

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 572 集

しん でん
新田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

2011

国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団

新田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業に関連して平成21年度に発掘調査された遠野市新田Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代中期の集落が見つかりました。この集落は、堅穴住居が半環状に配され、その内側では土壇墓が半環状に配される計画的な大規模集落の一部であったことを示します。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、遠野市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成23年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例 言

- 1 本書は、平成21年度に行われた東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業に伴う新田Ⅱ遺跡の緊急発掘調査成果を収録したものである。
- 2 新田Ⅱ遺跡は、岩手県遠野市綾織町下綾織第31地割149-17ほかに所在し、岩手県遺跡登録台帳遺跡番号はMF53-1305、遺跡略号はSDⅡ-09である。
- 3 発掘調査および整理作業は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた（財）岩手県文化振興事業埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は晴山雅光・福島正和・丸山浩治・北田勲が担当し、整理作業は晴山・福島が担当した。
- 5 発掘調査を行った面積は、2,800㎡である。発掘調査期間は、平成21年4月10日～8月31日、整理作業期間は、平成21年11月1日～平成22年3月31日である。
- 6 本書の執筆および編集は、晴山と福島が分担して行った。
- 7 発掘調査に際する基準点測量は釜石測量設計株式会社に、航空写真撮影は東邦航空株式会社にそれぞれ業務委託した。また、出土した石器等の石材の肉眼観察は花崗岩研究会へ業務委託した。
- 8 発掘調査においては、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、遠野市教育委員会、近隣住民の方々のご理解とご協力をいただいた。
- 9 発掘調査および整理作業にあたり以下の方々のご教示をいただいた。（敬称略・順不同）
小向裕明・黒田篤史（岩手県遠野市教育委員会）、佐藤浩彦（遠野市役所）、中村良幸（花巻市教育委員会）。
- 10 本書では、国土地理院発行「遠野」・「人首」・「土淵」・「大迫」1：50,000地図を使用した。また、遺構の土層注記における土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』2008年度版に準拠した。
- 11 発掘調査で作成した各種記録、出土した遺物および実測図、写真等の一切は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 12 本書発刊以前に現地説明会や当センターのホームページ（<http://www.echna.nc.jp/~imaibun/>）等で調査成果および調査経過の一部を公表したが、公表内容と本書記載事実との不一致、相違に関しては整理作業を経ている本書をもって正とする。

目 次

I	調査に至る経過	
1	調査経緯	1
2	調査経過	1
II	立地と環境	
1	遺跡の位置	2
2	地理的環境	2
3	歴史的環境	4
III	調査方法	
1	発掘調査の方法	8
2	整理作業の方法	8
3	記載方法と凡例	9
IV	調査成果	
1	調査概要と基本層序	11
2	検出遺構	11
3	出土遺物	70
V	総 括	
1	縄文時代の遺構	136
2	縄文時代の遺物	145
3	縄文時代の集落	147
4	古代の遺構と遺物	149
5	ま と め	149
	報告書抄録	252

図版目次

第1図	遺跡の位置	3	第43図	SI25	48
第2図	遺跡の立地	4	第44図	SI25付属施設	49
第3図	地形分類	5	第45図	SI26・27	51
第4図	周辺の遺跡	6	第46図	SI26・27付属施設	51
第5図	凡例	9	第47図	SI28	52
第6図	遺構配置・基本層序	10	第48図	SI28付属施設	52
第7図	SI01・14	12	第49図	柱穴群と掘立柱建物	54
第8図	SI01・14付属施設	13	第50図	SB01	56
第9図	SI02	14	第51図	SB02	56
第10図	SI02付属施設	15	第52図	SB03	57
第11図	SI03	16	第53図	SB04	57
第12図	SI03付属施設	17	第54図	SK01～04	59
第13図	SI04	18	第55図	SK07・08	60
第14図	SI04付属施設	19	第56図	SK10・11・22・23	62
第15図	SI05	21	第57図	SK24・30	64
第16図	SI05付属施設	22	第58図	SK28～30・31	66
第17図	SI06	23	第59図	SK34～38	67
第18図	SI06付属施設	24	第60図	SK39～43	68
第19図	SI07	25	第61図	SK44～46	69
第20図	SI07付属施設	26	第62図	SK48・49	70
第21図	SI08	27	第63図	縄文土器 (SI01)	71
第22図	SI08付属施設	27	第64図	縄文土器 (SI02-1)	73
第23図	SI09・10	29	第65図	縄文土器 (SI02-2)	74
第24図	SI10	29	第66図	縄文土器 (SI02-3)	75
第25図	SI11	30	第67図	縄文土器 (SI03・04-1)	77
第26図	SI11付属施設	31	第68図	縄文土器 (SI04-2)	78
第27図	SI12	32	第69図	縄文土器 (SI05-1)	80
第28図	SI12付属施設	32	第70図	縄文土器 (SI05-2)	81
第29図	SI15	34	第71図	縄文土器 (SI05-3)	82
第30図	SI15付属施設	35	第72図	縄文土器 (SI05-4)	83
第31図	SI16	37	第73図	縄文土器 (SI05-5)	84
第32図	SI16付属施設	38	第74図	縄文土器 (SI06・07・10)	85
第33図	SI17	40	第75図	縄文土器 (SI11)	86
第34図	SI17付属施設	41	第76図	縄文土器 (SI12)	87
第35図	SI18	42	第77図	縄文土器 (SI15)	88
第36図	SI18付属施設	42	第78図	縄文土器 (SI16-1)	90
第37図	SI19・20	44	第79図	縄文土器 (SI16-2)	91
第38図	SI19付属施設	44	第80図	縄文土器 (SI16-3)	92
第39図	SI22・24	45	第81図	縄文土器 (SI16-4)	93
第40図	SI22・24付属施設	45	第82図	縄文土器 (SI17・19・20・22・23)	94
第41図	SI23	46	第83図	縄文土器 (SI25-1)	96
第42図	SI23付属施設	47	第84図	縄文土器 (SI25-2)	97

第85回 縄文土器 (SI26・28)	99	第95回 石器-5	110
第86回 縄文土器 (SF・SK)	100	第96回 石器-6	111
第87回 縄文土器 (遺構外-1)	102	第97回 石製品	112
第88回 縄文土器 (遺構外-2)	103	第98回 土製品-1	113
第89回 縄文土器 (遺構外-3)	104	第99回 土製品-2	114
第90回 古代の上器	105	第100回 堅穴住居の分類	137
第91回 石器-1	106	第101回 炉の分類	138
第92回 石器-2	107	第102回 土器分類	146
第93回 石器-3	108	第103回 集落の変遷	150
第94回 石器-4	109	第104回 集落の構造	151

表 目 次

第1表 掲載遺物一覧 (土器)	116	第3表 掲載遺物一覧 (土製品)	135
第2表 掲載遺物一覧 (石器)	130	第4表 掲載遺物一覧 (石製品)	135

写真図版目次

写真図版1 航空写真	155	写真図版27 SI25-1	181
写真図版2 調査前現況・基本層序	156	写真図版28 SI25-2	182
写真図版3 SI01	157	写真図版29 SI26	183
写真図版4 SI02	158	写真図版30 SI27・28	184
写真図版5 SI03	159	写真図版31 堅穴住居群-1	185
写真図版6 SI04	160	写真図版32 堅穴住居群-2	186
写真図版7 SI05-1	161	写真図版33 SK01~04・08	187
写真図版8 SI05-2	162	写真図版34 SK05~07・11・22	188
写真図版9 SI06	163	写真図版35 SK22~25	189
写真図版10 SI07-1	164	写真図版36 SK26~29	190
写真図版11 SI07-2	165	写真図版37 SK30~33	191
写真図版12 SI08	166	写真図版38 SK34~37	192
写真図版13 SI09	167	写真図版39 SK38~41	193
写真図版14 SI10	168	写真図版40 SK42~45	194
写真図版15 SI11-1	169	写真図版41 SK46~49	195
写真図版16 SI11-2	170	写真図版42 土壇墓群-1	196
写真図版17 SI12	171	写真図版43 柱穴群-2、SP09・16・46・47	197
写真図版18 SI14	172	写真図版44 SP52・53・68・70・73・74・105・ 117・135	198
写真図版19 SI15	173	写真図版45 SP136・158・161・162・164・165・ 179・184	199
写真図版20 SI16	174	写真図版46 SB01、SF01・02	200
写真図版21 SI17	175	写真図版47 SK12~14・17	201
写真図版22 SI18	176	写真図版48 SK15・16・18・19	202
写真図版23 SI19・20	177	写真図版49 SP201~203・206、SK20、SX01	203
写真図版24 SI22・23-1	178	写真図版50 縄文土器 (SI01)	204
写真図版25 SI23-2	179		
写真図版26 SI23-3・24	180		

写真図版51	縄文土器 (SI02-1)	205	写真図版79	縄文土器 (SF01、SK10・14・25、 遺構外-1)	233
写真図版52	縄文土器 (SI02-2)	206	写真図版80	縄文土器 (遺構外-2)	234
写真図版53	縄文土器 (SI02-3)	207	写真図版81	縄文土器 (遺構外-3)	235
写真図版54	縄文土器 (SI02-4)	208	写真図版82	縄文土器 (遺構外-4)	236
写真図版55	縄文土器 (SI03・04-1)	209	写真図版83	縄文土器 (遺構外-5)、古代の土器 (SK12-1・14)	237
写真図版56	縄文土器 (SI04-2)	210	写真図版84	古代の土器 (SK12-2・17-1・18、 遺構外)	238
写真図版57	縄文土器 (SI05-1)	211	写真図版85	古代の土器 (SK17-2、SP202)	239
写真図版58	縄文土器 (SI05-2)	212	写真図版86	剥片石器 (SI01・02・04・05・07・ 16・17・25-1)	240
写真図版59	縄文土器 (SI05-3)	213	写真図版87	剥片石器 (SI25-2)	241
写真図版60	縄文土器 (SI05-4)	214	写真図版88	剥片石器 (SI25-3、SK06、SP52、 遺構外)	242
写真図版61	縄文土器 (SI05-5)	215	写真図版89	剥片石器 (SI01・02・04・07・12・ 16・17・25)	243
写真図版62	縄文土器 (SI05-6)	216	写真図版90	剥片石器 (SI07・25・28、遺構外)	244
写真図版63	縄文土器 (SI05-7・06-1)	217	写真図版91	礫石器 (SI01・02・04・07・25)	245
写真図版64	縄文土器 (SI06-2・07)	218	写真図版92	礫石器 (SI07・15・16・23・25、 遺構外)	246
写真図版65	縄文土器 (SI10・11-1)	219	写真図版93	礫石器 (SI02・04・05・12・15・16)	247
写真図版66	縄文土器 (SI11-2・12-1)	220	写真図版94	礫石器 (SI04・16)	248
写真図版67	縄文土器 (SI12-2・15-1)	221	写真図版95	礫石器 (SI07)、石製品 (SI04)	249
写真図版68	縄文土器 (SI15-2・16-1)	222	写真図版96	土製品 (SI05・07・12・15・16)	250
写真図版69	縄文土器 (SI16-2)	223	写真図版97	土製品、石製品 (SI05・07・16・ 19、遺構外)	251
写真図版70	縄文土器 (SI16-3)	224			
写真図版71	縄文土器 (SI16-4)	225			
写真図版72	縄文土器 (SI16-5)	226			
写真図版73	縄文土器 (SI16-6)	227			
写真図版74	縄文土器 (SI17・19・20・22・23)	228			
写真図版75	縄文土器 (SI25-1)	229			
写真図版76	縄文土器 (SI25-2)	230			
写真図版77	縄文土器 (SI25-3・26)	231			
写真図版78	縄文土器 (SI28)	232			

I 調査に至る経過

1 調査経緯

新田II遺跡は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の施工に伴って、その事業区域内に遺跡が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

東北横断自動車道は、東北縦貫自動車道（東北道）に合流、さらに北上市にて分岐し、西和賀町・横手市・大仙市を経由して秋田市に至る総延長212km（内岩手県内113kmで供用区間は45km）の高規格道路である。

本路線は、釜石港・大船渡港といった重要港湾や観光資源豊富な陸中海岸国立公園を有する三陸地方拠点都市地域と、先端技術産業の集積が著しい北中部地方拠点都市地域や花巻空港等の岩手県内と秋田県とを結び、周辺地域のみならず岩手・秋田両県全域の産業・経済発展を担うことを目的に策定された。遠野～東和間については、平成10年度に遠野～宮守間で整備計画が、宮守～東和間では施行命令がそれぞれ出されている。また、平成16年度には新直轄方式による整備が決定している。

新田II遺跡については、過年度において岩手県教育委員会による試掘調査の結果、当該事業地内に埋蔵文化財包蔵地の存在が確認され、その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所は協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団に委託することとした。

これにより、平成21年4月1日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で新田II遺跡の発掘調査に関する委託契約を締結し、発掘調査が行われることとなった。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

2 調査経過

新田II遺跡の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所との委託契約に基づき平成21年4月10日より（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

同年4月10日、現地へ必要資材を搬入し翌日より本格的な調査に着手した。調査に際しては基準点測量や航空写真の撮影業務を外部へ委託した。また、調査区内およびその周辺、作業従事者の安全を確保するための安全対策も適宜実施した。調査に際しては当初の見込みを遙かに超える遺構が検出され、調査予定期間を延長せざるを得なかった。その中で同年6月20日には現地説明会を開き、広く一般への公開を行った。この現地説明会では周辺住民を中心に多数の参加があった。また、同年6月29日には航空写真の撮影も行った。同年7月30日には国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会生涯学習文化課による終了確認が現地にて行われた。ここで未伐採の山林部分について協議がなされ、遺構が山林部分へも延びることが明らかであるためこの部分の伐採が予定された。その後、伐採作業が実施され、この山林部分の調査にも着手した。概ね調査の終了した同年8月19日より撤収作業や終了確認時に依頼された調査区内の埋め戻し作業を行い、同年8月31日に埋め戻しの作業を終え、調査区を岩手河川国道事務所に引き渡した。

整理作業は平成21年11月1日より埋蔵文化財センター内で行い、平成22年3月31日にすべての作業を終えた。また、この間に本書の執筆作業も行っている。

Ⅱ 立地と環境

1 遺跡の位置

新田Ⅱ遺跡は、岩手県遠野市綾織町下綾織31地割149-17ほかに所在する。遺跡の所在する遠野市は、岩手県の中央部よりやや南東に位置する。ここは早池峰山を中心とする北上山地の山塊が連なり、西へ猿ヶ石川が流れる。遠野市の人口は平成20年10月現在、市域面積825.62km²、人口3,1151人である。これは平成17年10月1日に行われた宮守村との合併後のデータである。この合併により誕生した新しい遠野市は北の宮古市川井、西の花巻市（東和町・大迫町）、東の釜石市や上閉伊郡大槌町、南の気仙郡住田町・奥州市江刺区等の市区町村と境界を接することとなった。遠野市中心部は遠野盆地の中にあり、四方を険しい峠によって他地域と連絡され、古くから陸上交通の要衝である。したがって、内陸部と沿岸部を結ぶ東西ルートの重要拠点であることは近世において宿場町として栄えたことから想像できる。また、遠野南部家一万三千石の城下町であり、今もその地割りを多く残している。現在、遠野市の主要な産業は農業、畜産、林業からなり、近年では農作物としてホップ生産、馬産などが特に盛んで、全国的にも名の知れるところである。また、観光資源として、柳田国男の「遠野物語」の舞台として注目されており、この「民話のふるさと」を求めて全国各地から観光客が多く訪れている。

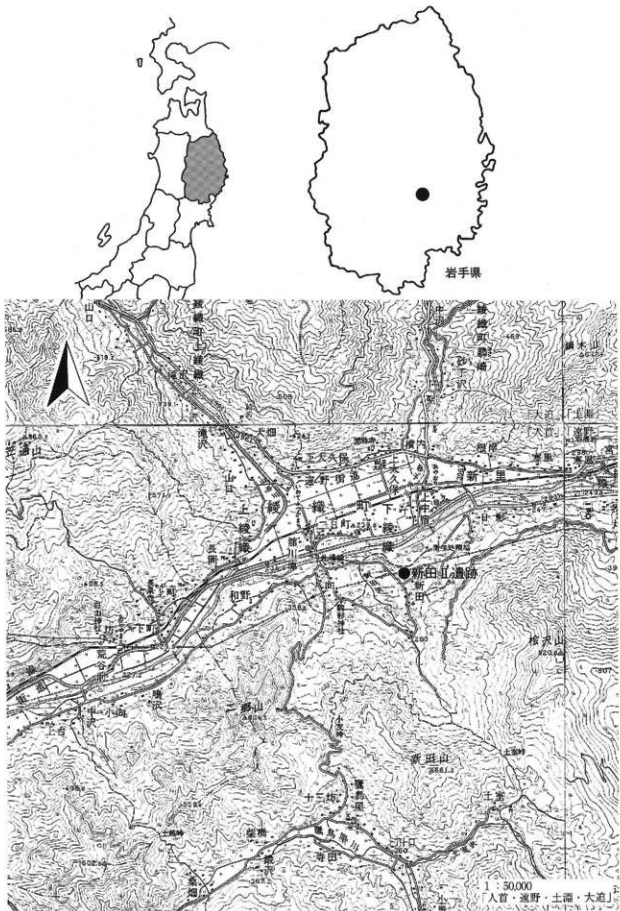
本書で報告する新田Ⅱ遺跡は、現在JR釜石線遠野駅が所在する遠野市街地より約6km西、JR釜石線いわて二日町駅より猿ヶ石川を挟んで約2km北東に位置する。猿ヶ石川の兩岸に広がる田園風景とそれに迫り来るかのような山々が明瞭なコントラストをなしている地域である。今回の調査地は、調査前には畑、水田、山林として利用されている。

2 地理的環境

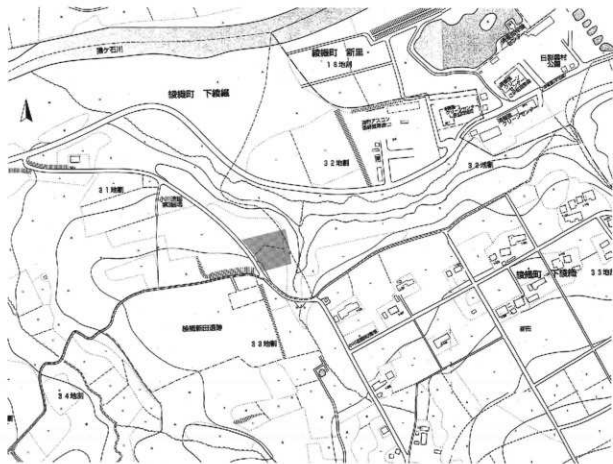
岩手県は大きく分けて西側の奥羽山脈、東側の北上高地、これらに挟まれた盆地や平野地からなっている。遠野市は先述したとおり、北上高地のほぼ中央に位置する遠野盆地にある。北上高地は紡錘形の山地帯を形成し、南北に広がっている。山系最高峰の早池峰山は、標高1,917mで、東西に1,400～1,800m級の山々を従えるように連峰を形作っている。早池峰山の南には1,645mの薬師岳が位置し、非常に険しい大起伏地がみられる。しかし、遠野盆地はこの薬師岳に源を持つ猿ヶ石川や早瀬川などによって開析された広大な谷底平野である。この地帯は北上山系の花崗岩分布域となっており、特に遠野・土淵花崗岩帯は北上山系では最大の規模を有する花崗岩帯である。

向Ⅱ遺跡の立地する綾織地区は、猿ヶ石川兩岸の狭小な谷底平野とそれを取り囲む中起伏山地からなる。これに加え、綾織地区北部では大起伏地がみられる。綾織町の下綾織にある向地区は猿ヶ石川南岸に位置し、北岸に位置する上綾織地域よりも平野部は狭く、洪積段丘の張り出しが顕著である。

新田Ⅱ遺跡周辺は谷底平野からやや高位にある猿ヶ石川の南岸の洪積段丘の突端に立地している。周辺は南側に位置する丘陵地を源とする小規模な沢地形が形成されており、背面丘陵地より供給される土砂堆積物を含んでいるものとみられる。調査区周辺にも沢が認められ、調査区内の大半を占める段丘面と微地形において様相を異にしている。



第1図 遺跡の位置



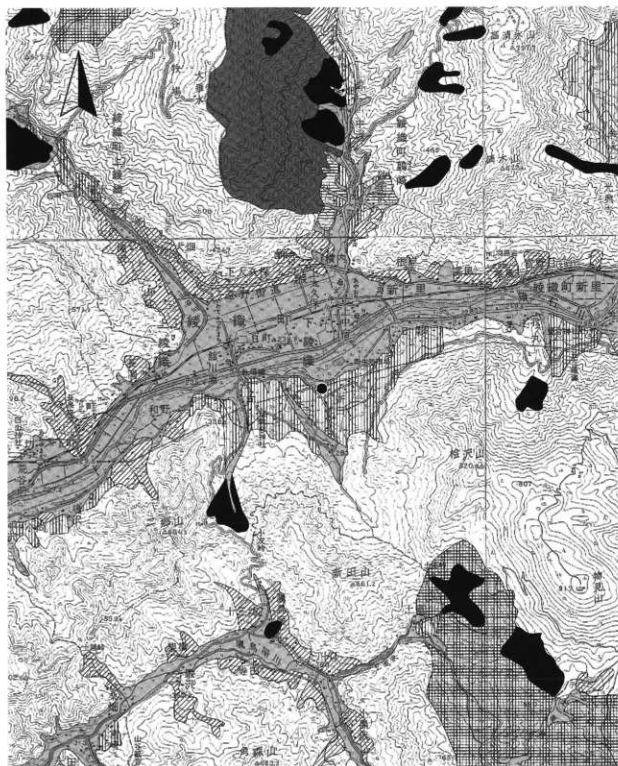
第2図 遺跡の立地

3 歴史的環境

新田II遺跡の所在する遠野市には、多くの遺跡が確認されている。本節では、旧遠野市域を中心に確認されている遺跡の分布状況を示し、考古学的観点により、新田II遺跡周辺における歴史的環境について時代順に述べることとする。

縄文・弥生時代

旧遠野市域では、縄文時代早期～前期の遺跡がいくつか確認されている。早期の代表的な遺跡は九重沢遺跡が挙げられる。この遺跡では、早期前葉～前期前葉にかけての遺構、遺物が発掘調査によって確認されている。特に、縄文時代早期に属する尖底土器、貝殻沈線文土器、表裏縄文土器などが出土している。また、寒風I遺跡や向II遺跡・向III遺跡でも縄文時代早期・前期の遺構、遺物が確認されている。向II遺跡は早期末から前期初頭の遺物包含層が検出されている。この縄文時代早期が、当地域における人々の活動を考古学的に確認できる最古の例である。その他にも縄文時代早期の土器が確認されている遺跡や散布地は存在するが、総じて詳細な様相が把握できる状況ではない。しかし、縄文時代前期に入ると、確認されている遺跡および遺構・遺物の数は増加する。新田II遺跡の北東に隣接する綾織新田遺跡では、縄文時代前期前葉～中葉を中心とした拠点的な集落遺跡であることが発掘調査によって明らかになっている。この綾織新田遺跡の集落は、大形の堅穴住居群が規則的に配された状況が認められ、現在は国指定史跡（平成14年12月19日指定）として保存されている。この国指



第3図 地形分類



第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代
1	池Ⅱ	聚布地	縄文・古墳
2	向重	聚布地	
3	塚跡Ⅰ	集落跡	縄文
4	塚跡Ⅱ	聚布地	
5	塚跡Ⅲ	聚布地	
6	新田	聚布地	縄文
7	新田Ⅱ	聚布地	縄文・平安
8	須田王元塚跡	集落跡	平安
9	田	聚布地	縄文
10	野野沢	聚布地	
11	山形	聚布地	
12	城跡	城跡跡	中世
13	新屋岡木野	聚布地	縄文・古代
14	新屋新屋	聚布地	縄文
15	新屋堂石高	集落跡	縄文
16	新屋五郎塚跡	聚布地	
17	新倉城	城跡跡	中世～近世
18	九重沢Ⅰ	聚布地	縄文
19	九重沢Ⅱ	聚布地	縄文
20	新田Ⅲ	聚布地	縄文
21	新田	聚布地	縄文
22	夫須石輪高野	集落跡	縄文
23	ノ田	聚布地	縄文
24	谷内(上野) 跡	城跡跡	中世
25	坂子塚	聚布地	縄文

No.	遺跡名	種別	時代
26	田中	聚布地	縄文
27	大久保Ⅰ	聚布地	古代
28	大久保Ⅱ	聚布地	古代
29	大久保	聚布地	縄文・平安
30	狭内Ⅲ	聚布地	縄文・古代
31	狭内Ⅱ	聚布地	縄文
32	狭内Ⅰ	聚布地	縄文
33	砂子沢Ⅰ	聚布地	縄文
34	砂子沢Ⅱ	聚布地	縄文
35	堂	聚布地	古代・中世
36	ミヤギの亀虎跡	深穴	縄文
37	西門跡(ミヤギの亀)	城跡跡	中世
38	東田前Ⅰ	聚布地	古代
39	東田前Ⅱ	聚布地	古代
40	東田前Ⅲ	聚布地	古代
41	東田前Ⅳ	聚布地	古代
42	東田Ⅱ	聚布地	縄文
43	東田Ⅲ	聚布地	縄文
44	東田Ⅰ	聚布地	縄文
45	宮野Ⅱ	聚布地	縄文
46	宮野Ⅰ	聚布地	縄文
47	宮野Ⅲ	聚布地	縄文
48	宮野Ⅳ	聚布地	縄文
49	上宮野Ⅱ	聚布地・集落跡	古代～近世
50	角鼻館	城跡跡	中世

No.	遺跡名	種別	時代
51	光輝寺跡	城跡跡	中世
52	天神Ⅲ	聚布地	縄文
53	天神Ⅱ	聚布地	縄文
54	天神Ⅰ	聚布地	縄文
55	天神Ⅳ	聚布地	縄文
56	金ヶ沢Ⅱ	集落跡	縄文
57	金ヶ沢Ⅰ	集落跡	縄文
58	穂田成(遺跡)	城跡跡	中世
59	上ノ山	聚布地	縄文・古代
60	高橋	聚布地	古代
61	東館	城跡跡	
62	宮代Ⅰ	聚布地	縄文
63	宮代Ⅱ	聚布地	縄文
64	宮代Ⅲ	聚布地	縄文
65	下藤Ⅰ	聚布地	縄文
66	下藤Ⅱ	聚布地	
67	大塚	集落跡	縄文・古代
68	塚中	聚布地	古代
69	藤崎Ⅱ	聚布地	古代
70	藤崎Ⅰ	聚布地	古代
71	蓮田	集落跡	縄文・中世
72	町田	聚布地	縄文
73	横ノ岡	集落跡	縄文・古代

第4図 周辺の遺跡

定史跡綾織新田遺跡ももとは同じ新田Ⅱ遺跡という登録名称であった。

縄文時代中期～後期の集落として張山遺跡が著名である。複式炉を有する竪穴住居が多数検出されており、遺構の配置が現状となる大規模な集落遺跡である。集落の範囲はほぼ全域の調査で、竪穴住居は76棟検出されて大半が複式炉を伴うものである。これら竪穴住居は、出土遺物から中期後葉～後期初頭を中心とする時期である。竪穴住居以外の遺構では、掘立柱建物や墓塚が検出され、特に翡翠大珠が墓塚内で副葬品として出土している点で注目される。

縄文時代後期の遺跡としては、甲子遺跡が挙げられる。ここでは、竪穴住居や掘立柱建物など集落の構成要素である遺構が検出されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡では、高瀬Ⅰ遺跡・高瀬Ⅱ遺跡や蓬田遺跡などが挙げられる。高瀬Ⅰ遺跡・高瀬Ⅱ遺跡では、竪穴住居のほか掘立柱建物などが検出されており、地域の拠点的な集落が形成されていたと考えられる。竪穴住居からは多くの墨書土器が出土しており、その中には、「物部」や「地子不得」と解釈される文字が墨書されたものも含まれる。また、集落に近接して円形の周溝を伴う墳墓も確認されている。

中世・近世

中世では、篠館跡で大小様々な曲輪や切岸、土塁、堅堀など山城の縄張りを構成する遺構が検出されている。出土遺物の中には、中国産陶磁器や武器・武具類が出土している。中心となる時期は16世紀頃であると想定されており、当時の内陸と沿岸を結ぶ要衝であったこの地を治める武将が築いたものとみられる。近世は、甲子遺跡で近世墓が12基まとまってみつかり、これら近世墓からは様々な副葬品を伴って人骨も出土している。同様に平成19年度におこなった向Ⅱ遺跡でも近世墓や掘立柱建物などが調査されている。

引用・参考文献

- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査報告書
- 1982 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第43集『寒風遺跡発掘調査報告書』
- 1991 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第155集『高瀬Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 2000 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第353集『篠館跡発掘調査報告書』
- 2004 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第435集『九重沢遺跡発掘調査報告書』
- 2010 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第549集『向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 遠野市教育委員会発掘調査報告書
- 1991 遠野市埋蔵文化財調査報告書第3集『蓬田遺跡』
- 1991 遠野市埋蔵文化財調査報告書第3集『高瀬Ⅱ遺跡』
- 1997 遠野市埋蔵文化財調査報告書第10集『寒風Ⅰ遺跡』
- 2006 遠野市埋蔵文化財調査報告書第8集『張山遺跡』
- 1998 遠野市埋蔵文化財調査報告書第11集『甲子遺跡』
- 2001 遠野市埋蔵文化財調査報告書第12集『向Ⅱ・向Ⅲ・深沢野・新田Ⅱ・間木野遺跡』
- 遠野都市計画道路埋蔵文化財調査委託事業報告—
- 2002 遠野市埋蔵文化財調査報告書第13集『新田Ⅱ遺跡』

Ⅲ 調査方法

1 発掘調査の方法

人力でのトレンチの掘削により表土の層厚や遺物包含層の広がり等を確認後、表土除去作業を重機によって行った。現況が山林部分にあたる地点においては、必要に応じて抜根および根回りの表土除去を人力作業で補った。

表土除去の後、人力による遺構検出作業を行った。遺構検出作業で平面的な検出が困難な地点および遺構については、適宜人力によってトレンチを掘削し、断面による土層の把握を行いながら進めた。

検出した遺構の掘削は、堅穴住居については4分法または6分法、その他の遺構については規模・形状に則して4分法、2分法など適宜選択して行った。また、遺構埋土の掘削に際しては層位毎に遺物を取り上げるよう努めた。

また、調査中は遺跡名を略号(SD II-09)によって記録し、遺構名も略号を用いた(略号に関しては3節を参照)。

遺構平面図および断面図は、おもに発掘調査用電子平板測量によって実測および作図を行った。また、必要に応じて微細図などは電子平板と通常の手描き実測を併用して行った。

遺構の写真撮影は、デジタル一眼レフ(35mm)・6×7cm判モノクロによる撮影を基本とした。デジタル一眼レフカメラの撮影は、RAWモードとJPEGモードで撮影保存した。また、撮影に際しては、撮影カードを作成しこれの記入および写し込みを行い、撮影写真の整理に活用した。

2 整理作業の方法

発掘調査終了後の整理作業は、当センターの室内にて行った。発掘調査時に作成した図は、パソコン上でデータの整理、点検、修正、編集作業を行い、図版として体裁を整え、アナログ図版として作成した。また、遺構等発掘調査時に撮影した写真はそれぞれパソコン上で整理を行った。本書に掲載する遺構写真は選択した後、JPEGデータのものを原稿データとした。

洗浄および注記を行った遺物は、接合作業を行った。これらのうち、本書に掲載する遺物を選択し、実測と写真撮影を行った。選択基準は、実測可能な残存状況のものを原則とし、土器類の破片については特徴から時期や土器型式を特定できるもの、口縁部の残存するものを中心とした。遺物の実測作業は、原寸での実測を基本とした。実測を行った遺物は、デジタルトレースとアナログトレースを併用し抄書した。これをもとに図版用の版下を作成した。また、純文土器器表面や銭貨等は湿拓により採拓した。遺物の写真撮影は、デジタル一眼レフカメラを用いて当センター内で行った。これら撮影した遺物は、JPEGデータを編集し写真図版として掲載した。なお、これら遺物写真データはJPEG形式およびRAW形式にて保管している。すべての処理が終了した遺物は、本書掲載遺物と不掲載遺物とに分けて岩手県立埋蔵文化財センター内にある所定の場所へ収納した。

本書の原稿執筆は各担当者が分担して行い、表現方法や名称などは担当者間で協議を行い、統一事項を定め全体の中で可能な限り統一を図った。統一事項の詳細については次節で述べることとする。

3 記載方法と凡例

(1) 遺構

遺構名および遺構番号は略号を用いて表現した。遺構略号は遺構種別によって分け、煩雑にならないよう努めた。遺構略号は以下の通りである。

S I ··· 堅穴住居、S B ··· 掘立柱建物、S K ··· 土坑（土壌墓も含む）、S P ··· ビット（柱穴状土坑）、S X ··· その他不明遺構。

それ以外に、遺構に付属する施設についても略号を用い、この略号は以下の通りである。

S I O O - F ··· 堅穴住居内の炉、S I O O - P ··· 堅穴住居内の柱穴および掘立柱建物の柱穴。

遺構番号は遺構種別毎、検出した順に通し番号を付与した。遺構に関する記述は、以下の通り統一して行った。平面規模は「m」単位で、深さは「cm」単位で表現した。遺構平面図における平面位置を示す方法として、グリッドは設けず、国土座標による表記を行った。また、遺構の位置を表現する際には調査区を座標により4分割し東西南北で呼称した。平面図上に付した座標の表記は、国土座標X系のもので、「X」・「Y」の順で連記している。遺構断面図に示した基準高は、すべて海拔標高値とした。

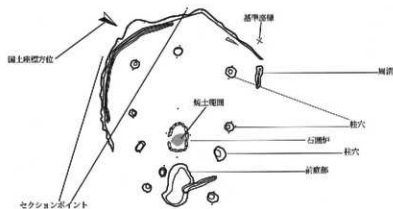
(2) 遺物

遺物の掲載番号は通し番号を付与し、本文・観察表・実測図・写真図版にそれぞれ同一の番号を表記した。

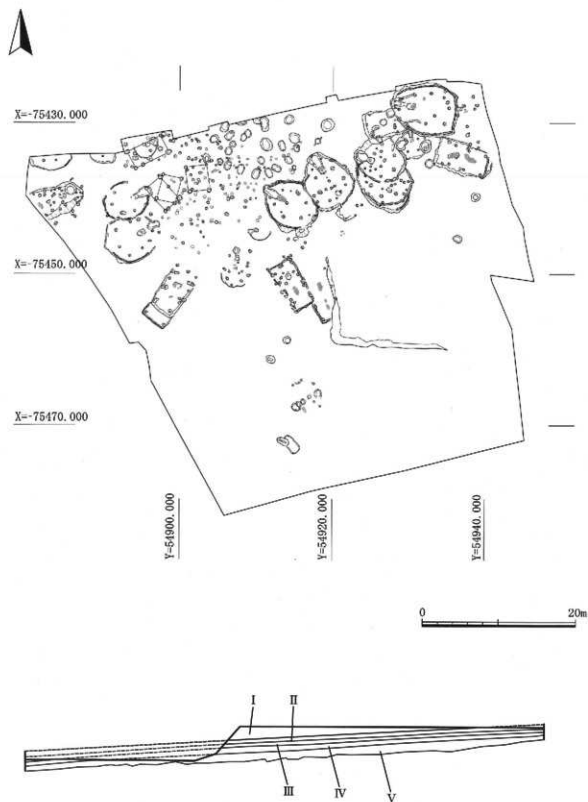
遺物実測図は、縄文土器3分の1、古代の土器4分の1、石器・石製品・土製品を2分の1でそれぞれ統一し掲載した。本書に掲載した遺物は「掲載遺物一覧」に一覧表として掲げた。この表中で示される遺物固有の番号は、先述した種別毎の番号である。遺物写真図版に掲載した遺物の縮尺は不定としたが、遺物種類毎の縮尺はおおむね統一した。

(3) 凡例

遺構および遺物の図についての凡例は以下に示した通りである。



第5図 凡例



第6図 遺構配置・基本層序

Ⅳ 調査成果

1 調査概要と基本層序

調査区は、南から北へ向け舌状に張り出す段丘上に位置する。これは遺跡の南に位置する猿ヶ石川に向かって延びる段丘である。この段丘の高い南側は近現代の削平により元の地形が損なわれている。一方、畑地であった北側は削平の度合いが小さく比較的源地形を留めている。遺跡の標高は約260mである。調査区東側には一筋の谷があり、ここを沢が流れている。この沢を境に西側は新田遺跡である。また、調査区西側の外は今回の調査では外れている。

検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居・掘立柱建物・土坑、古代の土坑、焼土遺構などである。遺構の分布は調査区の北側で集中をみせており、縄文時代の集落域は概ね北半分である。一方、南側は遺構数が少ないが、このエリアの一角には古代の遺構がまとも検出されている。出土遺物は、縄文土器・縄文時代の石器・土師器・須恵器が主なものである。

基本層序は、大別するとⅠ層が表土、Ⅱ層が黒色土層、Ⅲ層が漸移層、Ⅳ層が黄褐色ローム層、Ⅴ層が礫層である。Ⅰ層は近現代の造成、耕作に伴うもの（ⅠB層）も含め、層厚40～200cmであり、暗褐色を呈するシルトを基調とする。おもに近現代に畑等の耕作が行われていた調査区東側の北半はⅣ層のブロック土が多く認められ、同時にⅠ層直下にⅡ層あるいはⅢ層は残存していない。Ⅱ層は谷に向けて下る比較的低位面においてのみ確認される。Ⅲ層以下は無遺物の自然堆積層である。大半の遺構はⅢ層上面で検出したが、調査区北西は削平著しくⅣ層上面あるいは層中で検出した。古代の遺構についてはⅡ層が残存するエリアに位置するため、この上面で検出した。

2 検出遺構

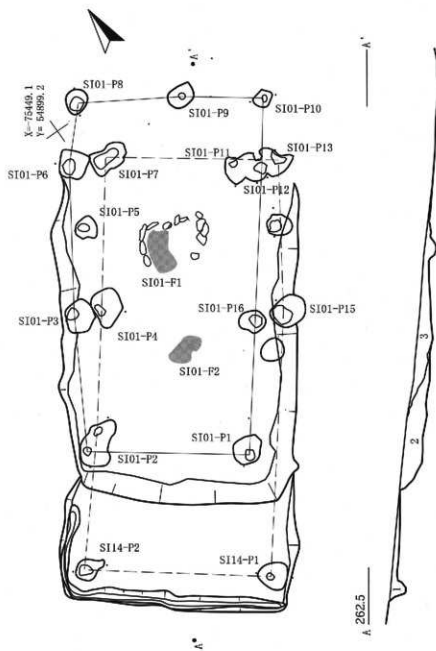
(1) 竪穴住居

SI01（第7図、写真図版3）

調査区南西部、南から北へ向けわずかに傾斜する地点に位置する。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。さらに、SI14と重複関係にあり、断面では切り合いは不明瞭であったが、床面の高低差や検出状況などからSI14を切っている可能性が高い。長軸3.8m、短軸1.9mの平面長方形の竪穴住居である。軸方向は北東を指向し、東へ43度傾く。深さは17cmで、埋土は上下2層からなる。埋土上層は黒色シルトが顕著な自然堆積層である。下層は暗褐色シルトである。床面は凹凸があり平滑ではなく、締まりもない状況である。しかし、この床面には石囲炉や地床炉が検出されるほか、この竪穴住居に伴うであろう柱穴も確認できる。床面の凹凸は後世の植物擾乱による2次的なものかもしれないが、調査では判明しなかった。また、床面は検出面の地形に沿うようにわずかに傾斜が認められる。

石囲炉は、竪穴住居中央よりやや北東へ寄った位置に1基存在する。この石囲炉は平面円形を基調としていると思われるが、床面より浮いた状態の石もあることから正確な平面形は不明である。一方、地床炉は竪穴住居中央付近に弱い赤褐色の範囲を確認した。

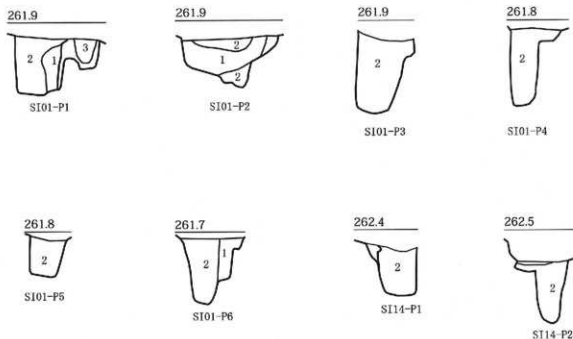
柱穴は四方隅に2個、西側壁際および東側壁にそれぞれ1個ずつ配置されている。柱穴は柱痕跡の明瞭なものはないが、どれも直径20cm、約30cmの深さを有している。



- | | | |
|------|---|---|
| SI01 | 1 | 10YR3/4 暗褐色シルト (地山 B.L. 2 ~ 5 cm 大少量・炭化物少量含む) |
| | 2 | 10YR1.7/1 黒色シルト |
| | 3 | 10YR2/1 黒色シルト (微粒砂少量混) |

0 1:60 2m

第7図 S101・14



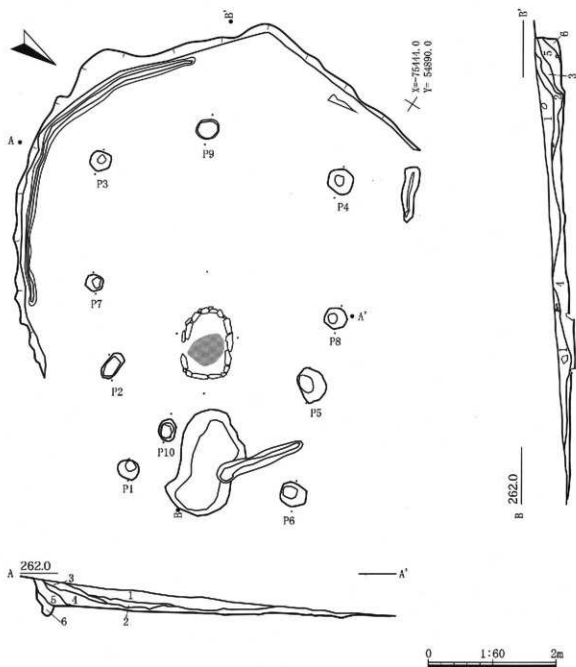
- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (地山B.L少量含む)
- 2 10YR2/1 黒色シルト (炭化物・地山B.L少量含む)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト (粗粒砂混)

第8図 SIO1・14付属施設

出土遺物は埋土および床面から縄文土器が出土した。出土した土器より、この竪穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

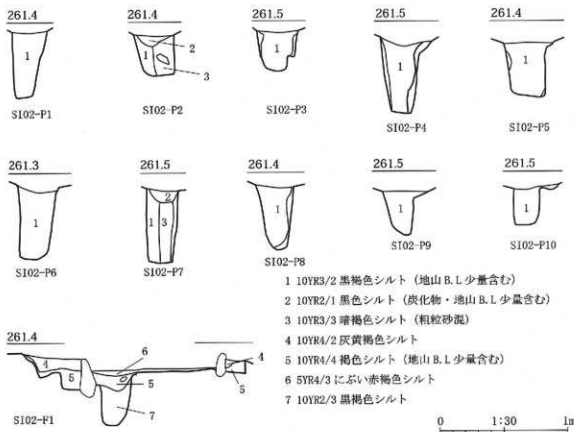
SI02 (第8図、写真図版4)

調査区北西部、南から北へ向け緩やかに下り傾斜する地点に位置する。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。さらに、SI06と重複関係にあり、断面では切り合いは不明瞭であったが、このSI02の床面がSI06に及んでいないこと、検出状況などからSI06によって切られている可能性が高い。長軸4.2m、短軸3.9mの平面6～8角の多角形の竪穴住居である。軸方向は炉および前庭部の位置から北東を指向し、東へ45度傾くものとみられる。深さは45cmで、埋土は大きく分けて上下2層からなる。埋土上層は暗褐色シルトを主体とする自然堆積層である。下層は上層より明るい色調の褐色シルトであり、非常に堅致である。この下層は地山ブロックを含んでいるため人為的な堆積である可能性も考えられるが、周堤等の竪穴住居に付属する土性の施設の崩落、流入であることも可能性の一つである。これら上層と下層の層界には厚さ数cmの炭化物が多く認められ、土器もこの炭化物層中および直上で多く出土する。この炭化物と土器は、主に地形的高位にある南西方向から自然に流入した可能性も考えられるが、この南西方向には竪穴住居等の遺構が認められない。また、土器の中には小形の土器がほぼ完形で出土することや、約30m東に位置するSI05出土土器片と接合関係が確認されることなどから、自然堆積とは考えられず、下層堆積後の廃棄や祭祀行為がおこなわれた可能性が考えられる。床面は比較的平滑で固く締まる黄褐色シル



- S102
- 1 10YR3/1 黒褐色シルト (粗粒砂混、地山B.L少量含む)
 - 2 10YR2/1 黒色シルト (炭化物・焼土B.L多量を含む)
 - 3 10YR3/3 暗褐色シルト (粗粒砂、地山B.L多量を含む)
 - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (地山B.L5cm 大多量を含む)
 - 5 10YR3/1 黒褐色シルト (粗粒砂混、地山B.L 3cm 大含む)
 - 6 10YR2/3 黒褐色シルト (炭化物・地山B.L含む)

第9図 S102



第10図 S102付属施設

トである。この床面には前庭部を有する石囲炉、柱穴、周溝等が認められる。床面での遺物は散見される程度である。

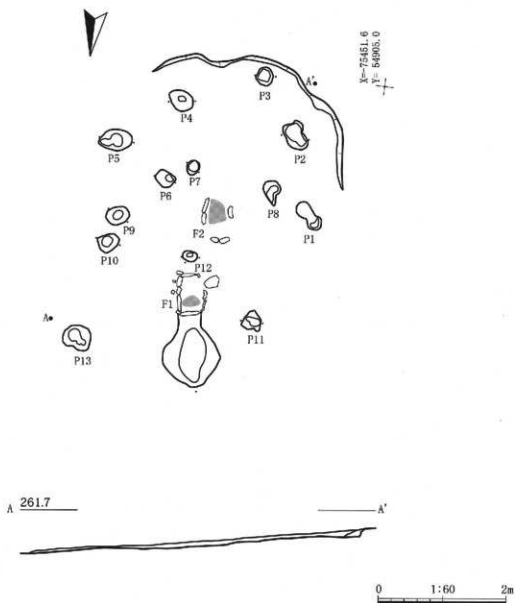
石囲炉は竪穴住居中央より北東へ寄った位置に前庭部を有して1基存在する。この石囲炉は平面楕円形を基調としているが、前庭部側が潰れたような楕円である。構成される石はすべて比較的平らな円礫で平面形の変化点において意図的に石の並べ方を変えている。焼土は南西側で顕著であり、この焼土を除去すると直径約15cm、深さ約30cmの円形ピットが認められるが、性格は不明である。

柱穴は主柱穴6個、小形の柱穴が数基認められる。いずれも深さ20cm以上の規模を有し、大半のものが柱痕跡不明瞭である。また、柱穴の中には住居埋土下層にまで連続してその痕跡が認められるものがある。このことは柱穴の柱材が残ったままの状態に住居埋土下層が堆積した結果と考えられる。

出土遺物の大半は埋土上層および上下層境界の炭化層より多く出土しているが、これに比して埋土下層および床面での出土は極端に少ない。土器の一部がSI04出土のものと接合関係にあり、さらにSI04と出土状況も似ることから、これら2棟は同時期に廃絶した竪穴住居である可能性が高い。出土した土器は、縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられ、竪穴住居が完全埋没するまでの期間を考慮しても竪穴住居もこの遺物の時期と大きく隔たると考えられる。

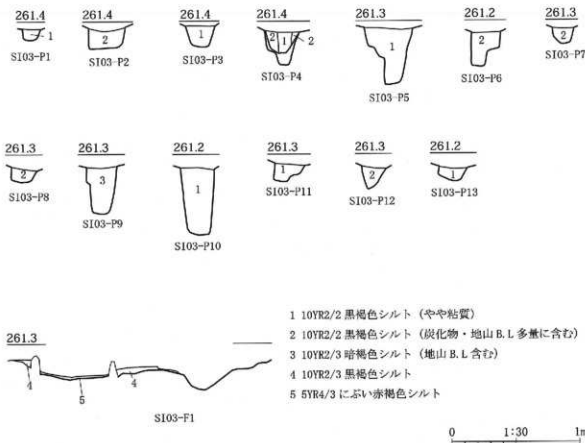
SI03 (第11・12図、写真図版5)

調査区南西部、南から北へ下る傾斜がほぼ収斂する平坦な地点に位置する。遺構検出面は、近現代



- S103
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
 - 2 10YR3/3 暗褐色シルト (地山B.L.少量含む)

第11図 S103



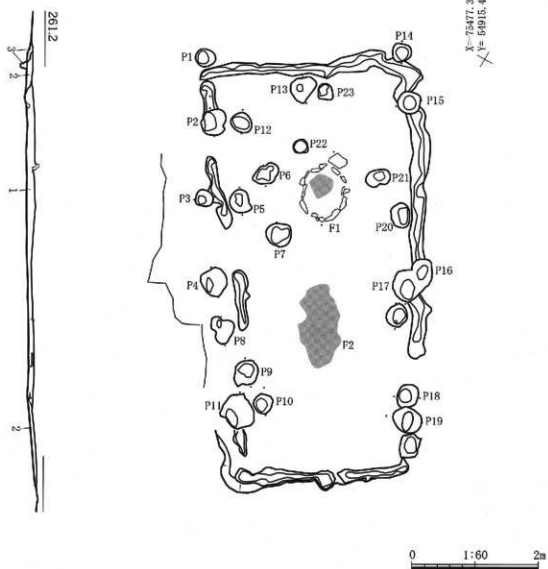
第12図 S103付属施設

の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。遺構の平面形は残存していない部分があるため不明であるが、長軸3.5m、短軸2.8mの楕円形を基調とするとみられる竪穴住居である。軸方向は炉および前庭部の位置および形状から北東を指向し、東へ39度傾くものとみられる。深さは3cmで、埋土は暗褐色シルトの自然堆積層である。床面には石囲炉2基、柱穴、周溝等が認められる。床面での遺物は散見される程度である。

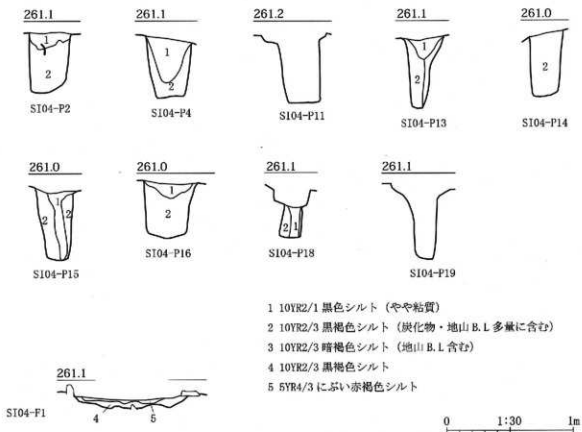
石囲炉は前庭部を有するものが1基、石組のみのものが1基それぞれ近接して存在する。石組は、いずれも方形を基調とする小規模なものである。近接して石組が存在することから2棟分の炉である可能性が考えられる。床面に段差が認められなかったため2棟がどのような配置になっていたのか不明である。しかし、炉の位置関係、前庭部の残存状況、石組の残存度から考えて北東に位置する炉の方が後出するものとみられる。

柱穴は主柱穴4個、小形の柱穴が数基認められる。いずれも深さ約10cmの規模を有し、大半のものが柱痕跡不明瞭である。柱穴の配置は、南に回る柱穴群と少し北寄りに戻る柱穴群に分かれ、やはり2棟の竪穴住居が重なっていることを示している状況である。

出土遺物は遺構検出中、埋土中、床面のそれぞれで縄文土器が出土したが、層位による遺物の時期差は認められない。出土した土器から縄文時代中期中葉～後葉に属する竪穴住居であると考えられる。



- S104
- 1 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質、小礫混、部分的に地山B.L含む)
 - 2 10YR3/2 黒褐色シルト (地山B.L少量含む)
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (中粒砂混)



第14図 SI04付属施設

SI04 (第13・14図、写真図版5・6)

調査区南西部のほぼ平坦な地点に位置する。SI23と重複関係にあり、切り合いは不明瞭ながら、SI04の周溝がSI23によって切られている可能性が高い。長軸2.8m、短軸1.9mの平面長方形の堅穴住居である。軸方向は北西を指向し、西へ45度傾く。現代の水田造成により大幅に削平を受けており、検出面において多くの遺物が出土した。深さは8cmで、埋土はほぼ単層のシルトである。この埋土は黒色シルトが顕著な自然堆積層である。床面はわずかに凹凸があるが、おおむね平滑である。床面には石囲炉や地床炉が検出されるほか、この堅穴住居に伴うであろう柱穴、周溝も確認できる。埋土や床面には多くの自然礫が散在している。これらは自然に流入したものか、人為的なものかは判断できない。

炉は、堅穴住居中央よりやや北東寄りに石囲炉が1基、中央やや南寄りに地床炉が1基存在する。石囲炉は楕円形あるいは長六角形を基調としていると思われる。大小様々な円礫を用いて作られており、焼部は弱い赤褐色の被熱範囲を確認した。地床炉は不整な長楕円形の被熱範囲が認められ、中心部における焼土の厚さは3cmである。

柱穴は四方隅に4個、西側壁際および東側壁にそれぞれ2個ずつ配置されていると考えられる。柱穴は柱痕跡の明瞭なものはないが、どれも直径20cm、約30cmの深さを有している。また、SI23に属する柱穴も南東側に存在するものと考えられる。

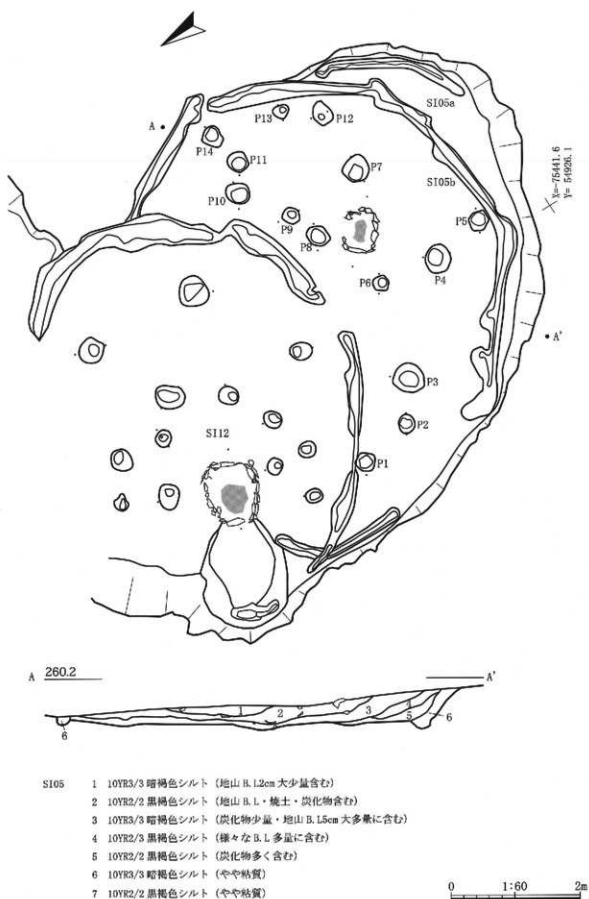
周溝は全周しないが、柱穴の内側に配されている場所もあり、建て替えや柱穴の再配置などがおこなわれた可能性が高い。

出土遺物は埋土および床面から縄文土器や石棒などが出土した。また、頁岩の剥片も一定量出土した。出土した土器より、この堅穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

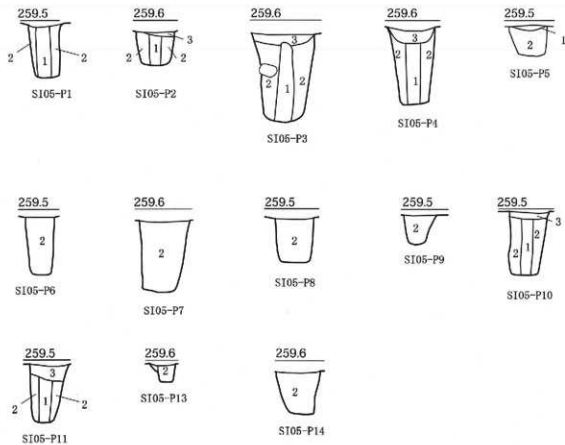
SI05 (第15・16図、写真図版7・8)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。SI12と重複関係にあり、切り合いは不明瞭ながら、SI05の周溝がSI12によって切られている可能性が高い。また、一部で同一レベルの床面がこの周溝北側へ延びており、遺構名は付さなかった(本書ではこれをSI05bとする)が、もう1棟の堅穴住居がこの住居を切っているものとみられる。これらの中間に位置するSI05aは唯一床面で石囲炉が検出されないことからみても、これら3棟のうち最古の堅穴住居であると推測される。平面形態は多角形で、南半で周溝が認められないため断定はできないが、角と推定範囲を考えると6～8角形の堅穴住居であると思われる。推定される南北長は6～7m、東西長は6.6mであるとみられる。この堅穴住居に伴う炉が検出されず、軸方向は不明である。しかし、周溝角から考えれば、隣接するSI17と同一軸である可能性が考えられる。深さは最深で59cm、埋土はおおむね3層のシルトである。しかしながら、これら埋土は北側で重なっているSI05bを埋めているものであり、3棟のうち最古のSI05b埋土は存在しないものと考えられる。埋土中層では大量の土器が面的に投棄されたような状況がみられた。この遺構から出土した土器の大半がこの埋土中層の一括遺物である。埋土中層はやや暗い色調の褐色を帯びており、多くの炭化物が認められる。また、埋土の締まりは上層の黒褐色上は柔らかいが、下層ほど締まりが顕著である。床面は、固く締まり平滑である。先述した通り、SI05bの周溝や床面も検出されているが、それらとの比高差は認められない。床面には石囲炉が1基、多数の柱穴が確認された。

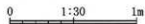
石囲炉(SI05-F1)は、配置や新古関係からSI05bに伴うものと考えられる。北東側面の石が1個失われているが、方形の平面形態であると考えられる。いずれの石も扁平な円礫で、石の長短と方向



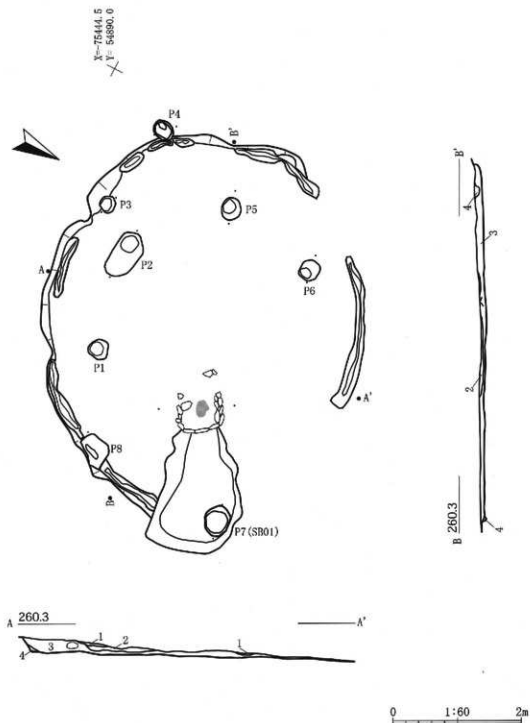
第15図 S105



- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (地山 B. L 少量含む)
- 2 10YR2/1 黒色シルト (地山 B. L 少量含む)
- 3 10YR3/3 暗褐色シルト (粗粒砂混)
- 4 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト (炭化物少量含む)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト

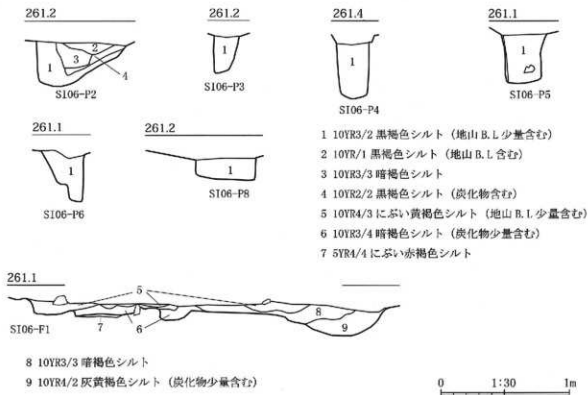


第16図 S I 05付属施設



- S106
- 1 10YR2/1 黒色シルト (炭化物多く含む)
 - 2 10YR3/3 暗褐色シルト (中粒砂混)
 - 3 10YR4/3 に近い黄褐色シルト (炭化物少量含む)
 - 4 10YR2/2 黒褐色シルト (中粒砂混)

第17図 S106



第18図 S106付属施設

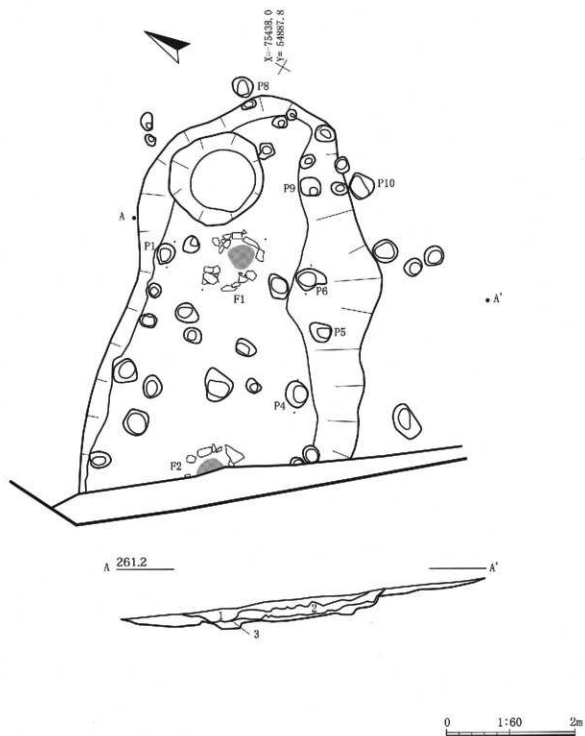
を意識して並べられている。燃焼部は石囲炉の中央部分に形成されており、やや弱い被熱痕跡が認められる。この石囲炉には浅い前庭部があり、この前庭部はSI12北側崗溝の一部を切っている。

柱穴はSI05bに属するとみられるものが5個である。他のものと比較して柱穴規模が大きく、しっかりとしたものがこれらである。SI05bに属するものは不明であるが、規模の小さな柱穴のいくつかがこれに該当するものとみられる。

出土遺物の大半は埋土中層より出土しているが、これに比して埋土下層および床面での出土は極端に少ない。大半がSI05新に属するものであると考えられる。また、土器の一部がSI02出土のものとの接合関係にあり、さらにSI02と出土状況も似ることから、これら2棟は同時期に廃絶した竪穴住居である可能性が高い。出土した土器は、縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられ、竪穴住居が完全埋没するまでの期間を考慮しても竪穴住居もこの遺物の時期と大きく隔たることはないものと考えられる。

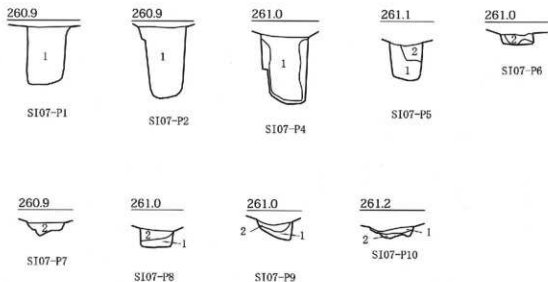
SI06 (第17・18図、写真図版9)

調査区北西部、南から北へ向け緩やかに下り傾斜する地点に位置する。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。また、削平のためか斜面下方、すなわち北側は埋土が残存せず、床面が露出している。SI02と重複関係にあり、断面では切り合いが不明瞭であったが、斜面上方に位置するSI02の床面がSI06に及んでいないこと、検出状況などからこの遺構はSI02を切っている可能性が高い。長軸5.6m、短軸5.2mの平面楕円形に近いが、周溝に角が認められる箇所もあり、本来多角形を指向する竪穴住居である可能性が高い。軸方向は炉お

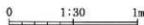


- S107
- 1 10YR2/1 黑色シルト (中粒砂混、締まりなし)
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (締まりなし、地山 B.L 少量含む)
 - 3 10YR4/4 褐色シルト (粗粒砂混)

第19図 S107



- 1 10YR3/2 黒褐色シルト (地山 B.L 少量含む)
 2 10YR2/1 黒色シルト (炭化物・地山 B.L 少量含む)



第20図 SI07付属施設

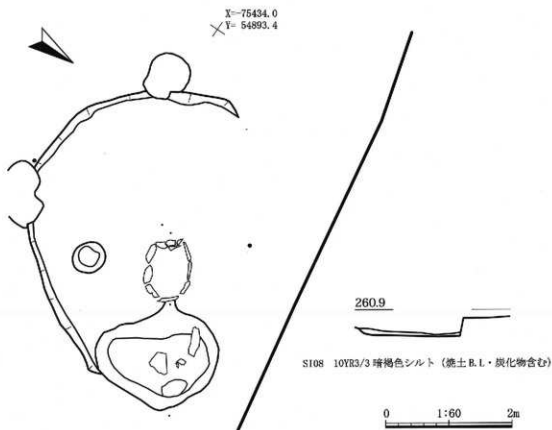
よび前庭部の位置から北東を指向し、東へ42度傾くものとみられる。深さは埋土が残存する南側で25cm、埋土は大きく分けて上下2層からなる。埋土上層は暗褐色シルトを主体とする自然堆積層である。下層は上層より明るい色調の褐色シルトであり、非常に堅致である。床面は比較的平滑で固く締まる黄褐色シルトである。この床面には前庭部を有する石囲炉、柱穴、周溝等が認められる。床面の遺物は散見される程度である。

石囲炉 (SI06-F1) は、前庭部側の石組が良好に残存しており、その石の配置から長方形を基調とするものと考えられる。燃焼部は石囲炉中央よりやや前庭部側で、被熱による焼土が形成されている。前庭部は北東方向に開き、外側でやや広がる平面台形を有する。前庭部埋土は焼土や炭化物を多く含み、これを除去すると柱穴 (SP) が検出された。

柱穴は4個を検出した。いずれも比較的細く深いものである。いずれの埋土も暗褐色シルトであるが、前庭部で検出した柱穴 (SP) は黒色シルトである。このことから、この柱穴は竪穴住居に伴わないことが明らかである。

周溝は全周しないが、途切れる北側が削平されていることを考えれば、本来は全周する可能性が考えられる。

出土遺物は住居埋土や前庭部埋土から縄文土器が出土した。出土した土器より、この竪穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。



第21図 S108

S107 (第19・20図、写真図版10・11)

調査区北西部、南から北へ向け緩やかに下り傾斜する地点に位置する。遺構西側は調査区外へ延びているため全体の様相は不明である。遺構検出面は近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。全体的に遺構上部が擾乱されており正確な形状を把握することが困難であった。したがって、平面形態は長楕円形になったが、壁の立ち上がりがルーズであるため本来長方形であった可能性も考えられる。規模は、調査区内で確認できる長軸6.5m、短軸4.2mである。住居埋土は上下2層からなり、上層は黒色、下層は黄褐色をそれぞれ基調とするシルトである。いずれも締まりが無い。床面は多少凹凸がある締まったシルト面である。床面では石囲炉2基、柱穴を多数検出した。

石囲炉は2基検出された。住居東側の石囲炉(S107-F1)は、大きさや質が異なる石が乱雑に並べられている。平面形態は不明であるが、多角形か円形を指向するものとみら



第22図 S108付属施設

れる。燃焼部はほぼ全面的に被熱しており、明瞭な赤褐色である。一方、西側調査区境に位置する石囲炉（SI07-F2）は7個の石が検出され、大半は調査区外へ及んでいると考えられる。調査区境にはヒューム管製の側溝が築かれており、その掘り方等でこの炉の大半が失われているものと推測される。

なお、住居東側で検出した土坑（SK47）は、床面付近で検出されたが、この住居に伴うものではないと考えられる。この堅穴住居よりもSK47の方が古いと推測される。

出土遺物は住居埋土からわずかながらも縄文土器が出土した。出土した土器より、この堅穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

SI08（第21・22図、写真図版12）

調査区北西部のほぼ平坦な地点に位置する。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。平面形態は円形または楕円形を呈する。主軸方向は北東方向を指向し、東へ30度傾く。規模はこの主軸方向で3.3mである。埋土はほぼ単層の黒褐色シルトであり、深さは10cm程度である。床面は小さな凹凸があるが、およそ平坦である。床面では前庭部を有する石囲炉1基を検出した。

石囲炉（SI08-F1）は、大きさがほぼ同じ8個の扁平な円礫からなっており、主軸方向に長く六角形を意識して並べられている。すなわち、円礫の配置は両側面にそれぞれ2個、長軸方向の頂点をそれぞれ2個の円礫で作りに出している。前庭部は長楕円形の掘り込みで、住居主軸方向に直交する長軸を有している。前庭部は住居外側に近い部分で窪みが認められ、その近くに花崗岩の礫が積たわって出土した。この状況はあたかも礫がその窪みに縦方向に立てられていたかのようである。燃焼部は弱い被熱が認められる。

住居内および周辺では柱穴（SP）が検出されたが、規模や埋土から住居に伴うものではなく、住居に重なっている掘立柱建物を構成する柱穴であると考えられる。

出土遺物は、住居埋土から縄文土器が少量出土した。出土した土器より、この堅穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

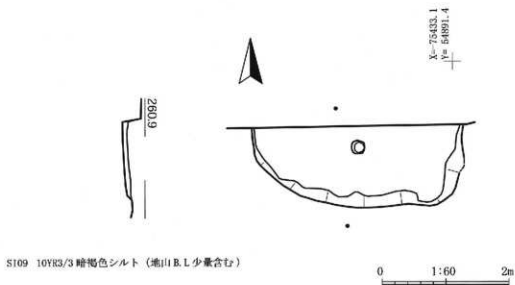
SI09（第23図、写真図版13）

調査区北西部のほぼ平坦な地点に位置する。遺構北側の大半は調査区外へ延びているため全体の様相は不明である。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。平面形態は調査区内で半円形を呈しているため円形あるいは楕円形である可能性が考えられる。規模は調査区境で3.3mの長さである。埋土は灰黄褐色シルトであり、深さは最深でも5cmである。床面では柱穴を1個検出したが、この住居に伴うものか掘立柱建物を構成するものか判断できない。

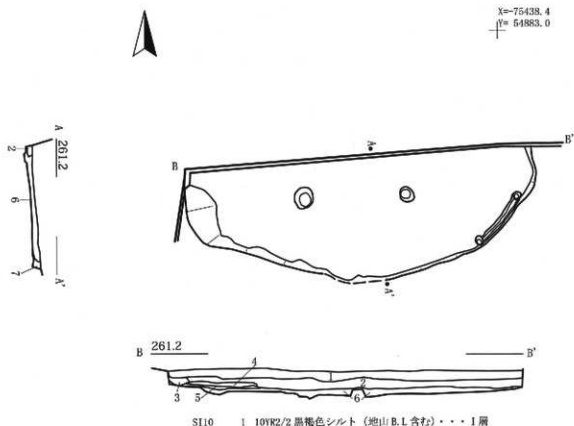
出土遺物は無かったが、周辺の状況から考えて他の堅穴住居と同じ時期の堅穴住居である可能性が高い。

SI10（第23図、写真図版14）

調査区北西部のほぼ平坦な地点に位置する。遺構北側の大半は調査区外へ延びているため全体の様相は不明である。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。平面形態は調査区内で半円形を呈している。円形あるいは楕円形、多角形である可能

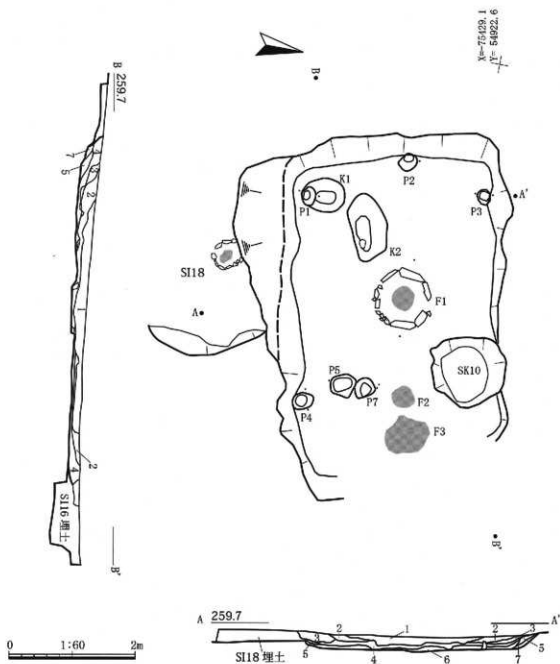


第23図 S109



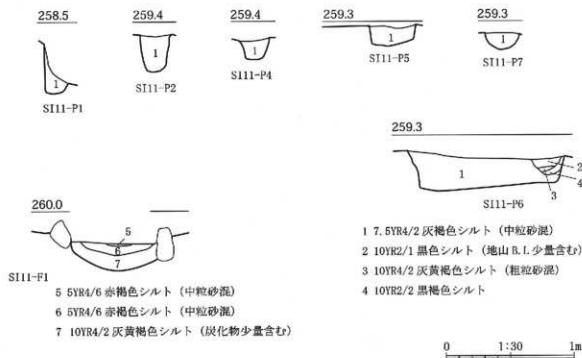
- SI10
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト (地山 B.L 含む) . . . I 層
 - 2 10YR3/1 黒褐色シルト (粗粒砂混)
 - 3 10YR3/3 暗褐色シルト
 - 4 10YR3/2 暗褐色シルト (地山・燃土 B.L 少量含む)
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (炭化物少量含む)
 - 6 10YR3/3 暗褐色シルト (地山 B.L 少量含む)
 - 7 10YR4/4 褐色シルト (粗粒砂混)

第24図 S110



- S111
- 1 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質)
 - 2 10YR3/3 暗褐色シルト (炭化物・焼土 B.L 含む)
 - 3 10YR3/1 黒褐色シルト (粗粒砂混)
 - 4 10YR8/1 灰白色花崗岩風化土 (粗粒)
 - 5 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (炭化物含む)
 - 6 10YR4/4 褐色シルト (粗粒砂混)
 - 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト

第25図 S111



第26図 S111付属施設

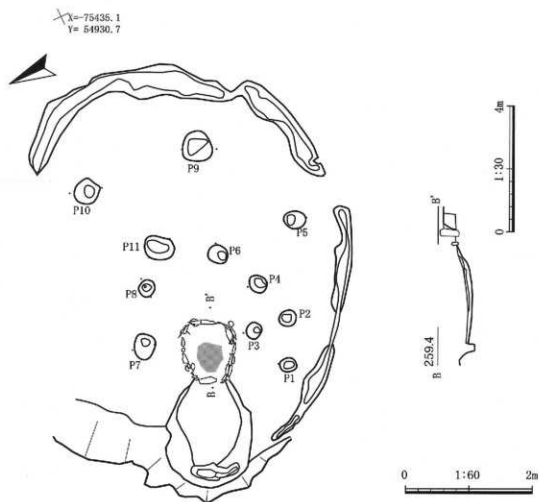
性が考えられる。規模は調査区境で5.4mの長さである。埋土は灰黄褐色シルトであり、深さは最深でも5cmである。床面は固く締まっており、柱穴を2個検出した。しかし、この住居に伴うものか掘立柱建物を構成するものか判断できない。

出土遺物はごく少量の縄文土器片が出土したが、いずれも縄文時代中期のものであると考えられる。出土遺物によって時期を特定することは困難であるが、周辺の状況から考えて他の竪穴住居と同じ時期の竪穴住居である可能性が高い。

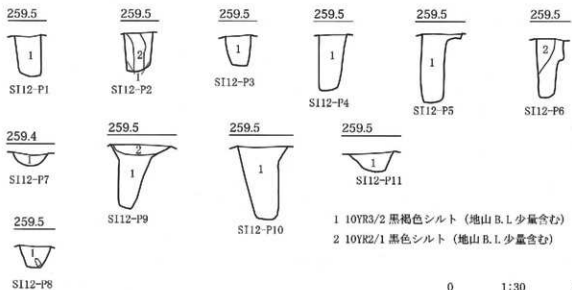
SI11 (第24・25図、写真図版15・16)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。SI12・SI18・SI16・SI28などの竪穴住居およびSK10と近接する。そのうち、SI18・SI16・SI28・SK10とは直接切り合い関係がある。そのうち断面から確実な関係として、SI16の埋土中にこの住居床面が作られていることから、SI16よりも大幅に新しい。SI18は断面よりSI11に切られている可能性が高い。SK10はSI11の検出中で遺構プランが見え、断面においてもこれを切っていることが明らかである。長軸4.5m、短軸2.1mの平面長方形の竪穴住居である。軸方向はほぼ東西を指向する。深さは24cmで、埋土はおおむね2層のシルトである。埋土上層は黒色シルトの自然堆積層であり、下層はやや明るい黄褐色シルトである。これら層界には花崗岩が風化して細くなったものが層をなしている。また、床面はわずかに凹凸があるが、おおむね平滑である。床面には石囲炉や地床炉が検出されるほか、柱穴もみられる。

石囲炉 (SI11-F1) は住居の中央よりもやや西寄りに1基存在する。石は六角形を意識して並べられている。焼焼部は石囲炉の中央部分に形成されており、赤褐色の被焼痕跡が認められる。さらにこの



第27図 S112



第28図 S112付属施設

石囲炉は土坑状の堀方を有しており、床面に丸く掘り込まれた穴の縁辺に石を並べた後、石囲い内側を土で充填している。このほかに、SI16との境付近の床面で地床炉と考えられる焼土の広がりを検出している。柱穴は7個検出した。また、西側床面で土坑状の遺構も確認したが、この住居に伴うものかどうか不明である。

出土遺物は、住居埋土から縄文土器が出土した。出土した土器より、この竪穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

SI12 (第26・27図、写真図版17)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。SI05・SI11・SI18・SI28などの竪穴住居と直接切り合い関係がある。このSI12はSI05およびSI28を切り、SI11およびSI18に切られる。長軸3.8m、短軸2.9mの平面円形あるいは多角形の竪穴住居である。軸方向はほぼ東西を指向する。深さは40cmで、埋土はおおむね2層のシルトである。埋土上層は黒色シルトの自然堆積層であり、下層はやや明るい黄褐色シルトである。床面はおおむね平坦であり、固く締まる。床面では前庭部を有する石囲炉、周溝、柱穴等を検出した。

石囲炉は方形を崩した六角形に石が並べられており、住居中心側の一边は2重に石が並ぶ。出土遺物は、住居埋土から縄文土器が出土した。出土した土器より、この竪穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

SI14 (第7図、写真図版18)

調査区南西部、南から北へ向けわずかに傾斜する地点に位置する。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。さらに、SI01と重複関係にあり、断面では切り合いは不明瞭であったが、床面の高低差や検出状況などからSI01に切られている可能性が高い。残存する本来の長軸0.8m、短軸2.2mの平面長方形の竪穴住居であると考えられる。軸方向は東へ約45度傾くものとみられる。深さは5cmで、埋土はほぼ単層の暗褐色シルトを主体とする自然堆積層である。床面は比較的平滑で固く締まる黄褐色シルトであり、部分的に地山の小礫が認められる。この床面には地床炉とみられる焼土、柱穴、周溝が認められる。床面での遺物はわずかに散見される程度である。

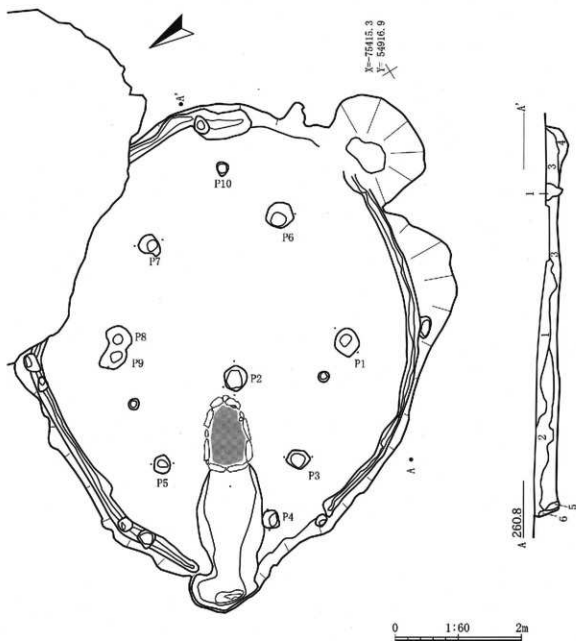
地床炉は弱い被熱の範囲が認められ、概ね円形を基調としている。

柱穴は主柱穴とみられる2個からなり、それぞれコーナーに位置する。いずれも深さ20cm程の規模を有し、柱痕跡不明瞭である。また、SI01床面にも柱穴は及ぶとみられる。

出土遺物の大半は埋土中より出土しているが、微細な縄文土器の破片である。縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

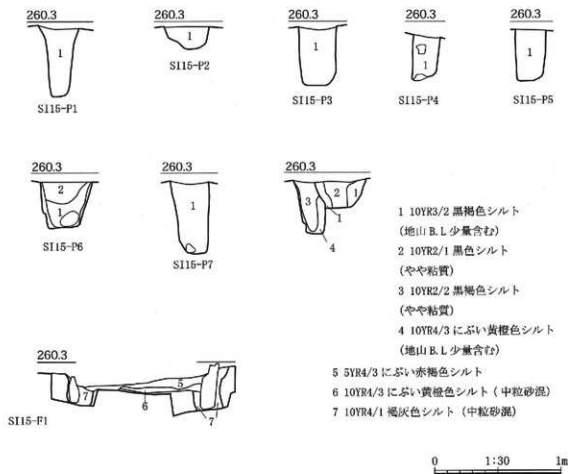
SI15 (第29・30図、写真図版19)

調査区中央部北側、南から北へ下る傾斜がほぼ収斂する平坦な地点に位置する。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。SI17と切り合いが認められ、SI17に切られている。長軸8.2m、短軸6.4mの多角形を基調とすると思われる竪穴住居である。多角形の角は、緩やかに曲線を描いているものの本来は7箇所角が存在するものと考えられる。軸方向は炉および前庭部の位置および形状から北東を指向し、東へ40度傾くものとみられる。深さは35cmで、上下2層からなる埋土は褐色シルトの自然堆積層である。床面には前庭部を有する石



- S115
- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト (締まりなし)
 - 2 10YR2/1 黒色シルト (炭化物少数含む)
 - 3 10YR3/1 黒褐色シルト (小礫含む)
 - 4 10YR2/3 黒褐色粘質シルト
 - 5 10YR2/3 黒褐色シルト (地山 B. L 多く含む)
 - 6 10YR2/2 黒褐色シルト (地山小 B. L 多量に含む)

第29図 S115



第30図 S115付属施設

囲炉1基、柱穴、周溝等が認められる。床面での遺物は土器小破片が散見される程度である。

石囲炉の石組は、楕円から卵形に近い台形を基調とするものである。石組を構成する石は土なもの10個の円礫からなり、扁平で長い形状のものが選ばれている。石組は前庭部側の辺が長く、住居中央寄りの辺を短くする意図がみられる。焼土は石囲炉内の前庭部寄りに形成されている。この焼土面は住居中央寄りの部分より前庭部寄りの方がやや低く傾斜している。前庭部は住居外方向へ向けて傾斜し、前庭部底面より浮いた状態で大小様々な石が混じっている。これらは住居埋土の観察では認められないため、この周辺にまとめて投棄されたか、この周辺で何らかの施設として使用されていた可能性が考えられる。

柱穴は主柱穴7個、小形の壁柱穴が6個認められる。主柱穴はいずれも深さ約15~20cmの規模を有し、大半のものが柱痕跡不明瞭である。

周溝は、前庭部を除き全周している。周溝埋土は、住居埋土下層にまで連続してその痕跡が認められる。このことは木製の壁材が残ったままの状態では住居埋土下層が堆積した結果と考えられる。出土遺物は遺構検出中、埋土中、床面のそれぞれで縄文土器が出土したが、層位による遺物の時期差は認められない。出土した土器から縄文時代中期中葉~後葉に属する竪穴住居であると考えられる。

SI16 (第29・30図、写真図版20)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。SI11およびSK10とそれぞれ切り合いが認められ、いずれの遺構にも切られている。長軸9.2m、短軸7.4mの平面多角形の竪穴住居である。多角形角は緩やかなカーブを描いているが、7~9角形を指向するものと考えられる。軸方向は東西方向を指向する。深さは45cmで、埋土は上下2~3層のシルトである。この埋土は褐色のシルトが顕著な自然堆積層である。埋土には上~中層には焼土や炭化物を多く含む箇所も存在する。床面はおおむね平滑であるが他の住居よりもやや床面標高が低いためか、地点によっては花崗岩質の風下層に相当する地山が認められる。床面には石囲炉が検出されるほか、柱穴、周溝も確認できる。また、他の竪穴住居ではみられない5~10cmの段差が住居西半の両側に認められる。床面の機能が段差の上下で異なる可能性が考えられる。

石囲炉は竪穴住居中央より西寄りに存在する。石囲炉は方形から六角形を指向していると思われる。大小様々な円礫を用いて作られており、燃焼部は弱い赤褐色の被熱範囲を確認した。焼土の範囲は住居中央寄りに形成されている。

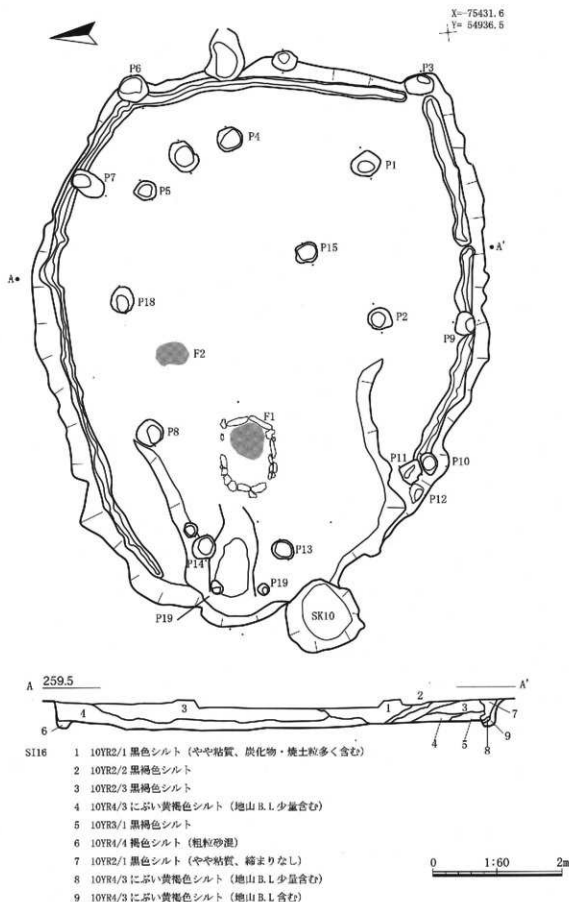
柱穴は床面で10個、側壁部に6個確認された。柱穴の平面配置は不規則であるが、住居東半に位置する4個は住居平面形の角部分と一致するように配されている。このことからこれらが土となる柱穴であると推測される。柱穴は柱痕跡の明瞭なものはないが、いずれも約30cmの深さを有している。

周溝は部分的に途切れる箇所も存在するが、前庭部を除いてほぼ全周する。

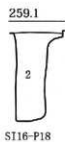
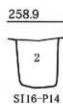
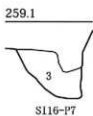
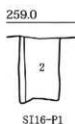
出土遺物は埋土上層および中層から縄文土器等の遺物が出土した。出土した土器より、この竪穴住居は縄文時代中期中葉~後葉に属すると考えられる。

SI17 (第33・34図、写真図版20)

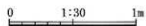
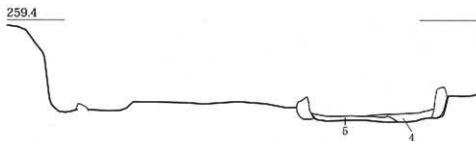
調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。SI15およびSI19と切り合いが認められ、SI15の一辺を切り、SI19の石囲炉が残存していることからこれによって切られている可能性が高い。削平が顕著であるため、壁の大半は失われている。不整な平面形態であるが多角形を意識しているものと考えられる。長軸7.6m、短軸6.3mであるとみられる。深さは12cm、埋土はおおむね単層のシルトである。床



第31図 S116



- 1 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質)
- 2 10YR4/3 にぶい黄橙色シルト (地山 B.L 多く含む)
- 3 10YR4/6 褐色シルト (粗粒砂混)
- 4 5YR4/3 にぶい赤褐色シルト (炭化物少量含む)
- 5 5YR4/4 にぶい黄橙色シルト (粗粒砂混)



第32図 S I 16付属施設

面は固く締まり平滑である。床面には石囲炉が1基、多数の柱穴が確認された。

石囲炉は、部分的に側面の石が数個欠れているが、概ね方形から逆台形の平面形態であると考えられる。いずれの石も扁平な円礫で、石の長短と方向を意識して並べられている。石組の住居中央寄り側面は、3重に囲いがなされており、その他の測辺よりも密に組まれている。燃焼部は石囲炉のほぼ中央部分に形成されており、やや弱い被熱痕跡が認められる。この石囲炉には前庭部があり、この前庭部は撥形を呈し、端部には窪みが認められる。この窪みはあたかも掘えられていた石が抜き取られたかのような状況である。

柱穴は18個ある。主柱穴と壁柱穴からなると考えられるが、重複しているSI19のものも存在していると思われる。

周溝は攪乱著しい部分と前庭部を除き全周している。

出土遺物の大半は埋土より出土している。出土した縄文土器は、縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

SI18 (第35・36図、写真図版22)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。SI11およびSI12と切り合っているものと考えられるが、新旧を明確に判別できなかった。しかし、このSI18の前庭部と重なるSI11の壁面は、この部分において不明瞭となっており、SI18がSI11の壁を損壊している可能性が考えられる。SI12との関係は、SI12の周溝が、SI18範囲内において検出できなかったため、SI18構築時にこの周溝を破壊している可能性が考えられる。このように他の竪穴住居に挟まれ、残存状況が良好ではないが、残存する長軸3.1mの平面円形に近い形態であるものと考えられる。軸方向は炉および前庭部の位置から北を指向する。残存する深さは5cm程度、埋土は褐色シルトを主体とする自然堆積層である。床面は比較的平滑で固く締まる黄褐色シルトである。この床面には前庭部を有する石囲炉、柱穴が認められる。床面での遺物は散見される程度である。

石囲炉は、石組がほぼ完存に近く、その石の配置からやや胴張りの長方形を基調とするものと考えられる。燃焼部は石組内に全体みられ、被熱による微かな焼土が形成されている。前庭部は石組同様に胴張りの長方形を呈し、燃焼部より数cmの窪みである。前庭部埋土は炭化物を若干含む。

柱穴は南西に2個を検出した。いずれも比較的小さい規模である。

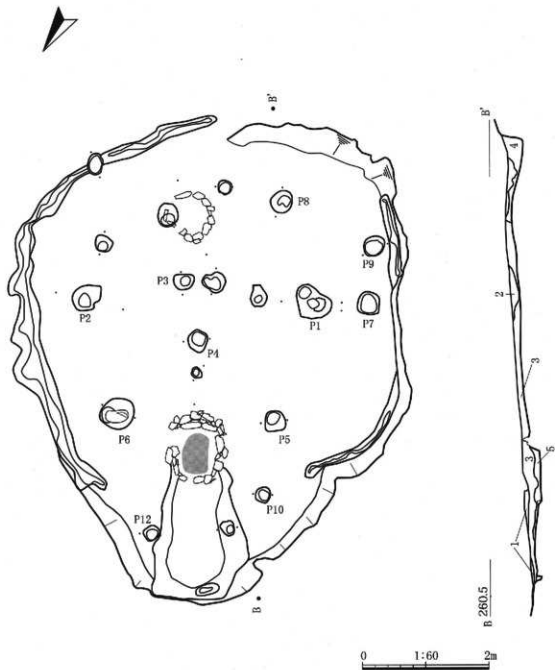
出土遺物は住居埋土や前庭部埋土から縄文土器が少量出土した。出土した土器より、この竪穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

SI19 (第37・38図、写真図版22)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。SI17と切り合いが認められ、この住居の石囲炉がSI17の住居範囲内に残存していることから、これを切っている可能性が高い。また、SI20とも近接するが、削平の著しい箇所であったため直接的な切り合い関係の有無については不明である。全体的に削平および攪乱によって壁の大半は欠われている。平面形態は残存する壁およびSI17の範囲内で検出される柱穴の配列から長方形を呈するものと考えられる。主軸方向は、平面形態と同様に柱穴の配列等からは北を指向するものと推測される。埋土はほぼ単層の黒褐色シルトである。床面はSI17床面とほぼ同じ面を検出され、本来の床面は平坦であったと考えられる。床面では石囲炉1基、柱穴12個を検出した。

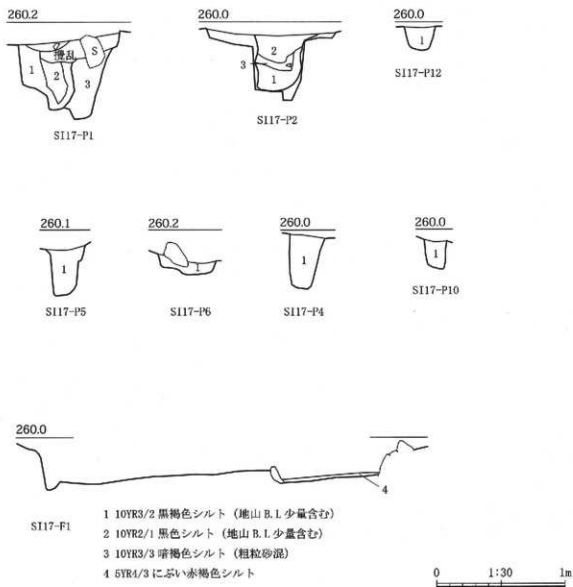
石囲炉は、準大の円礫によって石組がなされている。本来、多角形か円形に並べられていたものと

X=75453.0
Y=54921.4



- S117
- 1 10TR2/2 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
 - 2 10TR2/1 黒色シルト
 - 3 10TR3/3 暗褐色シルト (地山小・B.L少量含む)
 - 4 10TR3/3 暗褐色シルト (やや粘質)
 - 5 10TR3/2 黒褐色シルト (地山・焼土・B.L少量含む)

第33図 S117



第34図 S117付属施設

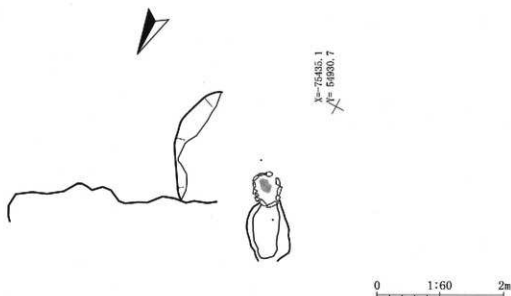
考えられるが、東側の一辺は複数個の石が失われている。この石組の東側石の下には、柱穴が検出され、この住居によって切られたSI17に帰属するものである可能性が考えられる。

住居内および周辺では柱穴（SP）が検出された。列をなすものについてはこの住居に帰属するものと考えられるが、SI17の柱穴も範囲内に存在しており、峻別が困難である。

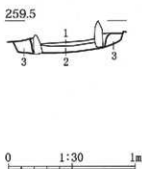
出土遺物は、住居埋土から縄文土器が少量出土した。出土した土器より、この竪穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

SI20（第37図、写真図版23）

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。本来この地点は、周辺の地形から考えて緩やかに傾斜するものとみられるが、近現代の耕作地造成によって大きく削平されているようである。そのため、表土や耕作土の除去中に石囲炉の残骸が検出され、壁や床面も完全に失われていた状況である。そのため遺構全体の様相は不明である。また、その形態や規模についても推測することすら困難である。



第35図 SI18



SI18-F1

- 1 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト（炭化物多量を含む）
- 3 10YR4/1 褐灰色シルト（炭化物少量含む）

第36図 SI18付属施設

石罫炉の残骸も数個の石がまばらにみられるのみで、形態や規模は不明である。しかし、この位置は住居群の構成からみて、住居が存在する可能性が高い地点であることを付記する。

SI22 (第39・40図、写真図版24)

調査区中央部やや北寄りのほぼ平坦な地点に位置する。遺構検出面は、近現代の畝間溝状耕作痕が幾筋も認められ、これにより遺構上部は乱されている。また、周辺は風倒木痕とみられる攪乱が点在し、遺構全体形は不明である。しかし、平面形態は北半が半円形であるため円形であった可能性が高い。規模は残存する直径3.2mである。埋土は黄褐色シルトであり、深さは最深でも3cmである。

炉は前庭部を有する石罫炉であると考えられるが、石組を構成する石数個のみみられたが、いずれも原位置を留めていない。前庭部は楕円形の平面形態で浅い掘り込みである。

出土遺物は微量の縄文土器が出土した。周辺の状況や炉の形態等を考えると他の堅穴住居と同じ時期の堅穴住居である可能性が高い。

SI23 (第41図、写真図版24・25)

調査区南中央部のほぼ平坦な地点に位置する。遺構検出面は、近現代の耕作痕や水田造成によって大きく削平され、さらに遺構東半においては水田の畦畔やそれに伴う段差に当たっているため、遺構は大きく損なわれている。SI04と部分的に重複するものと考えられる。切り合いは不明瞭ながら、SI04の周溝によって切られている可能性が高い。平面形態は残存する周溝や柱穴の配列から長方形である可能性が高い。残存する柱穴等からみて長軸7m程度、短軸3.5m程度の規模であると推定される。埋土は黒色のシルトであり、深さは数cmである。床面には地床炉であると考えられる焼土範囲が3箇所みられる。床面には7個の柱穴がみられ、柱穴列に沿うように周溝も確認される。

出土遺物は埋土から少量の縄文土器が出土した。周辺の状況や炉の形態等を考えると他の堅穴住居と同じ時期の堅穴住居である可能性が高い。

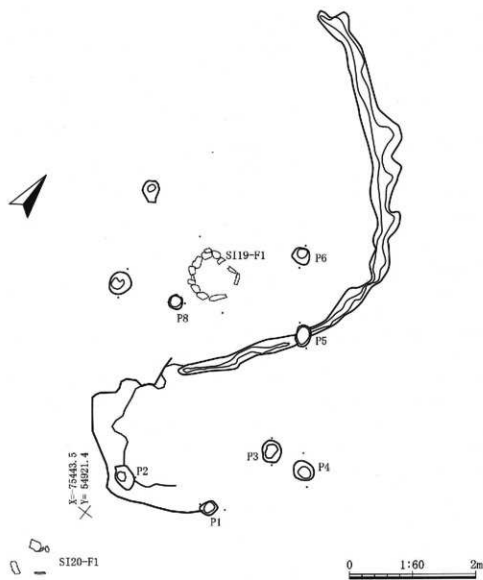
SI24 (第39図、写真図版26)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。遺構検出面は、近現代に植林された樹木の根により遺構上部が乱されている。平面形態および規模は植林木の根による攪乱のため不明である。埋土は灰黄褐色シルトであり、深さは最深で6cmである。炉は石罫炉である。11個の石から構成されており、長方形から楕円形の平面形である。柱穴と思われるものも3個検出したが、この堅穴住居に伴うものと断定できない。

出土遺物は少量の縄文土器が出土した。周辺の状況等を考えると他の堅穴住居と同じ時期の堅穴住居である可能性が高い。

SI25 (第43・44図、写真図版27・28)

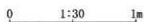
調査区北東部、南から北へ向けわずかに傾斜する地点に位置する。遺構検出面は、近現代に植林された樹木の根により遺構上部が乱されている。また、検出面には花崗岩の転石が多くみられ、これを選けるように遺構が形成されている。これら転石はこの遺構が作られる以前から存在したものと考えられる。長軸7.4m、短軸4.2mの平面長方形の堅穴住居である。主軸方向は南北を指向し、東へ約20度傾く。深さは35cmで、埋土は上下2層からなる。埋土上層は黒色シルトが顕著な自然堆積層である。下層は黒褐色シルトである。いずれの埋土からも多量の剥片類や剥片石器未成品などが検出された。きわ



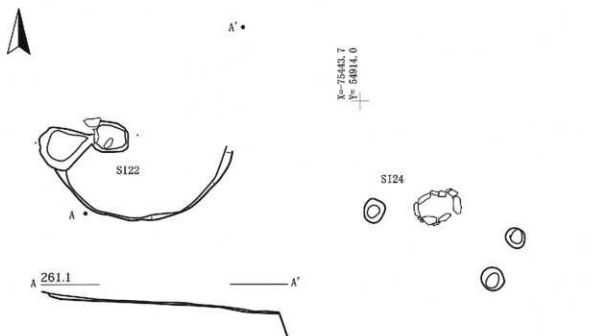
第37図 S I 19・20



- SI19-F1
- 1 SYR3/2 暗赤褐色シルト
 - 2 10YR3/4 暗褐色シルト (炭化物含む)
 - 3 10YR2/1 黒色シルト (炭化物少量含む)

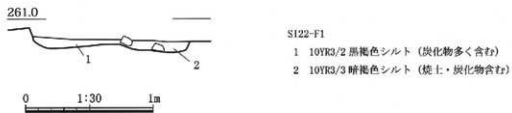


第38図 S I 19付属施設

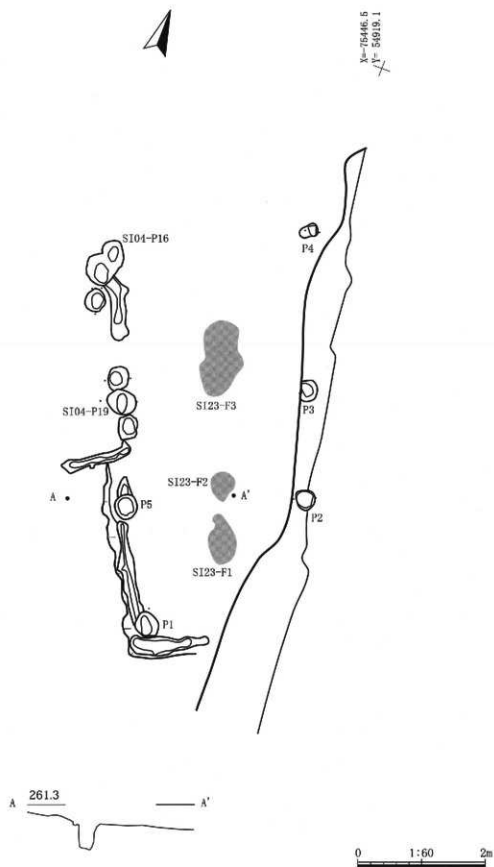


S122 10YR3/1 黒褐色シルト (粗粒砂混、地山 B.L 少量含む)

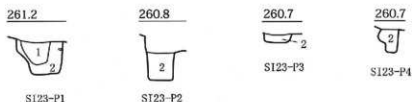
第39図 S122・24



第40図 S122付属施設

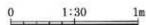


第41図 S123



1 10YR3/2 黒褐色シルト (地山 B.L 少量含む)

2 10YR3/1 黒褐色シルト (地山 B.L 少量含む)



第42図 S123付属施設

めて細かな剥片は、1cmに満たない程の鱗状のものが多く認められ、剥片石器刃部等の加工で生じたものであると考えられる。ただし、住居床面付近からはほとんど出土しないことから、この住居が埋没する過程で廃棄されたものである可能性が高い。床面は凹凸があり平滑ではなく、締まりもない状況である。しかし、この床面には石囲炉や地床炉が検出されるほか、この竪穴住居に伴うであろう柱穴も確認できる。

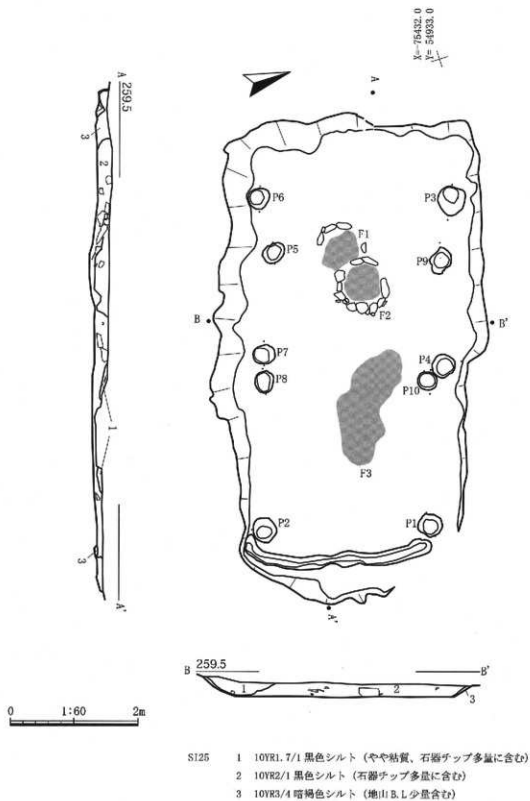
石囲炉は、竪穴住居中央よりやや北東へ寄った位置に2基存在する。この2基の石囲炉を構成する石組は、平面円形を基調としていると思われるが、欠落している部分があるため多角形である可能性も否定できない。2基は切り合いが認められ、東にあるものが中央よりある1基に切られている。この状況から、この2基の石囲炉は2時期の使用の可能性が考えられる。一方、地床炉は竪穴住居中央付近に位置し、不定形な弱い赤褐色の範囲を確認した。

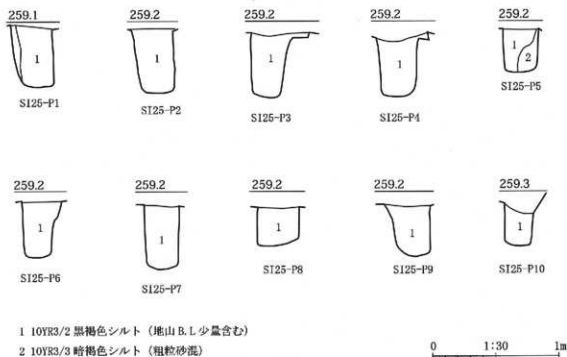
柱穴は四方隅にそれぞれ4個、西側壁際および東側壁にそれぞれ3個ずつ配置されている。これらは柱筋が沿わない対の柱穴が存在するため、石囲炉でみられた2時期と対応する可能性が考えられる。また、柱穴は柱痕跡の明瞭なものはないが、どれも直径25cm、約30cmの深さを有している。

出土遺物は先述した通り埋土から石器製作に伴う剥片が多量に出土した。また、床面から縄文土器が出土した。出土した土器より、この竪穴住居は縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

SI26 (第45・46図、写真版図29)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。遺構検出面は、近現代に植林された樹木の根により遺構上部が乱されている。平面形態および規模は植林木の根による攪乱のため不明である。SI16と比べて近接するが、直接的な切り合いは認められず先後関係は不明である。主軸方向は前庭部のありかたから東西方向を指向すると考えられる。埋土は褐色シルトであり、根による攪乱のためか締まりが無い。床面と思われる面には石囲炉、その周辺には柱穴になる可能性のあるピットが検出され、竪穴





第44図 S I 25付属施設

住居であると考えられる。

石囲炉は本来、石組であったと思われる石が5個散見され、そのうち南側3個の列は幸うじて原位を留めている可能性が高い。また、焼土もわずかに認められる。前庭部は小規模な不整形円形の窪みがみられ、SI16の壁直近まで延びている。

出土遺物は、この住居を検出する際に縄文土器片が出土した。また、わずかながら埋土からも出土が確認され、周辺の状況を考えて他の竪穴住居と同じ時期の竪穴住居である可能性が高い。

SI27 (第45・46図)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。遺構検出面は、近現代に植林された樹木の根により遺

構上部が乱されている。平面形態および規模は植林木の根による攪乱のため不明である。SI25・SI26の間に位置し、それぞれきわめて近接するが、直接的な切り合いは認められず先後関係は不明である。住居埋土はほぼ残存しておらず、黒色土を除去すると石囲炉が検出される。平面形態および規模は植林木の根による攪乱のため壁が残存しておらず不明である。床面と思われる面には石囲炉、その周辺には柱穴になる可能性のあるピットが検出され、堅穴住居であると考えられる。

石囲炉は乱雑に石組が全周するが、焼土はわずかで前庭部は存在しない。

出土遺物は縄文土器の微細な破片がわずかに出土した。出土遺物から遺構の時期を特定することは困難であるが、周辺の状況を考えると他の堅穴住居と同じ時期の堅穴住居である可能性が高い。

SI28 (第47・48図、写真図版30)

調査区北東部のほぼ平坦な地点に位置する。土坑等に損壊される部分があり全体形は不明だが、円形を基調とするものであると考えられる。南北3.7mの平面長方形の堅穴住居である。主軸方向は前庭部のあり方から北を指向するとみられる。埋土は黒褐色のシルトであり、炭化物や焼土粒を多く含んでいる。床面はおおむね平坦であり、前庭部を有する石囲炉や柱穴が認められる。

石囲炉は、準人の円礫によって石組がなされている。石組を構成する石の一部が失われているが、平面長方形に並べられていたものと考えられる。焼土は石囲炉内の前庭部寄りに形成されている。前庭部は住居外方向へ向けて傾斜し、浅い窪みである。

出土遺物の大半は埋土より出土している。出土した縄文土器は、縄文時代中期中葉～後葉に属すると考えられる。

(2) 掘立柱建物

SB01 (第49・50図、写真図版46)

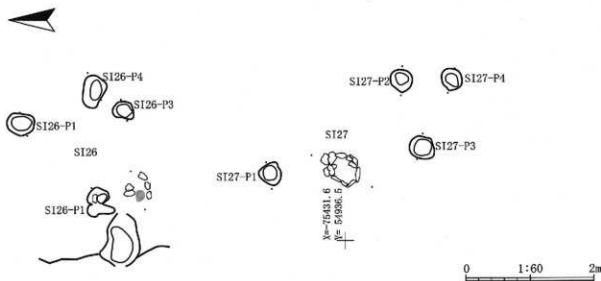
調査区北西に位置する。SI06およびSB02と重複し、これらに切られていると考えられる。平面長方形を呈すると想定される。長軸は北西方向を指向し、西側の柱列は北からSI06-P7、SP175、SP16と並び、東側の柱列は北からSP68、SP25、SP19である。柱穴の埋土はいずれも暗褐色土に地山ブロックがみられ、人為的な堆積を示す。遺物は出土していないが、少なくともSI06よりも古い建物である。

SB02 (第49・51図、写真図版46)

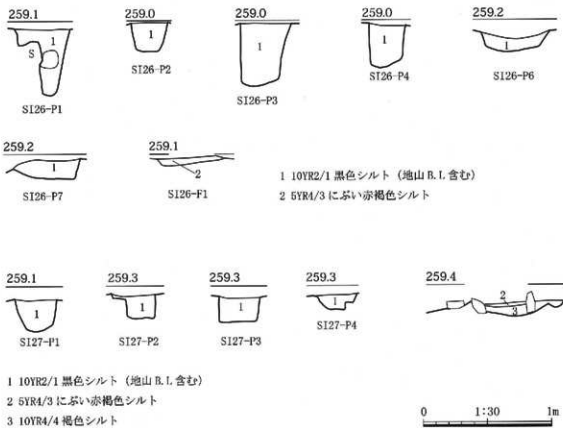
調査区北西に位置する。SB01と重複し、これを切っていると考えられる。平面長方形を呈すると想定される。長軸は北東方向を指向し、西側の柱列は北からSP70、SP174と並び、東側の柱列は北からSP159、SP18である。柱穴の埋土はいずれも暗褐色土に地山ブロックがみられ、人為的な堆積を示す。時期を特定できる遺物は出土していないが、少なくともSI06よりも古い建物である。

SB03 (第49・52図)

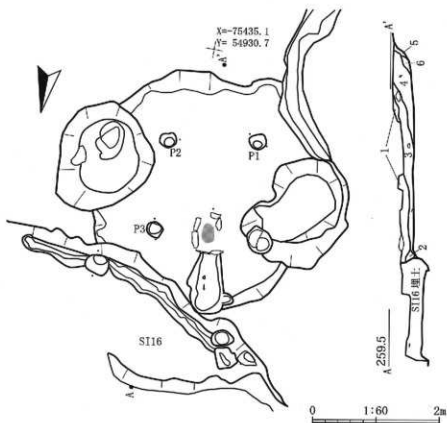
調査区北西に位置する。平面長方形を呈すると想定され、長軸は北方向を指向する。西側の柱列は北からSP60、SP24と並び、東側の柱列は北からSP42、SP173である。柱穴の埋土はいずれも暗褐色土に地山ブロックがみられ、人為的な堆積を示す。時期を特定できる遺物は出土していないが、周辺の建物同様縄文時代中期の可能性が高い。



第45図 S126・27

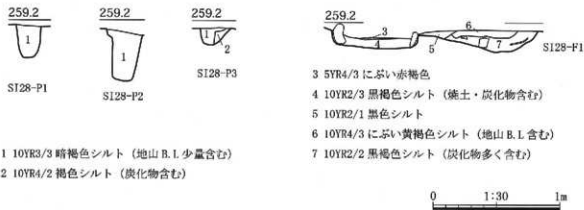


第46図 S126・27付属施設



- S128
- 1 10YR2/1 黒色粘質シルト (炭化物多く含む)
 - 2 10YR2/2 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
 - 3 10YR3/3 暗褐色シルト (地山小B.L少量含む)
 - 4 10YR3/3 暗褐色シルト (やや粘質)
 - 5 10YR3/2 黒褐色シルト (地山・粘土B.L少量含む)
 - 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (地山B.L少量含む)

第47図 S128



- S128-P1
- S128-P2
- S128-P3
- 1 10YR3/3 暗褐色シルト (地山B.L少量含む)
 - 2 10YR4/2 褐色シルト (炭化物含む)

- 3 5YR4/3 にぶい赤褐色
- 4 10YR2/3 黒褐色シルト (粘土・炭化物含む)
- 5 10YR2/1 黒色シルト
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (地山B.L含む)
- 7 10YR2/2 黒褐色シルト (炭化物多く含む)

第48図 S128付属施設

SB04 (第49・53図)

調査区北西に位置する。平直長方形を呈すると想定され、長軸は北東方向を指向する。北側の柱列は東寄りのものからSP156、SP71と並び、南側の柱列は東寄りのものからSP52、SP75である。柱穴の埋土はいずれも暗褐色土に地山ブロックがみられ、人為的な堆積を示す。時期を特定できる遺物は出土していないが、周辺の建物同様縄文時代中期の可能性が高い。

(3) 土 坑

SK01 (第54図、写真図版33)

調査区北東に位置する。直径85cmの平面円形の土坑である。深さは1.2mを測り、埋土はおおむね5層のシルトからなる。最上層のみ黒色土が流入しているが、その他は褐色から黄褐色のシルトである。遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、規模や形状から縄文時代の貯蔵穴である可能性が高い。

SK02 (第54図、写真図版33)

調査区北東に位置する。直径15cmの平面円形の土坑である。深さは20mを測り、埋土は単層のシルトからなる。埋土は黒色シルトである。遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、規模や形状から縄文時代の土坑である可能性が高い。

SK03 (第54図、写真図版33)

調査区北東に位置する。直径20cmの平面円形の土坑である。深さは20mを測り、埋土は単層のシルトからなる。埋土は褐色シルトである。底面は凹凸があり、平坦ではない。遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、規模や形状から縄文時代の土坑である可能性が高い。

SK04 (第54図、写真図版33)

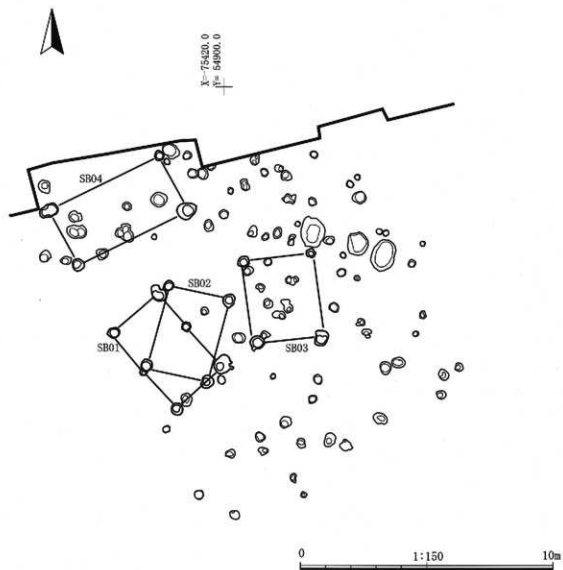
調査区北東に位置する。長軸54cm、短軸25cmの平面楕円形の土坑である。深さは10mを測り、埋土は単層のシルトからなる。埋土は黒褐色シルトである。遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、規模や形状から縄文時代の土坑である可能性が高い。また、SK08と切り合いが認められ、これを切っている。

SK05 (第55図、写真図版34)

調査区北東に位置する。直径50cmの平面円形の土坑である。深さは15cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は褐色から黄褐色のシルトである。遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、規模や形状から縄文時代の墓塚である可能性が高い。

SK06 (第55図、写真図版34)

調査区南西に位置する。直径54cmの平面円形の土坑である。深さは20mを測り、埋土は単層のシルトからなる。埋土は褐色シルトである。底面は凹凸があり、平坦ではない。遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、規模や形状から縄文時代の土坑である可能性が高い。



第49図 柱穴群と掘立柱建物

SK07 (第55図、写真図版34)

調査区北東に位置する。直径50cmの平面円形の土坑である。深さは15cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は褐色から黄褐色のシルトである。遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、規模や形状から縄文時代の墓墳である可能性が高い。

SK11 (第55図、写真図版34)

調査区南西に位置する。長軸90cm、短軸45cmの平面楕円形の土坑である。深さは50cmを測り、埋土はおおむね3層のシルトからなる。最上層のみ黒色土が流入しているが、その他は褐色から黄褐色のシルトである。遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、規模や形状から縄文時代のおとし穴である可能性が高い。

SK12 (第60図、写真図版47)

調査区南西に位置する。長軸62cm、短軸41cmの平面楕円形の土坑である。深さは25cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒色土が主体となり、若干の地山ブロックが混入している。遺物は、古代の土器がまとめて出土した。このことから古代の土坑であると考えられる。

SK13 (第55図、写真図版34)

調査区南西に位置する。長軸88cm、短軸44cmの平面楕円形の土坑である。深さは75cmを測り、埋土はおおむね3層のシルトからなる。最上層のみ黒色土が流入しているが、その他は褐色から黄褐色のシルトである。遺物は出土しなかったため時期は特定できないが、規模や形状から縄文時代のおとし穴である可能性が高い。

SK14 (第60図、写真図版47)

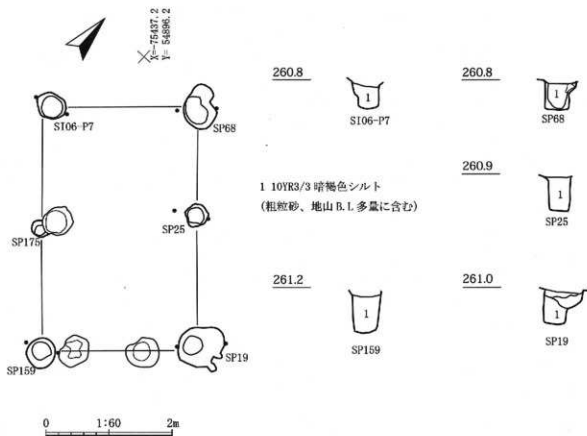
調査区南西に位置する。長軸48cm、短軸21cmの平面楕円形の土坑である。深さは25cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒色土であり、若干の地山ブロックおよび焼土ブロックが混入している。遺物は、古代の土器が少量出土した。このことから古代の土坑であると考えられる。

SK17 (第60図、写真図版47)

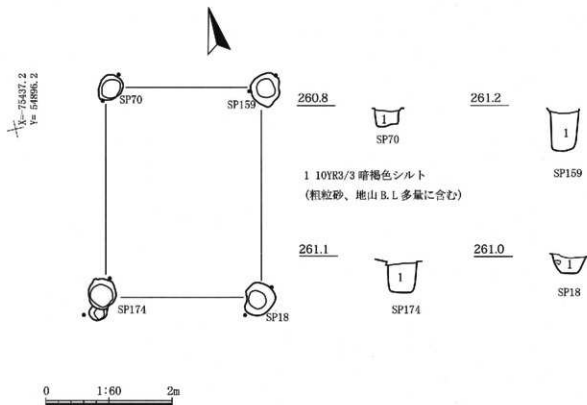
調査区南西に位置する。長軸48cm、短軸33cmの平面楕円形の土坑である。深さは15cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒色土であり、若干の地山ブロックおよび焼土ブロックが混入している。SX02と切り合いが認められ、これに切られる。遺物は、古代の土器が少量出土した。このことから古代の土坑であると考えられる。

SK22 (第61図、写真図版35)

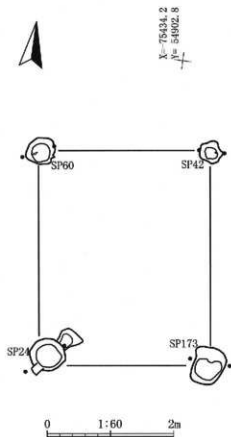
調査区北西に位置する。長軸88cm、短軸33cmの平面楕円形の土坑である。深さは56cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は暗褐色である。多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、最底面で縄文土器小形深鉢が1点ほぼ完形で出土した。このことからこの土坑は縄文時代中期中葉(大木8b式)に属すると考えられ、人為堆積であることから墓墳であると考えられる。



第50図 SB01



第51図 SB02



260.6



SP60

260.6



SP42

1 10YR3/3 暗褐色シルト (地山 B.L 多量を含む)

2 10YR3/2 黒褐色シルト (地山 B.L 少量含む)

260.9



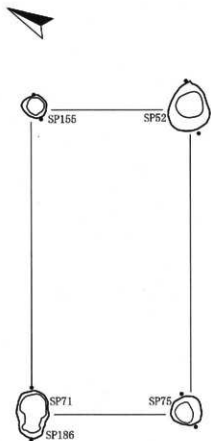
SP24

260.8



SP173

第52図 S B 03


~~X=75434.9
Y=54899.0~~

260.5



SP155

260.5



SP52

1 10YR3/3 暗褐色シルト (粗粒砂、地山 B.L 多量を含む)

2 10YR2/3 黒褐色シルト (地山 B.L 少量含む)

2 10YR3/1 黒褐色シルト

260.6



SP71

SP186

260.6



SP75

第53図 S B 04

SK23 (第61図、写真図版35)

調査区北西に位置する。長軸77cm、短軸38cmの平面楕円形の土坑である。深さは45cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は暗褐色である。多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK24 (第61図、写真図版35)

調査区北西に位置する。長軸70cm、短軸41cmの平面楕円形の土坑である。深さは52cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は暗褐色である。多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK25 (第61図、写真図版35)

調査区北西に位置する。長軸70cm、短軸41cmの平面楕円形の土坑である。深さは52cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色である。若干の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK26 (第62図、写真図版36)

調査区北西に位置する。長軸80cm、短軸49cmの平面楕円形の土坑である。深さは72cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は暗褐色である。多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK27 (第62図、写真図版36)

調査区北西に位置する。長軸65cm、短軸58cmの平面円形の土坑である。深さは30cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色である少量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

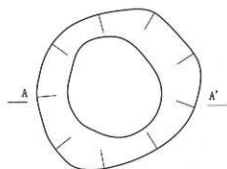
SK27 (第62図、写真図版36)

調査区北西に位置する。検出したプランの長軸65cm、短軸28cmである。平面楕円形であると考えられるが、半分は調査区外に延びる土坑である。深さは25cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色である少量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

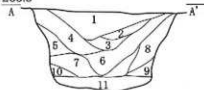
SK28 (第62図、写真図版36)

調査区北西に位置する。長軸68cm、短軸44cmの平面楕円形の土坑である。深さは38cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚

X=75429.0
Y= 54918.0

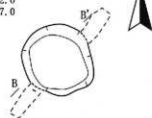


269.9



- SK01 1 10YR2/1 黒色シルト (締まりなし)
 2 10YR2/3 黒褐色シルト
 3 10YR2/2 黒褐色シルト
 4 10YR3/3 暗褐色シルト (細粒砂混)
 5 10YR2/1 黒色シルト (細粒砂混)
 6 10YR3/3 暗褐色シルト (中粒砂混)
 7 10YR3/1 黒褐色シルト
 8 10YR4/2 灰黄褐色シルト (中粒砂混)
 9 10YR4/4 褐色シルト
 10 10YR3/2 黒褐色シルト
 11 10YR2/2 黒褐色シルト (やや粘質)

X=75432.0
Y= 54917.0



- SK02 1 10YR2/1 黒色シルト
 (焼土 B.L., 炭化物少量含む)
 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
 (炭化物少量含む)

X=75433.0
Y= 54914.0

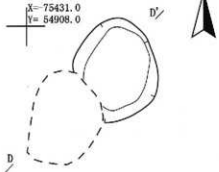


260.1



- SK03 1 10YR3/1 黒褐色シルト
 (炭化物少量含む)

X=75431.0
Y= 54908.0



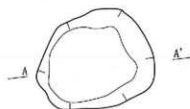
260.3



- SK04 1 10YR3/2 黒褐色シルト
 (地山 B.L 含む)

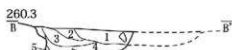
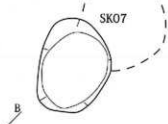
0 1:40 2m

X=75431.0
Y=54903.0



- SK07 1 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質)
2 10YR3/3 暗褐色シルト (地山小B.L.わずかに含む)
3 10YR4/4 褐色シルト

X=75431.0
Y=54908.0



- SK08 1 10YR2/1 黒色シルト
2 10YR3/3 暗褐色シルト (中粒砂混)
3 10YR3/1 黒褐色シルト (地山B.L.少量含む)
4 10YR3/2 黒褐色シルト (地山B.L.含む)
5 10YR4/4 褐色シルト (地山B.L.少量含む)

0 1:40 2m

第55図 SK07・08

であると考えられる。

SK29 (第62図、写真図版36)

調査区北西に位置する。長軸70cm、短軸38cmの平面楕円形の土坑である。深さは45cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓墳であると考えられる。

SK30 (第63図、写真図版37)

調査区北西に位置する。長軸65cm、短軸42cmのやや不整な平面楕円形の土坑である。深さは38cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓墳であると考えられる。

SK31 (第63図、写真図版37)

調査区北西に位置する。長軸88cm、短軸56cmのやや不整な平面楕円形の土坑である。深さは58cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色である。遺物は出土しなかった。墓墳が多数検出されるエリアに位置するが墓墳と考えられる土坑とは堆積状況が異なり、規模や

形状も異なる。縄文時代の所産である可能性が高いが墓塚ではない遺構であるとみられる。

SK32 (第63図、写真図版37)

調査区北西に位置する。長軸78cm、短軸60cmのやや不整な平面楕円形の土坑である。深さは57cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色である。遺物は出土しなかった。墓塚が多数検出されるエリアに位置するが墓塚と考えられる土坑とは堆積状況が異なり、規模や形状も異なる。縄文時代の所産である可能性が高いが墓塚ではない遺構であるとみられる。

SK33 (第62図、写真図版37)

調査区北西に位置する。長軸67cm、短軸49cmの平面楕円形の土坑である。深さは46cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は、出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK34 (第63図、写真図版38)

調査区北東に位置する。長軸90cm、短軸59cmの平面楕円形から長方形の土坑である。深さは58cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は褐色であり、多量の地山ブロックや小礫が混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。SK35と切り合いが認められ、これを切っている。

SK35 (第63図、写真図版38)

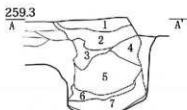
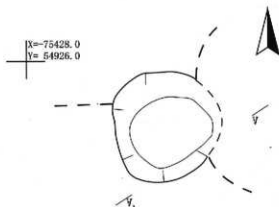
調査区北東に位置する。長軸66cm、短軸35cmの平面楕円形の土坑である。深さは15cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は褐色であり、多量の地山ブロックや小礫が混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。SK34と切り合いが認められ、これに切られている。

SK36 (第63図、写真図版38)

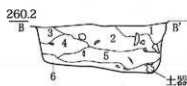
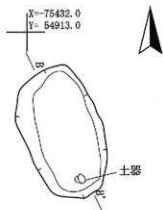
調査区北東に位置する。長軸58cm、短軸30cmの平面楕円形の土坑である。深さは20cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は暗褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかったが、位置や規模、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。検出当初は2基の土であると考えたが、切り合いが認められず、堆積状況が連続していることから1基の土坑であるとした。

SK37 (第63図、写真図版38)

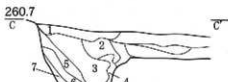
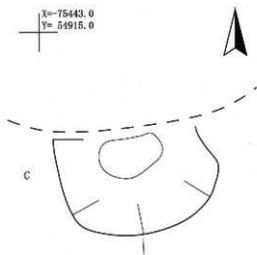
調査区北東に位置する。長軸44cm、短軸36cmの平面円形の土坑である。深さは20cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は暗褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかったが、位置、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。



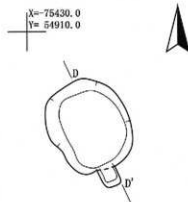
- SK10 1 10YR2/1 黒色シルト (織まりなし) 5 10YR2/1 黒色シルト (細粒砂混)
 2 10YR2/2 黒褐色シルト 6 10YR4/2 灰黄褐色シルト (中粒砂混)
 3 10YR2/3 黒褐色シルト (粗粒砂混) 7 10YR4/4 褐色シルト
 4 10YR3/4 暗褐色シルト (細粒砂混)



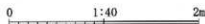
- SK22 1 10YR3/1 黒褐色シルト (地山 B.L.・炭化物少量含む)
 2 10YR3/4 暗褐色シルト (地山中 B.L. 多く含む)
 3 10YR3/3 暗褐色シルト (地山小 B.L. 多く含む)
 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (地山中 B.L. 含む)
 5 10YR4/4 褐色シルト (小礫含む)
 6 10YR4/6 褐色シルト (やや粘質)



- SK11 1 10YR2/1 黒色シルト (織まりなし) 5 10YR4/1 褐灰色シルト (細粒砂混)
 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 6 10YR5/3 灰黄褐色シルト (中粒砂混)
 3 10YR4/2 灰黄褐色シルト 7 10YR4/4 褐色シルト
 4 10YR3/3 暗褐色シルト (細粒砂混)



- SK23 1 10YR2/3 黒褐色シルト (炭化物小粒少量含む)
 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト (地山小 B.L. 多く含む)
 3 10YR3/2 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (地山 B.L. 含む)



SK38 (第64図、写真図版39)

調査区北東に位置する。長軸50cm、短軸39cmの平面楕円形の土坑である。深さは10cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は暗褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかったが、位置、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK39 (第64図、写真図版39)

調査区北東に位置する。長軸63cm、短軸41cmの平面円形の土坑である。深さは34cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックおよび小礫が混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかったが、位置、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK40 (第64図、写真図版39)

調査区北東に位置する。長軸71cm、短軸42cmの平面円形の土坑である。深さは38cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかったが、位置、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK41 (第64図、写真図版39)

調査区北東に位置する。長軸40cm、短軸29cmの平面楕円形の土坑である。深さは18cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかった。その他に比して小規模ながら位置、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK42 (第65図、写真図版40)

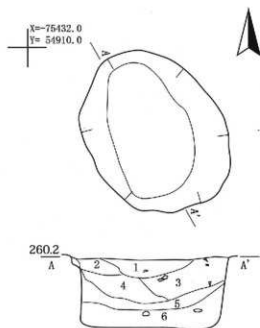
調査区北東に位置する。長軸66cm、短軸43cmの平面楕円形の土坑である。深さは24cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。底面と埋土との境界が不明瞭であった。遺物は出土しなかったが、位置、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK43 (第65図、写真図版40)

調査区北東に位置する。長軸77cm、短軸49cmの平面楕円形から隅丸長方形の土坑である。深さは33cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかったが、位置、堆積状況から縄文時代の墓塚であると考えられる。

SK44 (第65図、写真図版40)

調査区北東に位置する。長軸54cm、短軸39cmの平面円形の土坑である。深さは9cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒褐色であり、多量の地山ブロックが混入しており、人為的な堆積を示している。遺物は出土しなかった。他の土坑よりも浅いが位置、堆積状況から縄文時



SK24 1 10YR3/2 黒褐色シルト (地山中 B.L. 炭化物少量含む)

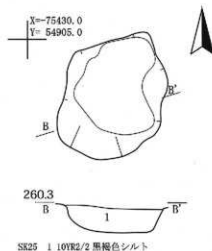
2 10YR3/4 暗褐色シルト (地山中 B.L. 多く含む)

3 10YR3/3 暗褐色シルト (地山中 B.L. 多く含む)

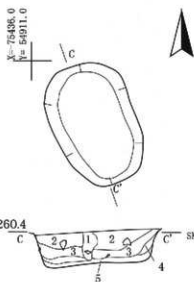
4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (地山中 B.L. 含む)

5 10YR4/4 褐色シルト (小礫・地山中 B.L. 含む)

6 10YR4/6 褐色シルト (地山中 B.L. 多く含む)



SK25 1 10YR2/2 黒褐色シルト



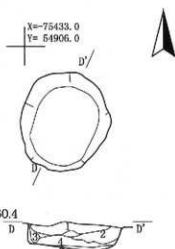
SK26 1 10YR2/1 黒色シルト

2 10YR3/4 暗褐色シルト (地山中 B.L. 多く含む)

3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (地山中 B.L. 含む)

4 10YR3/3 暗褐色シルト (地山中 B.L. 多く含む)

5 10YR4/4 褐色シルト (小礫・地山中 B.L. 含む)



SK27 1 10YR3/1 黒褐色シルト (地山中 B.L. 多く含む)

2 10YR3/4 暗褐色シルト (地山中 B.L. 多く含む)

3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (地山中 B.L. 含む)

4 10YR3/3 暗褐色シルト (地山中 B.L. 多く含む)

0 1:40 2m

代の墓墳であると考えられる。

SK45 (第65図、写真図版40)

調査区北東に位置する。長軸56cm、短軸51cmの平面円形の土坑である。深さは20cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒色であり、少量の地山ブロックが混入している。遺物は出土しなかったが、縄文時代の土坑であると考えられる。

SK46 (第66図、写真図版41)

調査区北東に位置する。長軸39cm、短軸20cmの平面円形の土坑である。深さは6cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は黒色であり、底面は多少の凹凸がある。遺物は出土しなかった。遺物は出土しなかったが、縄文時代の土坑であると考えられる。

SK47 (第66図、写真図版41)

調査区北東に位置する。SI11やSI16と切り合いが認められ、これらの埋土を切っている。直径69cmの平面円形の土坑である。深さは切り込み面から122cmを測り、埋土はおおむね5層のシルトからなる。埋土上層は黒色であり、底面はほぼ平坦である。遺物は埋土中より縄文時代後期の深鉢が出土した。SI11およびSI16が縄文時代中期の堅穴住居であること、切り合いからこの土坑の方が新しいと考えられることから出土した縄文時代後期の年代と矛盾しない。性格は規模や、フラスコ形にならないものの垂直に近い立ち上がり有することから貯蔵穴であると考えられる。

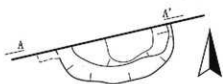
SK48 (第66図、写真図版41)

調査区北東に位置する。長軸35cm、短軸21cmの平面円形の土坑である。深さは15cmを測り、埋土はおおむね単層のシルトからなる。埋土は褐色であり、少量の地山ブロックが混入している。底面はやや凹凸が認められ、やや不整形である。遺物は縄文土器片が少量出土したが、この土坑に伴うものかどうかは不明である。縄文時代の所産であると考えられるが、遺構の性格を示す属性が見あたらず、何らかの遺構であるものの性格は不明である。

SK49 (第65図、写真図版40)

調査区北東に位置する。長軸56cm、短軸51cmの平面円形の土坑である。深さは20cmを測り、埋土はおおむね2層のシルトからなる。埋土は上下とも黒色である。根による擾乱が顕著で埋土も柔らかである。しかしながら、底面は皿状に窪み、平面楕円形の掘り込みが顕著である。また、遺物は狩猟の縄文土器片が出土した。遺構の性格は不明ながら、縄文時代の土坑であると考えられる。

X=75429.0
Y=54907.0



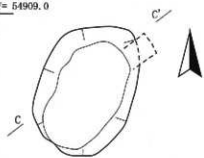
SK28 1 10YR2/1 黒色シルト (締まりなし)

X=75435.0
Y=54907.0



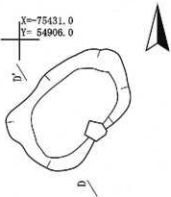
- SK29 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (地山と類似)
2 10YR2/2 黒褐色シルト (炭化物含む)
3 2と1の混合
4 10YR3/1 黒褐色シルト (地山 B.L 多く含む)
5 10YR2/3 黒褐色シルト (地山 B.L 多く含む)
6 10YR2/2 黒褐色シルト (地山小 B.L 多く含む)

X=75436.0
Y=54909.0



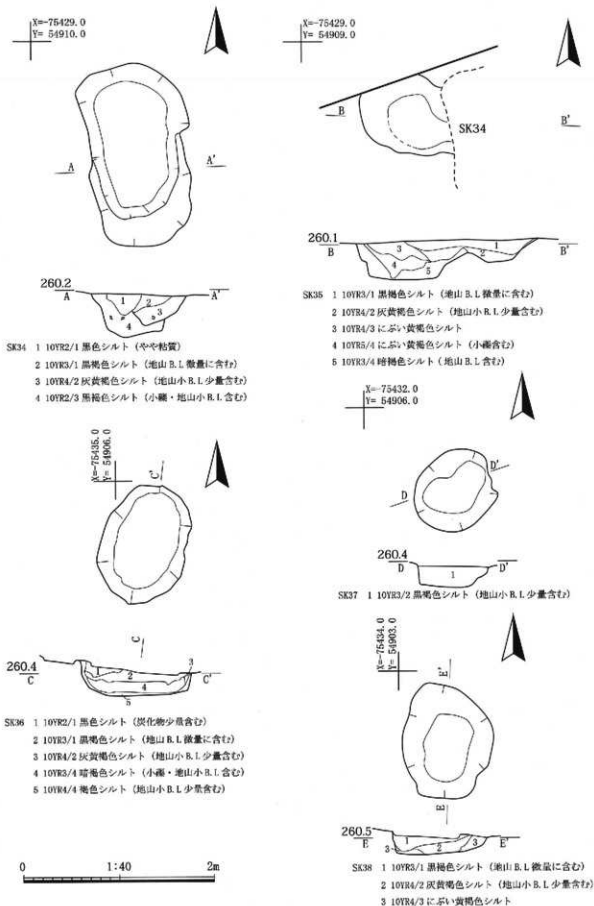
- SK30 1 10YR3/1 黒褐色シルト (大小地山 B.L 多量に含む)
2 10YR2/3 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト (地山小 B.L 含む)
4 10YR4/4 褐色シルト (粗粒砂混)

X=75431.0
Y=54906.0

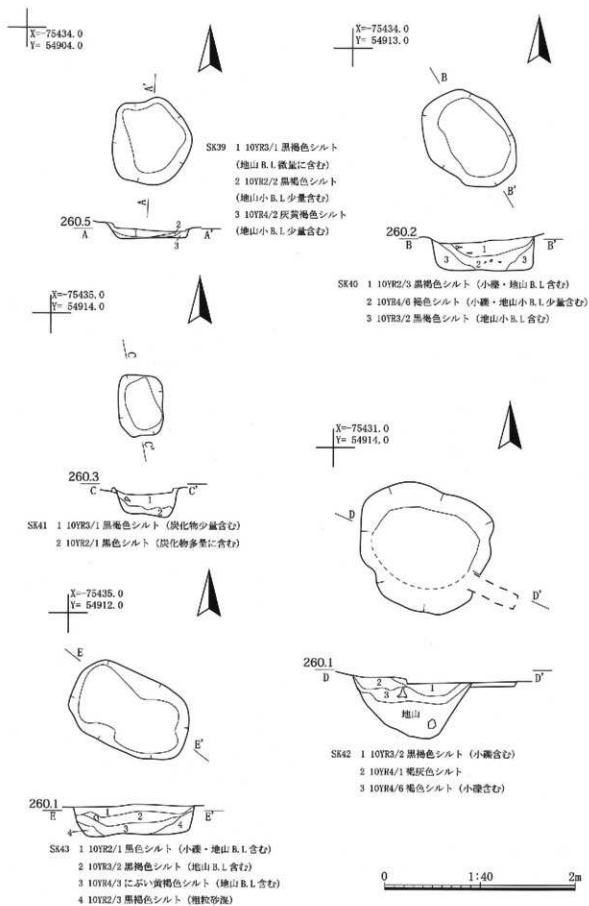


- SK33 1 10YR3/1 黒褐色シルト (地山小 B.L 含む)
2 10YR3/2 黒褐色シルト (炭化物・小礫・地山 B.L 含む)
3 10YR3/3 にぶい黄褐色シルト (地山小 B.L 多く含む)

0 1:40 2m

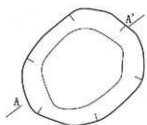


第59図 SK34~38



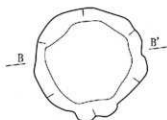
第60図 SK39~43

X=75428.0
Y=54913.0



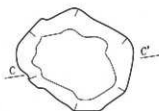
- SK44 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト (小礫・地山B.L含む)
2 10YR4/6 褐色シルト (小礫・地山小B.L少量含む)

X=75434.0
Y=54931.0



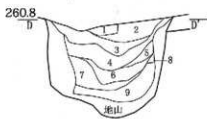
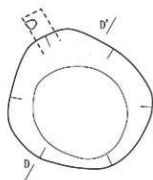
- SK45 1 10YR3/3 暗褐色シルト (地山B.L部分的に含む)
2 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質)
3 10YR4/1 褐色シルト (やや粘質)
4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (やや粘質)

X=75444.0
Y=54935.0



- SK46 1 10YR2/1 黒色シルト (やや粘質)

X=75437.0
Y=54884.0



- SK47 1 10YR3/4 暗褐色シルト
2 10YR3/1 黒褐色シルト
3 10YR2/3 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト
5 10YR4/4 褐色粘質シルト
6 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
7 10YR4/4 褐色シルト (小礫多く含む)
8 10YR4/1 褐色シルト
9 10YR4/6 褐色シルト (粗粒砂混)

0 1:40 2m

第61図 SK44~46

X=75432.0
Y=54930.0



SK48 1 10YR3/1 黒褐色シルト (炭化物少量含む)
2 10YR2/1 黒色シルト (炭化物多量を含む)

X=75439.0
Y=54938.0



SK49 1 10YR2/1 黒色シルト (炭化物多量を含む)
2 10YR3/1 黒褐色シルト (炭化物少量含む)

0 1:40 2m

第62図 SK48・49

3 出土遺物

(1) 縄文土器

SI01出土縄文土器 (第63図、写真図版50)

1～10はSI01から出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

1は小形深鉢である。体部に括れを持ち、底部は扁平である。口縁部は残存していないが、体部や口頸部から3単位の波状になるものと推測される。器表面は脆弱で剥落が著しいが、外面には隆帯と沈線からなる曲線文が施される。

2は小形深鉢体部～底部である。縦方向に沈線が認められるが、これに平行する隆帯は認められない。隆帯は完全に剥落した可能性が考えられる。

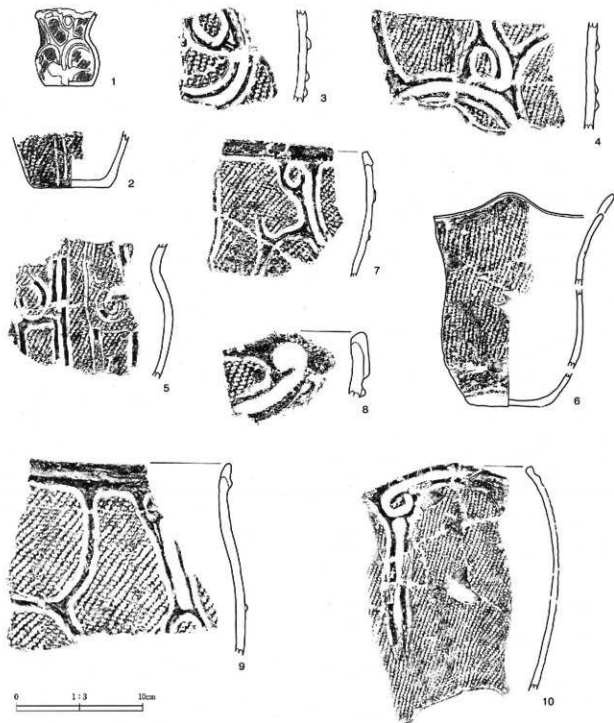
3・4は深鉢の体部片である。いずれも隆帯と沈線によって曲線文が施されている。内面は丁寧にミガキが施されている。

5は小形～中形の深鉢体部片である。括れが認められ、隆帯と沈線で施文されている。隆帯の一部は剥落のため、地文である縄文が露わになっている。

6は小形深鉢である。体部中位にわずかな括れを持ち、3単位の波状口縁である。隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

7～9は深鉢の口縁部～体部片である。隆帯と沈線により曲線文が施されている。8は波状口縁であると考えられるが、7・9は水平な口縁である。

10は深鉢の口縁部～体部片である。口縁部付近に比較的小さな隆帯と沈線による尚巻き文が認めら



第63図 縄文土器 (S101)

れ、体部の縦方向の文様へ連続する。

SI02出土縄文土器 (第64～66図、写真図版51～54)

11～41はSI02から出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

11は小形深鉢である。2単位の波状口縁を持ち、体部中位で折れが認められる。口縁部はラッパ状

に開く。口縁部と体部とは1条の沈線によって境界が設けられており、これより上部の口縁部は地文が「寧」に消されている。体部には隆帯と沈線によって曲線文が施されている。

12は小形深鉢である。体部上半および口縁部は欠損している。体部は膨らみを持たない形態である。体部には隆帯と沈線で施文されている。

13・14は小形深鉢である。いずれも口縁部が内彎する形態で、隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。13の口縁部は完存していないが、2単位の波状口縁であると考えられる。

15は小形深鉢である。体部中位に括れを持ち、口縁部は完存していないが、2単位の波状口縁であると考えられる。口縁部には無文帯が存在するが、沈線や隆帯による体部側との境界は設けられていない。体部には隆帯と沈線による縦方向の文様が施され、体部中位括れ付近に小さめの渦巻き文が形成されている。

16は深鉢である。「く」の字形に屈曲する口縁部を持ち、体部は完存していないが直線的に立ち上がる形態であると考えられる。屈曲部には橋状の把手が付けられている。体部には隆帯と沈線によって文様が施されており、屈曲部直下では渦巻き文が認められる。

17・18・19は深鉢である。いずれも口縁部が内彎する形態で、隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。いずれも共通の形態であるが、17・18・19の順に容量が大きくなっている。

20は体部が丸く膨らむ形態の深鉢である。口縁部は欠損しているが、体部から口縁部へ続く位置に括れを持つ。この括れの位置付近に細めの隆帯と沈線により渦巻き文が認められる。

21は深鉢である。口縁部は大きく内彎し、口縁端部が肥厚する。口縁部には横方向の無文帯があり、1条の幅広隆帯によって体部と境をなしている。体部は隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

22はミニチュア土器の底部である。簡素な作りで文様も施されていない。

23は小形深鉢である。体部下半～底部にかけて残存しており、隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

24・25は把手付きの深鉢片である。24は上下で連続する刺突文を有する横方向の文様帯に把手が付けられ、把手部分には隆帯による渦巻き文が施されている。25の把手も隆帯による文様が認められる。

26は体部が丸く膨らむ形態の深鉢である。体部は緩やかな曲線を描き、2条1単位の細い隆帯と沈線によって文様が施されている。

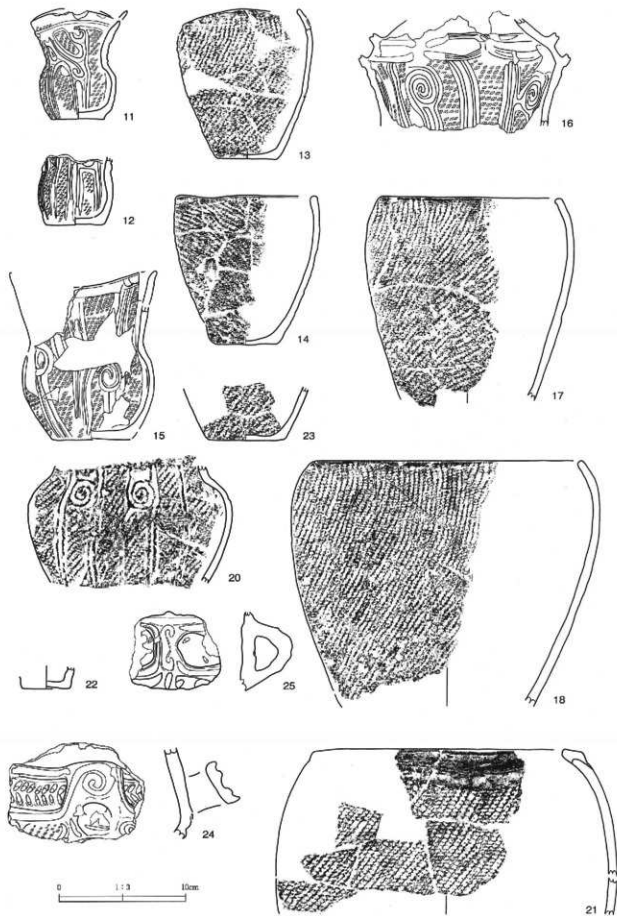
27・28はいずれも深鉢の口縁部片である。いずれも口縁部には、横方向の隆帯によって文様が施されている。

29は深鉢である。口縁部は無文帯があり、その直下には横方向に一定間隔で連続する円形刺突文が上下2列配されている。体部は隆帯と沈線によって曲線文様が施されている。大きく円弧を描く曲線からなる渦巻き文と、これに衛星状に取り付く小さな渦巻き文が認められる。

30は深鉢体部片である。隆帯と沈線によって文様が施されている。

31～36はいずれも深鉢の口縁部片である。いずれも隆帯と沈線によって文様が施されている。32・34・35の口縁部には無文帯があり、その直下には横方向に連続する円形の刺突文が認められる。34の刺突文は1列であるが、32・35はそれぞれ2列配されている。35は残存する口縁部の形状から波状口縁であると考えられる。36は口縁部に無文帯が設けられておらず、口縁部にも隆帯と沈線による文様が及んでいる。

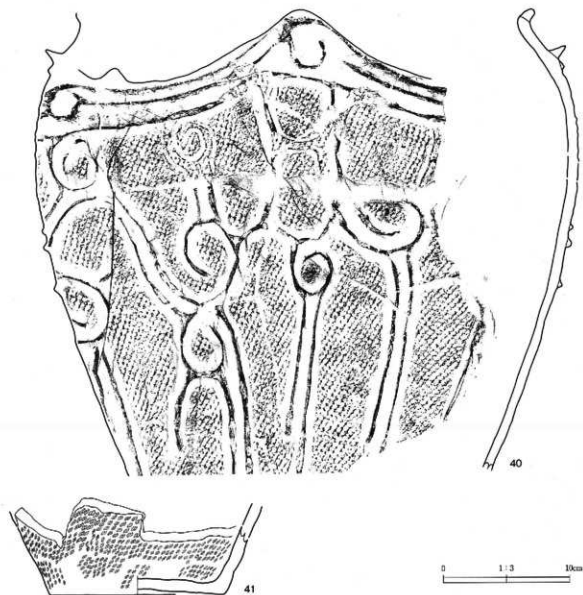
37～39はいずれも小形深鉢の底部片である。39は隆帯と沈線によって縦方向の文様が認められる。



第64図 縄文土器 (S102-1)



第65図 縄文土器 (S102-2)



第66図 縄文土器 (S102-3)

40と41は大形深鉢である。40は口縁部～体部下半にかけて残存し、41は底部片であるが、両者は胎土、色調、寸法、形状等に共通性を見出すことができ、本来同一個体であると考えられる。40は口縁部が波状になっており、残存する形状から3単位の波状をなすものと推測され、この3単位の突起の間に小規模な突起が設けられているものと考えられる。これら突起には隆帯による渦巻文が配されている。体部には、隆帯と沈線によって渦巻き文を中心とした複雑な曲線文様が施されている。41は隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

SI03出土縄文土器 (第67図、写真図版55)

42・43はSI03から出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

42は小形深鉢である。体部のみ残存しており、隆帯と沈線によって文様が施されている。

43は深鉢の口縁部片である。全体の形状は不明であるが、波状口縁の突出部分が認められ、隆帯と沈線によって文様が施されている。

SI04出土縄文土器（第67・68図 写真図版55・56）

44～64はSI04から出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

44は深鉢である。口縁部はやや内傾し、肩部は丸く取められている。口縁部には無文帯は設けられず、隆帯と沈線によって文様が施されている。

45は体部の丸い膨らみから浅鉢であると考えられる。口縁部に突起が認められ、波状口縁であることが推察される。口縁突起頂部には内外面ともに隆帯による渦巻文が施されている。体部にも隆帯と沈線によって曲線を主体とする流麗な文様が認められる。

46は深鉢の口縁部片である。口縁部は無文帯が設けられ、体部へと続く文様帯とは隆帯と沈線によって境界が作られている。この横方向の区画沈線は上下2条からなり、それぞれの沈線内には連続する円形の刺突文が連続して施されている。体部は隆帯と沈線によって文様が施されている。

47は小形深鉢である。体部はわずかに丸みを持ち、隆帯と沈線によって文様が施されている。

48は小形深鉢である。体部中位に括れがあり、2単位の波状口縁を持つ。口縁部には無文帯が設けられており、この無文帯は隆帯と沈線によって体部文様帯と境界が設けられている。体部は隆帯と沈線によって文様が施されている。この文様は小さい渦巻文と曲線からなっている。

49は深鉢である。体部に折れを持ち、口縁部は2単位か3単位の波状口縁であると考えられる。口縁部には隆帯によって縁取られ、体部の隆帯と沈線によって施された文様は口縁部まで及ぶ。体部の文様は渦巻文と曲線文からなり、複雑に展開する。

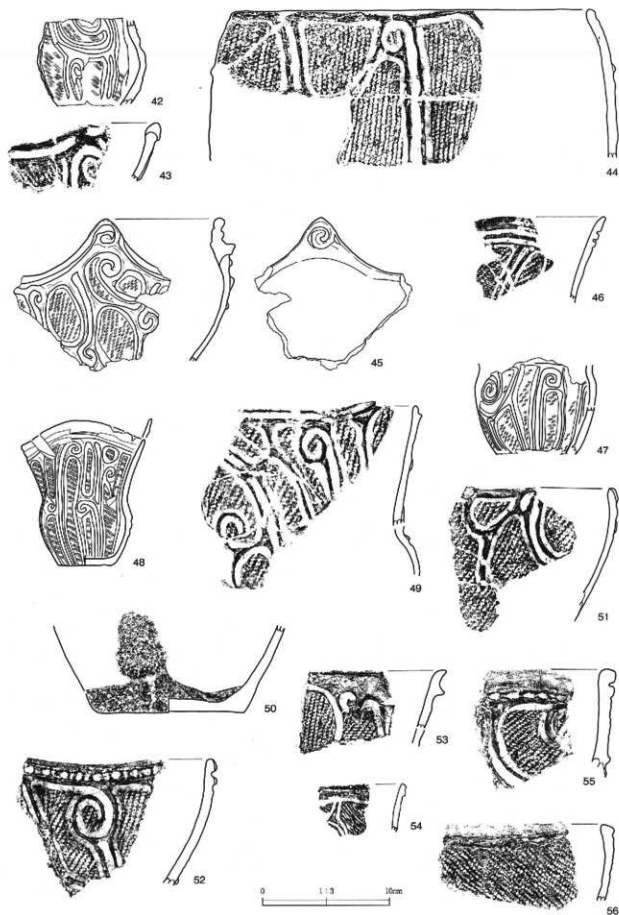
50は深鉢の底部である。摩滅著しく文様等は不明である。

51～58は深鉢の口縁部片である。51の口縁部はわずかに突起が認められることから波状である可能性も考えられるが、残存部位だけでは判断できない。口縁部～体部にかけて連続する隆帯と沈線によって文様が施されている。この文様は曲線を主体とするが変化点が多い。52は口縁部が水平ではなく波状であると考えられる。この口縁部には、横方向の2条からなる隆帯によって区画された中に、連続して1列の刺突文が施されている。この文様帯直下にやはり隆帯と沈線によって文様が施されている。53は口縁端部が外反気味である。口縁部は無文帯が存在するが、その直下の文様帯との境は不明瞭である。また、隆帯と沈線によって文様が施されているが、一部沈線のみである。54は小形深鉢であると考えられる。全体的に摩滅著しく文様が隆帯と沈線によるものなのか、沈線のみであるのか判断できない。55は肥厚する口縁端部に1列の連続する刺突文が認められる。56は口縁端部が肥厚し、やや内傾する口縁形態である。体部は隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。57は残存する口縁部が弧状であることから波状口縁であると考えられる。口縁部には口縁端部の形状に沿って隆帯と沈線が施されている。58は口縁部に2条の横方向隆帯を巡らせ、体部には隆帯と沈線によって文様が施されている。

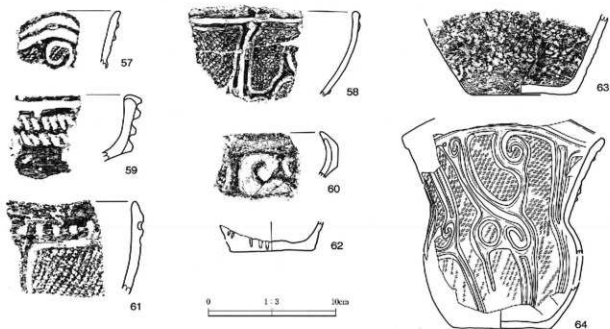
59・60は浅鉢の口縁部片であると考えられる。59の口縁部には連続する刺突文が上下2列施されている。60は隆帯による渦巻文が認められる。

61は深鉢の口縁部片である。口縁部には横方向の2条からなる隆帯によって区画された中に、連続して1列の刺突文が施されている。

62は小形深鉢の底部である。



第67図 縄文土器 (S 103・04-1)



第68図 縄文土器 (S104-2)

63は深鉢の底部である。外面には微かに地文のみが認められる。

64は小形深鉢である。体部中位に括れを持ち、口縁部は直線的に外傾する。口縁部は2単位の波状口縁部であると考えられ、最上部は無文帯が設けられている。口縁部無文帯と体部文様帯は隆帯と沈線によって境界が設けられている。体部は隆帯と沈線によって曲線を主体とする文様が施されている。また、体部括れ部分には渦巻文が配されている。

SI05出土縄文土器 (第69～73図、写真図版56～63)

65～89、91～104はSI05から出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

65～71は小形の深鉢である。65は体部中位に括れを持ち、口縁部はやや外反する。口縁部は3単位の波状口縁部であり、最上部はわずかな幅ながら無文帯が設けられ、隆帯が横走する。体部は隆帯と沈線によって曲線を主体とする文様が施されている。また、口縁部直下と体部括れ部分には渦巻文が配されている。66は体部下～底部にかけて残存する。体部は隆帯と沈線によって文様が施されている。67は体部中位に緩い括れを持ち、口縁部はやや外反する。口縁部は3単位の波状口縁部である。隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。68は体部下～底部にかけて残存する。隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。69は体部に括れがなく胴張り気味である。口縁部は3単位の波状口縁部であると考えられる。口縁突出部には隆帯と沈線によって渦巻文が配されている。70は体部下位に括れを持ち、口縁部はやや外反する。外面には文様がみられず、無文である。地文が施された後にナア消された可能性も考えられるが、全体的にナアつけられた形跡のみがみられるのみである。71は底部片である。外面に地文が認められるのみである。

72は深鉢であると考えられる。内傾する口縁部を持ち、体部外面には磨消縄文が認められる。

73は深鉢の底部である。外方へ開く体部下～底部にかけて残存する。隆帯や沈線による文様が施されている。

74は浅鉢の口縁部片であると考えられる。波状口縁部であるとみられ、小さな突出部が認められる。

体部は隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

75は口縁部片である。肥厚する口縁端部に、地文のみの体部からなる。

76は小形浅鉢である。体部には磨消縄文が認められる。

77は小形深鉢である。体部に折れがなく胴張り気味の形態である。口縁部は2単位対となる大きな突出部と、やはり2単位対となる小さな突出部からなる波状口縁である。口縁部は隆帯によって縁取られ、この隆帯は突出部で集約されここで加飾化されている。

78は中形深鉢である。体部に折れがなく胴張り気味である。口縁部は内湾し、2単位の波状口縁であると考えられる。口縁部には上下2条からなる隆帯が横定し、その内側には連続する円形の刺突文が1列配されている。この隆帯で区画された文様帯直下には隆帯と沈線によって文様が施されている。渦巻文の巻きは簡素で、その形状も歪んでいる。

79～84はいずれも深鉢の口縁部片である。81は吊り手状の突起が付けられ、その直下には縦方向の隆帯で区画され内区は縄文磨消、外区は縄文が施されている。82は口縁部に平行する3条の隆帯がみられ、その間には上下2列の連続する刺突文がそれぞれ配されている。83は口縁端部に剥落しているが宍存していないながらも隆帯が施されている。その直下には隆帯と沈線によって文様が認められる。84の口縁最上部は無文帯が設けられている。口縁部無文帯と体部文様帯とは隆帯と沈線によって境界が設けられている。体部は隆帯と沈線によって曲線を主体とする文様が施されている。

85は浅鉢の口縁部片であると考えられる。口縁部文様帯は隆帯と沈線によって帯状に区画され、上下2列に連続する刺突文が配されている。また、隆帯と沈線によって渦巻きではなく円形の文様が施されている。

86～88は深鉢の口縁部片である。86の口縁端部には1条の隆帯が施されている。この隆帯直下には隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。87は隆帯と沈線によって文様が施されている。また、口縁部には1箇所の補修孔が認められる。88の口縁端部には1条の隆帯が施されている。体部には隆帯と沈線によって文様が施されている。

89は浅鉢である。隆帯と沈線によって区画された帯状の口縁部文様帯に渦巻文と、対になる上下2列の連続する刺突文が施されている。体部は隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

91は浅鉢であるとみられる。体部には隆帯と沈線によって文様が施されている。これらは体部まで延びることなく、体部下半にて消滅している。

92は深鉢である。口縁部は無文で、直下に橋状の把手が付けられている。把手は4箇所体部と結合し、正面には渦巻文が認められる。体部には隆帯と沈線によって文様が施されているが、地文はすべて磨り消されている。

93・94は深鉢の口縁部片である。93の口縁部には無文帯があり、その直下には横方向に連続する円形の刺突文が1列認められる。体部は隆帯と沈線によって文様が施されている。94の口縁部には無文帯があり、直下には横方向の隆帯と沈線によって文様が施されている。

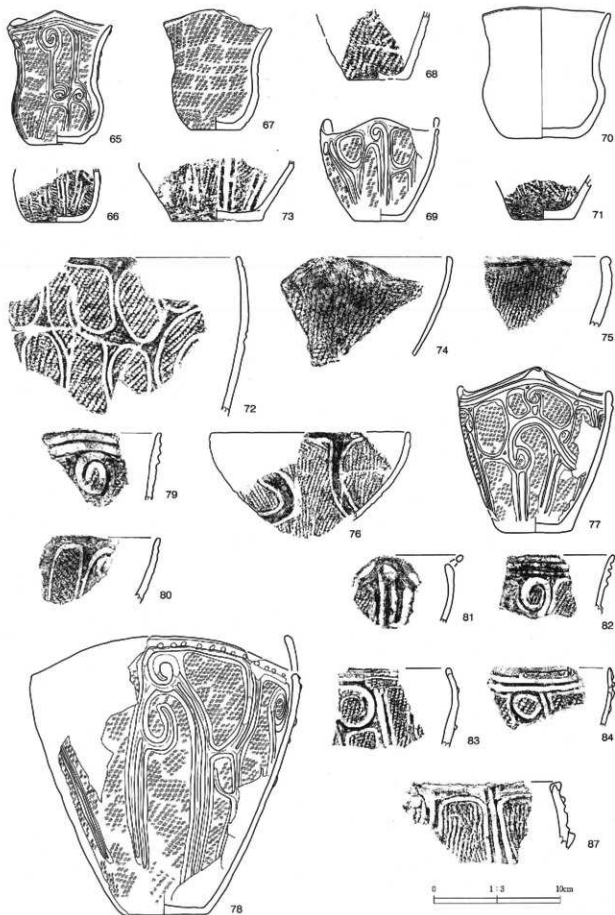
95は深鉢である。摩滅著しく地文は不明瞭であるが、隆帯や沈線による文様は認められない。

96は深鉢である。口縁部には横方向の隆帯と沈線が認められ、体部には隆帯と沈線によって曲線を主体とする文様が施されている。

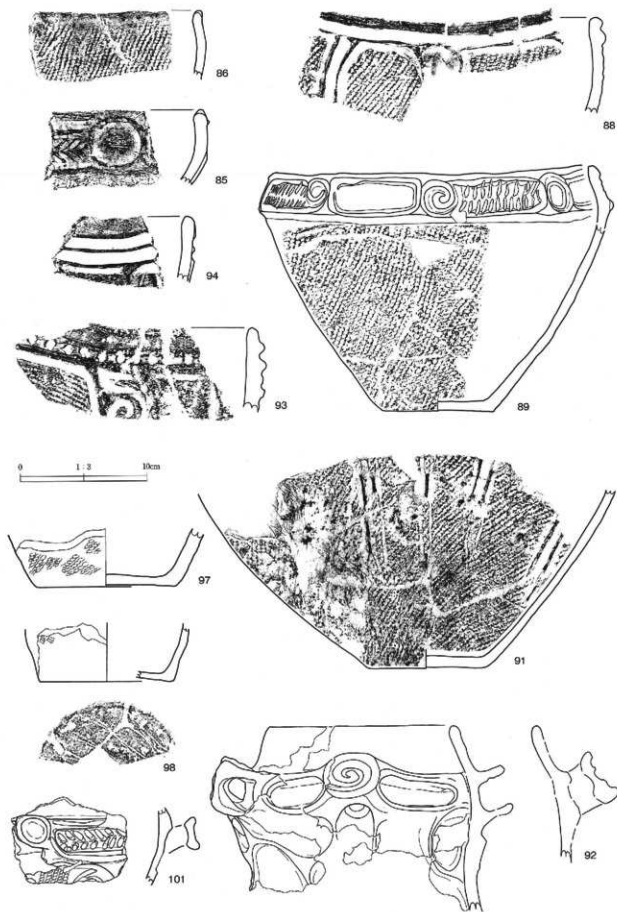
97・98は深鉢の底部片である。いずれも隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

99は深鉢である。隆帯と沈線によって文様が施されている。隆帯と沈線は底部直近まで延びず体部下半で消滅している。

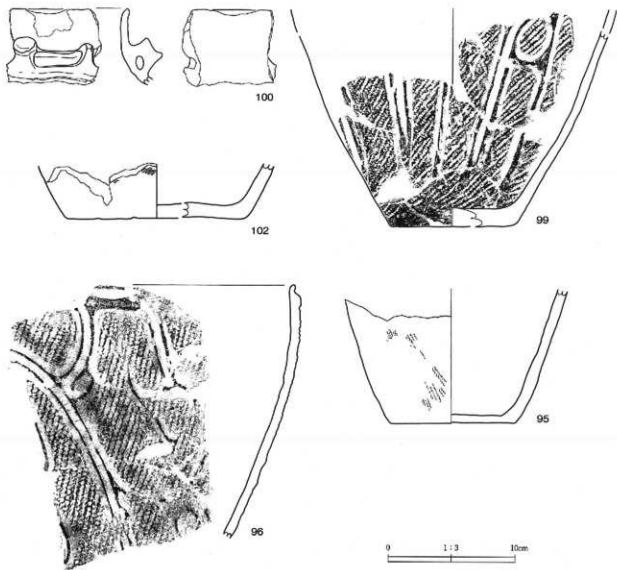
100・101は把手状に加飾された深鉢の口縁部片である。100は摩滅著しく細部が不明であるが、把



第69図 縄文土器 (S105-1)



第70図 縄文土器 (S105-2)



第71図 縄文土器 (S105-3)

手状の突起は簡素なものと同様に整形されたものが認められる。隆帯と沈線によって区画された帯状の文様帯に、連続する刺突文が上下2列認められる。

102は深鉢の底部片である。残存する部分においては隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

103・104は深鉢である。いずれも口縁部が内彎し、体部上位に最大径を持つ器形である。体部には隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

S106出土縄文土器 (第74図、写真図版63・64)

105~111はS106からそれぞれ出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉~後葉に属するものと考えられる。

105は深鉢の口縁部片である。隆帯と沈線によって施文された橋状の把手が認められる。

106は小形深鉢である。隆帯と沈線によって文様が施されている。



第72図 縄文土器 (S105-4)

沈線によって曲線を主体とする文様が施されている。

SI07出土縄文土器 (第74図、写真図版64)

112～118はSI07からそれぞれ出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

111は深鉢である。口縁部最上部は隆帯によって縁取られているが、それ以外に隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

112～114は深鉢の口縁部片である。112は口縁部に無文帯が設けられており、その直下には突起、橋状把手からなる加飾がなされている。113は波状口縁の突出部であるとみられる。隆帯と沈線によって文様が施されている。114は波状口縁であるとみられる。口縁部は隆帯によって縁取りがなされており、体部は隆帯と沈線によって文様が施されている。

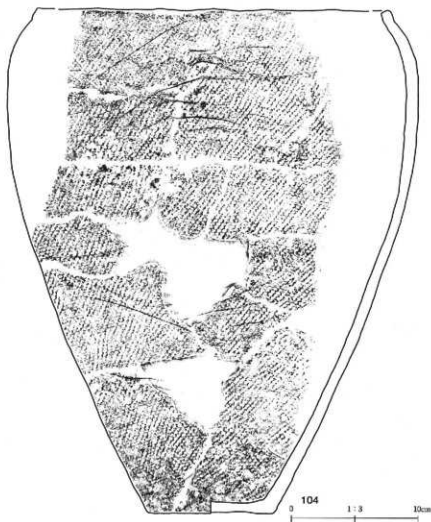
115は器台の一部であると考えられる。円弧状を呈し、わずかに台部へ続くとみられる破面から、上端が水平に外方へ鉤状に突出する形態であると考えられる。文様は認められず、器表面は丁寧な調

107は深鉢の口縁部片である。突出部の上部と側面が渦巻文で飾られている。

108は小形深鉢の体部片である。体部中に該当すると思われる部分に括れを持ち器壁が薄いことが特徴である。おもに沈線によって文様が施されている。

109は深鉢であるとみられる。波状口縁であるとみられ、口縁部突出部は口縁上端部を縁取る隆帯から連続して渦巻文が施されている。体部には隆帯と沈線によって文様がみられ、隆帯は文様同士の接点で太さが増している。

110は深鉢であるとみられる。口縁部は横方向の隆帯と沈線が認められ、体部は隆帯と



第73図 縄文土器 (S105-5)

整である。

116は小形深鉢である。隆帯と沈線によって文様が施されている。

117は小形深鉢の口縁部片である。一部隆帯が剥落しているが、隆帯と沈線によって文様が施されている。

118は深鉢である。隆帯と沈線によって直線的な文様が施されているが、これらの間隔密なため地文は確認できない。

SI10出土縄文土器 (第74図、写真図版64)

119はSI10から出土した縄文土器である。縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

119は小形深鉢である。体部下半～底部にかけて残存しているが、隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。

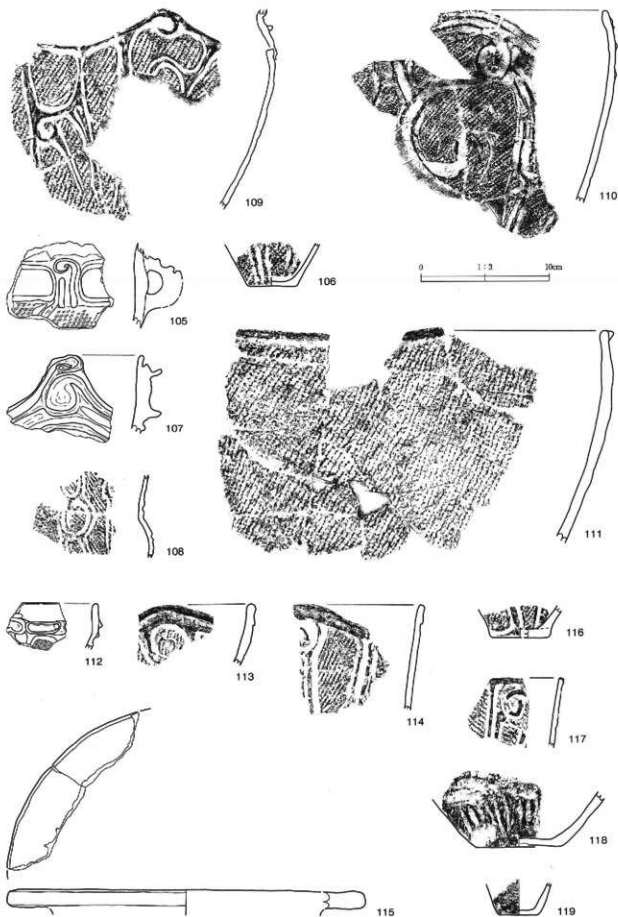
SI11出土縄文土器 (第75図、写真図版65・66)

120～126はSI11から出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

120～124は深鉢の口縁部片である。120は口縁部がわずかに内彎する形態で、隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。121は傾きが不明確であるが、口縁部が反る形態である。隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。122は口縁端部が隆帯によって肥厚する形態である。この縁取りの隆帯直下から隆帯と沈線によって文様が施されている。また、1箇所補修孔が認められる。123は頸部に把手状の加飾がなされた小形のものである。124は口縁部がわずかに内彎する形態で、隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。口縁端部は隆帯状の貼り付けが施されているため、やや肥厚する。

125は深鉢である。口縁部が大きく内彎する形態で、隆帯や沈線による文様は無く、地文のみである。全体での最大径は体部上半にあり、下部の窄まる形態である。また内面の炭化物の付着が顕著である。

126は深鉢の体部上半である。体部に括れがなく胴張り気味であるものと考えられる。口縁部は2



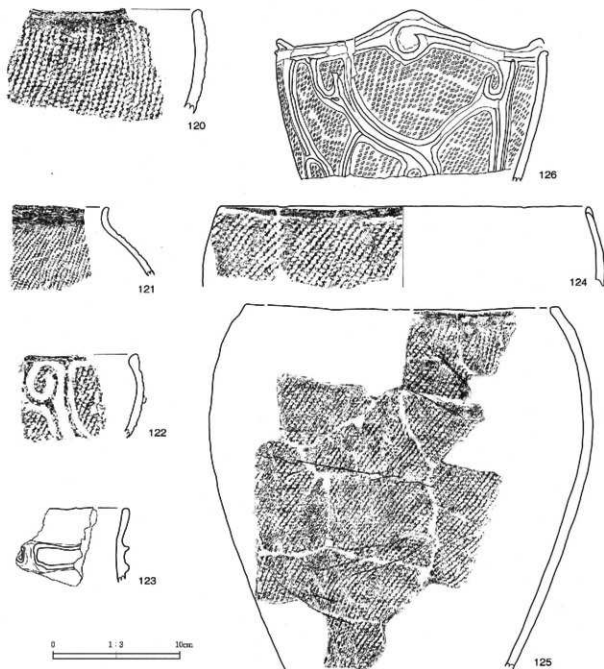
第74図 縄文土器 (S 106・07・10)

単位対となる大きな突出部と、やはり2単位対となる小さな突出部からなる波状口縁である。口縁部は隆帯によって縁取られ、この隆帯は突出部で集約されここで加飾化されている。

SI12出土縄文土器（第76図、写真図版66・67）

127～139はSI12から出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

127～132は深鉢の口縁部片である。127は把手状の突起によって加飾され、隆帯や沈線による文様が施されている。比較的、薄いことから小形～中形の深鉢である可能性が高い。128は波状口縁の突出部であるとみられる。隆帯と沈線によって文様が施されている。突出部には装飾的な意図であると考えられる円孔がみられる。隆帯による渦巻きの巻きは小さく、比較的簡素である。やはり器壁が薄



第75図 縄文土器 (S111)

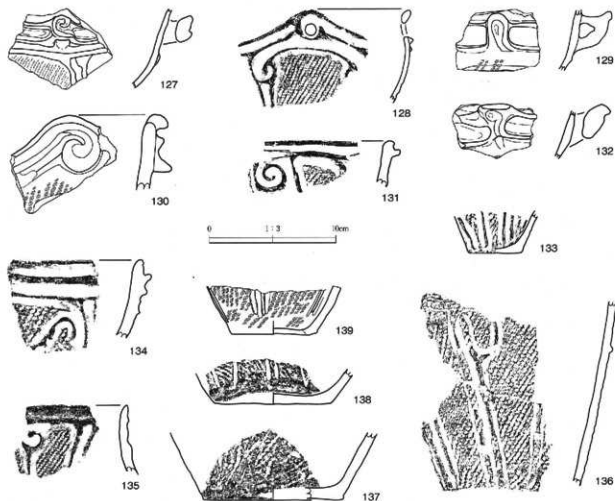
いことから小形～中形のものであると考えられる。129は口縁部付近の把手状の突起部片である。把手状の突起外面には隆帯による文様が施されている。130は波状口縁の突出部片であるとみられる。隆帯と沈線によって渦巻き文様が施されている。下端部にはわずかに地文が認められる。131は水平口縁であるとみられ、隆帯と沈線による文様が施されている。132は把手状の突起によって加飾され、隆帯や沈線による文様が施されている。

133は小形の深鉢の下半部である。隆帯と沈線により縦方向の文様が施されている。この縦方向の隆帯は体部下端まで延びている。

134・135は深鉢の口縁部片である。134は水平な口縁に隆帯と沈線によって文様が施されている。特に、口縁部に付けられた水平方向の隆帯は、他の隆帯よりも顕著なものである。135は比較的薄い器壁を持ち、隆帯と沈線によって文様が施されている。隆帯と沈線の凹凸は小さく、沈線は不明瞭である。

137～139はいずれも小形深鉢の底部片である。137は地文のみである。地文は不明瞭である。底部外面は比較的丁寧な調整によって平滑になっている。138は沈線のみで縦方向の文様が施されている。この縦方向の沈線は体部下端まで延びている。地文は不明瞭である。139は隆帯と沈線によって縦方向の文様が認められる。

SI15出土縄文土器（第77図、写真図版67・68）



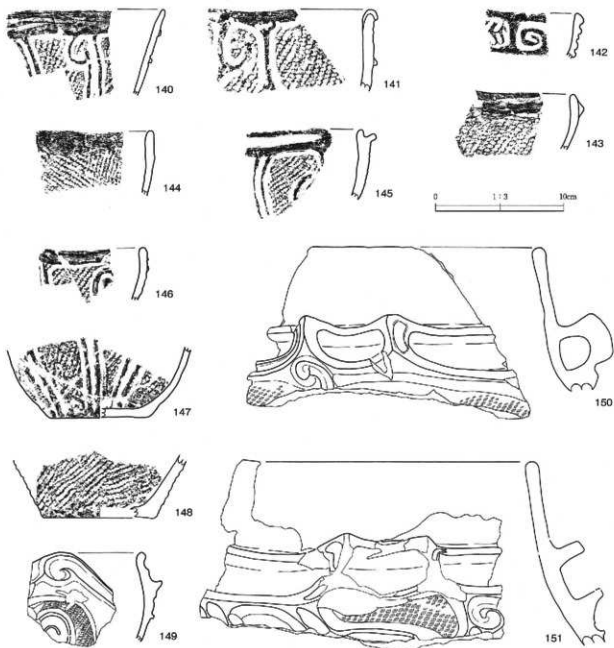
第76図 縄文土器（S112）

140～151はSI15から出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

140・141はいずれも深鉢の口縁部片である。140はきわめて薄い器壁に、細い隆帯と微かな沈線によって文様が施されている。この文様には、渦巻き部分も認められるが、巻きが小さく簡素なものである。141は隆帯と沈線によって文様が施されている。140と同様、文様に渦巻き部分も認められるが、巻きが小さく簡素で鈎状である。

142は浅鉢の口縁部であるとみられる。隆帯と沈線によって区画された帯状の口縁部文様帯に渦巻文と、対になる上下2列の連続する刺突文が施されている。

143～146はいずれも深鉢の口縁部片である。143は口縁に平行する1条の隆帯が施されている。144は口縁部に無文帯が設けられている。無文帯直下は地文となっている簡素なものである。145は口縁端部に隆帯が施されている。体部は丸みを持つ器形であると推測される。146は細い隆帯と沈線に



第77図 縄文土器 (S115)

よって文様が施されている。

147・148は深鉢の体部下半である。147はやや丸みを持つ体部に縦方向の2条1対の隆帯と沈線によって文様が施されている。148は地文のみである。

149～151は深鉢口縁部である。149は波状口縁の突出部であるとみられ、隆帯と沈線によって文様が施されている。口縁部の隆帯は沈線との区分が不明瞭で一体となっている。150と151は火形の深鉢であると考えられる。色潤や胎土等共通する部分が多く、同一個体である可能性が高い。把手状の加飾が施され、器面調整も非常に密である。また、表面は他の土器に比べると赤く発色している。器表面は二次的な被熱のためか細かな剥離が認められる。

SI16出土縄文土器（第78～81図、写真図版68～73）

152～178はSI16から出土した縄文土器である。大半が縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられるが、本来SK10に帰属するものと考えられる縄文時代後期初頭の土器（169・170）が埋土中に混入していたが、この堅穴住居の埋土出土であるためここで一括して掲載した。

152は深鉢の口縁部片である。隆帯と沈線によって文様が施されている。水平な口縁部であると考えられる。

153は台付き深鉢の台部分である。台の断面形は逆U字形になっており、中心部は接地していない。失われている体部から連続すると考えられる隆帯と沈線によって縦方向の文様が施されている。隆帯は2条1対平行となり、それぞれ沈線と対応している。

154は浅鉢であるとみられる。口縁部に平行する1条の隆帯から体部へ向け縦方向の隆帯が派生する。隆帯にはそれぞれ沈線が付随する。

155は深鉢の口縁部片である。口縁は端部で外反するが、体部の丸みは緩やかである。この口縁の外反部分が無文帯となっているため、体部に施された隆帯との接続が曖昧となっている。

156～158は小形の深鉢である。156は下半のみであるが、体部中で窄まる形態であると推測される。文様は地文のみの簡素なものである。157は底部片である。地文に縦方向の沈線のみが施されている。158は底部片である。地文が微かに認められる。

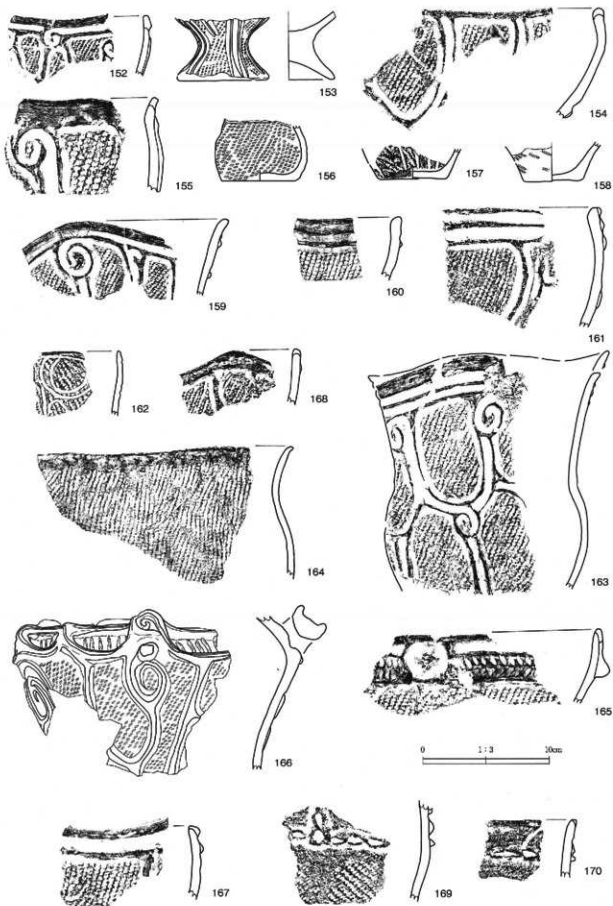
159～162は深鉢の口縁部片である。159は数単位の波状口縁の突出部である。隆帯と沈線によって文様が施されている。これらで大小の渦巻きが表現されている。160は水平な口縁部であるとみられ、隆帯と沈線により横方向の区画が施されている。161は水平な口縁部であると考えられる。口縁端部から3条の隆帯が横方向にみられる。162は器壁が薄く、小形のものである可能性が高い。文様は地文に沈線で曲線が施されている。隆帯が剥離した痕跡がみられず、本来沈線のみで文様が施されているものと考えられる。

163は深鉢である。口縁部は数単位の波状であるとみられ、体部に括れを有する。隆帯と沈線によって文様が施されており、器形の変化点に渦巻き文が認められる。外面にはススが少量に付着しており、煮沸に用いられたものと考えられる。

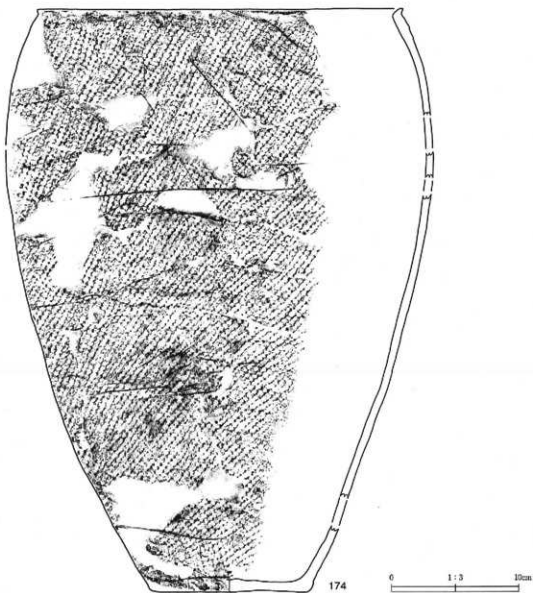
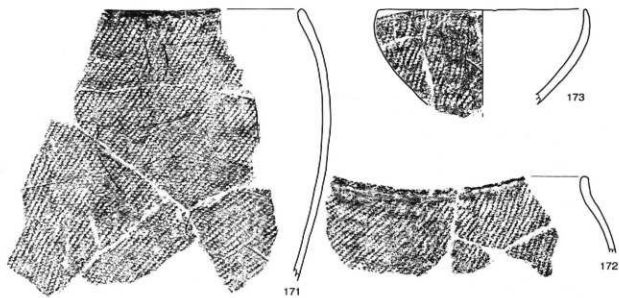
164は深鉢の口縁から体部の破片である。口縁部に括れがみられるが、地文のみの簡素なものである。口縁端部はやや小さく外反する。

165は浅鉢の口縁部片であると考えられる。口縁端部に隆帯が施され、その直下には2条からなる横方向の隆帯で区画された文様帯があり、対になる上下2列の連続する刺突文が施されている。

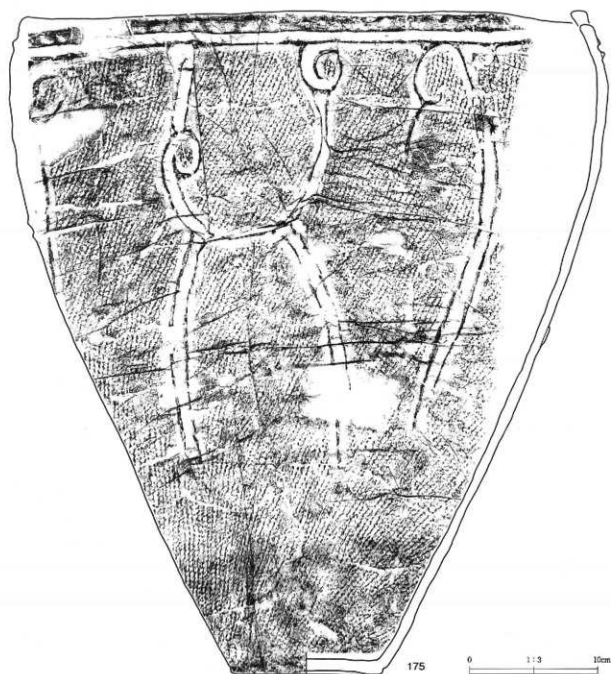
166は深鉢の破片である。把手状の突起が認められ、これに伴う文様帯には連続する刺突文が施されている。体部は隆帯と沈線によって文様が施されている。



第78図 縄文土器 (S116-1)



第79図 縄文土器 (S116-2)

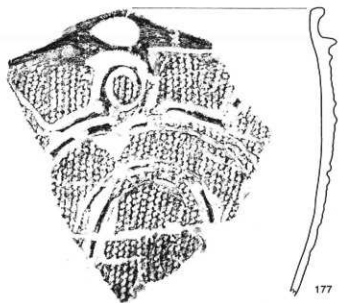


第80図 縄文土器 (S116-3)

167・168は深鉢の口縁部片である。いずれも隆帯と沈線によって文様が施されている。168は波状口縁の突出部である。

169・170は後期初頭の深鉢片である。いずれも鎖状浮線文が認められる。この遺跡では、胎土や色調がその他の中期の土器と大きく隔絶しているため、小破片でも一見して区別可能である。先述した通り、この堅穴住居を切っているSK10の混入遺物であると考えられる。

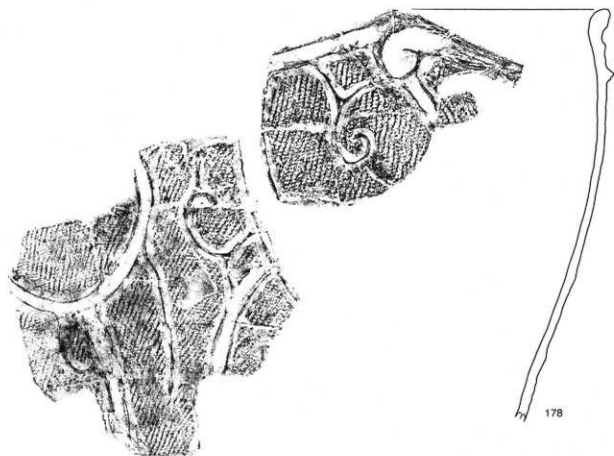
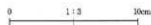
171・172は粗製深鉢の破片である。口縁部がやや内彎する形態であると考えられる。口縁部以外は縄文が施されている。172は口縁部が緩やかに屈曲する。口縁端部以外は縄文で埋められている。



177



176



178

第81図 縄文土器 (S116-4)

173は小形浅鉢の破片である。やや内彎する口縁に丸みのある体部から浅い器種であると推測される。文様は地文のみである。

174は粗製深鉢である。体部上半は緩く内彎傾向である。口縁端部は面を持ち、外方に小さく突出する。

175は大形の深鉢である。水平な口縁にやや内彎傾向の体部上半を持ち、体部下半は直線的に外傾しながら立ち上がる。隆帯と沈線によって文様が施されるが、体部下半には続いていない。大振りな器形に比べ隆帯は細く貧弱である。文様は直線と曲線からなり、体部上半部にはいくつかの渦巻き文が認められる。

176は小形の深鉢である。体部下半から底部にかけて残存し、縦方向の隆帯と沈線によって文様が施されている。この文様は底部まで及ばず、体部下半で消失している。

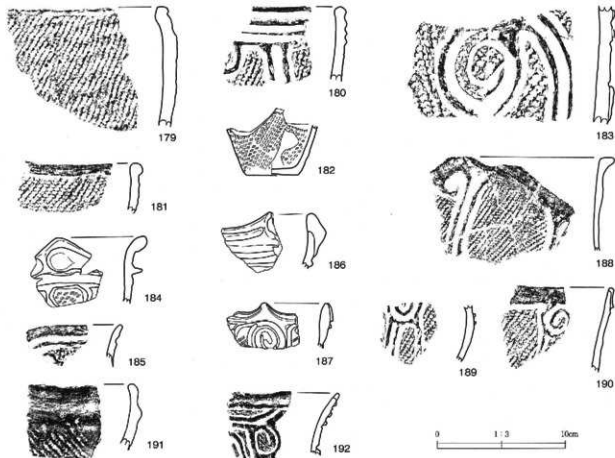
177・178は深鉢の破片である。いずれも波状口縁の突出部である。177は隆帯と沈線によって文様が施されているが、隆帯は部分的に剥離している。口縁突出部には楕円形に窪む文様がみられる。

178は隆帯と沈線によって文様が施されているが、隆帯は細く貧弱である。

SI17出土縄文土器（第82図、写真図版74）

179・180・183～187はSI17からそれぞれ出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

179・180はいずれも深鉢の口縁部片である。179は粗製の深鉢で、地文のみの文様である。180は水平な口縁であるとみられ、口縁部に横方向の隆帯が付けられている。



第82図 縄文土器 (S117・19・20・22・23)

183は深鉢の体部片である。隆帯と沈線によって文様が施されている。破片であるが、大形の深鉢であると考えられる。

184～187は深鉢の口縁部片である。184は波状口縁の突出部である。隆帯と沈線によって文様が施されている。185は隆帯と沈線によって文様が施されるが、文様の展開までは不明確である。186・187は波状口縁の突出部である。隆帯と沈線によって文様が施されるが、文様の構成および展開までは不明確である。

SI19出土縄文土器（第82図、写真図版74）

188はSI19から出土した縄文土器である。縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

188は深鉢波状口縁の突出部である。器壁は薄く直線的である。隆帯と沈線によって文様が施されている。

SI20出土縄文土器（第82図、写真図版74）

189はSI20から出土した縄文土器である。縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

189は小形の深鉢の体部片である。体部は緩やかに彎出し、隆帯と沈線によって文様が施されている。

SI21出土縄文土器（第82図、写真図版74）

181・182はSI21からそれぞれ出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

181は粗製の深鉢の口縁部片である。口縁端部が玉縁状に肥厚し、体部には地文のみの文様が施されている。

182は小形の深鉢である。隆帯や沈線による文様はなく地文のみである。

SI22出土縄文土器（第82図、写真図版74）

190はSI22から出土した縄文土器である。縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

190は深鉢の口縁部片である。口縁部と体部境にある横方向の隆帯は、不明瞭で直下の隆帯との接続が曖昧である。

SI23出土縄文土器（第82図、写真図版74）

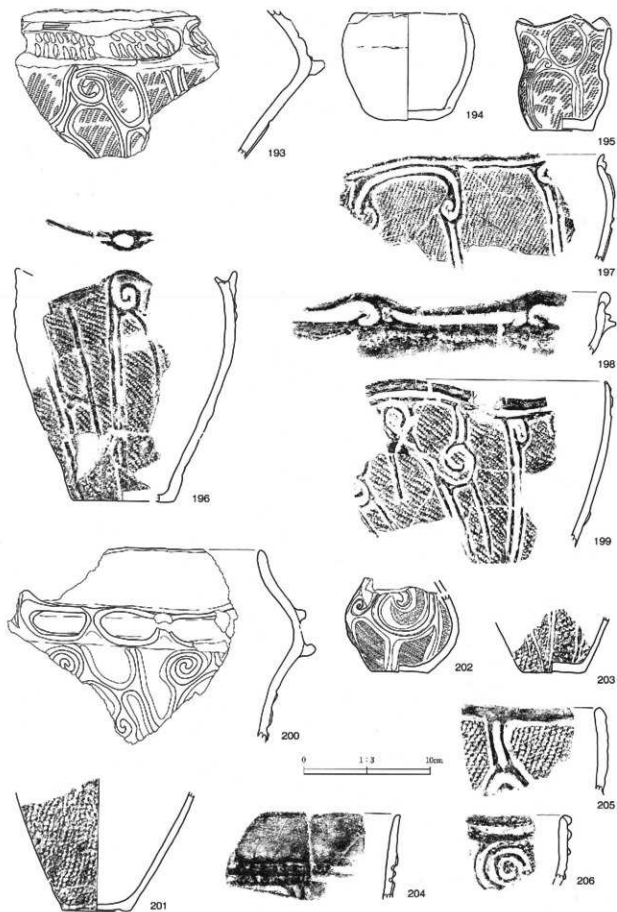
191・192は深鉢の口縁部片である。191は口縁部に付された横方向の隆帯と沈線以外は地文のみである。192は隆帯と沈線によって文様が施されているが、これによる凹凸が非常に明瞭である。

SI25出土縄文土器（第83・84図、写真図版75～77）

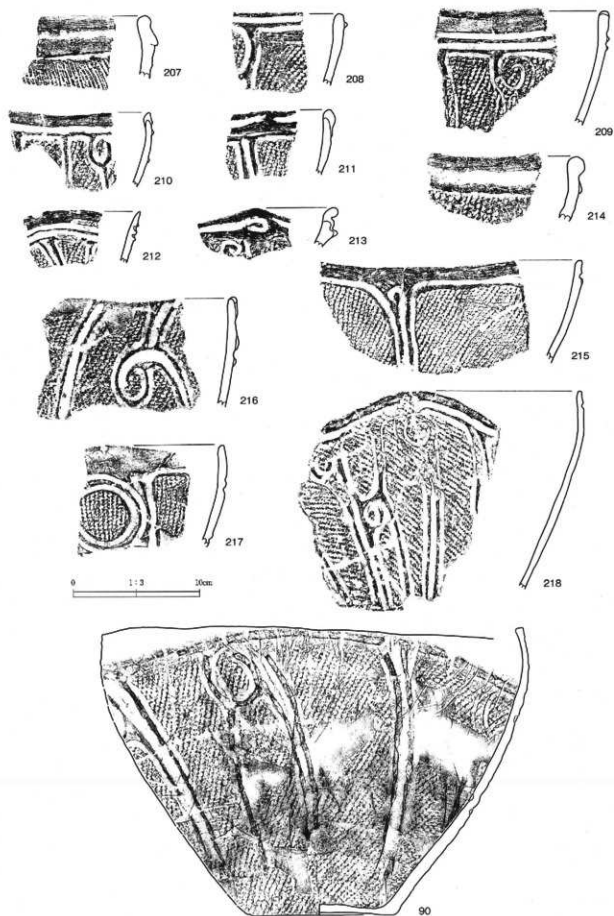
90・193～218はSI25からそれぞれ出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

90は浅鉢である。口縁部がやや内彎する形態である。口縁部には1条の隆帯が施されている。この隆帯より体部へ垂下する隆帯へと展開する。体部を貫くように施された縦方向の隆帯と沈線は底部まで及ばず、体部下半で消失する。

193は浅鉢であると考えられるが、器壁の傾きによっては深鉢である可能性も考えられる。橋状の



第83図 縄文土器 (S125-1)



第84圖 織文土器 (S125-2)

把手が付けられ、これに伴う文様帯には連続する上下1対の刺突文が施されている。体部は隆帯と沈線によって文様が施されている。

194は小形の鉢である。粗雑な作りで、文様はみられない。器表面には輪積みの痕跡がわずかに残るが、大半はなでつけられて消されている。口縁部も丁寧なナデは施されていない。

195は小形の深鉢である。体部中に拵れがあり、3単位の波状口縁である。隆帯と沈線による文様が施されているが、口縁部と体部との境界を意識するような区画や文様はなされていない。

196は中形の深鉢である。波状口縁であるとみられる。口縁部直下から隆帯と沈線によって文様が展開しており大半が縦方向の区画によって構成されている。

197は深鉢である。隆帯と沈線によって文様が施されている。口縁部には2条からなる横方向の隆帯によって文様が認められる。

198は深鉢の口縁部片であるとみられる。口縁端部に2箇所突出部がみられることから波状口縁である可能性が考えられる。隆帯による立体的な文様が施されている。

199は深鉢の口縁部片である。口縁部の緩やかな曲線から2単位の波状口縁であると考えられる。口縁部には横方向に上下2条の隆帯が併走し、下部の隆帯から体部の隆帯へと派生する。体部の隆帯は2条1対のものと1条単独のものが共存する。

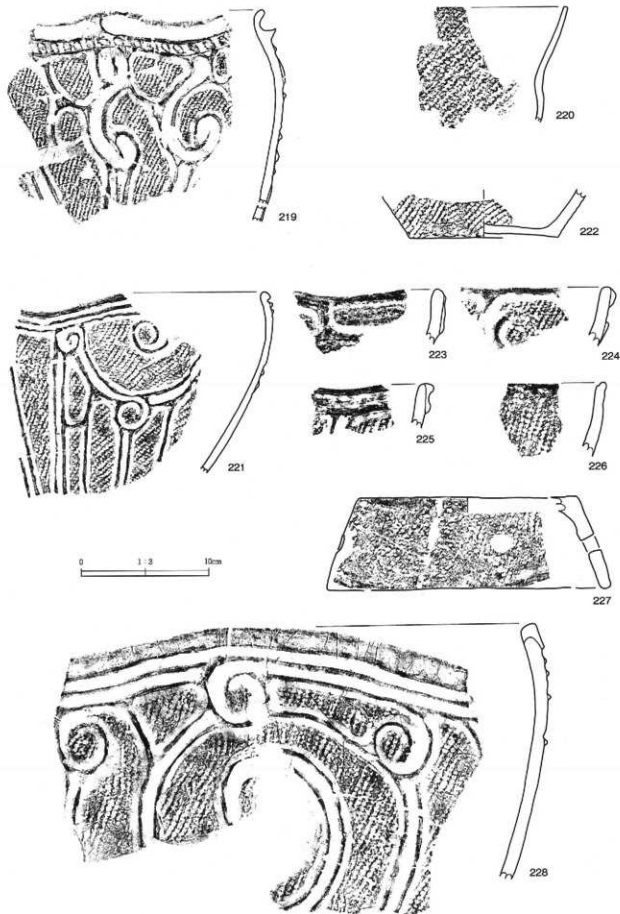
200は深鉢の破片である。橋状の把手が付けられ、これに伴い文様帯が認められるが、刺突文等で充填されておらず無文である。体部は曲線を主体とする隆帯と沈線が縦横に走る。隆帯と沈線の無い箇所は丁寧になで消されており、地文の存在が不明である。

201は深鉢である。地文のみの体部下半である。底部外周にはリング状に微かな突出が認められ、やや上げ底状になっている。

202・203は小形の深鉢である。体部が外方に張った形態を呈し、隆帯と沈線によって文様が施されている。これによる渦巻き文も認められるが、その巻きは小さい。203は体部下半のみ残存する。隆帯は認められず、沈線のみによって縦方向の文様が施されている。

204～206は深鉢の口縁部片である。204は幅広い口縁部の無文帯直下に横方向の隆帯と沈線が認められ、隆帯に挟まれた2条の沈線部には、棒状の工具による深い刺突文が横方向に連続して施されている。205は口縁部に隆帯が施され、これから体部に展開する隆帯と沈線によって文様が施されている。206は口縁部に2条の隆帯が認められ、直下に隆帯と沈線によって渦巻き文が配されている。

207～217は深鉢の口縁部片である。207は口縁部に横方向に隆帯が施されている。体部はほとんど残存していないが、地文が縄文ではなく櫛状工具による条線であるとみられる。208は隆帯と沈線によって文様が施されている。209は口縁部に無文帯を有し、体部には隆帯と沈線によって文様が施されている。210は口縁部に横方向の隆帯と沈線が認められ、体部の隆帯と沈線に展開する。体部の隆帯と沈線による文様は直線と曲線からなり、巻きの小さな渦巻き文も認められる。211は隆帯と沈線によって文様が施されている。212は口縁部に無文帯が設けられ、その直下に沈線に挟まれた1対の隆帯が横方向に走っている。隆帯に挟まれた2条の沈線部には、棒状の工具による深い刺突文が横方向に連続して施されている。213は波状口縁の突出部であると考えられる。突出部には隆帯による立体的な渦巻き文が認められる。214は2条の横方向に走る隆帯が配された口縁部と地文のみの体部からなる。口縁端部は肥厚している。215は水平な口縁に、横方向の微かな隆帯が施されている。隆帯は比較的細い。216は体部の隆帯と沈線による文様が口縁部にまで及んでいる。口縁端部には微かに1条の隆帯が認められる。217は口縁部に無文帯が設けられ、その直下に隆帯と沈線によって文様が施されている。



第85図 繩文土器 (S 126・28)

218は深鉢である。2単位の波状口縁の突出部を有する。隆帯と沈線によって文様が施されている。隆帯は部分的に剥離が認められるが、これらで直線や曲線に加え渦巻きが表現されている。

SI26出土縄文土器 (第85図、写真図版77)

219～220はSI26からそれぞれ出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

219～220は深鉢である。219は波状口縁を有すると考えられ、口縁部は隆帯によって加飾されている。口縁部文様帯と体部文様帯との境には円形の連続する刺突文が施され境を明確にしている。体部には隆帯と沈線によって文様が施されている。2条の隆帯の間には、それぞれの沈線が不明瞭で地文が消されている箇所も認められる。また、隆帯による渦巻きはほとんど巻きがみられない特徴を持つ。220は隆帯や沈線による文様はなく地文のみであるが、体部に括れを持つ器形である。

SI28出土縄文土器 (第85図、写真図版78)

221～228はSI28からそれぞれ出土した縄文土器である。いずれも縄文時代中期中葉～後葉に属するものと考えられる。

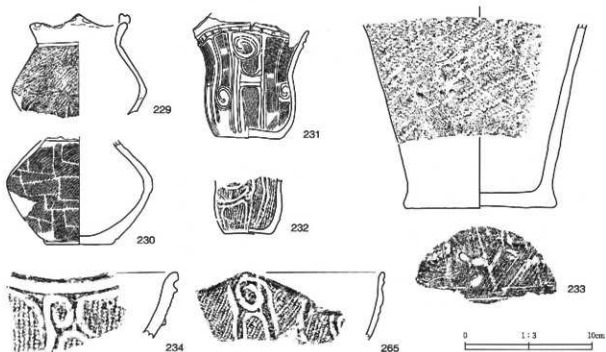
221は深鉢である。数単位の波状口縁を有すると考えられる。口縁部は2条1対の隆帯により横方向の平行する文様が施され、体部は隆帯と沈線によって文様が施され、渦巻きが表現されている。

222は深鉢の底部片である。隆帯や沈線による文様はなく地文のみである。

223は浅鉢か深鉢の口縁部片である。器形の屈曲する角度から浅鉢である可能性が高いが、口縁部のみであるため器形は不明である。隆帯によって区画が施されている。

224～226はいずれも深鉢の口縁部片である。224は口縁部から隆帯と沈線によって文様が施されている。225は口縁部に横方向の隆帯がみられ、体部は隆帯と沈線によって文様が施されている。226は隆帯や沈線による文様はなく地文のみである。

227は器台片である。正面観は横長台形を呈し、側面には直径約2cm円形の穿孔がなされている。



第86図 縄文土器 (SF・SK)

穿孔は焼成前のものであることから透かし孔であると考えられる。台部には地文が施されており、胴部はわずかししか残存していないが施文されていないようである。

228は大形の深鉢である。水平な口縁を持ち、体部には隆帯と沈線によって文様が施される。大振りの器形に比べ隆帯は細く貧弱である。文様は直線と曲線からなり、体部上半部には大小の渦巻き文が認められる。

その他の遺構出土縄文土器（第86図、写真図版79）

229～234は堅穴住居以外の遺構から出土した縄文土器である。土器の帰属時期は堅穴住居と同じ縄文時代中期のものだけにとどまらず多岐にわたる。

229はSI05最上層から出土した縄文土器である。胎土は精良で黒褐色の色調を呈する。口縁部は突起を有する。口頸部に「く」の字状の括れがあり、ここに1条の沈線が巡る。体部中位も極端に屈曲し張り出す形態である。地文原体は細かく他の出土土器とは大きく異なる特徴である。特徴から縄文時代晩期～弥生前期の小形精製品であると考えられる。

230はSF01の炉埋土より出土した縄文土器である。229同様に胎土は精良で黒褐色の色調を呈する。体部下端部には1条の沈線が巡る。特徴から縄文時代晩期～弥生前期の小形精製品であると考えられる。

231はSK32の底面から出土した小形深鉢である。欠損しているが、2単位の波状口縁を持ち、体部中位で微かな括れが認められる。口縁部はラッパ状に開く。口縁部と体部とは2条1対の隆帯によって境界が設けられており、この中に刺突文が連続して施されている。上部の隆帯より上の口縁部は無文である。体部には隆帯と沈線によって渦巻き文を含む直線文が施されている。

232はSK25埋土より出土した小形深鉢である。隆帯と沈線によって渦巻き文を含む直線文が施されている。

233はSK10埋土より出土した縄文時代後期の深鉢である。やや赤みを帯びた褐色の色調は他の中期の土器とは異なる。また、胎土もやや粗く、焼成良好である。体部は地文のみである。

234・265はSK14埋土より出土した深鉢の口縁部片である。口縁部には横方向の隆帯が施され、体部も隆帯と沈線によって文様が施されている。なお、265は写真図版83に掲載している。

遺構外出土縄文土器（第87～89図、写真図版79～83）

235～265は遺構外より出土した縄文土器である。これら大半が堅穴住居の占拠するエリアで出土しており、本来堅穴住居に帰属するものであったと考えられる。しかし、近現代の造成等により攪拌されたものが調査において帰属すべき堅穴住居と遊離した状態で出土したものと想定される。

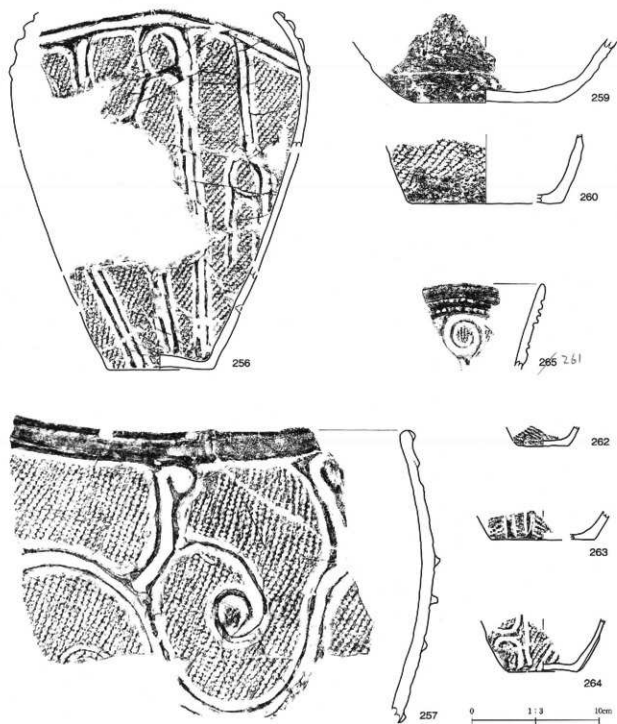
出土した土器の大半が縄文時代中期のもので、大小の深鉢・浅鉢からなる。凶化に耐えられない破片も多いが、堅穴住居出土のものとはかけ離れた様相ではない。

235・236は小形の深鉢である。235は2単位の波状口縁で、体部には括れを有する形態である。口縁部には帯状の無文帯が存在する。無文帯直下には、2条の平行する沈線がみられ、沈線には連続する刺突文が認められる。これより下に位置する体部の文様は隆帯が貼り付けられておらず、沈線のみで渦巻き文を中心とする曲線文が施されている。236は体部には括れを有する形態である。体部の文様は隆帯が貼り付けられておらず、沈線のみで渦巻き文を中心とする曲線文が施されている。

237～238は深鉢の口縁部片である。237は口縁端部が小さく外反する形態である。隆帯と沈線によって文様が展開するものとみられる。238は橋状の把手が付けられている。把手が掛かる文様帯に



第87圖 縄文土器（遺構外-1）



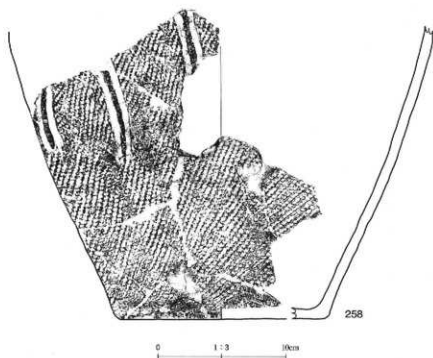
第88図 縄文土器 (遺構外-2)

は上下1対の連続刺突文が施されている。

239は壺形を呈する深鉢である。口縁部は無文で外反傾向である。肩部に位置する箇所には、橋状の把手が認められる。体部は丸みを帯びた球状で、隆帯と沈線によって文様が施されている。

240は浅鉢の口縁部から体部片である。体部は隆帯と沈線による文様は見られず地文のみである。口縁部には文様帯があり、渦巻き文と上下2列の刺突文が認められる。

241・242は深鉢の口縁部片である。いずれも水平な口縁部の一部であると考えられる。口縁部は隆



第89図 縄文土器 (遺構外-3)

帯と沈線によって加飾され、体部の渦巻き文などの文様に展開する。242は口縁部に連続する刺突文が1列認められる。

243は深鉢体部下半である。縦方向の隆帯と沈線によって文様が施されている。

244は深鉢の体部片である。体部中位に括れを有し、外面には隆帯と沈線によって大小の渦巻き文が配されている。

246は浅鉢の口縁部片であると考えられる。口縁部は水平で、端部には1条の隆帯が認められる。口縁部はやや肥厚してお

り、口縁部直下に体部の文様である曲線文が施されている。

247は粗製浅鉢の口縁部片である。隆帯や沈線による文様は認められず、地文のみである。焼成は不良気味でやや軟質である。

248・249は深鉢の口縁部片である。248は水平の口縁であるとみられ、口縁部には隆帯と沈線が平行に施されている。また、口縁部と体部との境には1条2列の連続する刺突文が施されている。体部は隆帯と沈線によって渦巻き文が認められる。249は波状口縁の突出部である。この突出部には渦巻き文が施され、体部との境には1列の連続する刺突文が施されている。直下の体部には隆帯と沈線によって渦巻き文が認められる。

250は小形深鉢あるいは壺の口縁部片であると考えられる。隆帯と沈線が施された橋状把手が口縁部直下に付けられている。この把手から連続するように体部の文様へ展開する。

251・252は深鉢の口縁部片である。251は口縁端部に釣手状の装飾がなされている。この装飾は横から隆帯に連続するように配されている。また、体部の文様はこの装飾直下に隆帯と沈線によって渦巻き文として表現がなされている。252は波状口縁であるとみられる。口縁端部は隆帯によって縁取られ、沈線を挟んだ下にはもう1条の隆帯が認められる。体部の文様はこの隆帯の直下展開しており、小さな渦巻き文と縦方向の直線文が施されている。

253・254は小形の深鉢下半である。隆帯や沈線はおろか縄文すらみられない無文の土器である。胎土を粗くなでつけた痕跡を留めるのみである。254は2条1対の隆帯と沈線による縦方向の文様が認められる。

255は深鉢の口縁部片である。水平方向の隆帯と沈線によって加飾されている。

256・257・258は深鉢である。256は体部に括れがなく胴張り気味である。口縁部は2単位の波状を呈し、平行する2条の隆帯によって縁取りがなされている。体部は隆帯と沈線によって文様が施され

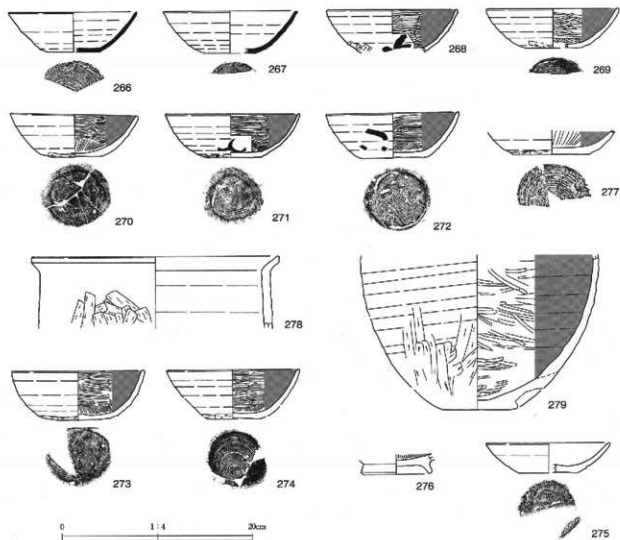
ているが、その大半が縦方向で直線的に配されている。このうち、曲線となる部分は巻きのない渦巻き文で単なる円形である。257は大形のものであるとみられ、口縁部は水平である。口縁部には隆帯によって無文帯が区画されており、体部の曲線文へと展開する。曲線は複雑に入り組み、渦巻き文に連続する。258は体部下半から底部にかけて残存する。体部は直線的に外傾しながら立ち上がり、残存部において括れはみられない。外傾する器壁の角度から考えて括れを有する形態ではないと推察される。体部には縦方向の隆帯と沈線によって文様が施され、これは体部下半には及ばない。

259は粗製深鉢あるいは壺であると考えられる。隆帯や沈線はおろか縄文すらみられない無文の土器である。胎土を粗くなでつけた痕跡を留めるのみである。

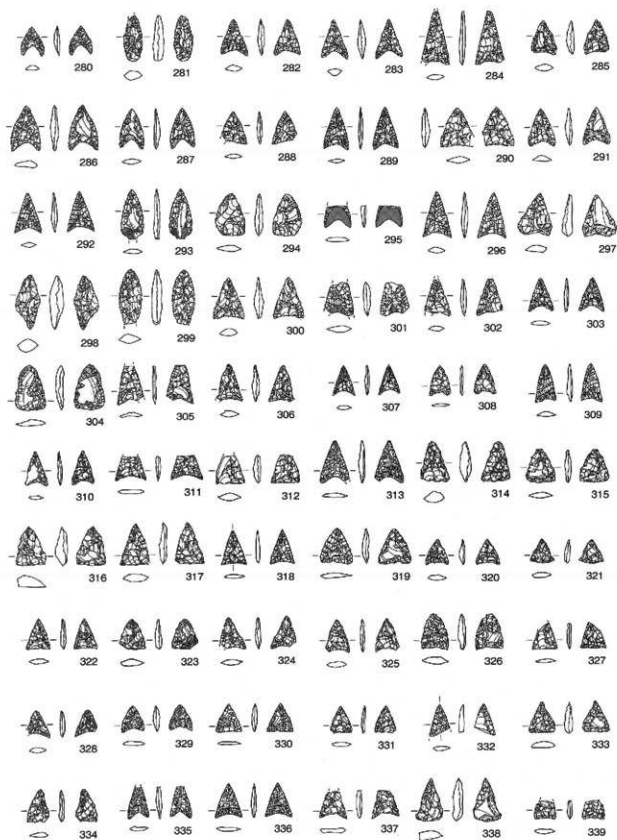
260は深鉢体部下半である。残存する部位に地文以外の文様は認められない。

261は深鉢の口縁部片である。波状口縁であるとみられる。口縁部と体部との境には1条2列の連続する刺突文が施されている。体部には隆帯と沈線によって渦巻き文が認められる。

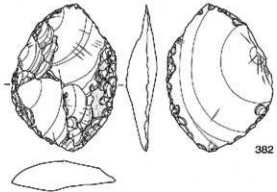
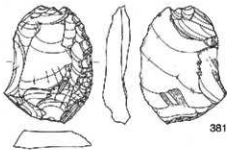
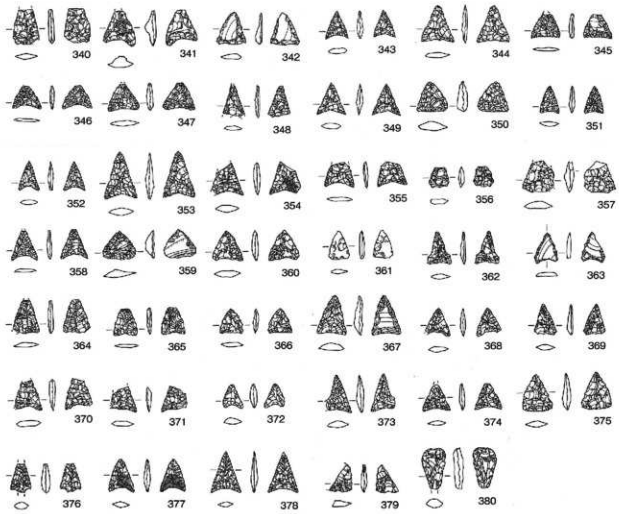
262~234は深鉢体部下半である。262は残存する部位に地文以外の文様は認められない。263は隆帯と沈線によって縦方向の文様が施されている。263も隆帯と沈線によって文様が施されているが、直線範囲はわずかで大半において曲線文へと展開する。



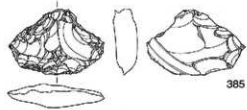
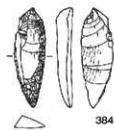
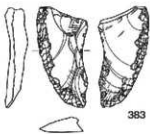
第90図 古代の土器



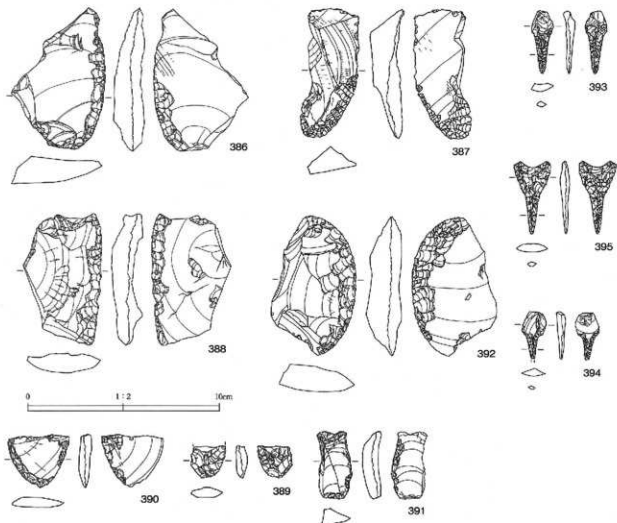
第91圖 石器-1



0 1:2 5cm



第92圖 石器-2



第93図 石器-3

(2) 古代の土器

土師器・須恵器（第90図、写真図版83～85）

266～275は今回の調査で出土した土師器・須恵器など古代の土器である。いずれも9世紀中頃～10世紀前半にかけての時期のものであると考えられる。

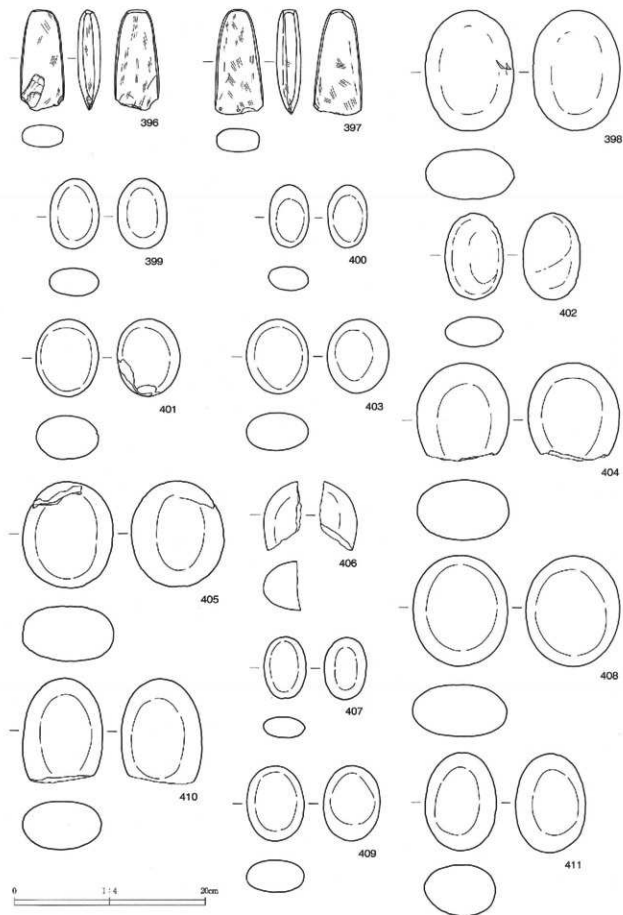
266～272はSK12の埋土より出土した坏類である。

266・267は須恵器坏である。いずれもロクロによる調整が施されている。比較的硬質に焼成されている。接点は無いが特徴が酷似しているため、これらは同一固体の可能性も考えられる。

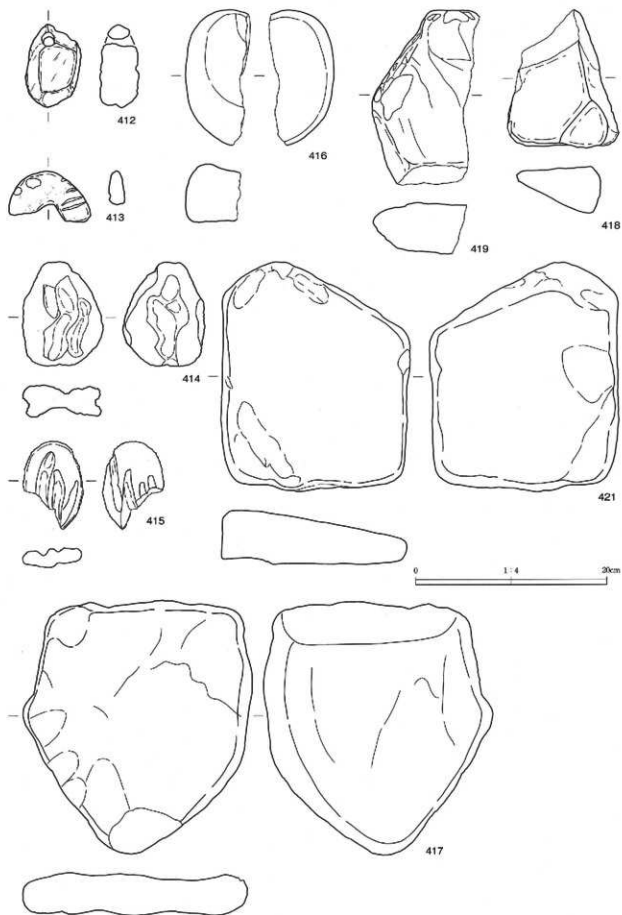
267～272は土師器坏である。ロクロによる調整がなされ、内面はミガキおよび黒色処理が施されている。268・269・270のように体部下端にヘラケズリが施されているものも存在する。また、268・271・272は体部外面に墨痕が認められる。墨書の可能性も考えられるが、残存していない部分に及ぶため断定はできない。

276はSK17埋土より出土した土師器高台付坏である。ロクロによる調整が施されている。

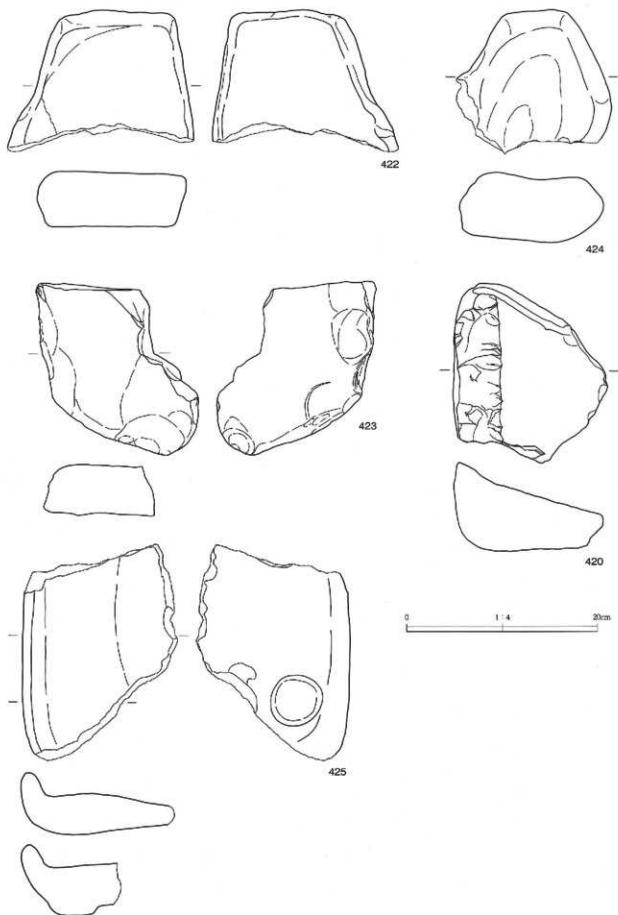
277はSK18埋土より出土した土師器坏である。ロクロによる調整がなされており、内面はミガキおよび黒色処理が施されている。



第94図 石器-4



第95図 石器-5



第96図 石器-6

278はSK17埋土より出土した土師器壺である。ロクロによる調整がなされており、外面にはヘラケズリが施されている。

279はSP202埋土下層より出土した土師器鉢である。ロクロによる調整がなされており、内面はミガキおよび黒色処理が施されている。また、体部下半は縦方向のヘラケズリが認められる。

(3) 石器・石製品

剥片石器 (第91~93図、写真図版86~95)

280~379はいずれも石鏃である。これらのほとんどが堅穴住居より出土した。素材となる石材は大半が北上山地産出の頁岩であるが、色調において様々なものが存在する。黒色、褐色、黄褐色、灰色、赤色などが多くみられる。また、その外観には光沢のあるものとあまりないものがある。石材として特徴的なものは、327・329・345・364の珪質頁岩、328・356の黒曜石、361・365・372の凝灰岩が挙げられる。また、形態的特徴は無茎のものが大半であるが、293のように有茎のものも存在する。

380~395はその他の剥片石器である。こ石鏃同様これらのほとんどが堅穴住居より出土した。素材となる石材は大半が北上山地産出の頁岩であるが、色調において様々なものが存在する。器種としては石錐・搔器・尖頭器などがみられる。

礫石器 (第94~96図、写真図版86~95)

396・397は磨製石斧である。いずれも刃部が欠損している。396は凝灰岩製、397は砂岩製であると考えられる。

398~411は磨石である。いずれも表面が滑らかな円礫である。401のように打撃の痕跡が認められるものも存在する。

412~379はその他の礫石器である。凹石、台石・石皿類である。安山岩やデイサイトなどの石材が用いられているようである。425は大半が失われている破片であるが、低い円柱状の脚部が認められる。

石製品 (第97図、写真図版95・97)

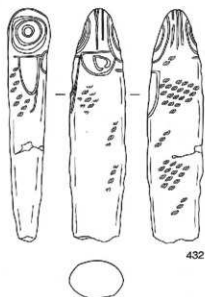
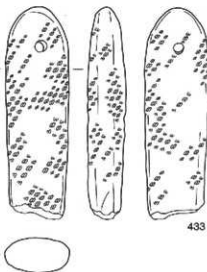
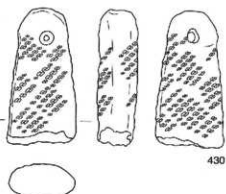
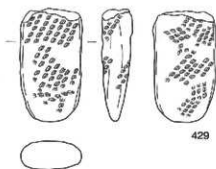
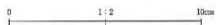
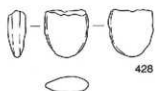
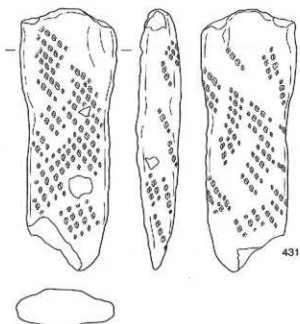
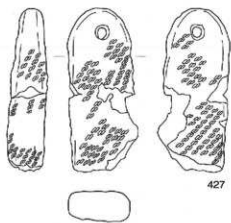
426・443は石製品である。いずれも縄文時代中期のものである可能性が高い。

426はSI25より出土した石棒である。円柱状を呈する砂岩製のもので、表面は丁寧に研磨されている。基部は欠損しているため全長は不明である。一方、先端部は良好に残存し、丸い凹みが認められる。

443は石製耳飾りと思われる。軟質の凝灰岩製で、中央に穿孔が施された跛形を呈している。



第97図 石製品





第99圖 土製品-2

(4) 土製品

斧状土製品 (第98・99図、写真図版96・97)

427～438は斧状土製品である。いずれも縄文時代中期のものである可能性が高い。

427・428はSI05から出土した斧状土製品である。427は扁平な板状の形態で、扁平な面に対して正面から穿孔されている。428は先端部だけの破片である。地文はみられず、残存部は無文である。

429・430はいずれもSI07より出土した斧状土製品である。429は扁平な板状の形態である。先端部の破片であり、先端部まで地文が施されている。430は扁平な板状の形態で、扁平な面に対して正面から穿孔されている。

431はSI12より出土した斧状土製品である。基部側端部は残存するが、穿孔は認められない。また、この基部中央は盛り上がっており、このことから無孔で両端部中央部分よりも突出する形態のものであると考えられる。

432はSI15より出土した斧状土製品である。扁平な板状の形態で、扁平な面に対して側面から穿孔されている。孔の周辺は沈線によって文様が施されている。

433はSI16より出土した斧状土製品である。扁平な板状の形態で、扁平な面に対して正面から穿孔されている。

434はSI19より出土した斧状土製品である。扁平な板状の形態であり、先端部の側面は鋭利な作りである。

435～438はいずれも遺構外より出土した斧状土製品である。435は両端部が欠損しているため全体の形状は不明である。436は先端部の破片である。437は扁平な板状の形態で、扁平な面に対して正面から穿孔されている。断面形状は楕円形よりも長方形に近い。438は両端部が欠損しているため全体の形状は不明である。

その他の土製品 (第99図、写真図版96・97)

439はSI05より出土した三角板土製品である。おおむね正三角形を呈する板状である。1つの頂点には突出部が作り出され、この突出部には刺突が認められる。また、全体が細かな刺突による文様で埋められているが、中には貫通する刺突も存在する。

440は遺構外より出土した三角板土製品である。土器片の転用であり、外面の隆帯と沈線による文様のうち、渦巻き文を頂点にした意図的な部位選択がなされている。側面は土器片の破面であるが、丁寧に研磨され、滑らかになっている。

441と442はいずれも波形の土製品である。前者は丁寧な作りであるが、後者は歪な形態である。

第1表 掲載遺物一覧(土器)

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
1	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI01	南東埋土下層	(6.1)	-	3.7	0.4	隆帯・沈線・縄文 (RL?)	にぶい 褐色	Ac	
2	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI01	南西埋土下層	(4.5)	-	(6.0)	0.7	沈線・縄文(RLR)	褐色	B	
3	縄文土器 (中期)	深鉢	SI01	埋土上層	(7.3)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	-	
4	縄文土器 (中期)	深鉢	SI01	埋土中層	(8.4)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	-	
5	縄文土器 (中期)	深鉢	SI01	埋土下層	(10.5)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Ac	
6	縄文土器 (中期)	深鉢	SI01	埋土中層	16.9	13.4	5.0	0.6	縄文(RLR)	にぶい 黄褐色	Aa4	
7	縄文土器 (中期)	深鉢	SI01	内側床面直上	(9.8)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	B	
8	縄文土器 (中期)	深鉢	SI01	検出面	(5.1)	-	-	1.4	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黄褐色	-	
9	縄文土器 (中期)	深鉢	SI01	南東ベルト埋土、 検出面	(10.0)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc	
10	縄文土器 (中期)	深鉢	SI01	埋土中層	(18.2)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RL)	黒褐色	Bc2	
11	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI02	南西埋土最下層	8.6	6.7	4.0	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Ac2	
12	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI02	北西埋土上層、東 西ベルト埋土最上 層	(5.6)	-	4.6	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Ac	
13	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI02	北西埋土最上層、 東西ベルト内側埋 土上層	11.9	[11.8]	4.6	0.5	縄文(RLR)	褐色	Ba2	
14	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI02	北西埋土最上層、東 西ベルト西側埋土 層、南西埋土上層	11.8	(11.0)	5.0	0.6	縄文(LR?)	褐色	Ba0	
15	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI02	南西埋土最上層	(13.3)	[11.5]	6.0	1.0	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Ac2	
16	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	北西埋土最上層、 南東埋土上層、埋 土中層	(9.7)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	De	
17	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	北西埋土最上層、 東西ベルト西側埋 土上層	(16.1)	12.0	-	0.7	縄文(RLR?)	黒褐色	Ba0	
18	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南西埋土上層、南 北ベルト南側埋土 層、南西埋土上層	(19.5)	[21.0]	-	0.7	縄文(RLR)	黒褐色	Ba0	
19	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南西埋土最上層、 検出面	(24.4)	[29.8]	-	0.5	縄文(RLR)	にぶい 黄褐色	Ba0	
20	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI02	南東埋土中層	(9.3)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Cc	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口徑	底径	器厚				
21	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南東塚土上層、埋 土上層	(13.0)	18.2	-	0.75	縄文 (RLR)	暗褐色	Ba0	
22	縄文土器 (中期)	ミニ チュエ ア	SI02	南東塚土上層	(1.6)	-	(3.6)	0.6	無文	暗褐色	-	
23	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI02	北西塚土下層遺物 集中部、埋土上層	(4.25)	-	(5.8)	0.6	縄文 (RLR)	黒褐色	Ba	
24	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI02	北西塚土上層	(2.9)	-	-	1.1	連続刺突文・隆帯 ・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Dc	
25	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	東西ベルト西側埋 土上層	(6.1)	-	-	1.2	隆帯・沈線	褐色	Dc	
26	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	東西ベルト西側埋 土上層	(9.3)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Ac	
27	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南北ベルト南側埋 土上層	(8.9)	-	-	1.1	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	-	
28	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南北ベルト南側埋 土上層	(9.2)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Fc	
29	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	北西塚土下層	(13.3)	-	-	0.5	連続刺突文・隆帯 ・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc	
30	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南西塚土最上層	(15.9)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Bc	
31	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	埋土	(5.7)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文	褐色	Bc0	
32	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南東塚土中層	(5.1)	-	-	0.8	連続刺突文・隆帯 ・沈線・縄文 (RL?)	にぶい 黄褐色	-	
33	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南西塚土最上層	(3.9)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黄褐色	-	
34	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南北ベルト南側埋 土下層	(6.4)	-	-	0.6	連続刺突文・隆帯 ・沈線・縄文 (RL?)	にぶい 黄褐色	A	
35	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	北西塚土最上層、 南北ベルト南側埋 土上層	(5.0)	-	-	0.5	連続刺突文・隆帯 ・沈線・縄文 (RL?)	黒褐色	-	
36	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南東塚土上層	(5.6)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	-	
37	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI02	埋土	(1.8)	-	(6.6)	0.7	不明	にぶい 黄褐色	-	摩滅顯著
38	縄文土器 (中期)	深鉢	SI02	南西塚土最上層	(2.0)	-	(11.8)	0.9	不明	にぶい 黄褐色	-	
39	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI02	南側塚土上層	(3.2)	-	(8.0)	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc	
40	縄文土器 (中期)	大形 深鉢	SI05 SI02	南側ベルト上層 南西塚土下層	36.8	(36.2)	-	0.9	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc1	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.41~60

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
41	縄文土器 (中期)		SI02	南西埋土下層	(7.6)	-	13.6	1.0	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	-	
42	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI03	北東埋土、F1埋 土、前庭部埋土	(6.4)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (LR)	にぶい 黄褐色	Ac	
43	縄文土器 (中期)		SI03	埋土	(4.8)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文	暗褐色	Bc	
44	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	南西埋土、南北ベ ルト上層	(11.7)	(27.8)	-	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc0	
45	縄文土器 (中期)	小形 浅鉢	SI04	南西埋土上層	(12.0)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc	
46	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	西側検出面	(7.1)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLZ)	にぶい 黄褐色	Ac	
47	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI04	東側検出面	(7.7)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Ac	
48	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI04	南西埋土上層、検 出面	11.4	9.6	4.2	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Ac0	
49	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	南東埋土上層	(13.3)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Ac	
50	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	西側検出面	(6.7)	-	11.4	1.0	不明	にぶい 黄褐色	Bb	砂粒多く、厚減著
51	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	中央東埋土上層	(11.0)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Bc0	
52	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	南西埋土上層	(10.3)	-	-	0.8	連続刺突文・隆帯 ・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc	
53	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	中央東埋土上層	(6.2)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	-	
54	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	南西埋土上層	(3.8)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLZ)	褐色	-	
55	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	南北ベルト南側埋 土	(8.5)	-	-	1.0	連続刺突文・隆帯 ・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc0	
56	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	南北ベルト南側埋 土	(6.0)	-	-	0.8	口縁部の隆帯・縄 文(LR)	にぶい 黄褐色	Bb0	
57	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	西側検出面	(4.6)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLZ)	にぶい 黄褐色	Ac2	
58	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	西側検出面	(7.0)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Bc0	
59	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI04	東側検出面	(5.7)	-	-	0.7	連続刺突文・隆帯 ・沈線	暗褐色	Ec0	
60	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI04	埋土	(3.6)	-	-	0.9	隆帯・沈線	暗褐色	Ec0	

*寸法欄の数字は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.	種別	器種	造構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口徑	底徑	器厚				
61	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	南東埋土	(7.3)	-	-	0.8	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文(RLR?)	にぶい 黄褐色	Bc0	
62	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	西側検出面	(2.3)	-	6.7	0.8	隆帯・沈線	暗褐色	Bc	
63	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	床面直上	(6.4)	-	7.6	0.9	縄文(RLR)	暗褐色	Bb	
64	縄文土器 (中期)	深鉢	SI04	南西埋土上層	(1.5)	(15.8)	(7.6)	0.6	隆帯・沈線・縄文(RLR)	にぶい 黄褐色	Ae2	
65	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI05	南西埋土下層	10.5	8.2	4.4	0.5	隆帯・沈線・縄文(RLR)	暗褐色	Ae3	
66	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI05	西側埋土上層	(4.3)	-	4.0	0.6	隆帯・沈線・縄文	暗褐色	Ac	
67	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI05	南東埋土下層	9.6	8.5	4.0	0.7	縄文(RLR)	にぶい 黄褐色	Ab2	
68	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI05	埋土上層、西ベル ト埋土上層	(5.2)	-	4.6	0.7	縄文(RL?)	暗褐色	Bb	
69	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI05	南東埋土下層	8.2	(8.9)	3.8	0.5	隆帯・沈線・縄文(RLR)	にぶい 黄褐色	Bc3	大木9?
70	縄文土器 (中期)	小型 深鉢	SI05	南東埋土下層	10.4	10.1	6.0	0.8	無文	暗褐色	Aa0	
71	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI05	南東埋土上層	(3.2)	-	4.8	0.8	沈線・縄文(LR?)	にぶい 黄褐色	Bc	
72	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南西埋土下層、北 西埋土上層	12.6	-	-	0.7	磨消・沈線・縄文(RLR)	暗褐色	Bd0	大木9?
73	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南東埋土下層	(4.7)	-	7.0	0.7	隆帯・沈線・縄文(RLR?)	にぶい 黄褐色	Bc	
74	縄文土器 (中期)	小形 浅鉢	SI05	北西埋土下層	(8.3)	-	-	0.4	縄文(RL?)	にぶい 黄褐色	Fa	
75	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南東埋土下層	(5.5)	-	-	0.9	縄文(RLR)	にぶい 黄褐色	Bb0	
76	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI05	南西埋土上層、北 西埋土上層	(7.0)	(15.8)	-	0.5	磨消・沈線・縄文(RLR?)	暗褐色	Fd0	大木9
77	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI05	西側埋土上層	12.0	12.0	5.8	0.8	隆帯・沈線・縄文(RLR)	にぶい 黄褐色	Bc4	
78	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	北西埋土上層、南 西埋土中層	22.0	21.0	6.5	0.9	隆帯・沈線・縄文(RLR)	褐色	Bc2	
79	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南東埋土上層	(5.4)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文(RLR?)	暗褐色	Ac	
80	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	東側埋土上層	(5.3)	-	-	0.6	磨消・沈線・縄文(LR)	黒褐色	Bd	大木9

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、「」のものが復元値、-は測定不可。

3 出土遺物

No.81~100

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法 (cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
81	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南西堀上上層	(5.5)	-	-	0.7	磨消・隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	-	大木9?
82	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	西側堀上上層	(4.8)	-	-	0.4	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Ac	
83	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南西堀上上層	(6.2)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc	
84	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南西堀上上層	(4.6)	-	-	0.4	隆帯・沈線・縄文 (RLR?)	褐色	-	補修孔有り
85	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI05	南東堀上中層	(5.3)	-	-	0.8	口縁部の隆帯・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Be0	
86	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	北西堀上下層	(5.4)	-	-	0.7	縄文 (RLR)	褐色	Ba0	
87	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南西堀上下層	(5.9)	-	-	1.2	隆帯・沈線・縄文 (LR)	にぶい 黄褐色	Be0	補修孔有り
88	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南側ベルト上層、 南東上層南西堀上 下層	(7.5)	-	-	1.1	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc0	
89	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI05	堀上層、検出面、 埋土下層	19.5	27.5	8.6	0.9	連続刺突文・隆帯・ 沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Be0	
90	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI25	南中側埋土最下 層、北西埋土上層	22.6	33.3	11.2	0.9	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Ec	
91	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI05	南東堀上中層、南 東堀下層	13.9	-	8.8	0.9	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Fc	
92	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南東堀土下層	(14.7)	14.3	-	1.4	隆帯・沈線・縄文 磨消	褐色	Dd	大木9?
93	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	東側埋土上層	(6.7)	-	-	1.5	連続刺突文・隆帯・ 沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Be0	
94	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	東側堀上上層	(15.1)	-	-	1.1	隆帯・沈線	にぶい 黄褐色	-	
95	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	PS埋土	(10.4)	(17.5)	9.7	0.9	縄文 (LR?)	褐色	B	
96	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	東側ベルト上層	(20.5)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc0	
97	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI05	南西埋土下層	(4.5)	(15.4)	(10.8)	0.9	縄文 (RL)	褐色	B	
98	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	北側ベルト埋土中 層、北西埋土上層	(4.2)	(12.8)	(10.4)	0.6	不明	暗褐色	B	底部木炭痕
99	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	堀上層・中層・ 下層	(17.2)	-	(9.2)	1.4	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc	
100	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	南西埋土上層	(6.0)	-	-	0.6	隆帯	暗褐色	-	大木9?

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.	種別	器種	造構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
101	縄文土器 (中期)	深鉢	SI05	北東堰上土層	(6.8)	-	-	1.1	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文(RL?)	黒褐色	D	
102	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI05	北東堰上土層	(4.4)	-	(14.0)	1.2	不明	暗褐色	-	摩滅顕著
103	縄文土器 (中期)	大形深鉢	SI05	堰上土層・中層・下層	46.5	(27.6)	-	1.0	縄文(RLR)	褐色	Bb0	
104	縄文土器 (中期)	大形深鉢	SI05	北西堰土下層、南西堰土下層	39.9	27.3	9.6	1.2	縄文(RLR)	にぶい黄褐色	Bb0	
105	縄文土器 (中期)	深鉢	SI06	北東堰土上層(塚乱瓦じり)	(6.9)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文(RLR)	黒褐色	D	
106	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI06	南西堰土最上層	(3.4)	-	3.8	0.4	隆帯・沈線・縄文(RLR?)	褐色	Bc	
107	縄文土器 (中期)	深鉢	SI06	南西堰土最上層	(6.9)	-	-	1.2	隆帯・沈線	褐色	-	
108	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI06	東側石囲炉前庭部	(6.5)	-	-	0.4	隆帯・沈線・縄文(LR?)	黒褐色	Ac	摩滅顕著
109	縄文土器 (中期)	深鉢	SI06	南西堰土最上層、堰土下層	(16.0)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文(RLR)	黒褐色	Bc	
110	縄文土器 (中期)	深鉢	SI06	堰上土層、石囲炉前庭部直上	(17.3)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文(RL?)	褐色	Bc	
111	縄文土器 (中期)	深鉢	SI06	石囲炉前庭部横土中層、石囲炉前庭部直上	(16.9)	-	-	0.9	口縁部の隆帯・縄文(RLR)	黒褐色	Bb0	
112	縄文土器 (中期)	深鉢	SI07	北東堰上土層	(3.9)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文(RL)	にぶい黄褐色	D	摩滅顕著
113	縄文土器 (中期)	深鉢	SI07	南西堰上	(4.9)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文(LR)	にぶい黄褐色	Bc	
114	縄文土器 (中期)	深鉢	SI07	北西堰上下層	(8.3)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文(RLR?)	にぶい黄褐色	Bc	
115	縄文土器 (中期)	器台	SI07	北西堰土下層	(1.5)	(27.9)	-	1.3	無文	暗褐色	G	
116	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI07	南西堰土	(2.5)	-	(4.0)	0.7	隆帯・沈線・縄文(RLR)	暗褐色	Bc	
117	縄文土器 (中期)	深鉢	SI07	北東堰土上層	(5.5)	-	-	0.4	隆帯・沈線・縄文(LR?)	褐色	Bc	
118	縄文土器 (中期)	深鉢	SI07	北西堰土	(5.6)	-	6.6	0.7	隆帯・沈線・縄文	にぶい黄褐色	Bc	
119	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI10	東館堰土	(2.5)	-	3.0	0.6	不明	褐色	Bc	
120	縄文土器 (中期)	深鉢	SI11	南西トレンチ上層	(8.2)	-	-	1.0	口縁部の隆帯・縄文(RLR)	褐色	Bb0	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

3 出土遺物

No.121~140

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
121	縄文土器 (中期)	深鉢	SI11	K1 堀上	(6.5)	-	-	0.5	口縁部の隆帯・縄文 (RLR?)	褐色	Bb0	
122	縄文土器 (中期)	浅鉢?	SI11	北舗検出面	(6.5)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR?)	にぶい 黄褐色	Bc0	補修孔有り
123	縄文土器 (中期)	深鉢	SI11	南中側埋土下層	(6.2)	-	-	1.0	隆帯・沈線	暗褐色	D	
124	縄文土器 (中期)	深鉢	SI11	南西埋土兼下層	(6.3)	(28.3)	-	0.7	口縁部の隆帯・縄文 (RLR?)	にぶい 黄褐色	Bb0	
125	縄文土器 (中期)	深鉢	SI11	埋土上層、北東ト レンチ下層、北東埋土 下層、ベルト下層	(28.8)	(24.4)	-	0.9	口縁部の隆帯・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bb0	
126	縄文土器 (中期)	深鉢	SI11	埋土下層、南中側 埋土下層	(13.5)	(21.2)	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc4	
127	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	埋土下層、F1 前 庭部埋土	(6.3)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLR?)	暗褐色	Dc	摩滅顕著
128	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	F1 前庭部埋土	(7.3)	-	-	0.4	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Dc	
129	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	F1 前庭部埋土	(4.9)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	D	
130	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	北側ベルト下層	(7.7)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc	
131	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	西側ベルト上層	(3.7)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Bc	
132	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	F1 埋土	(4.3)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR?)	にぶい 黄褐色	D	
133	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	SI12	北西埋土下層	(3.4)	(6.6)	(4.0)	0.4	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc	
134	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	南西埋土上層	(6.3)	-	-	0.9	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc	
135	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	北西埋土下層	(5.5)	-	-	0.9	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	-	
136	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	北西埋土上層、北 西トレンチ下層	(14.5)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc	
137	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	F1 前庭部埋土	(5.3)	-	(11.0)	0.9	縄文	にぶい 黄褐色	B	
138	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	F1 前庭部埋土	(2.7)	-	(9.0)	0.8	沈線・縄文 (LR?)	暗褐色	Bc	
139	縄文土器 (中期)	深鉢	SI12	南西トレンチ下層、 西側ベルト下層	(13.9)	-	(6.7)	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc	
140	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	北東埋土下層	(7.0)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc0	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.	種別	器種	造構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
141	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	埋土最下層、南西埋土下層	(6.3)	-	-	0.9	隆帯・沈線・縄文(RLR)	暗褐色	Bc0	
142	縄文土器 (中期)	不明	SI15	北西埋土下層	(3.6)	-	-	0.7	連続削突文・隆帯・沈線	にぶい黄褐色	Ec0	
143	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	南東最下層	(4.3)	-	-	0.7	L1線部の隆帯・縄文(RLR)	にぶい黄褐色	Bb0	
144	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	南北ベルト南側上層	(5.1)	-	-	0.8	L1線部の隆帯・縄文(LR?)	暗褐色	Bb0	
145	縄文土器 (中期)	深鉢?	SI15	北西埋土下層	(5.5)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文(RL?)	黒褐色	Bc0	
146	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	北東埋土下層	(4.1)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文(RLR)	黒褐色	Bc0	
147	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	南東埋土最下層	(5.6)	-	(7.8)	0.7	隆帯・沈線・縄文(RLR)	暗褐色	Bc	
148	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	南西埋土下層	5.0	-	(8.8)	1.0	縄文(RLR?)	にぶい黄褐色	Bb	
149	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	検出面(メインセクションベルト内)	(7.4)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文(RL?)	にぶい黄褐色	Bc	
150	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	北西埋土上層	(13.5)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文(RLR)	褐色	Dc0	151と同一個体?
151	縄文土器 (中期)	深鉢	SI15	北西埋土下層、東西ベルト下層	(14.4)	-	-	1.3	隆帯・沈線・縄文(RLR)	褐色	Dc0	150と同一個体?
152	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	検出面	(4.8)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文(RLR)	暗褐色	Bc0	
153	縄文土器 (中期)	台付深鉢	SI16	SI11から連続するトレンチ	(5.4)	-	(7.2)	0.8	隆帯・沈線・縄文(RL)	褐色	-	
154	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	検出面	(9.2)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文(RLR)	褐色	Ec0	
155	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	南西埋土上層	(7.6)	-	-	1.1	隆帯・沈線・縄文(RLR)	暗褐色	Bc0	
156	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI16	西端(SI11床面範囲直下)	(4.9)	-	-	5.7	縄文(RLR)	にぶい黄褐色	Aa	
157	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI16	南北ベルト最上層	(2.4)	-	5.2	0.5	沈線・縄文(LR?)	にぶい黄褐色	Bc	
158	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI16	南西埋土最上層	(3.1)	-	4.6	0.9	縄文(LR)	暗褐色	Bb	摩滅顯著
159	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	南東埋土上下層	(6.3)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文(RLR)	褐色	Ac2	
160	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	南東埋土下層	(5.1)	-	-	0.9	隆帯・沈線・縄文(RLR)	黒褐色	Bc0	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.161～180

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
161	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	SI11から連続する トレンチ	(9.5)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR?)	褐色	Bc0	
162	縄文土器 (中期)	不明	SI16	南北ベルト上層	(5.1)	-	-	0.5	沈線・縄文 (LR?)	暗褐色	Bc	摩滅顯著
163	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	南東埋土上層・中 層・下層	(0.7)	(18.9)	-	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR?)	暗褐色	Ae2	外面に多量のスス 付着
164	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	西端 (SI11床面鏡 両直ト)	(10.5)	-	-	0.6	口縁部の隆帯・縄 文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bb0	
165	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI16	南東隅埋上下層	(6.0)	-	-	0.9	連続刺突文・隆帯 ・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Ec	
166	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	掘土最下層、埋土 最上層	(15.0)	-	-	1.0	連続刺突文・隆帯 ・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Dc	
167	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	南西埋土上層	(5.9)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR?)	にぶい 黄褐色	Be0	
168	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	南東埋土上～中層	(4.4)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc	
169	縄文土器 (後期)	深鉢	SI16	南東隅埋上下層	(7.7)	-	-	0.8	鎖状隆帯	赤褐色	-	
170	縄文土器 (後期)	深鉢	SI16	南東隅埋土下層	(4.5)	-	-	0.7	鎖状隆帯	赤褐色	-	
171	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16		(22.9)	-	-	0.8	口縁部の隆帯・縄 文 (RLR?)	にぶい 黄褐色	Bb0	
172	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	南東埋土下層	(8.4)	-	-	0.7	口縁部の隆帯・縄 文 (RLR?)	にぶい 黄褐色	Bb0	
173	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI16	北東埋土上層、南 西埋土上層、北東 埋土下層	(7.5)	(16.2)	-	0.7	縄文 (RLR?)	にぶい 黄褐色	Fb0	
174	縄文土器 (中期)	大形 深鉢	SI16		46.1	28.4	12.4	1.0	縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bb0	
175	縄文土器 (中期)	大形 深鉢	SI16	南西埋土上層、南 東埋土中～上層、 南東埋土中層	52.5	44.3	11.5	1.1	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc	
176	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	北西埋土下層	(7.4)	-	(6.6)	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Bc	
177	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	南西埋土中層	(23.0)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc	
178	縄文土器 (中期)	深鉢	SI16	SI11から連続する トレンチ	(32.6)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Bc	
179	縄文土器 (中期)	深鉢	SI17	北東埋土最下層	(9.9)	-	-	1.1	縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bb	
180	縄文土器 (中期)	深鉢	SI17	南側検出面	(5.9)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Dc	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.	種別	器種	遺構	位置・方位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
181	縄文土器 (中期)	深鉢	SI21	北西埋土	(4.0)	-	-	0.7	Li線部の隆帯・縄文(RLR)	黒褐色	Bb	
182	縄文土器 (中期)	深鉢	SI21	北西埋土	(5.3)	-	4.0	0.5	縄文(RLR)	暗褐色	Bb	
183	縄文土器 (中期)	深鉢	SI17	南側検出面	(9.2)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文(RLR)	褐色	Bc	
184	縄文土器 (中期)	深鉢	SI17	東側柱穴状埋土	(5.2)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文(RLR)	にぶい 黄褐色	-	摩滅顯著
185	縄文土器 (中期)	深鉢	SI17	南側検出面	(3.3)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文	暗褐色	Ac	
186	縄文土器 (中期)	深鉢	SI17	北西埋土上~下層	(4.6)	-	-	0.9	隆帯・沈線	暗褐色	-	
187	縄文土器 (中期)	深鉢	SI17	南東埋土上層	(3.6)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文(RL)	褐色	-	
188	縄文土器 (中期)	深鉢	SI19	埋土	(7.3)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文(RLR?)	暗褐色	Bc	
189	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI20	埋土	(4.5)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文(RLR?)	暗褐色	Ac	
190	縄文土器 (中期)	深鉢	SI22	F1埋土	(6.8)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文(RLR?)	褐色	Bc	
191	縄文土器 (中期)	深鉢	SI23	南西埋土下層	(5.2)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文(LR)	にぶい 黄褐色	Bb	
192	縄文土器 (中期)	深鉢	SI23	南西埋土下層	(5.1)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文	暗褐色	-	
193	縄文土器 (中期)	浅鉢	SI25	南中側埋土上層	(11.8)	-	-	0.9	連続刻突文・隆帯・沈線・縄文(RL)	暗褐色	Dc	
194	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	中央付近床面直上	(8.5)	(5.4)	4.2	0.9	無文	にぶい 黄褐色	-	
195	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI25	南中側埋土最下層	9.1	7.5	4.9	0.9	隆帯・沈線・縄文(RLR)	にぶい 黄褐色	Ac3	大木9?
196	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	北西埋土下層、南西埋土最上層	18.3	(17.4)	(8.0)	0.8	隆帯・沈線・縄文(LRL)	暗褐色	Bc	
197	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	検出面	(8.5)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文(RLR)	黒褐色	Bc0	
198	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25		(5.0)	-	-	0.7	隆帯・沈線	にぶい 黄褐色	-	
199	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南側埋土下層、南中側埋土下層	(13.3)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文(LRL)	暗褐色	Bc	
200	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南中側埋土最下層	(15.6)	-	-	0.9	磨削縄文・隆帯・沈線	にぶい 黄褐色	Dd	大木9?

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.201~220

No.	種別	器種	連携	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
201	縄文土器	深鉢	SI25	南西埋土下層	(9.5)	-	5.4	0.6	縄文 (RL?)	暗褐色	Bb	
202	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI25	中央付近床面直上	(7.4)	-	4.4	0.6	隆帯・沈線・縄文 (LR)	褐色	Ac	
203	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SI25	埋土上層	(4.4)	-	4.5	0.7	沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc	大木9?
204	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南西埋土下層	(6.7)	-	-	0.8	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc	
205	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南西埋土下層	(6.7)	-	-	0.9	隆帯・沈線	にぶい黄褐色	Bc0	
206	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	埋土	(5.0)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文	にぶい黄褐色	Bc	
207	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	埋土	(4.9)	-	-	1.0	口縁部の隆帯・縦位の条痕	黒褐色	Bd	
208	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南西埋土下層	(5.7)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい黄褐色	Bc	
209	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	埋土上層	(9.2)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい黄褐色	Bc	
210	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南中欄埋土下層、 南西埋土下層	(5.9)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc	
211	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南中欄埋土上層	(5.2)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Bc	
212	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	埋土	(4.1)	-	-	0.6	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Ac	
213	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南中欄埋土城下層	(3.2)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文	にぶい黄褐色	Bc	
214	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	埋土	(5.0)	-	-	0.9	口縁部の隆帯・縄文 (RLR)	褐色	B	
215	縄文土器 (中期)	深鉢?	SI25	南中欄埋土下層	(8.4)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc	
216	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南中欄埋土上層	(8.5)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc	
217	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南中欄埋土下層	(8.0)	-	-	0.7	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	黒褐色	Bc	
218	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	南西埋土下層	(16.3)	-	-	0.7	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文 (LRL)	褐色	Bc	
219	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	埋土	(16.7)	-	-	0.8	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc	
220	縄文土器 (中期)	深鉢	SI25	埋土	(9.3)	-	-	0.6	縄文 (RLR)	暗褐色	Ab	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
221	縄文土器 (中期)	深鉢	SI28	F1崩落部埋土	(15.0)	-	-	0.6	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文(RLR)	黒褐色	Bc	
222	縄文土器 (中期)	深鉢	SI28	西側土坑状の落ち込み層上	(3.8)	(15.8)	(11.6)	0.9	縄文(RLR)	にぶい黄褐色	B	
223	縄文土器 (中期)	?	SI28	西側土坑状の落ち込み層上	(4.3)	-	-	1.0	隆帯・沈線	にぶい黄褐色	Bc	
224	縄文土器 (中期)	深鉢	SI28	西側土坑状の落ち込み層上	(4.7)	-	-	0.9	隆帯・沈線・縄文(RLR)	暗褐色	Bc	
225	縄文土器 (中期)	深鉢	SI28	西側土坑状の落ち込み層上	(3.6)	-	-	0.9	隆帯・沈線・縄文(RLR)	褐色	Bc	
226	縄文土器 (中期)	深鉢	SI28	西側土坑状の落ち込み層上	(6.0)	-	-	0.9	縄文(RLR)	暗褐色	Bb	
227	縄文土器 (中期)	器台	SI28	北西埋土	12.3	-	(22.0)	1.2	縄文(RLR)	褐色	G	透孔有り
228	縄文土器 (中期)	深鉢	SI28	埋土中層	(20.1)	-	-	1.1	隆帯・沈線・縄文(RLR)	にぶい黄褐色	Bc	
229	縄文土器 (晩期)	小形壺	SF01	SI105最上層(黒色土)	(8.0)	(7.6)	-	0.6	沈線・縄文(RL)	黒褐色	-	
230	縄文土器 (晩期)	小形壺	SF01	SI105最上層(黒色土)	8.2	-	(5.0)	0.6	沈線・縄文(RL)	黒褐色	-	
231	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SK32	南館裏下面	(9.6)	(9.1)	5.0	0.7	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文(LR)	暗褐色	Ac2	
232	縄文土器 (中期)	小形深鉢	SK25	埋土	(4.4)	-	(3.8)	0.6	隆帯・沈線・縄文	黒褐色	Ae	
233	縄文土器 (後期)	深鉢	SK10	埋土	(14.5)	-	(11.6)	1.3	縄文(RL)	褐色	-	
234	縄文土器 (中期)	深鉢	SK14	埋土	(5.5)	-	-	0.9	隆帯・沈線・縄文(RLR?)	にぶい黄褐色	Bc	
235	縄文土器 (中期)	小形深鉢	遺構外	調査区北西上段～ト段検出面(SI01付近)	7.3	6.7	3.6	0.5	沈線・縄文(LR)	黒褐色	Ac2	
236	縄文土器 (中期)	小形深鉢	遺構外	調査区北東黒色土(SI25~27付近)	(4.6)	-	5.0	0.6	沈線・縄文(RL)	褐色	A	
237	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東検出面	(5.1)	-	-	0.9	隆帯・沈線・縄文(RLR)	褐色	-	
238	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東検出面(SI25~27付近)	(6.5)	-	-	0.7	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文(RLR)	暗褐色	De	
239	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東黒色土(SI25~28付近)	12.3	(9.2)	(8.8)	0.6	隆帯・沈線・縄文(RL)	にぶい黄褐色	Cc0	環状把手
240	縄文土器 (中期)	浅鉢	遺構外	調査区北東黒色土直下の褐色土(SI25~29付近)	(11.8)	-	-	0.9	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文(LR)	暗褐色	Ec0	

*寸法欄の数値は、()のものが残存数、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.241~260

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法 (cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
241	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	メインセクション ベルト東側検出面 (SI23付近)	(5.0)	-	-	0.8	連続刺突文・隆帯・ 沈線・縄文	暗褐色	-	
242	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区中央検出面 (SI04付近)	(4.2)	-	-	0.7	連続刺突文・隆帯・ 沈線・縄文	にぶい 黄褐色	-	
243	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東検出面 (SI04付近)	(7.0)	-	8.0	0.8	隆帯・沈線・縄文	にぶい 黄褐色	Bc	摩滅顯著、244と同 一器体の可能性有り
244	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東検出面 (SI04付近)	(13.2)	-	-	0.8	隆帯・沈線・縄文	にぶい 黄褐色	Ac	摩滅顯著、243と同 一器体の可能性有り
245	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東表土・ 検出面 (SI25-27 付近)	(10.9)	-	-	0.7	隆帯・沈線・磨消 縄文	黒褐色	Dd	人木97、内外面部分 的に赤色顔料付着
246	縄文土器 (中期)	浅鉢?	遺構外	調査区北東隅検出 面 (SI26・28付近)	(4.6)	-	-	1.2	隆帯・沈線・縄文 (LR?)	にぶい 黄褐色	Ec2	
247	縄文土器 (中期)	浅鉢	遺構外	調査区中央検出面 (SI04付近)	(6.8)	(14.8)	-	0.8	縄文 (RL?)	暗褐色	Fa0	摩滅気味
248	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東隅表土・ 検出面 (SI26・28 付近)	(10.6)	-	-	0.9	連続刺突文・隆帯・ 沈線・縄文 (RLR)	褐色	Bc0	
249	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東隅検出 面 (SI26・29付近)	(10.0)	-	-	0.7	連続刺突文・隆帯・ 沈線・縄文 (RLR)	褐色	-	摩滅気味
250	縄文土器 (中期)	小型 深鉢	遺構外	調査区北東検出面 (SI05付近)	(3.6)	-	-	0.7	隆帯・沈線	褐色	-	
251	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北西下段一 下段検出面 (SI01 付近)	(5.0)	-	-	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	B	
252	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区中央検出面 (SI04付近)	(5.3)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文 (RL)	暗褐色	B	
253	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	遺構外	調査区中央表土 (SI04付近)	(4.0)	-	(5.0)	0.8	無文	にぶい 黄褐色	-	
254	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	遺構外	調査区北西下段一 下段検出面 (SI01 付近)	(3.0)	-	(4.4)	0.6	隆帯・沈線・縄文 (RL?)	暗褐色	-	
255	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区中央検出面 (SI23付近)	(3.9)	-	-	0.8	上縁部の隆帯・縄 文	褐色	-	
256	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東検出面 (SI05付近)	28.2	19.6	8.2	1.0	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	暗褐色	Bc2	
257	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東表土・ 検出面 (SI25-27 付近)	(23.1)	-	-	1.0	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc0	
258	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区北東表土・ 検出面 (SI25-28 付近)	(23.5)	-	(16.0)	0.8	隆帯・沈線・縄文 (RLR)	にぶい 黄褐色	Bc	
259	縄文土器 (中期)	深鉢	遺構外	調査区中央検出面 (SI04付近)	(4.8)	-	(10.8)	0.9	無文	褐色	-	
260	縄文土器 (中期)	小形 深鉢	遺構外	調査区北東検出面	(5.5)	-	(11.5)	0.8	縄文 (RLR)	暗褐色	-	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法(cm・最大)				文様構成	色調	分類	備考
					器高	口径	底径	器厚				
261	縄文土器(中期)	小形深鉢	遺構外	調査区北東隅検出面(SI26・29付近)	(6.7)	-	-	0.7	連続刺突文・隆帯・沈線・縄文(RL)	暗褐色	-	
262	縄文土器(中期)	小形深鉢	遺構外	メインセクション・ベルト東側検出面(SI23付近)	(1.5)	-	4.0	0.4	縄文(LR)	にぶい黄褐色	-	
263	縄文土器(中期)	小形深鉢	遺構外	調査区中央表土(SI04付近)	(2.2)	-	(4.0)	0.7	隆帯・沈線・縄文(LR)	暗褐色	Bc	
264	縄文土器(中期)	小形深鉢	遺構外	調査区南東露土下層	(4.15)	-	(5.4)	0.5	隆帯・沈線・縄文(RLR)	にぶい黄褐色	Bc	
265	縄文土器(中期)	深鉢	SK11	埋土下層	(5.5)	-	-	0.5	隆帯・沈線・縄文(RLR)	にぶい黄褐色	Bc	第86図に掲載

No.	種別	器種	遺構	位置・層位	寸法(cm・最大)				調整技法	色調	備考
					器高	口径	底径	器厚			
266	須恵器	坏	SK12	埋土中～下層	4.2	(6.8)	(5.5)	0.4	回転ナデ・底部回転糸切り後無調整	灰白色	
267	須恵器	坏	SK12	埋土中～下層	4.45	14.0	[5.3]	0.5	回転ナデ・底部回転糸切り後無調整	灰白色	
268	土師器	坏	SK12	埋土中～下層	(4.5)	(6.8)	-	0.4	内外面回転ナデ・内面ミガキ・底部回転糸切り・ヘラケズリ	橙色	墨痕あり
269	土師器	坏	SK12	埋土中～下層	(5.6)	(13.8)	4.2	0.4	内外面回転ナデ・内面ミガキ・底部回転糸切り・ヘラケズリ	橙色	
270	土師器	坏	SK12	埋土中～下層	4.8	13.3	4.8	0.7	内外面回転ナデ・内面ミガキ・底部回転糸切り・ヘラケズリ	にぶい橙色	
271	土師器	坏	SK12	埋土中～下層	4.8	14.1	4.6	0.6	内外面回転ナデ・内面ミガキ・底部回転糸切り・ヘラケズリ	橙色	墨痕あり
272	土師器	坏	SK12	埋土中～下層	4.7	17.0	6.6	0.6	内外面回転ナデ・内面ミガキ・底部回転糸切り	にぶい橙色	牽減顕著・墨痕あり
273	土師器	坏	遺構外	調査区南西検出面(SK12・17付近)	5.2	13.8	[4.4]	0.6	内外面回転ナデ・内面ミガキ・底部回転糸切り・ヘラケズリ	暗褐色	
274	土師器	坏	遺構外	調査区南西検出面(SK12・18付近)	5.2	[13.9]	5.2	0.7	内外面回転ナデ・内面ミガキ・底部回転糸切り・ヘラケズリ	にぶい橙色	
275	土師器	坏	遺構外	調査区北東調査区外斜面確認トレンチ	3.2	12.8	6.0	0.8	内外面回転ナデ・底部回転糸切り	橙色	
276	土師器	高台坏	SK17	埋土(黒色土)	(7.5)	-	2.0	0.9	内外面回転ナデ・内面ミガキ	橙色	
277	土師器	坏	SK18	埋土(黒色土)	(2.6)	-	(7.8)	0.9	内外面回転ナデ・内面ミガキ・底部回転糸切り・ヘラケズリ	明褐色	
278	土師器	甕	SK17	埋土中層	(7.7)	[25.9]	-	1.0	内外面回転ナデ・外面ドムヘラケズリ	にぶい橙色	
279	土師器	鉢	SP202	屋上下層	(16.4)	-	(7.0)	1.9	内外面回転ナデ・内面ミガキ	にぶい黄褐色	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値、[]のものが復元値、-は測定不可。

第2表 掲載遺物一覧(石器)

No.280~309

No.	器種	遺構名	位置・層位	寸法(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
280	石鏃	SI01	南東埋土上層	1.55	1.20	0.35	頁岩(北上山地)
281	石鏃	SI01	東西ベルト(南東)埋土	(2.45)	1.00	0.60	頁岩(北上山地)
282	石鏃	SI02	北西埋土上層	(1.90)	(1.40)	0.35	頁岩(北上山地)
283	石鏃	SI04	南東埋土	2.10	1.40	0.45	頁岩(北上山地)
284	石鏃	SI05	北ベルト埋土中層(褐色土)	(2.85)	(1.40)	0.35	頁岩
285	石鏃	SI05	検出面	1.80	1.35	0.40	頁岩(北上山地)
286	石鏃	SI05	南西埋土中層	2.40	1.55	0.45	頁岩
287	石鏃	SI05	P10埋土	2.15	1.30	0.35	頁岩
288	石鏃	SI06	南西埋土上層	(1.70)	(1.30)	0.30	頁岩(北上山地)
289	石鏃	SI06	石圍伊標土	2.20	1.30	0.25	頁岩、As付着
290	石鏃	SI06	ベルト西埋土下層	(2.10)	(1.65)	0.50	頁岩(北上山地)
291	石鏃	SI07	東西ベルト(東)埋上下層	1.95	1.45	0.40	頁岩(北上山地)
292	石鏃	SI15	東西ベルト東側埋土上層	2.10	1.40	0.35	頁岩(北上山地)
293	石鏃(有茎)	SI16	南西埋土上層	(2.65)	1.20	0.35	頁岩(北上山地)、As付着
294	石鏃	SI16	南西埋土上層	2.20	1.50	0.40	頁岩(北上山地)
295	石鏃	SI16	東登付近埋上下層	(1.15)	1.40	0.30	頁岩(北上山地)、As付着
296	石鏃	SI16	南東埋土下層	2.40	1.45	0.35	頁岩(北上山地)・未成品?
297	石鏃	SI17	北西局溝埋土	2.20	1.80	0.60	頁岩(北上山地)・未成品?
298	石鏃	SI17	P1埋土	2.85	1.30	0.75	頁岩(北上山地)
299	石鏃	SI17	P2埋土	(2.90)	1.20	0.55	頁岩(北上山地)
300	石鏃	SI17	北西埋土	2.20	1.60	0.50	頁岩(北上山地)
301	石鏃	SI17	北西埋土	(1.80)	(1.50)	0.40	頁岩
302	石鏃	SI17	埋土最下層	(1.95)	(1.35)	0.30	頁岩
303	石鏃	SI25	南西埋土上層	1.80	1.30	0.20	頁岩(北上山地)
304	石鏃	SI25	南西埋土下層	2.40	1.60	0.40	頁岩(北上山地)・未成品?
305	石鏃	SI25	南西埋土下層	(2.00)	(1.35)	0.25	頁岩(北上山地)
306	石鏃	SI25	東西ベルト西側埋土	1.95	(1.55)	0.40	頁岩(北上山地)
307	石鏃	SI25	東西ベルト西側埋土	1.60	(1.20)	0.25	頁岩、As付着
308	石鏃	SI25	東西ベルト西側埋土	(1.55)	(1.10)	0.50	頁岩(北上山地)
309	石鏃	SI25	東西ベルト西側埋土	2.00	1.10	0.30	頁岩(北上山地)

*寸法欄の()の数値は残存値、「As」は、アスファルトの時。

No.	器種	選稱名	位置・層位	寸法(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
310	石鏝	SI25	東西ベルト西側埋土	1.80	1.15	0.20	頁岩(北上山地)
311	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	(1.30)	1.65	0.30	頁岩(北上山地)、As付着
312	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	(1.45)	1.45	0.40	頁岩(北上山地)
313	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	2.20	1.50	0.35	頁岩(北上山地)、As付着
314	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	2.10	1.50	0.60	頁岩(北上山地)・未成品?
315	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	1.80	1.50	0.35	頁岩(北上山地)・未成品?
316	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	2.05	1.55	0.65	頁岩(北上山地)・未成品?
317	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	2.20	1.50	0.40	頁岩(北上山地)・未成品?
318	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	1.80	1.30	0.20	頁岩(北上山地)
319	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	1.85	1.70	0.40	頁岩
320	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	1.35	1.20	0.30	頁岩(北上山地)
321	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	1.25	1.30	0.30	頁岩(北上山地)
322	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	1.65	1.25	0.30	頁岩
323	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	1.55	1.35	0.35	頁岩(北上山地)
324	石鏝	SI25	南北ベルト南側埋土	1.70	(1.25)	0.30	頁岩(北上山地)
325	石鏝	SI25	南北ベルト埋土下層	1.20	1.25	0.30	珪質頁岩(奥羽山脈)
326	石鏝	SI25	南中側埋土上層	1.90	1.40	0.40	頁岩(北上山地)
327	石鏝	SI25	南中側埋土上層	(1.90)	1.35	0.20	珪質頁岩(奥羽山脈)
328	石鏝	SI25	南西埋土下層	(1.40)	(1.15)	0.30	黒曜石
329	石鏝	SI25	南西埋土下層	1.35	1.20	1.30	珪質頁岩(奥羽山脈)
330	石鏝	SI25	南西埋土下層	1.50	1.30	0.30	頁岩(北上山地)
331	石鏝	SI25	南西埋土下層	1.45	1.10	0.25	頁岩(北上山地)
332	石鏝	SI25	南西埋土下層	(1.65)	(1.10)	0.25	頁岩
333	石鏝	SI25	南西埋土下層	1.60	1.40	0.40	頁岩(北上山地)
334	石鏝	SI25	南西埋土下層	1.70	1.10	0.30	頁岩(北上山地)
335	石鏝	SI25	南西埋土上層	1.70	1.10	0.25	頁岩、As付着
336	石鏝	SI25	南西埋土上層	1.80	1.30	0.25	頁岩(北上山地)
337	石鏝	SI25	南西埋土上層	(1.45)	1.40	0.30	頁岩(北上山地)
338	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	(2.25)	(1.45)	(0.5)	頁岩(北上山地)
339	石鏝	SI25	東西ベルト中側埋土	(1.00)	(1.20)	0.25	頁岩(北上山地)

*寸法欄の()内の数値は残存値、「As」は、アスファルトの略。

No.340~369

No.	器種	遺構名	位置・層位	寸法(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
340	石椀	SI25	南北ベルト(2)埋土上層	(1.80)	1.35	0.30	頁岩(北上山地)
341	石椀	SI25	南北ベルト(2)埋土上層	(1.90)	1.65	0.60	頁岩
342	石椀	SI25	南北ベルト(2)埋土上層	1.70	1.50	0.35	頁岩
343	石椀	SI25	南北ベルト(2)埋土上層	1.50	1.10	0.30	頁岩(北上山地)
344	石椀	SI25	南北ベルト(2)埋土上層	(2.0)	1.80	0.30	頁岩(北上山地)
345	石椀	SI25	南西埋土上層	1.40	1.40	0.25	珪質頁岩(奥羽山脈)
346	石椀	SI25	北中掘埋土下層	1.2	1.5	0.2	頁岩(北上山地)
347	石椀	SI25	北中掘埋土下層	1.4	1.65	0.3	頁岩(北上山地)
348	石椀	SI25	南西埋土上層	(1.70)	(1.15)	0.25	頁岩(北上山地)
349	石椀	SI25	南北ベルト(2)埋土下層	1.70	1.50	0.35	珪質頁岩(奥羽山脈)
350	石椀	SI25	南北ベルト(2)埋土下層	1.6	1.6	0.65	頁岩(北上山地)
351	石椀	SI25	南北ベルト(1)埋土	1.4	1.0	0.3	頁岩(北上山地)
352	石椀	SI25	南中掘埋土上層	1.55	1.1	0.3	頁岩(北上山地)
353	石椀	SI25	南西埋土下層	2.50	1.70	0.4	頁岩
354	石椀	SI25	北西埋土下層	(1.75)	(1.65)	(0.39)	頁岩、As付着
355	石椀	SI25	南西埋土下層	(1.35)	1.5	0.25	頁岩(北上山地)
356	石椀	SI25	南西埋土下層	(1.10)	1.05	0.3	黒曜石
357	石椀	SI25	南西埋土下層	(1.05)	(1.60)	0.5	頁岩(北上山地)
358	石椀	SI25	南西埋土下層	(1.6)	1.4	0.2	頁岩(北上山地)
359	石椀	SI25	南西埋土下層	1.5	1.7	0.45	頁岩(北上山地)
360	石椀	SI25	南西埋土下層	1.60	1.55	0.35	頁岩(北上山地)
361	石椀	SI25	南西埋土下層	1.50	1.10	0.25	凝灰岩(奥羽山脈)
362	石椀	SI25	南中掘埋土上層	1.70	1.25	0.30	頁岩(北上山地)
363	石椀	SI25	南西埋土下層	1.65	1.15	0.2	頁岩(北上山地)
364	石椀	SI25	南中掘埋土下層	1.7	1.35	0.25	珪質頁岩(奥羽山脈)
365	石椀	SI25	南北ベルト(2)埋土下層	(1.4)	1.2	0.25	凝灰岩(奥羽山脈)
366	石椀	SI25	南西埋土下層	1.35	1.30	0.3	頁岩(北上山地)
367	石椀	SI25	南西埋土下層	2.05	1.5	0.45	頁岩
368	石椀	SI25	南西埋土下層	(1.50)	(1.30)	0.30	頁岩(北上山地)
369	石椀	SI25	南西埋土下層	1.65	1.15	0.30	頁岩(北上山地)

*寸法欄の()内の数値は残存数。

No.	器種	遺構名	位置・層位	寸法(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
370	石錐	SI25	南西埋土下層	(1.6)	1.4	0.9	頁岩(北上山地)
371	石錐	SI25	南西埋土下層	(1.35)	(1.3)	0.3	頁岩(北上山地)
372	石錐	SI25	南西埋土下層	1.25	1.05	0.35	凝灰岩(奥羽山脈)
373	石錐	SI25	南中埋土下層	2.0	(1.3)	0.35	頁岩(北上山地)
374	石錐	SK06	埋土	(1.40)	1.40	0.30	頁岩
375	石錐	SP52	塚土	1.95	1.55	0.45	頁岩(北上山地)
376	石錐	遺構外	調査区南西部旧表土層	(1.50)	1.10	0.50	頁岩
377	石錐	遺構外	調査区南西部古代遺構群検出面	1.70	1.30	0.35	頁岩(北上山地)、As付着
378	石錐	遺構外	山林部黒色土	2.15	1.60	0.40	頁岩(北上山地)
379	石錐	SI25	東西ベルト中埋土	1.45	1.15	0.3	頁岩(北上山地)
380	石錐?	SI25	南西埋土下層	(2.15)	1.25	0.55	頁岩(北上山地)
381	掻器	SI01	塚上下層	6.25	4.45	1.3	頁岩(北上山地)
382	掻器	SI02	北西埋土最上層	7.8	5.5	1.6	頁岩(北上山地)
383	掻器	SI04	南西埋土下層	(5.35)	2.60	1.20	頁岩(北上山地)
384	尖頭器	SI04	南西埋土上層	5.3	4.15	0.9	頁岩(北上山地)
385	掻器 (石匙?)	SI07	塚上層	(3.45)	5.0	1.5	頁岩(北上山地)
386	掻器	SI12	東側塚土上層	7.55	4.90	1.6	頁岩(北上山地)
387	掻器	SI16	東壁付近埋土下層	6.8	3.05	1.7	頁岩(北上山地)
388	掻器	SI16	南西塚土上層	(6.9)	4.15	1.6	頁岩(北上山地)
389	掻器	SI25	東西ベルト中埋土	(1.70)	1.80	0.60	頁岩
390	掻器	SI25	北西塚上下層	2.80	3.20	0.70	頁岩(北上山地)
391	掻器	SK	埋土	3.60	1.89	1.00	頁岩(北上山地)
392	掻器	遺構外	調査区北東隅黒色土層	7.35	4.45	1.85	頁岩(北上山地)
393	石錐	SI25	南西埋土下層	3.30	1.20	0.60	頁岩
394	石錐	SI07	南西埋土上層	(2.50)	1.30	0.50	頁岩
395	石錐	SI25	南西埋土上層	3.85	1.95	0.50	頁岩(北上山地)
396	磨製石斧	SI07	北東埋土	10.6	4.55	2.35	凝灰岩(奥羽山脈)
397	磨製石斧	SI25	北中埋土下層	11.1	5.00	2.40	砂岩(奥羽山脈)
398	磨石	SI01	塚土下層	12.7	9.20	5.25	花崗岩(北上山地)
399	磨石	SI01	塚土下層	6.40	5.10	2.80	砂岩(北上山地)

*寸法欄の()内の数値は残存値、「As」は、アスファルトの略。

No.400~425

No.	群種	遺構名	位置・層位	寸法(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
400	磨石	SI02	前庭部埋土	6.60	4.10	2.50	花崗岩(北上山地)
401	磨石	SI04	南西埋土上層	8.10	6.50	4.60	ダイサイト(北上山地)
402	磨石	SI04	P2埋土	9.20	6.05	3.25	安山岩(北上山地)
403	磨石	SI04	P11埋土	7.80	6.50	4.00	斑れい岩(北上山地)
404	磨石	SI07	北西埋土	(10.3)	9.55	6.40	花崗岩(北上山地)
405	磨石	SI07	北西埋土	11.2	9.50	5.75	花崗岩(北上山地)
406	磨石	SI15	南西埋土下層	7.20	3.90	5.10	花崗岩(北上山地)
407	磨石	SI23	埋土	6.50	4.40	2.15	花崗岩(北上山地)
408	磨石	遺構外	調査区南東現代盛土層	11.6	9.80	5.50	花崗岩(北上山地)
409	磨石	SI25	P6埋土	7.90	6.00	3.30	安山岩(北上山地)
410	磨石	SI16	西側埋土	11.0	8.40	5.00	花崗岩(北上山地)
411	磨石	遺構外	山林部黒色土	10.3	7.30	5.35	花崗岩(北上山地)
412	凹石	SI04	中央東側埋土上層	8.75	5.75	4.00	安山岩(奥羽山脈)
413	凹石	SI12	南西埋土上層	5.45	8.50	1.65	安山岩(奥羽山脈)
414	凹石	SI16	南東埋土下層	11.0	9.40	3.40	安山岩(奥羽山脈)
415	石皿/台石	SI05	南東埋土上層	9.20	6.40	2.10	安山岩(奥羽山脈)
416	磨石	SI04	南東上層	14.3	6.70	6.20	ダイサイト(北上山地)
417	石皿/台石	SI02	竪床面直上	26.7	24.0	4.50	花崗岩(北上山地)
418	石皿/台石	SI04	南東埋土上層	14.6	11.6	4.90	ダイサイト(北上山地)
419	石皿/台石	SI04	南東埋土上層	18.5	11.1	5.50	ダイサイト(北上山地)
420	石皿/台石	SI16	南東埋土下層	18.9	16.1	9.30	ダイサイト(北上山地)
421	石皿/台石	SI04	中央西側埋土上層	24.8	19.8	5.70	ダイサイト(北上山地)
422	石皿/台石	SI04	中央西側埋土上層	14.9	19.5	5.90	ダイサイト(北上山地)
423	石皿/台石	SI04	埋土最下層	13.2	16.6	5.50	砂岩(北上山地)
424	石皿/台石	遺構外	調査区北西隅表採	15.2	16.4	7.40	ダイサイト(北上山地)
425	石皿	SI07	南西埋土	22.8	16.2	7.30	砂岩(北上山地)

*寸法欄の()内の数値は残存値。

第3表 掘載遺物一覧（土製品）

No.427~442

No.	種別	遺構	地点・層位	寸法(cm)			特徴	備考
				長さ	幅	厚さ		
427	斧状土製品	SI05	南東堀土下層	(8.6)	3.35	1.6	正面孔	
428	斧状土製品	SI05	検出面	(2.4)	(2.3)	0.8		
429	斧状土製品	SI07	南側中央掘土下層	(6.0)	3.2	2.5		
430	斧状土製品	SI07	西端調査区際掘土下層	(7.1)	(3.5)	(1.7)		
431	斧状土製品	SI12	掘土下層	(13.8)	(5.0)	(1.9)	無孔? 焼成不良のため摩滅顯著	
432	斧状土製品	SI15	掘土最下層	(12.2)	(2.9)	(2.0)	上部孔周りには泥線による円弧文・側面孔	
433	斧状土製品	SI16	最上層	(10.9)	(3.3)	1.8	正面孔	
434	斧状土製品	SI19	埋土上層	(12.6)	(4.15)	(1.8)		
435	斧状土製品	遺構外	調査区北側中央表土層	(4.15)	(3.2)	(1.2)		片面剥落
436	斧状土製品	遺構外	調査区中央黒色土	7.1	3.0	1.75		
437	斧状土製品	遺構外	調査区北西検出面	(9.8)	(8.2)	(2.0)	側面孔	
438	斧状土製品	遺構外	調査区東端表上層	(6.1)	(3.7)	(1.5)		片面剥落
439	三角板土製品	SI05	埋土	4.2	(4.4)	0.8	刺突文、一部刺突文に貫通するもの有り	
440	三角板土製品 (土器片転用)	遺構外	調査区中央黒色土	4.5	5.0	0.6	深鉢口縁部付近の破片を転用、側縁部破断面外周すべて研磨	
441	鼓形土製品	SI07	北西掘土下層	1.6	1.1	0.7		
442	鼓形土製品	SI16	SI13 南西掘土上層	(2.8)	(1.2)	0.7	片側端部波状	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値。

第4表 掘載遺物一覧（石製品）

No.426・443

No.	種別	遺構	地点・層位	寸法(cm)			特徴	備考
				長さ	幅	厚さ		
426	石棒	SI04	南東掘土上層	22.0	9.2	-	砂岩（北上山地）	
443	石製耳飾り	SI01	南東掘土上層	1.4	1.7	1.6	有孔、霏灰質	

*寸法欄の数値は、()のものが残存値。

V 総 括

1 縄文時代の遺構

(1) 竪穴住居

今回の発掘調査では、縄文時代中期の竪穴住居を26棟検出した。竪穴住居は調査区の北側にまとまってみつかっており、この時期に営まれた集落の居住域であることが明らかとなった。竪穴住居は比較的整然と半環状に配置されており、いわゆる環状集落の南半部分であることが想定される。また、竪穴住居は切り合いが認められるものも存在することから、しばらくの期間営まれた結果が遺構に表れているものとみられ、環状の集落形態についてもその期間の集落変遷の最終結果であると考えられる。ただし、このしばらくの期間という時間幅を決めることは非常に困難であるが、この時間幅を決めることに近づくべく考古学的に竪穴住居の整理をおこないたい。

まず、検出した竪穴住居は平面形態からいくつかに分類が可能である。大まかな形態差による分類は、(長)方形基調の住居(以下、方形住居と呼称)、多角形基調の住居(以下、多角形住居と呼称)、円形基調の住居(円形住居と呼称)の3形態である。今回の調査では、長方形住居8棟、多角形住居7棟、円形住居5棟、残りは形態不明の住居である。

次に、これら3形態の竪穴住居の特徴をそれぞれ詳述する。

【方形住居】SI01・04・07・11・14・19・23・25

方形住居はいずれも環状の中心よりもっとも外側に位置している。環状集落の中央であると想定される調査区北側中程のエリアを指向する傾向にある。そのため遺構の平面配置から放射状になっている状況が認められる。この放射状のそれぞれ小エリアでは、同じ場所で2棟が切り合うか、建て替えるいは改築などの痕跡が認められる。これらのことから、結果として住居配置が環状となる意識が非常に強い一群であると考えられる。

これら方形住居の深さは浅いものが多い傾向である。これはもっとも外側に位置するため近現代の前平が著しいエリアに位置していることにも起因するが、SI07のように北西側では削平の度合いは小さく、他の残存しているエリアと同様、影響は考えられない。したがって、方形住居はもともと比較的浅い竪穴構造であったと考えられる。また、埴土は黒色土を主体としているため、遺構検出の際には比較的鮮明に検出可能であった。

方形住居の柱穴は基本的に欄柱として列状に配置されている。柱穴は太く深いものも多くしっかりとした構造の建物であったことが想定される。

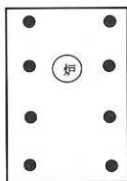
床面は基本的に平坦であるが、礫が露出している場所が多いためか滑らかな床面ではないことが多い。

床面には樹溝が巡るものが大半を占めるが、途切れた部分が存在し全周しないものが多い傾向である。

炉は床面に必ず存在しており、前庭部を持たない石囲炉と地床炉がセットとなる傾向である。石囲炉は住居の中央に位置せず、集落の中央寄りの床面に位置する。一方、地床炉は住居の中央付近の床面に形成されていることが多い。

【多角形住居】SI02・05・06・12・15・16・17

多角形住居はいずれも環状のもっとも内側に位置している。環状集落の中央に向けて軸方向が設定



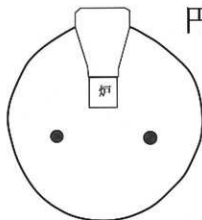
方形

軸角	深さ	柱穴	炉	周溝
集落中央を指向	浅め	規則的な列	石囲炉+地床炉	あり



多角形

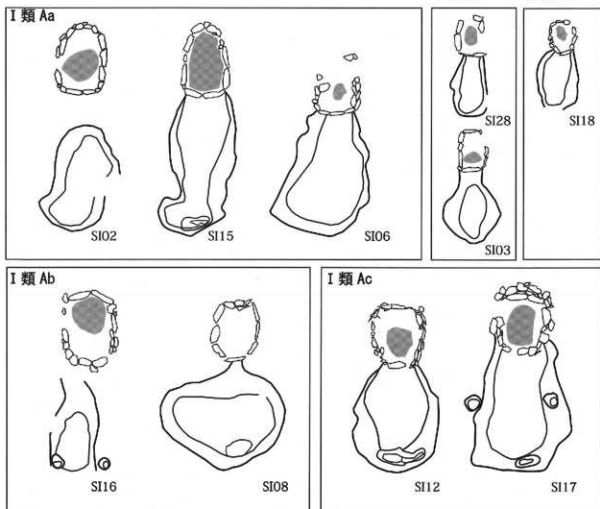
軸角	深さ	柱穴	炉	周溝
集落中央を指向	深め	各角に対応	石囲炉	あり



円形

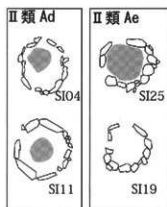
軸角	深さ	柱穴	炉	周溝
不規則	浅め	少数で不規則	石囲炉	なし

I 類 (石囲炉+前底部)



炉の分類

II 類 (石囲炉のみ)



構造	規模	石囲炉形態
I 類 石囲炉 + 前底部	A 大	a 卵形
		b 長方形
	B 小	c 逆台形
II 類 石囲炉のみ		d 多角形
		e 円形ほか

第101図 炉の分類

されている。方形住居ほどの強い意識は認められないが、おおむね中央に炉の前底部側が向くように構築されている。方形住居とは多重の環状配置の外側と内側の関係にあるためこれらとはほとんど切り合うことがない。しかし、調査区東側では密集度合いが高いこともあり、方形住居SI11と多角形住居SI16や方形住居SI19と多角形住居SI17のように切り合い関係もある。この関係はこの集落を考えるうえで重要な要素であると思われる。

多角形住居の深さはそれぞれであるが、この集落内ではもっとも深い一群である。地形的要因や削平の有無にもよるが、それを差し引いても深い堅穴構造であったと考えられる。また、埋土は方形住居と異なり、褐色系の土壌である。遺構検出の際には不鮮明で輪郭を掴むことが困難であった。埋土上位から中位にかけて遺物や焼土・炭化物が多く含まれ、埋土下位以下にはほとんどみられない傾向である。住居出土遺物の大半が廃絶後の埋没過程で遺棄されたものと考えられる。ただし、SI05などのように比較的完形に近い土器が多く含まれている例もあるため単なる遺棄ではない可能性も考えられる。住居の埋土下層は上層よりも明るく固く締まった層が堆積している住居が多い。

柱穴は、多角形の平面形態に則した形で配置されている。特に角部分に対応する箇所では、柱穴が太く深いものが多い。また、際柱穴も角部分でしばしばみられる。やはり、方形住居同様あるいは方形住居以上に重厚な建物構造である可能性が高い。

周溝はほぼ全周する傾向であり、断面では壁材の痕跡が認められる住居もある。この材の痕跡は埋土下層を切るようにして見えることがあることから材が残存した状態で住居が埋没していったことが想定される。平面でも埋土下層の上面付近で周溝の輪郭を確認することができる。

床面は非常に平滑で固く締まっている。礫や石などもほとんど存在しないため、方形住居の床面とはかなり異なっている。

炉はすべて前庭部を有する石囲炉である。いずれの前庭部も集落中央寄りに位置している。方形住居と異なり、地床炉はみられない傾向である。前庭部には礫や石がみられることが多いため、床面とは異なる石を用いた施設が存在する可能性が考えられる。しかし、今回の調査では原位置（使用状態）と断言できる状態でみつかった礫や石は確認できなかった。

【円形住居】 SI03・08・22・28ほか

円形住居は多重である環状の内側に位置しているが、軸方向や住居の向き、配置に至るまで不規則である。ただし、そのような状態にあっても環状外側に炉や前庭部の方向を向けている住居は存在しない。位置は多角形住居の隙間などに多くみられ、多角形住居と切り合う事例が多い。

住居は浅く方形住居に近いが、褐色系の土壌で埋まっている点では多角形住居により近い。また、平面形態は整った円形となるものは皆無で、比較的整なものが多く傾向である。また、住居そのものの平面規模が小さく、多角形住居の半分以下の規模も稀ではなさそうである。

柱穴配置は不規則で、明瞭な柱穴が存在しない住居もある。また、柱穴規模は径が小さく、細いものが主体である。これらのことから簡易な建物構造であった可能性が高い。このことは周溝がみられないことから想定される。

炉は前庭部を有する石囲炉である。住居の規模に応じるかのように規模が小さい。

以上のように、今回検出した堅穴住居はそれぞれの特徴を持ちながら、ある一定の規則性が各分類に存在することが明らかである。この住居の形態分類がどのような違いに基づくものかは現段階では不明であるが、時期的要因と機能的要因あるいは系譜などが絡み合っている可能性が考えられる。

次に、これらの埋土には少なからず差が認められる。円形住居および多角形住居の埋土色調は褐色が主体となり、方形住居の埋土色調は黒色が主体である。調査において、これらの差は大きな時期差

ではないと考えられ、あえて言及するならば時間差、例えば使用・廃棄された季節などが異なるため堆積状況に差が生じた可能性も考えられる。

これら竪穴住居各類の炉のありかたについて簡単に触れたが、竪穴住居を構成する大きな要素であるため炉について詳細に分類する。

今回検出した炉は、石囲炉と地床炉に大きく分けられる。住居内の炉の大半は石囲炉であり、地床炉は先に分類した方形住居のみにみられる。ここでは、住居群の主たる炉となっている石囲炉について形態分類をおこなう。

〔I類〕石囲炉+前庭部

燃焼部のある石囲炉と竪穴住居外寄りに位置する前庭部から構成される炉の形態である。このI類の炉は多角形住居と円形住居でみられる形態である。今回検出した石囲炉は石組の複式構造のものは存在せず、すべて単式構造のものである。これらを、石組の平面形態でさらに細分することが可能である。実際には炉の規模に大小がみられる。竪穴住居の規模の大小によって、炉の規模も反映されるようである。

〔I類A〕大規模

石囲炉の規模が大きいもののみをまとまりである。大半が多角形住居に設置されており、円形住居ではSI08のものが例外的にこの分類に該当する。

〔I類B〕小規模

石囲炉の規模が小さいもののみをまとまりである。大半が円形住居に設置されており、やはり住居の平面規模に左右されるようである。

これら分類したI類のものは大小問わず、石組の平面形態による分類が可能である。石組の平面形態は縦長の形態をとるものが主体となり、構成する石の形状や並べ方による石組の平面形態を意識している例が多い。これは、石を並べる際にある程度法則や規範が存在したことに違いなく、石囲炉を形態分類する上で重要な要素であると考えられる。

〔a形態〕卵形

この形態は、住居中央側の先端部が複数の石を用いて角を作り出している。特に、SI15のものは、2個の石を頂点で組み合わせるもので、その形態に意識が向けられている。両側辺は、この2個の石から連続するように石長辺を利用して並べられており、両側辺は平行にならず、前庭部側に向けややハの字に広がる。前庭部側の側辺は直線的に並べられ、全体の形態が卵形となっている。この形態のものは曲線が多く存在し、変化点が比較的多くなる。このことにより、小さな石を変化点に用い、緩やかな曲線を作り出しており、他の形態のものに比べると非常に丁寧で凝った作りである。

〔b形態〕長方形

この形態は、石組が長方形を呈する一群である。SI16のように六角形を意識したと想像できるものも存在するが、これらも実際には角が不明瞭であるため長方形に含めた。石長辺を利用して辺が形成されている。SI08は長側辺がやや外方に膨らむが基本的には長方形を意識していると思われる。また、前庭部側の短辺は石1個でまかなわれているSI08と複数個で構成されているSI16でやや構造が異なる。

〔c形態〕逆台形

この形態は長方形に近く、卵形を逆にしたような形態である。しかし、長方形のように短辺の長さが前庭部側において短い。また、構成される石は他のものに比べ1個が小さく、その分多数の石で組まれている。また、SI17のように石列が多重になる例も存在する。これは一見すると重厚な作りで

あるが、平面形態を作り出すということに関してはややルーズな感がある。これは、適当な形状とサイズの石を揃えて計画的に組むa形態などよりも工夫がみられず、あり合わせの不均質な石を用いて作られているという点でa形態の石組よりも意識が大きく異なっているものと考えられる。また、その他の石組が円礫を中心に使用されているのに比べ、これらは亜角礫や角礫が多くみられることも特徴である。

〔Ⅱ類〕石囲炉のみ

前庭部を持たず、石囲炉のみの炉をⅡ類とした。これらはすべて方形住居に設置された形態である。Ⅰ類Aよりも石組そのものの規模が小さく、大きさが均質である。また、平面形態は長辺と短辺の別が不明瞭であるものが大半を占め、六角形のものや門形のもの为主体である。したがって、Ⅰ類でおこなったような規模で分類することはできないが、平面形態では2形態に分けることができる。また、Ⅰ類に比べると石組はやや不整で、乱雑な組み方である。これは構成する石の不均質によるところが大きいようである。

〔d形態〕多角形

この形態は平面六角形のものである。正方形より意識的に2点の角を作り出すように石が並べられている。

〔e形態〕円形ほか

この形態は平面円形あるいはそれに近い形態のものを多角形とは分けて分類した。Ⅱ類はⅠ類のものよりもルーズな形態の石組であるが、そのなかでも特に不整な形態である。石組の一部が欠失しているものも多く、これは削平や撻乱のみならず構築方法そのものに問題がありそうである。

以上のように、竪穴住居とその内部施設である炉について主に形態的な特徴から分類をおこなった。竪穴住居の分類では大きく3形態のものが認められ、これらはほぼ同じ集団によって形成された居住域であることが想定される。これは、様々な属性が内包されていないながらも、基本的に3形態のものが住居の形態として集落の構成要素となっている点からも理解できる。特に、方形住居および多角形住居はそれぞれ占地が異なり、なおかつ住居の向きや規模などに共通性を見出すことができる。また、それぞれの形態の住居が定まった場所において切り合い、配置にある程度の決まりがあったものと推測される。よって、少なくともこれら2形態については一定の規範の中で営まれた住居群であると考えられる。その占地は、方形住居群が環状になった集落の外周、多角形住居群がそのやや内側の配置をとっている。集落内が平面的に多重構造となっており、それぞれ形態の異なる住居群がその限られた空間の中で展開する様相が看取される。このような事実を考えると、それぞれの形態の住居はそれぞれの形態の中で変遷し、その結果同じような場所で営まれていたものと考えられる。したがって、今回提示した住居の形態分類には、時間的な形態変化などが直接反映されていないと考えられる。むしろ、方形住居と多角形住居に関して言えば、それぞれの占地で共存しながら変遷を遂げたものとみることができる。そうであれば、このような住居形態の差は何に起因するのかを推察する必要がある。それを特定することは難しいが、調査所見から想定されるいくつかの仮説を提示する。

①季節による住み替えあるいは住み分けの結果

調査では多角形住居と方形住居では明らかに深さが異なることを確認した。これは未解明な上層構造の問題もあるが、方形住居の方が浅い竪穴であることから、半地下構造となっている竪穴住居に比べ簡素な住居である可能性がある。防寒対策を考慮すると多角形住居が冬期用の住居で、大半が地上に出ている方形住居が夏季用の住居なのかもしれない。両者で埋土の違いがみられる点に関して、黒色土の形成には地表面の植物の繁茂が影響すると言われており、同じ縄文中期の集落である盛岡市松

屋敷遺跡では、黒色土の形成が乏しいことから下草の管理がある程度おこなわれていたと想定されている。このような季節や下草管理によっても埋土に違いが出る可能性があるのかもしれない。

②男女の別など構成員の立場や役割の区別による居住形態の差

考古学的に証明が難しい問題であるが、可能性の一つとして掲げる。例えば、独身男性の住まいを別にする習俗は日本だけでなく世界でも多く存在するという話を聞く。いわゆる若衆屋のようなものである。方形住居の床面はあまり平滑ではなく、炉のあり方もルーズであると述べたが、石器の剥片が埋土中に多くみられるのも方形住居の特徴である。このようなことから若衆屋とまでいかなくとも石器製作などの作業場として方形住居が存在した可能性もある。ただし、炉の存在から日常の炊事等はおこなわれていた可能性は高い。

③出自や系譜の異なる集団の共存

これは、仮説としてはもっとも安易な発想である。しかし、これをクリアするにはかなりの根拠が必要である。形態の異なる住居間で出土する土器を比較しても異なるものがどちらにも含まれない。このことだけからみてもこの仮説は非常に無理がある。

以上のように、極めて限定された時間幅の中で異なる二つの住居形態が併存するには特別な理由があるものと思われる。今回はかなり大雑把な推論であるが、機能的な違いや使用主体者の違いが存在する可能性が考えられる。

住居形態の分類が時期を反映していないことが想定されたが、石囲炉についてはある程度の時期差が現れている可能性が考えられる。住居形態の分類とは異なり、同一形態の住居の中で細分可能であったため住居間の切り合い関係が存在するという考古学的事実に基づいて変化の方向性や変遷が想定できると考える。

炉の分類、I類(石囲炉+前庭部)を細分すると5形態に分類できた。多角形住居のうち、SI02とSI06は切り合い関係が認められる。これらは、SI06が新しく、SI02が古いという関係である。残念ながら両者は、いずれもI類Aa形態の石囲炉である。しかし、細部をみるとSI06の石列は欠失部があるものの側面に小さめの石が用いられ、さらに石が2重に組まれている。平面形態においては、同一であっても細部が異なることから手法の違いが看取される。SI06の手法は、よりI類Ac形態としたものに近い特徴である。次にSI05aとした多角形住居はSI05aやSI12に切られている。SI05aがもっとも古く、SI05b・SI12と順に新しくなる。これらのうちSI05bの炉は不明であるためSI05aとSI12bの炉をみると、より古いSI05aはI類Ab形態、これより新しいSI12はI類Ac形態である。このことから、よりシンプルな形態で小石を多用しないI類Ab形態と、これと正反対であるI類Ac形態の間には時間差が見出せる可能性があり、b形態よりもc形態が新出することが仮定される。この仮定から、a形態でもよりc形態に近い特徴を有するSI06はの炉は、a形態の中でも後出することが考えられ、SI02とSI06との新古関係とも整合性を持たせることができる。さらに、I類Aa形態の炉を有するSI15とI類Ac形態の炉を有するSI17との間には切り合い関係が存在し、前者が後者に切られている点で新古の関係は矛盾しない。I類Ab形態の代表例としてSI16の炉が挙げられる。この住居はこの遺跡最大の竪穴住居で、もっとも低い検出位置である。SI11の床面の下に埋土上層があり、さらに、SI28などにも一部切られているため東側のエリアではもっとも古い住居であると想定される。そのためSI05aの炉と同様、この集落において端緒となった形態の炉であったと想定できる。まとめると、多角形住居における炉の変遷として考えられるのは、b形態・a形態・c形態の順に推移するとみられる。同時に、円形住居に作られる小規模(I類B)の炉も連動する可能性が考えられる。

方形住居に作られるII類(石囲炉のみ)の炉については、d形態とe形態の2分類のみなので前後

を決めたいが、SI11が住居密集エリアにおいてももっとも新しい存在であるため、多角形の円形態であるd形態の方が新しい形態であると想定しておく。

(2) 土 墳 墓

調査区北側には土墳墓群が検出された。土墳墓群は合計26基の墓墳からなる。個々の墓墳については前章で述べた通りである。ここでは主に群構造について分析をおこなう。墓墳はすべて楕円形から小判形の平面形態を呈する。深さは1mを超えるものも存在し、埋土はすべて地山のブロック土や小礫が多く含まれる。このことから、すべて掘り込まれた直後に、人為的に埋め戻された状況である。また、この埋められた土は最下部まで充填されている。この墓域付近は遺構検出作業中もほとんど遺物が出土しないエリアであった。今回設定された調査区の中では、地山層まで大幅に削平されているエリアを除けばきわめて例外的な状況であった。そのため墓墳の存在に気付くのも遅れた経緯がある。このことは、少なくとも集落が営まれていた期間に、墓域という聖域として当時の人々も意識していたことが想像できる。

墓墳は調査区北側の一角にまとまって存在する。この墓墳が存在する墓域は半円形の範囲である。この墓域を画する半円は、もっとも外側に位置する墓墳群が放射状で、円弧を描くように配置されていることにより規定される。この外側に位置する墓墳の一群をA群とし、その内側に位置する比較的ランダムに配置されているものをB群とし、記述を進める。

A群は規模や形態がおおむね均質で、それぞれの墓墳が切り合うことなく比較的整然と配置されている。特に、西側に位置する墓墳群は特に整然と並んでいることが特徴である。堅穴住居との位置関係としては、多重の環状構造のもっとも内区にこの墓域が存在するが、堅穴住居とは近接する箇所もあるが切り合いは認められない。すなわち、墓域と居住域との使い分けは比較的明瞭であったものと考えられる。ただし、SI15やSI17などは墓域にかなり接しているため、切り合うことがなくても墓墳か住居のいずれかはあるいは双方かの意識が薄いことが想定される。両者の間には時期的なブランクを想定するのが適当であると思われる。これら土墳墓群は遺構として墓墳だけの簡素なものである。しかし、埋葬直後に埋め戻される遺構である以上、時間の経過によっては墓墳の位置などをその後の人々が認識できない可能性が高い。しかし、A群ではそれぞれの墓墳が整然と配置され、なおかつ切り合うことなく、地下に存在するということが、地上に墓標のような目印の存在を示唆している。特に、埋葬施設として存在する墓墳という遺構の性格上、ある一時期に多数作られるということは考えられない。そうなれば、世代を超えて墓墳が認識できる目印でなければ、今回のような遺構配置にはなり得ない。そこで、考えられるのが墓石のようなものであるが、確かに石柱や立石は朽ち果てることなく維持できる。しかし、この場合においては、放射状をとるための向きを規定するものでなければならぬ。また、立った状態を維持するためには堀方なども想定されるが、今回の調査では確認できなかった。そこで想定されるのが、墓墳の地上施設としてマウンドの存在である。先述した通り、墓墳の平面形態は楕円形など長軸を有する形態であり、配置を予め決められた向きに揃えるためには軸方向が明らかである必要がある。そのためには、墓墳直上に墓墳の形状に合ったマウンドが設けられれば、放射状の群構造を結果として残すことが可能であると思われる。さらに、マウンドに堀方を有する墓標が設置されてもマウンドが残存しない以上、発掘調査では遺構として認識できないであろう。改めてA群の配置に目をやると、位置についてはかなり厳密に整然とした配置であるが、軸方向という意味では細部においてそれぞれやや不整な部分もみられる。これが、軸方向を決めるであろう地上にある施設の不完全さを物語っているのかもしれない。

一方、規模や方向などにそれほど厳密な規則性が認められないB群と規則的なA群との関係は不明である。しかし、両者は墓塚という性格上の一致や占地など巨視的にみればある程度の規範の中で作られたものと考えられる。今回の調査では出土遺物がほとんどみられなかったため特定することは困難であるが、両者の間には時期的な差があるのかもしれない。

土壇墓群の最後に遺物について若干触れると、SK22の墓塚底面から供献されたと思われる土器が1点出土した。土器は口縁部を上にして出土した。口縁部の一部は欠損していたがほぼ完形の土器である。括れのある花瓶形を呈する小形の深鉢である。住居群から出土する土器群ともあまり時期差がないため、土壇墓群と住居群とは時期的に同じであると考えられる。出土位置は墓塚の南側の壁近くである。墓塚の向きから考えて南に位置する厩住城側に納められていたことになる。通常の観念から推察するに、この方向に埋葬頭位が向けられていたのかもしれない。当時の習俗を推測するうえで重要な事例である。

(3) 掘立柱建物群

調査区北側中央に位置する墓塚よりも西寄りの一角では、柱穴と思われる遺構が多数検出された。その検出数に見合うだけの掘立柱建物を想定することはできなかったが、4棟の建物がより蓋然性が高いと考え、その案を前章にて報告した。これら柱穴は検出による遺漏はないものと考えますが、結果として建物を想定するにあたって径が大きく深い柱穴を多数残した。想定した掘立柱建物はすべて方形を基調とする。6個の柱穴からなるSB01以外はすべて4個の柱穴からなる1間×1間の建物である。これら掘立柱建物の軸方向や規模には規則性がみられない。唯一存在すると考えられる規範はその占地である。建物を想定できなかった柱穴も含めこのエリアにしか存在しない。柱穴規模は大小様々であるが、大きいものは堅穴住居の柱穴よりもはるかに大きい。このことから、大規模な柱穴によって構成される建物は、頑強な上屋構造の建物であった可能性が考えられる。縄文時代の掘立柱建物の性格については諸説様々ある。列挙すると、住居・倉庫・祭祀施設・葬送関係施設などである。これに言及できるほどの情報を得た訳ではないが、今回の占地には特徴がみられる。今回検出した掘立柱建物や柱穴群は墓塚一部に及んでいるが、墓塚東側までは及んでいない。堅穴住居群とは一部で切り合いが認められる。SB01はSI06と切り合い関係があり、SI06がSB01を切っていると判断された。このSB01はSB02と重複しており、SB02によって切られている。このSB02はSB03と重複こそしないが、かなり近接する。SB01はSI08と重複するが新古関係は不明である。このように堅穴住居や掘立柱建物同士が重複し、あるいは近接していることを考えると、これら建物が一時期に同時併存しているとは考えられない。また、このことは規模や軸方向が無秩序であることから想像できる。この集落では居住域が確立され、ある程度の規範を作った住居の展開がある中でこれら掘立柱建物はきわめて異質な存在である。特に目に見えない多重の同心円があり環状構造であるため東西においてはシンメトリーであるはずが、この掘立柱建物のみ構造がやや外れている。このようなことから、居住に与する施設ではないものと考えられる。では、何らかの貯蔵施設なのであろうか。どのようなものを貯蔵するかで建物構造等が決まると考えられるが、食料程度の貯蔵で堅穴住居の柱穴を凌駕する規模の柱穴を持つ建物の必要性には大いに疑問がある。では、祭祀や宗教施設ということになるのかもしれないが、調査から積極的にこれを指示する根拠も見あたらない。

また、方形以外の掘立柱建物が存在するのであれば、柱穴群から建物プランを想定することはきわめて難しいということも付け加えておく。

2 縄文時代の遺物

(1) 土器

出土した縄文土器（中期）については前章で分類をおこない、表に示している。ここでは、堅穴住居出土の土器にみられる時間的前後関係を考える。今回の調査で堅穴住居から出土した土器は大半が縄文時代中期の大木8b式期末～大木9a式期のものである。出土土器は深鉢や浅鉢が主たる器種である。一部特殊な器種として器台も出土している。

深鉢ではAとしたものが括れを持つ花瓶のような形態のものである。これらは、手のひらに収まるような小形のものから中形のものまで認められる。Bとした深鉢形のは括れを持たない器形である。これの中には口縁部が著しく内彎するものも存在する。Cとしたものは、頸が短く体部が横に張った壺形のものである。Dとしたものはキャリパー形の形態で、口縁部などに立体的な加飾がされるものである。以上が深鉢の器形である。これら器形の中で大半がAとBである。また、これらは割合が多だけに多種多様である。大きさは小形から中形まであり、文様も地文のみのものから隆帯などがみられるものまで様々である。

浅鉢ではEとしたものとFとしたものが該当する。Eは深鉢Dと密接な関係にある浅鉢である。一方、Fは深鉢Bと密接な関係にある浅鉢である。これらの関係性は文様構成にほかならない。例えば、深鉢Dと浅鉢Eは口縁部の文様帯に共通性を見出すことが可能であり、器形に関しても器高と径を変えればそれぞれの器形に移行可能である。つまり、器種としては異なるが、同一系譜に位置するとみられる。

この遺跡で出土する土器の特徴の一つに地文のみの製品が多いことが挙げられる。地文のみの土器は日常の粗製器種であるとみられる。浅鉢Eではその多くが地文のみの小形品である。このような器種が粗製器種であると位置付けた場合、深鉢Aの小形品の中に地文のみの土器も日常的な粗製土器なのであろうか。大いに疑問がある。

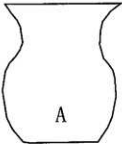
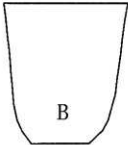
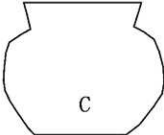
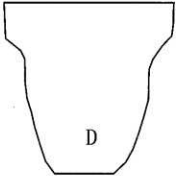
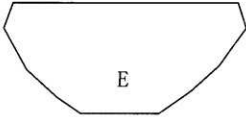
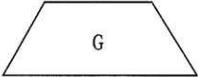
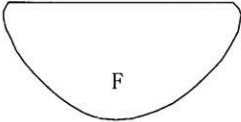
これら土器の中から大木9式に特徴付けられる磨消縄文がみられる土器を抽出するとSI04・SI05・SI25などでみられる。いずれも埋土中の資料である。これらの前段階の特徴をもつものが多いことから土器からみた集落の年代観は大木8b新段階から大木9a式の狭間の時期である可能性が高い。すなわち、兩型式の特徴をそれぞれ備え持つ土器が多いようである。

遺構の時期は床面直上より出土する土器がほとんどないことから土器によって住居の変遷を考えることが難しい。また、出土した土器に大きな時期差は見出せない。

(2) 石器・石製品

石器は剥片石器、礫石器とともに出土数は少ない。しかし、剥片石器の大半がSI25の埋土中出土である。このSI25では多量の剥片類が出土した。埋没しきっていない堅穴住居の門みに廃棄されたものと考えられる。これら剥片は大半が地元北上山地の頁岩である。また、頁岩以外にも黒曜石などが客体的に出土している。SI25が剥片類の廃棄場所に選ばれた理由として位置的にもっとも東側に位置し、東側は沢によって連続する平坦地が途切れる場所であったためであると考えられる。すなわち、このSI25の位置する地点は、いつかの段階で集落のはずれであった可能性が考えられる。

磨製石斧は2点出土している。いずれも刃部が欠損している。いずれも小形のものである。このように石製の利器は集落規模に比して少ない傾向である。特に礫石器は定形のものがあまり出土しな

	<p>文様構成</p> <p>a 無文 b 地文のみ c 地文+隆帯・沈線 d 磨り消し</p>	<p>口縁部単位</p> <p>0 水平 2 2単位 3 3単位 4 4単位</p>
	<p>文様構成</p> <p>a 無文 b 地文のみ c 地文+隆帯・沈線 d 磨り消し</p>	<p>口縁部単位</p> <p>0 水平 2 2単位 3 3単位 4 4単位</p>
	<p>文様構成</p> <p>a 無文 b 地文のみ c 地文+隆帯・沈線 d 磨り消し</p>	
		
		

第102図 土器分類

かった。集落の性格に関係あるのかもしれないが、判断材料乏しく不明である。

通常の利器としての石器以外では石棒が出土している。祭祀的な用途が想定されるため石棒を使用する祭祀がこの集落内でもおこなわれていたことが想像できる。

(3) 土製品

土製品は斧状土製品が多く出土した。縄文時代中期を代表する土製品である。祭祀に用いられた器物であるとみられるが、その出土状況や出土傾向にその用途を特徴付けるような状況はみられない。今回の調査では12点出土した。いずれも地文がみられ、中には沈線が認められるものもある。基部には穿孔が施され、横方向から開けられる場合と縦方向から開けられる場合がある。

斧状土製品以外では、三角板土製品が2点出土している。1点は土器片の転用で、もう1点は専用で作られたものである。これらも祭祀具と考えられるが、どのような使用方法であったかは不明である。この遺跡と同じ時期の集落がみつまっている盛岡市上米内遺跡でも同様の土製品が出土している。

3 縄文時代の集落

これまで遺構および遺物について述べたが、今回調査した縄文時代中期の集落についてその変遷と構造の分析をおこなう。

(1) 住居の変遷

先に述べた通り、この集落では同一の形態をとる住居同士が同一地点で比較的近接、あるいは切り合いながら変遷することが想定された。特に明瞭なのは方形住居と多角形住居である。

方形住居の大半は外周縁に放射状に位置しており、それぞれ、同一地点で2棟の切り合いあるいは、改築が認められる。もっとも南に位置する方形住居は、切り合いからSI23が古く、SI04がより新しいという関係である。その西側に位置する方形住居は、切り合いからSI14が古く、SI01が新しい。その北にはSI07が位置しているが、調査では1棟として数えたが、調査区外へ続くと思われる2基目の石囲炉の存在から改築あるいは切り合いがあるものと想定される。今後調査される際には注意したい場所である。反対である東側に目を向けるとSI25が位置する。これも改築の可能性が高いが、2基の石囲炉がそれぞれ少し場所をずらして切り合っている。以上のように現状の外周縁に位置する方形住居はいずれも長方形を基調とし、きれいな放射状である。これら配置の整合性を考えると、ある一定の時期幅の中で2回の動きが認められる。さらに、その動きはSI23→SI04とSI14→SI01となっており、やや内側へ移動する形が窺われている。そのスライド幅の大きかったのはもっとも南のSI23→SI04である。すべてが同時に動いたかどうかは不明であるが、このようにやや内へスライドするタイミングがあることが判明した。しかし、ここで問題となるのは、さらに内側には2棟の方形住居が存在する。SI11とSI19である。SI11は特に堅穴住居が密集するエリアに位置しているが、これらの中でもっとも新しいと判断される住居である。やや軸方向が異なるが、放射状の位置から考えてSI25後継の方形住居であるとみられる。すなわち、SI25→SI11という大きく内へ動く様子が想定される。SI19は、残存度があり良くないため不明瞭であるが、方形住居である。放射状の位置から考えると、SI23とSI25の中間に位置する。これよりも外周側では堅穴住居がみられないが、この遺跡の中でもっとも大きく削平されている地点であるため、本来はこのSI23とSI25の間にある空白域を埋めている方形住居が存在した可能性も大いに考えられる。したがって、この未見のものからSI19へスライ

下した可能性がある。方形住居の変遷を以上のように考えると、当初整然とした放射状に配置されていたものが、内側へ移動するものと考えられる。しかし、その動き幅は集落東側と西側では異なり、西側の小さな動きに比べ東側では大きく内側へ移動したことになりそうである。

多角形住居もやはり同じような地点で切り合いが認められる。この集落でもっとも古い住居であると考えられるSI16は集落東側に存在する。この住居も他の住居と同様、出土遺物の大半が埋土上層より出土したが、わずかながら、大木8b式期新段階よりもやや古く位置付けられそうな浅鉢片が埋土下層より出土している。おそらく他の住居ではみられない形態のものであるためやはりこの住居が集落の端緒となっていると考えられる。さらに、このSI16はSI25とわずかに数10cmほどで近接しており、切り合いが認められないまでも同時併存したとは考えられない。次に注目されるのは、先に述べた切り合いと炉の形態との関係からみることができる住居群である。集落西側にあるSI02→SI06と東側にあるSI05→SI12の関係である。これらは、集落を俯瞰すると東西においてシメトリーな関係となっていることが重要である。さらに、付け加えるならば、SI05とSI02の間では土器の遺構間接合が認められた。このことから、SI02とSI05とは埋まりかけた状態を同時に迎えていると考えられるのである。集落の東西で同形態の住居がそれぞれ廃絶した後、新規の同形態住居が成立するのである。一方、両者の間に位置するSI15→SI17は軸方向や位置的に東西の群よりも内側へ寄り気味であることからやや時間を経た後に作られた可能性も考えられる。ただし、方形住居のSI19との時間差を必要とする。

円形住居については切り合いが判明するものは他の住居との新古がわかるが、単独で存在するとあまりに規則性がないため不明とせざるを得ない。その中で唯一他の形態の住居と動きが一致しそうなのはSI03である。これも2基の炉があり、集落中央側に位置する炉が新しく、近在するSI23→SI04、SI14→SI01など方形住居の動きや多角形住居のSI02→SI06の動きに近い。このことから多重構造を維持しながらやや内側へスライドする住居の変遷が考えられる。

(2) 集落の構造

この集落の特質は環状にある。また、その環状は多重構造となっている点で重要な事例である。もっとも整然とした形に同時性を求められるかはわからないが、少なくとも多重構造の内容としては、もっとも区内に墓城が存在する。墓城を集落中央に置く集落として紫波町西田遺跡が著名である。また、多重構造をとる点でも共通性を見出すことができる。時代的にも同じく縄文時代中期である。ただし、西田遺跡の集落では掘立柱建物も顕著であったが、この新田II遺跡の集落は掘立柱建物よりも竪穴住居の方が顕著である。墓城を囲む居住域は円・多角形住居が配置され、さらに外側には放射状に方形住居が整然と作られている。

住居の変遷の基本的な流れは外から内へとなっているが、ある時期からあるいは当初から西側と東側では様子が異なる部分もあった可能性が考えられる。これについては、墓城なども関係する事象であると考えられる。縄文時代集落の環状構造が左右対称あるいは正円である必要性はないが、ここではその点について考える。

この集落においてもっとも秩序正しく配されているのは外周縁の方形住居である。長方形という形態的特徴から放射状配置に適していることも助けとなっている可能性はあるが、ある程度この集落において一定の規範を印象づける住居群と言える。しかし、先述の変遷では東側が大きく内へスライドすることを想定した。これによって集落の半径はもちろんのこと集落の中央が大きくずれること示している。集落中央に墓城が存在するが、住居群の変遷との対応は不明である。しかし、放射状に並ぶ

墓域群Aは外周縁に位置する最初の方形住居群と構造的によく似ている。両者はそれぞれ密接な関係にある可能性が考えられる。しかし、東側にある方形住居が極端に内側へ寄ると、当然集落中央は西側へ移り、墓域から外れる。また、SI15やSI17などは墓域に接して作られていることから墓域への意識が薄れた結果とみることができる。少なくとも、もっとも外周縁に位置する方形住居はSI15・SI17などより古いとみるべきであることから矛盾しない。多重の環状が墓域を中央に置いていたが、中央は掘立柱建物の柱のエリアになってしまうのである。ただし、掘立柱建物の時期が特定できないため本当にそのような精神性的変化があったのかどうかはわからないが、墓域への意識は薄らいだのではないだろうか。

多角形住居は東西で運動している時期があることは述べたが、この運動が確かであれば、少なくとも多角形住居同士の運動もあったものとみられる。

集落全体としてみた場合、東側は沢が流れており、この方向への集落の広がりは今回の調査範囲までであるとみられる。一方西側は、想像の城を出ないが集落の入り口あるいは集落へと続く道が存在した可能性が考えられる。さらに、調査では縄文時代中期の貯蔵穴などがみられないため周辺に存在する可能性が考えられる。

4 古代の遺構と遺物

今回の調査区南側の一角に古代の遺構が比較的まとまって検出された。遺構は土坑と焼土遺構から成りそれぞれ9世紀の土師器や須恵器を伴っている。焼土遺構は、1km西に位置する向II遺跡でも検出されている。やはり土師器をともなっているが、いずれの焼土遺構もその性格については現段階では不明である。

内面黒色処理された土師器坏は、共通する胎土や製作技法であることからほぼ同時期の同一製作地が想定できる。今回の調査区は居住域ではないが、周辺に集落等の居住域が存在することを示唆するものである。

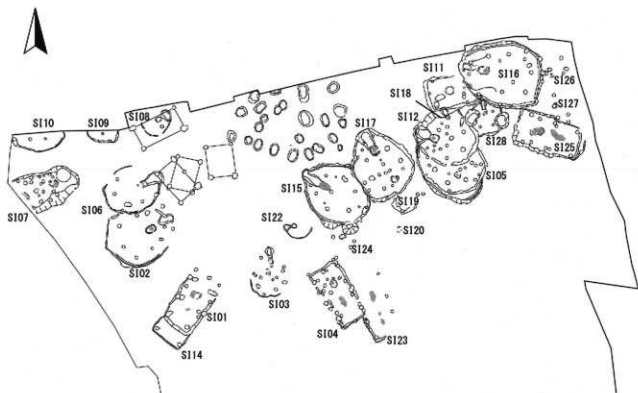
坏類はいずれもロクロが用いられており、底径はそれほど小さくなく、しっかりした作りであることから9世紀代の所産であると考えられる。特に土師器には底部付近に五月雨的な再調整が入り、ミガキも丁寧である。これら総合的に判断して9世紀第3四半期くらいに位置付けられる。また、墨痕がみられるものもあるが文字かどうか判別できなかった。当該期にこの地域では、資料数が少ないため重要である。

5 まとめ

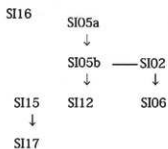
今回調査した新田II遺跡は、縄文時代中期中葉～後葉（大木8b～9a式期）を中心とする環状集落の一部であることが判明した。

なお、今回調査をおこなった北側でも遠野市教育委員会の試掘調査によって同じ時期の竪穴住居や遺物が認められているようである。このことから今回の調査では同一の段丘面が連続している北側調査区外においても半環状の集落が存在している可能性が考えられる。よって、今回の調査では環状集落の南側半分について調査を行ったものと想像される。なお、半分ということに関しては調査区北端が墓域のみられない空白域と思われる箇所があることからおよそ半分であろうと推測した。ただし、この環状が平面的に不整でないことを前提としての推定である。

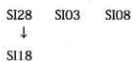
さらに、この集落はその遺構配置から環状の平面形態を呈していることが推測される。これは遺構



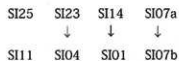
多角形住居



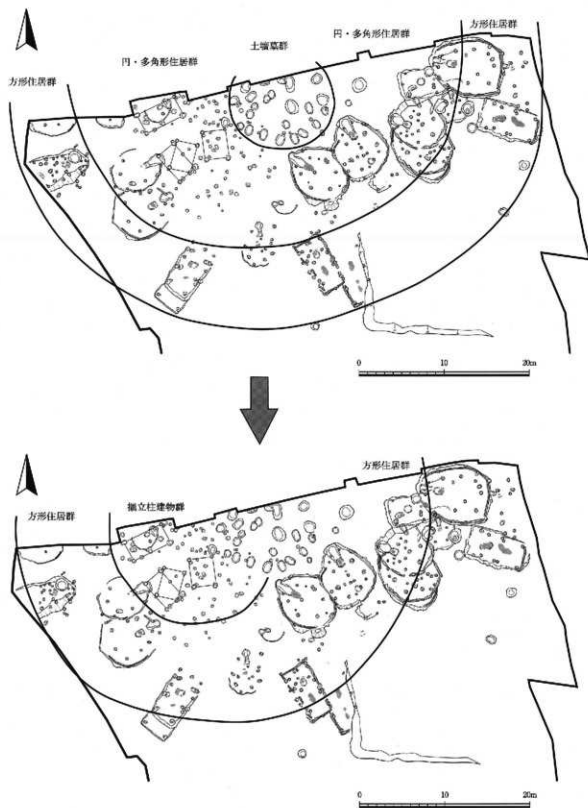
円形住居



方形住居



第103図 集落の変遷



第104図 集落の構造

の分析により性格の異なる遺構がそれぞれ規則的に配され、それぞれ性格の異なる空間である「場」が設けられていたものとみられる。この環状は多重構造となっており、内側に墓域、外側に2重の居住域が設けられている。遺構配置は集落の営みの重なった最終的な結果であるため同時期の様相がどれだけ復元できるか挑戦したが、なかなかうまくまとめることができなかった。しかし、このような構造を持つ集落は決して一般的な姿ではなく、基層となっている社会構造が堅固である大規模集落の証でもある。これは、他地域と交流を持ちながら、集落のルールによって安定維持されたものと想像できる。このようなことから県内有数の縄文時代中期の集落であると言える。

このような環状集落は、紫波町西川遺跡や遠野市張山遺跡があるが、これらは比較的長期間存続する拠点集落であるとみられているが、新田Ⅱ遺跡はこれらに比べかなり短期間の集落である。しかし、短期間の存続であっても遺物の質や量、集落の構成要素等を考えれば、この中期中葉～後葉におけるこの地域の拠点集落であると言える。今回調査によって明らかになった事象は、今後とも様々な形で検討しなければならないと考えられる。不十分な点が多いため今後何らかの形で補いたい。

引用・参考文献

- 中村良幸 1982 「複式炉について」『考古風土記』第7号
 村上 拓ほか 2008 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書545集 『松屋敷遺跡第2次発掘調査報告書』
 宮本長二郎 1998 「縄文時代建築の種類と構造」『季刊 考古学』第64号
 遠野市教育委員会 2002 遠野市埋蔵文化財調査報告書13集『新田Ⅱ遺跡』
 小林達雄編 2008 『総覧 縄文土器』
 鈴木克彦 2009 「東北地方の縄文集落の社会組織と村落」『集落の変遷と地域性』雄山閣
 高田和徳 2005 『縄文のイエとムラの風景 御所野遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ015

写 真 图 版



遺跡遠景（南から）



遺跡全景（真上）

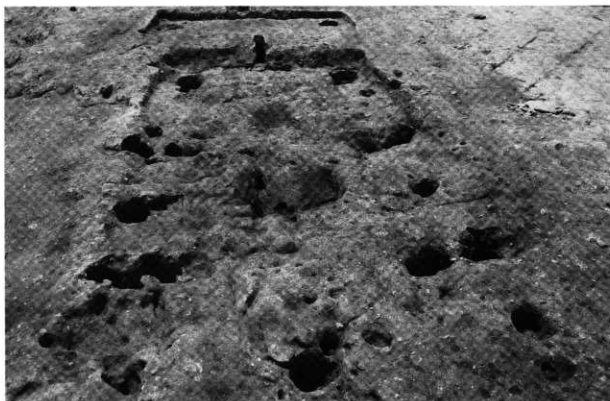


調査前全景



基本層序

写真図版2 調査前現況・基本層序



S101住居完掘



断面(西—東)



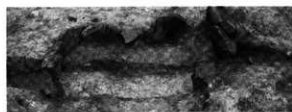
断面(北—南)1



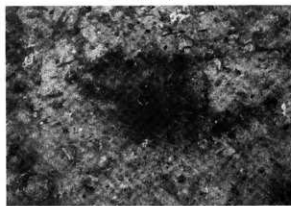
石囲炉



断面(北—南)2



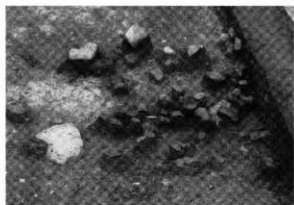
石囲炉断面(北—南)



地床炉



S I 02住居実掘



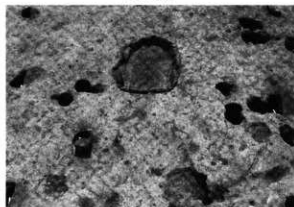
出土状況



断面(西-東)



断面(北-南)



石囲炉



石囲炉断面(西-東)

写真図版4 S I 02



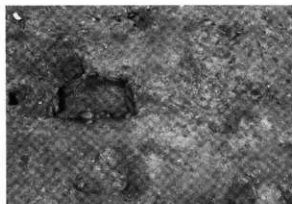
S I 03住居完掘



断面 (西—東)



断面 (北—南)



石囲炉 1 (南—北)



石囲炉 2 (南—北)



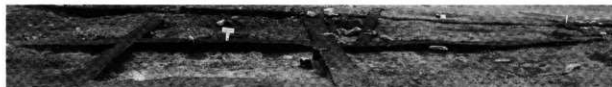
石囲炉 1 断面 (南—北)



石囲炉 1 断面 (東—西)



S 104住居完掘



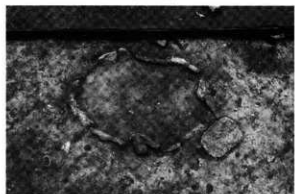
断面(北-南)



断面(西-東) 1



断面(西-東) 2



石囲炉



地床炉



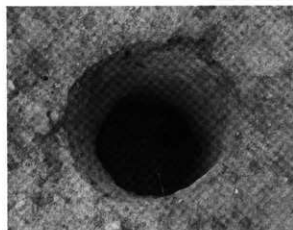
S105住居検出状況



出土状況



P5柱穴平面



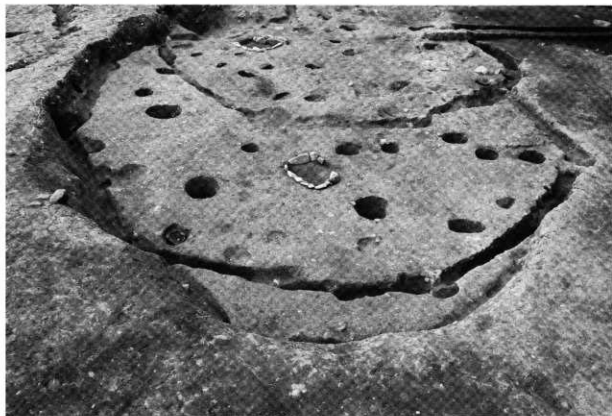
P10柱穴平面



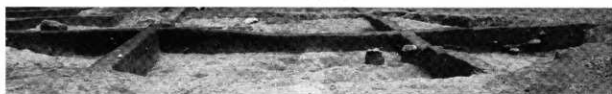
P5柱穴断面



P10柱穴断面



S 105住居完掘



断面 (北-南)



断面 (西-東)



石窑炉平面



石窑炉断面



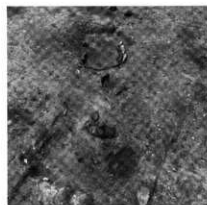
S106住居実掘



断面(西-東)



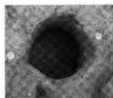
断面(北-南)



石圈炉平面



石圈炉埋土



柱穴平面



S 107住居検出



断面 (西—東)



断面 (南—北)



石田炉 1 平面



石田炉 1 断面



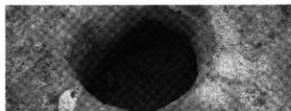
S107住居完掘



S107住居完掘(南から)



石囲炉2平面



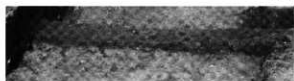
柱穴1



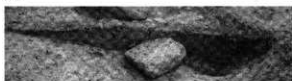
S 108住居完掘



断面 (西—東)



断面 (北—南)



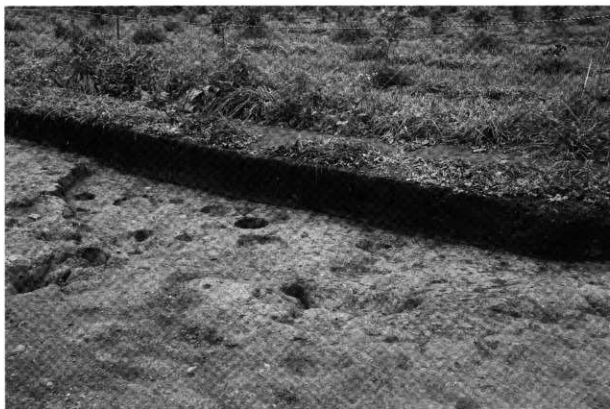
炉前底部 埋土 (西—東)



石器炉平面



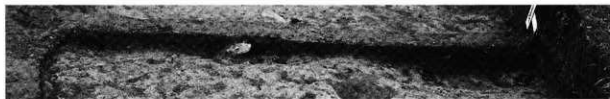
炉検出状況



S109住居完掘



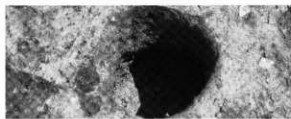
断面(西—東)



断面(南—北)



S109 住居棟出状況



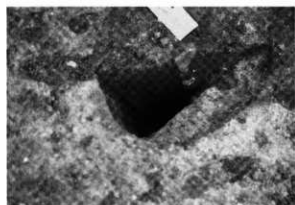
P1柱穴



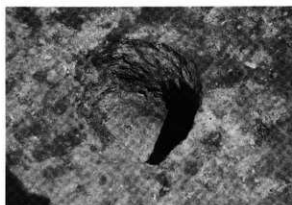
S 110住居完概



断面 (南—北)



P 1 柱穴断面



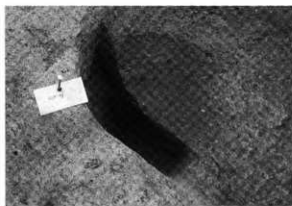
P 1 柱穴平面



S111住居検出状況



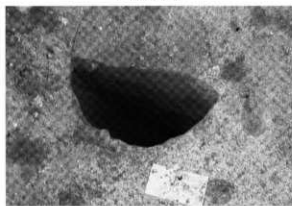
K1住居内土坑断面



P1柱穴断面



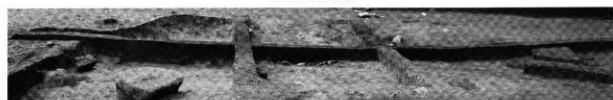
K2住居内土坑断面



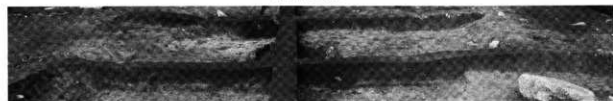
P3柱穴断面



S111住居完掘



断面(西-東)



断面(北-南)



石囲炉断面



石囲炉平面

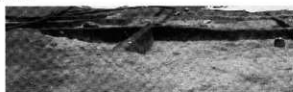
写真図版16 S111-2



S 112住居実掘



断面 (西—東)



断面 (北—南)



前庭部埋土



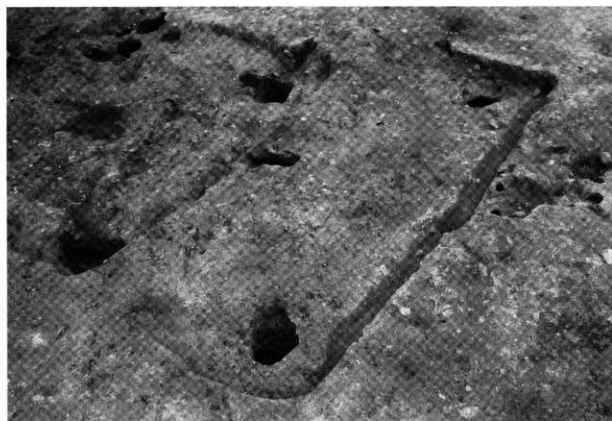
石囲炉平面



石囲炉断面



S 114住居完掘 (南から)



S 114住居完掘 (北から)



S 115住居完掘 (北西から)



断面 (西—東)



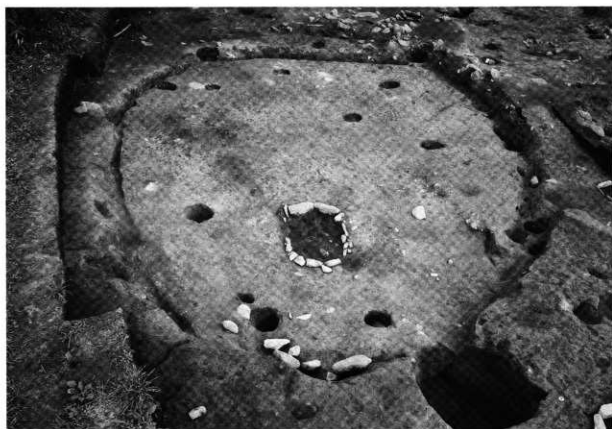
断面 (北—南)



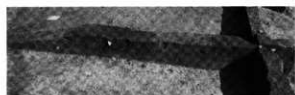
柱穴検出面



完掘 (南東から)



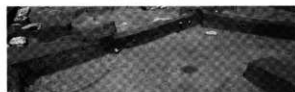
S 116住居完撰



断面（東—西）



断面（南—北）



断面（南—北）の南



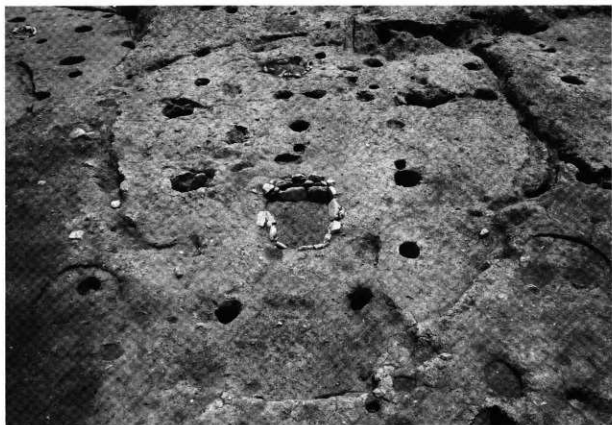
断面（北—南）



前庭部断面



石囲炉平面



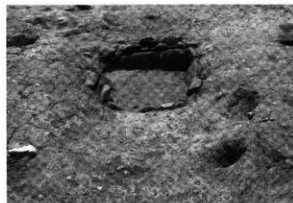
S 117住居実掘



断面(西-東)



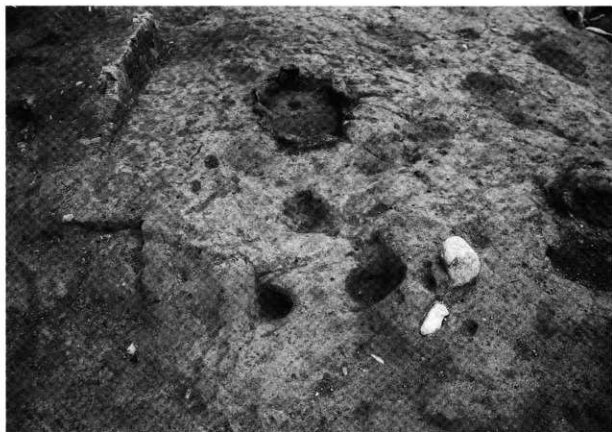
断面(北-南)



S 117石囲炉



S 117石囲炉断面



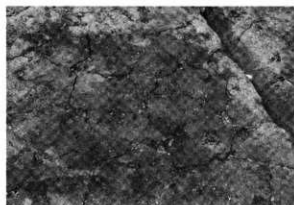
S 118住居完掘



S 118石囲炉



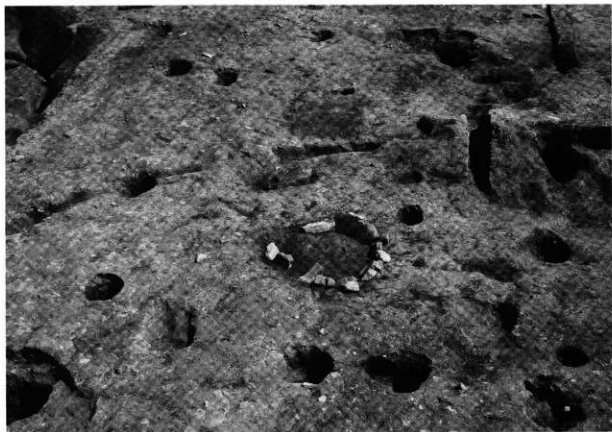
S 119石囲炉



S 119地床炉



S 119断面 (北—南)



S 119 住居実観



S 119 石囲炉断面



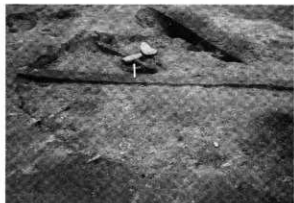
S 120 石囲炉



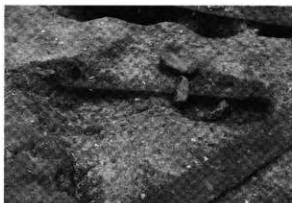
S 120 断面 (西—東)



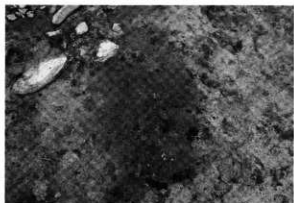
S 120 断面 (北—南)



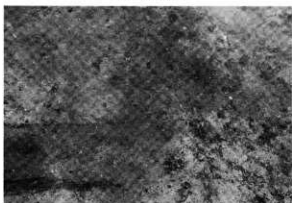
S I 22断面 (西—東)



S I 22炉断面



S I 23F 1 地床炉



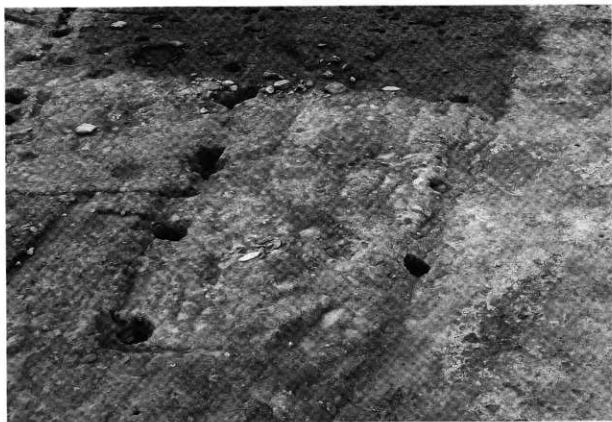
S I 23F 2 地床炉



S I 23断面 (北—南)



S I 23断面 (西—東)



S | 23住居完掘 (南から)



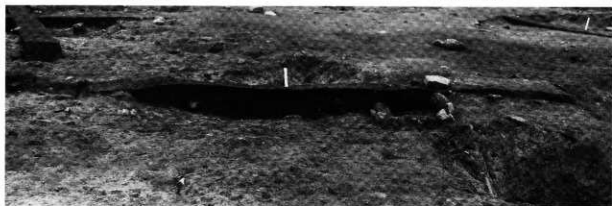
S | 23住居完掘 (北から)



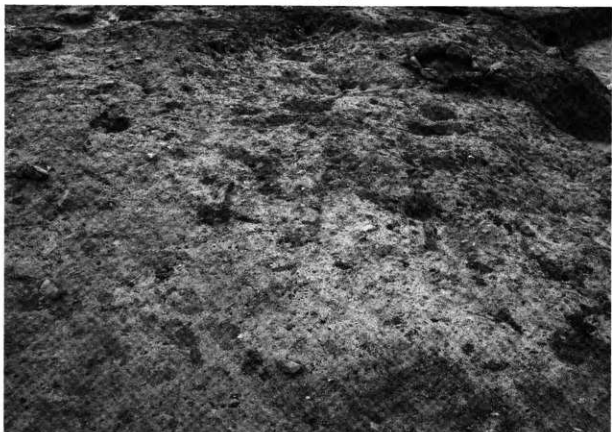
S I 23 F 3 地床炉



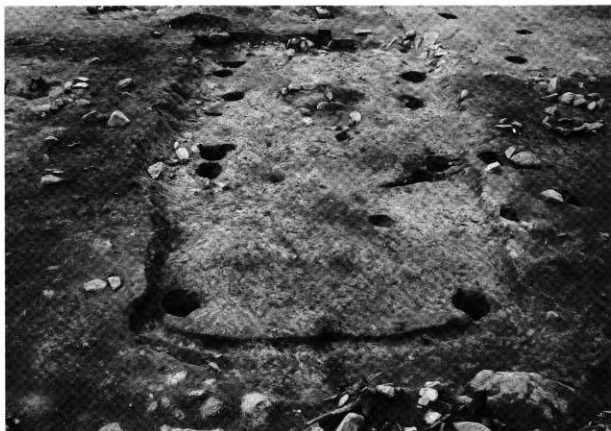
S I 24 石圍炉



S I 24 断面 (北—南)



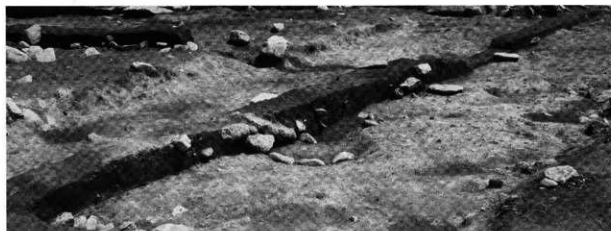
S I 24 住居平面



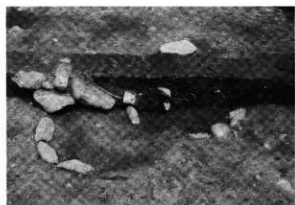
S I 25住居完掘



断面（北—南）



断面（西—東）



S125F1F2 石圈炉 埋土



S125F1F2 石圈炉 完掘



S125F1F2 石圈炉 断面



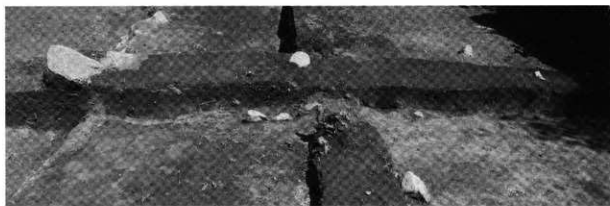
S125F3 地床炉 埋土



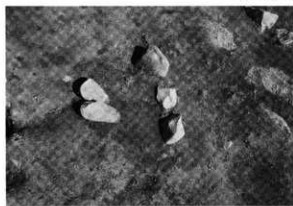
S125 断面 (西-東)



S 126住居 完攝



S 126 住居断面 (西-東)



S 126炉完攝



S 126断面 (北-南)



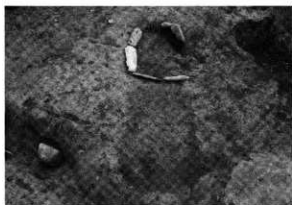
S 127石圈炉完攝



S 127断面 (北—南)



S 128炉断面 (南—北)



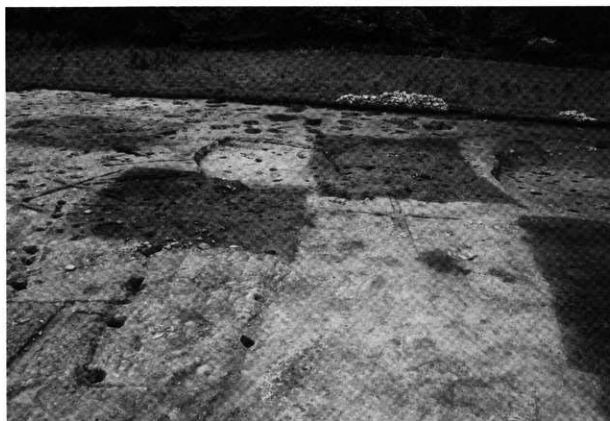
S 128炉横出 (東—西)



S 128炉完攝 (東—西)



住居群 (西)



住居群 (北)



住居群（北）



住居群（東）



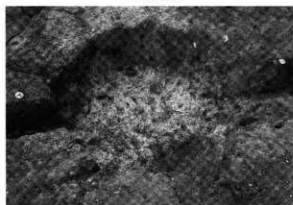
S K01断面



S K01完掘



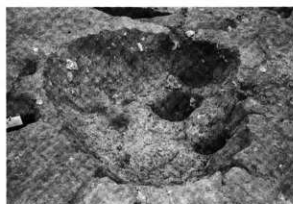
S K02断面



S K02完掘



S K03断面



S K03完掘



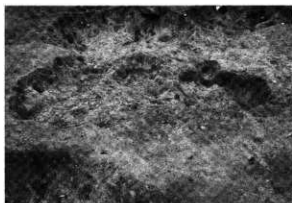
S K04断面



S K04・08完掘



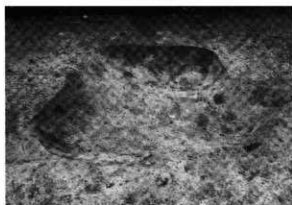
S K05断面



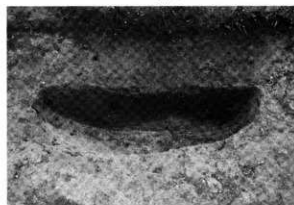
S K05完掘



S K06断面



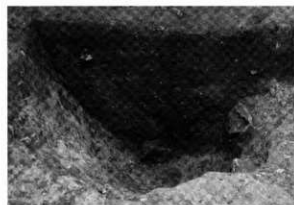
S K06完掘



S K07断面



S K07完掘



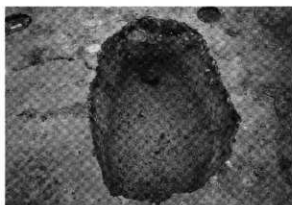
S K11断面



S K22土器出土状況



S K 22断面



S K 22完攝



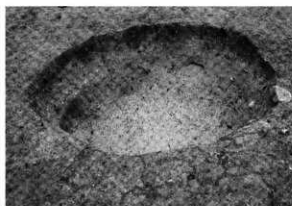
S K 23断面



S K 23完攝



S K 24断面



S K 24完攝



S K 25断面



S K 25完攝



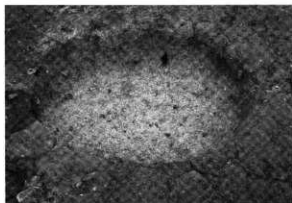
S K26断面



S K26完掘



S K27断面



S K27完掘



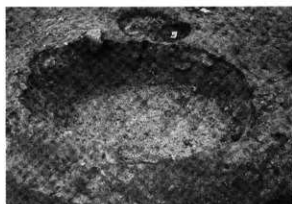
S K28断面



S K28完掘



S K29断面



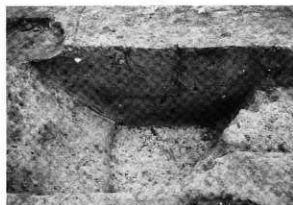
S K29完掘



S K30断面



S K30完掘



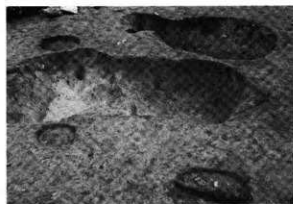
S K31断面



S K31完掘



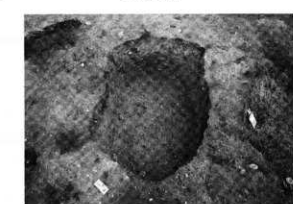
S K32断面



S K32完掘



S K33断面



S K33完掘



S K 34断面



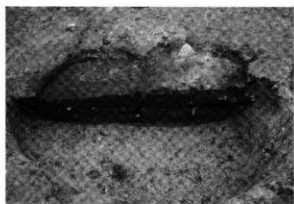
S K 34完掘



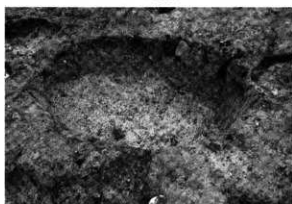
S K 35断面



S K 35完掘



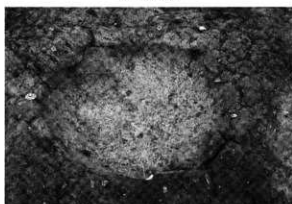
S K 36断面



S K 36完掘



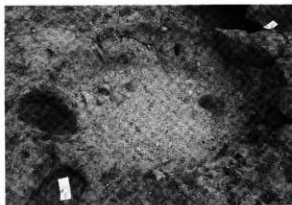
S K 37断面



S K 37完掘



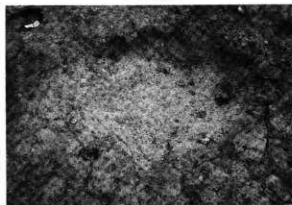
S K38断面



S K38完掘



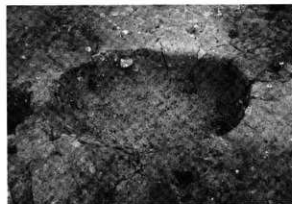
S K39断面



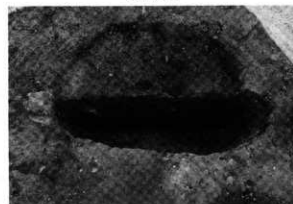
S K39完掘



S K40断面



S K40完掘



S K41断面



S K41完掘



S K 42断面



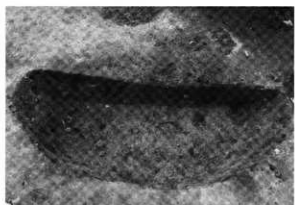
S K 42完掘



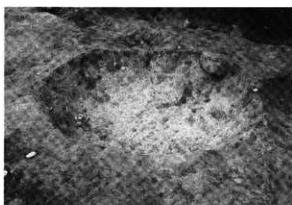
S K 43断面



S K 43完掘



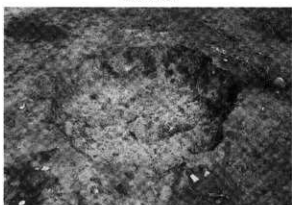
S K 44断面



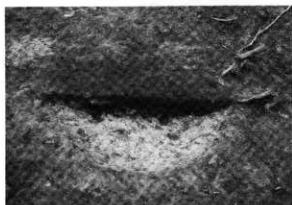
S K 44完掘



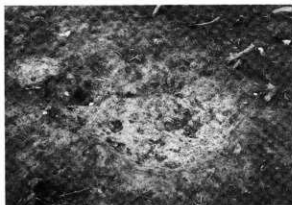
S K 45断面



S K 45完掘



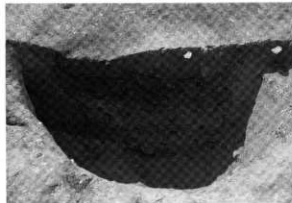
S K 46断面



S K 46完掘



S K 47断面



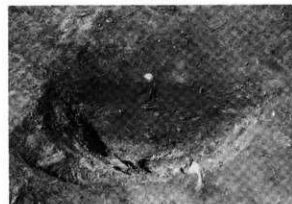
S K 47完掘



S K 48断面



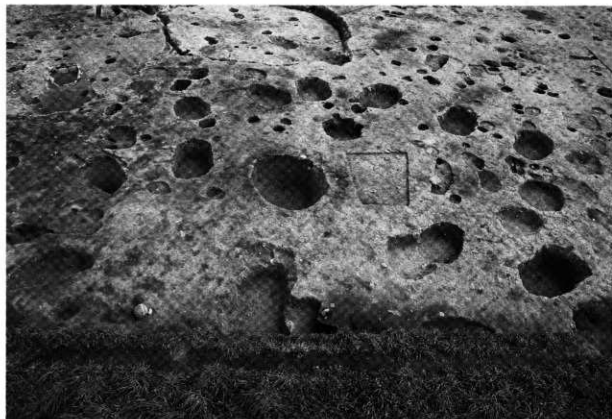
S K 48完掘



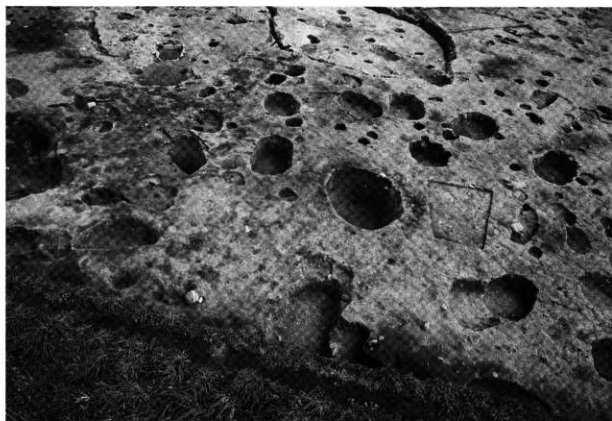
S K 49断面



S K 49完掘



調査区北土墳群 (北から)



調査区北土墳群 (北西から)



調查区北西 柱穴群



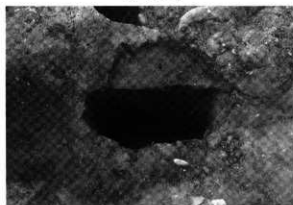
SP09断面



SP16断面



SP46断面



SP47断面



SP52断面



SP53断面



SP68 · SP70断面



SP73断面



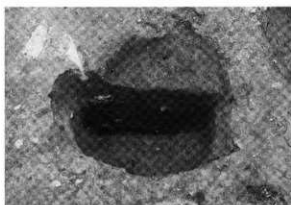
SP74断面



SP105断面

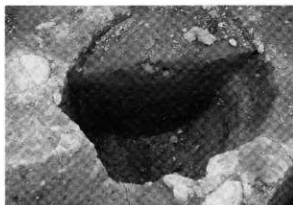


SP117断面



SP135断面

写真図版44 SP52 · 53 · 68 · 70 · 73 · 74 · 105 · 117 · 135



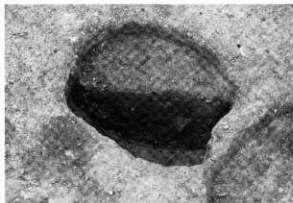
SP 136断面



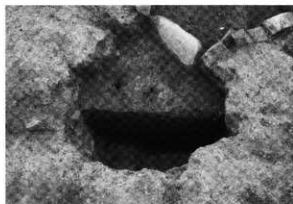
SP 158断面



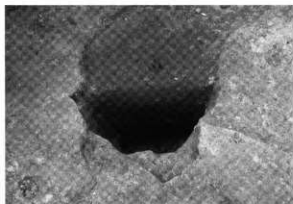
SP 161断面



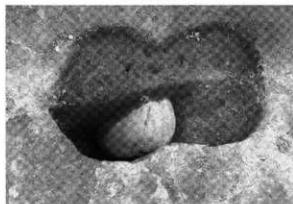
SP 162断面



SP 164断面



SP 165断面



SP 179断面



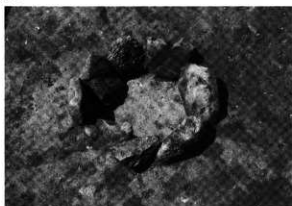
SP 184断面



S B01完掘



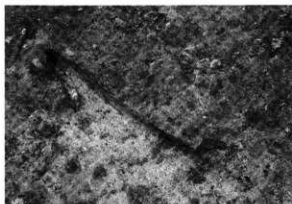
S F01埋土断面



S F01完掘



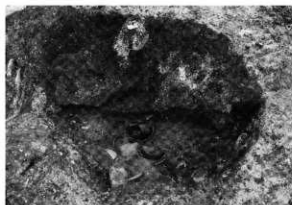
S F01断面



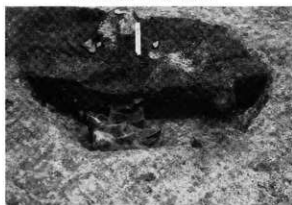
S F02検出



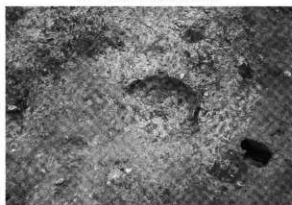
SK12遺物出土状況(東から)



SK12遺物出土状況(西から)



SK12断面



SK12完掘



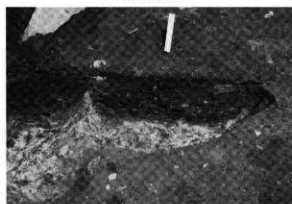
SK13断面



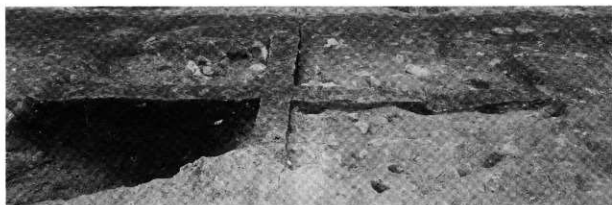
SK13完掘



SK14・17完掘



SK17断面



S K 15断面



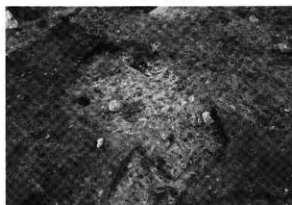
S K 16断面



S K 15・16完掘



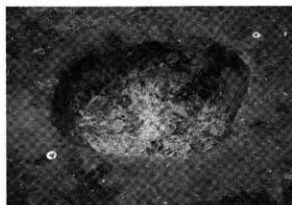
S K 18断面



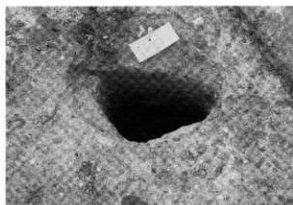
S K 18完掘



S K 19断面



S K 19完掘



S P 201 断面



S P 201 完掘



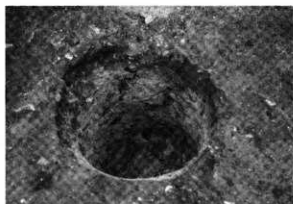
S P 202 断面



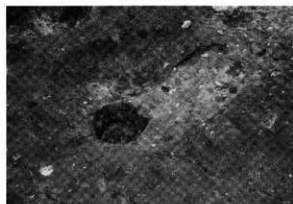
S P 202 完掘



S P 203 断面



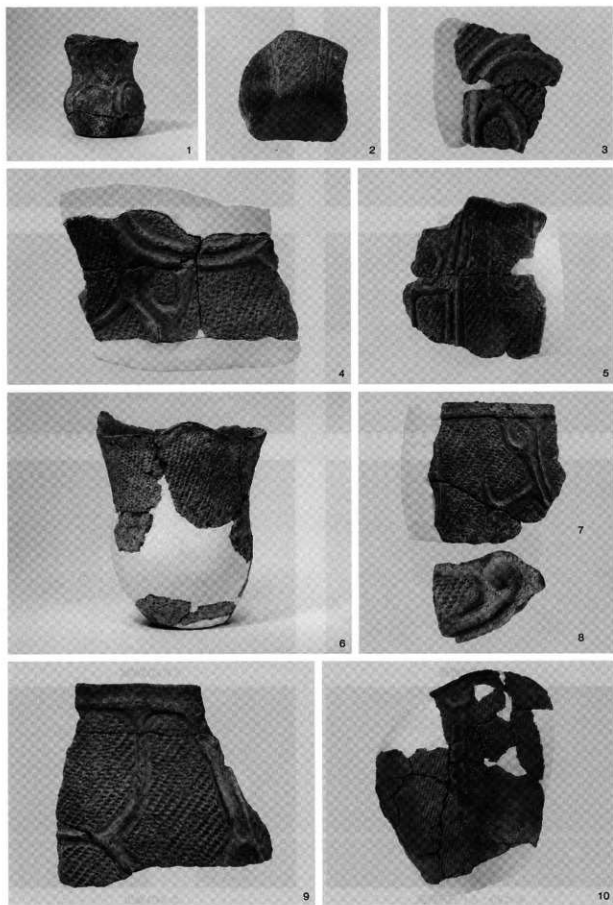
S P 203 完掘



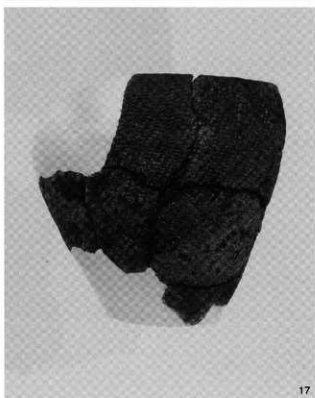
S K 20・S P 206 断面



S X 01 検出



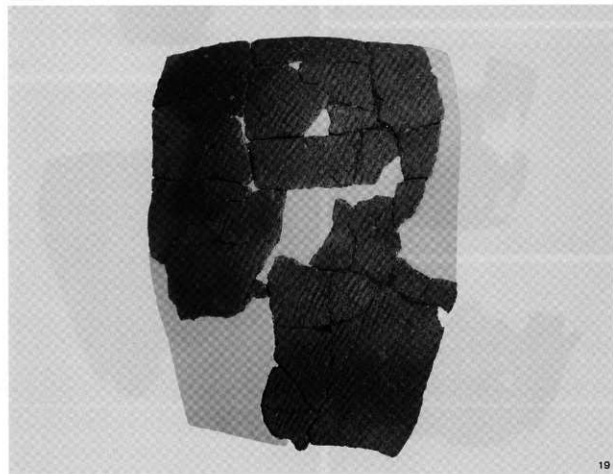
写真図版50 縄文土器 (S101)



写真図版51 縄文土器 (S I 02-1)

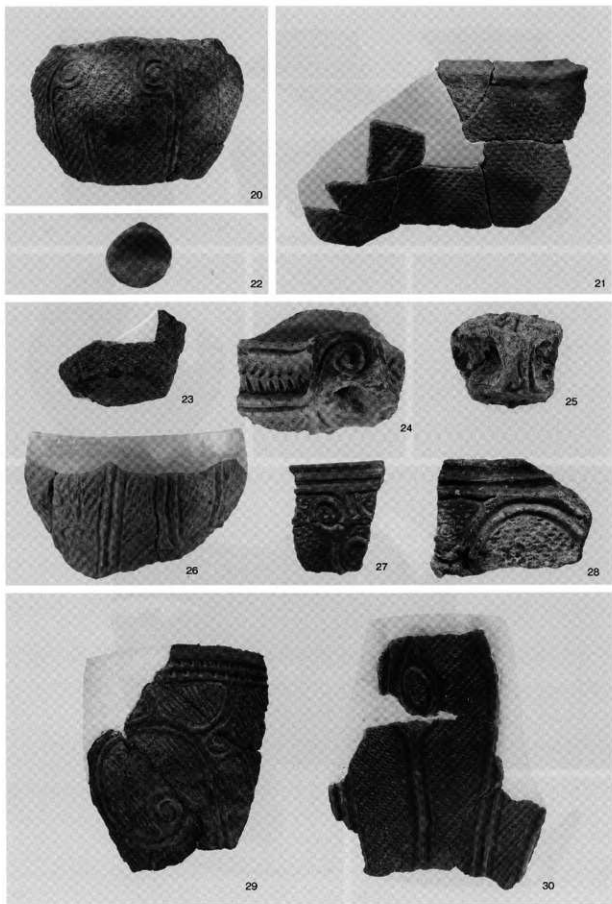


18

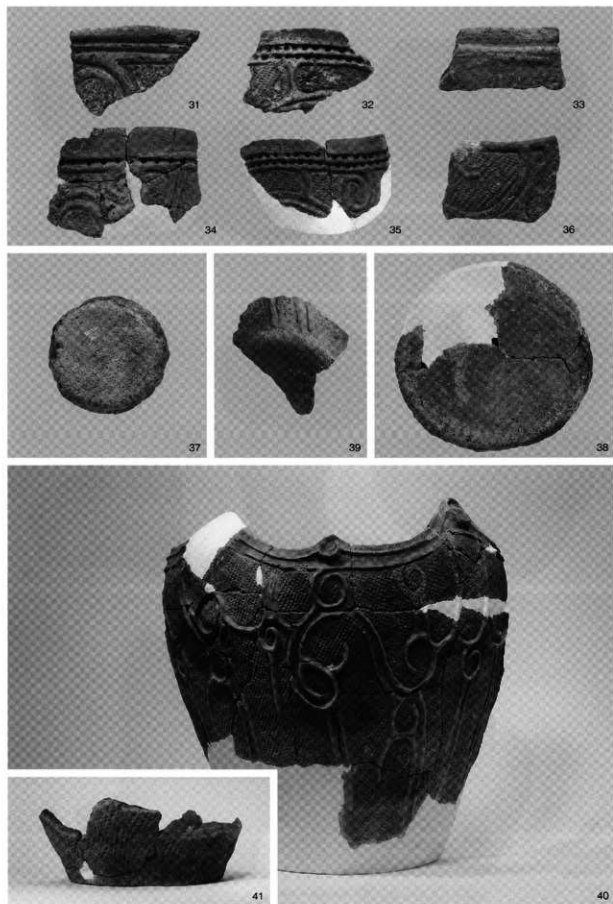


19

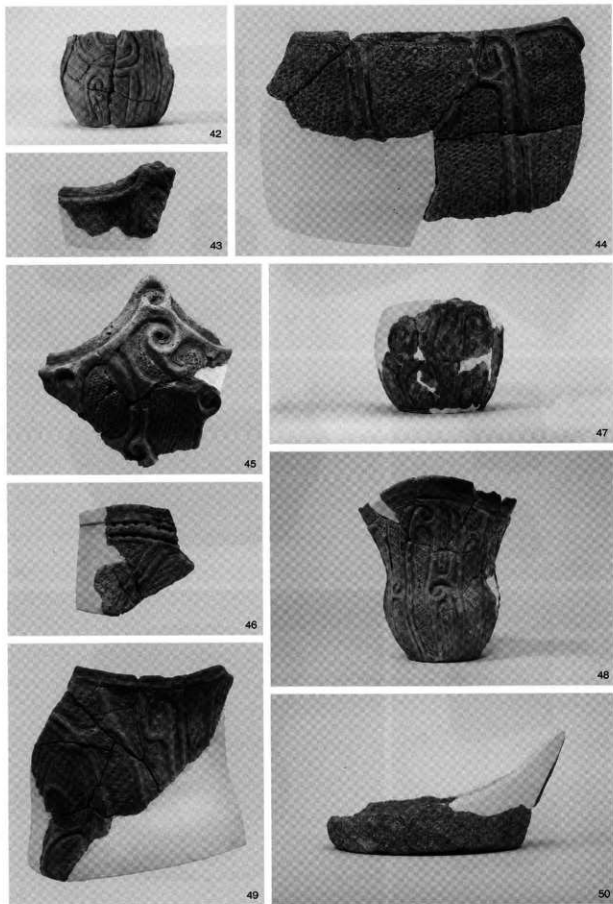
写真図版52 縄文土器 (S102-2)



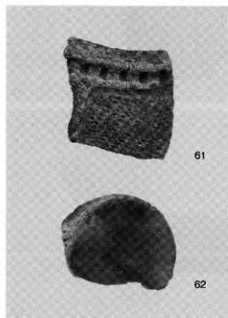
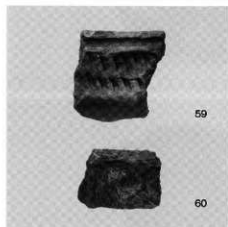
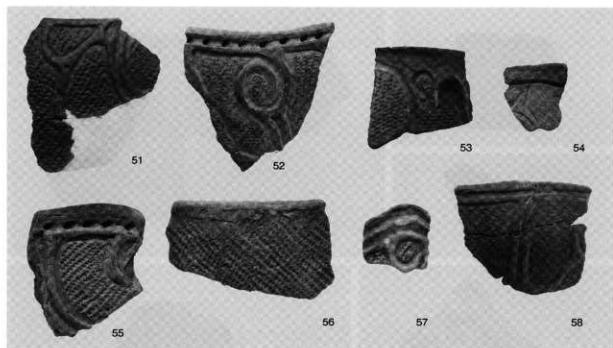
写真図版53 縄文土器 (S102-3)



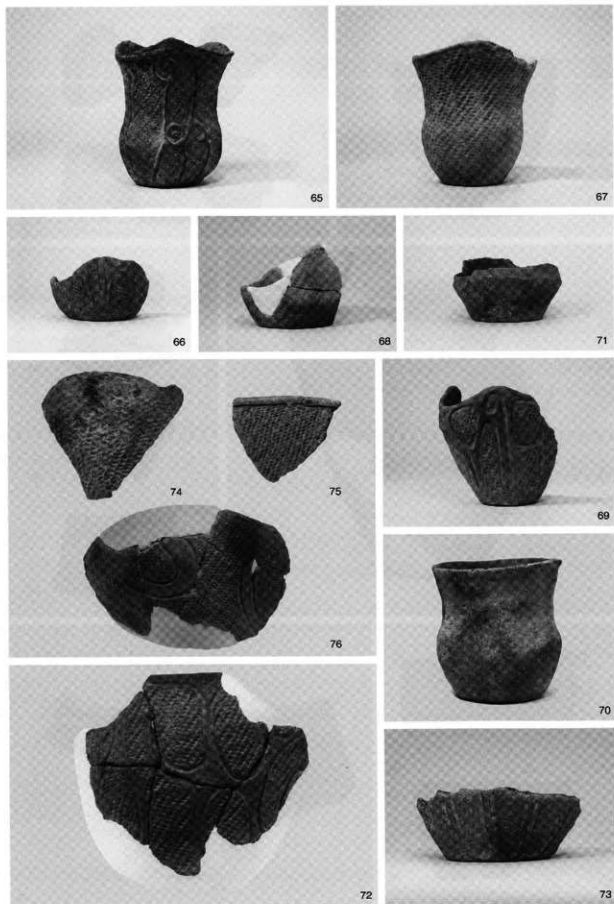
写真図版54 縄文土器 (S102-4)



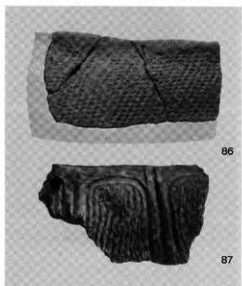
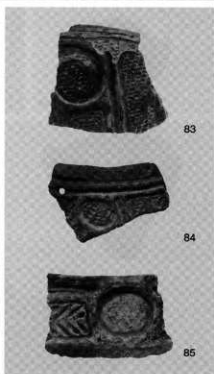
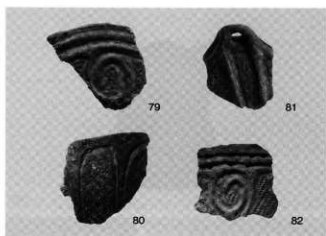
写真図版55 縄文土器 (S103・04-1)



写真図版56 縄文土器 (S104-2)



写真図版57 縄文土器 (S I 05-1)



写真図版58 縄文土器 (S105-2)



89

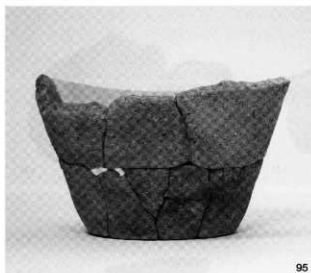


90

写真図版59 縄文土器 (S105-3)



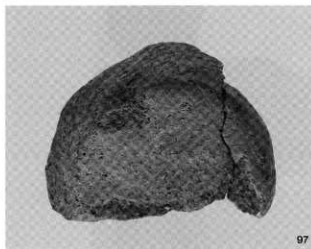
写真図版60 縄文土器 (S105-4)



95



96



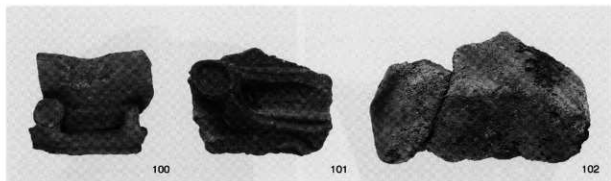
97



98



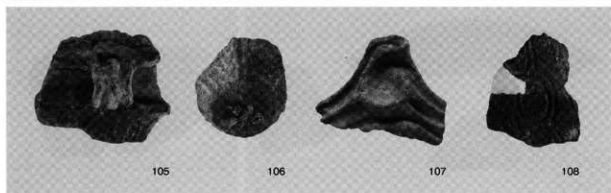
99



写真図版62 縄文土器 (S105-6)



104



105

106

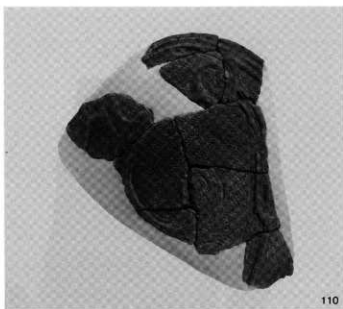
107

108

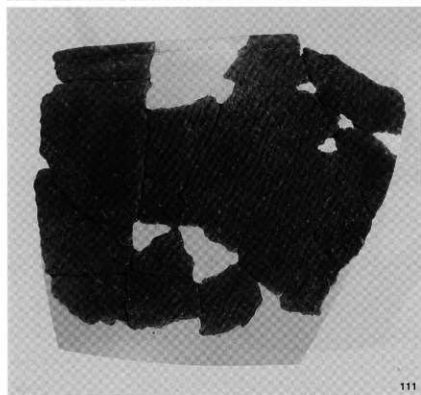
写真図版63 縄文土器 (S | 05-7・06-1)



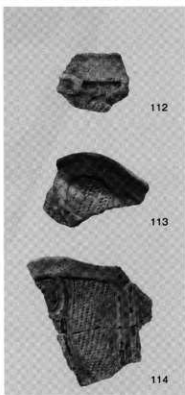
109



110



111



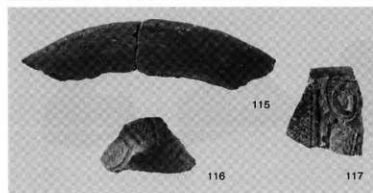
112



113



114



115



116

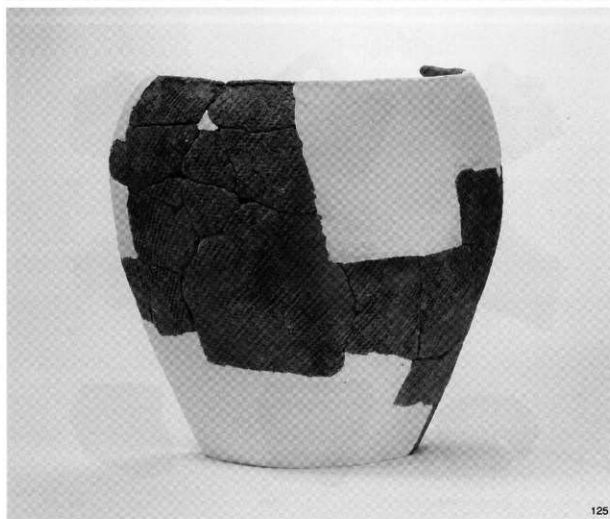
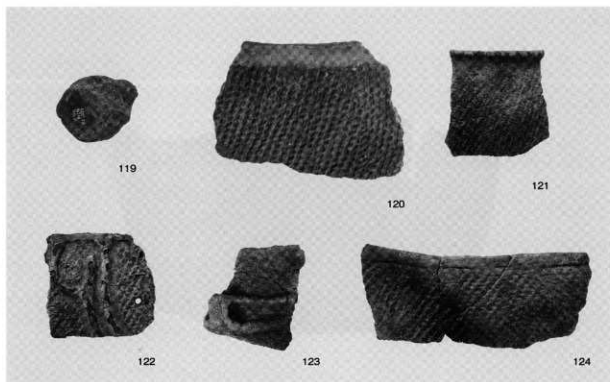


117



118

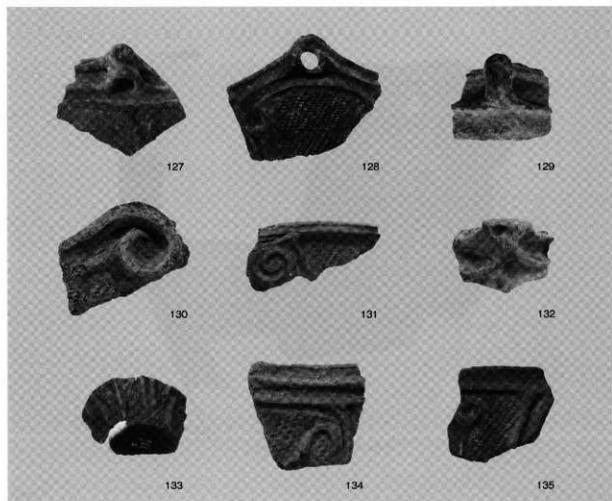
写真図版64 縄文土器 (S106-2・07)



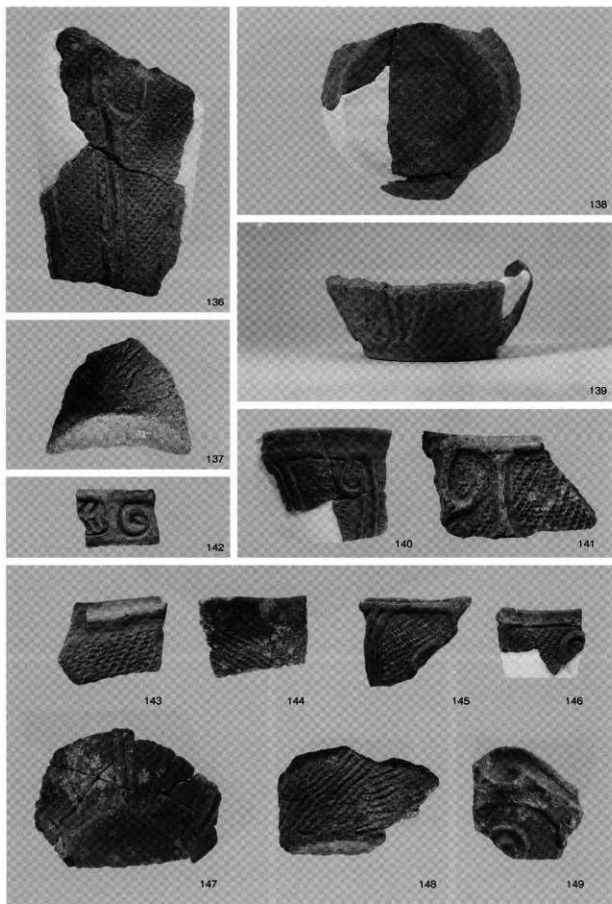
写真図版65 縄文土器 (S110・11-1)



126



写真図版66 縄文土器 (S111-2・12-1)



写真図版67 縄文土器 (S112-2・15-1)



150



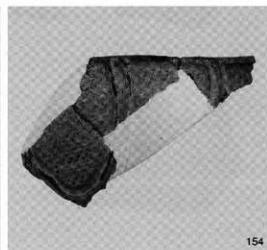
151



152

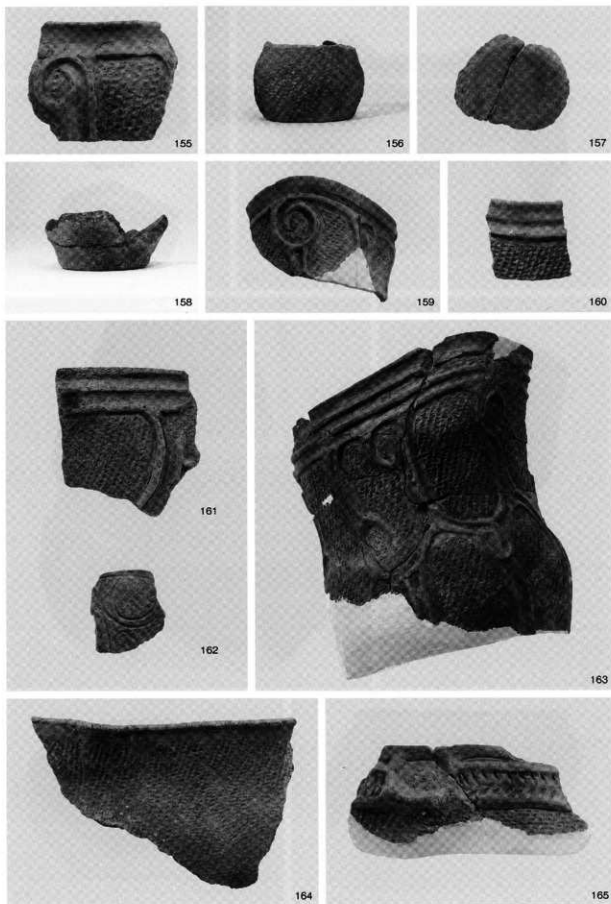


153

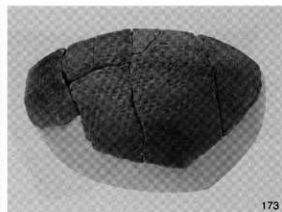
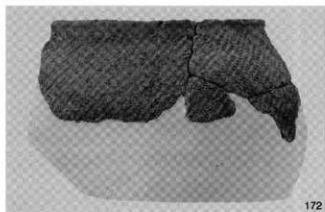
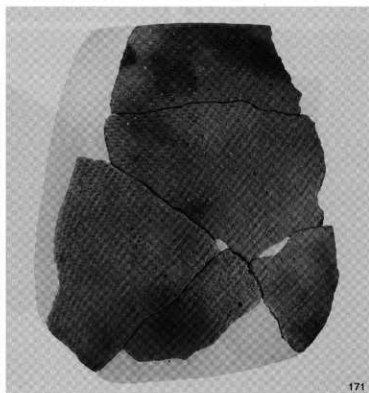
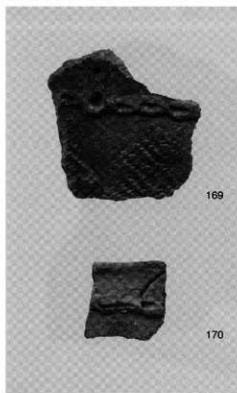
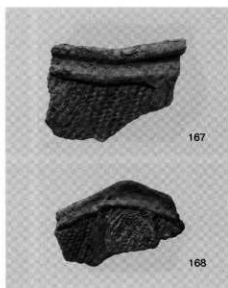


154

写真図版68 縄文土器 (S115-2・16-1)



写真図版69 縄文土器 (S | 16-2)



写真図版70 縄文土器 (S | 16-3)



174

写真図版71 縄文土器 (S116-4)

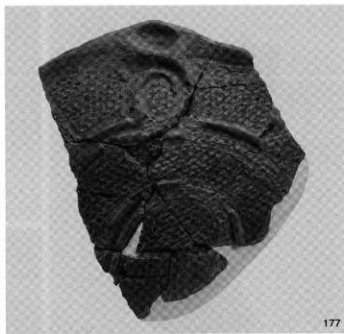


175

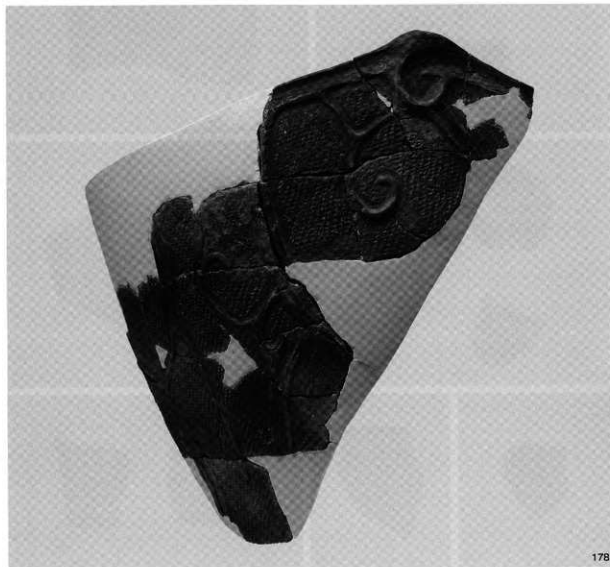
写真図版72 縄文土器 (S116-5)



176

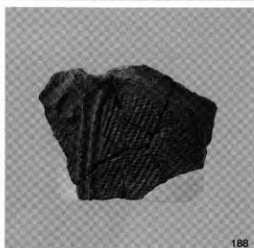
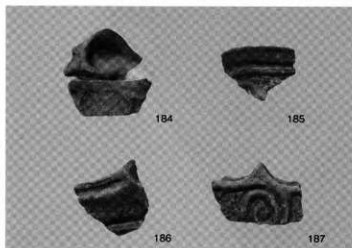
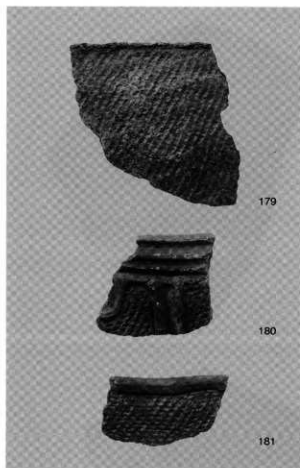


177



178

写真図版73 縄文土器 (S116-6)



写真図版74 縄文土器 (S | 17・19・20・22・23)



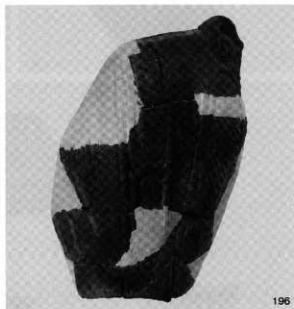
193



194



195



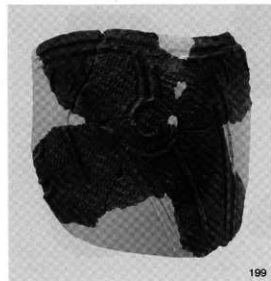
196



197



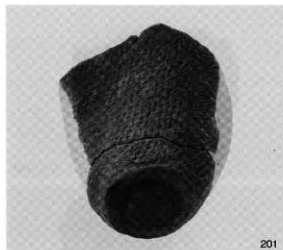
198



199



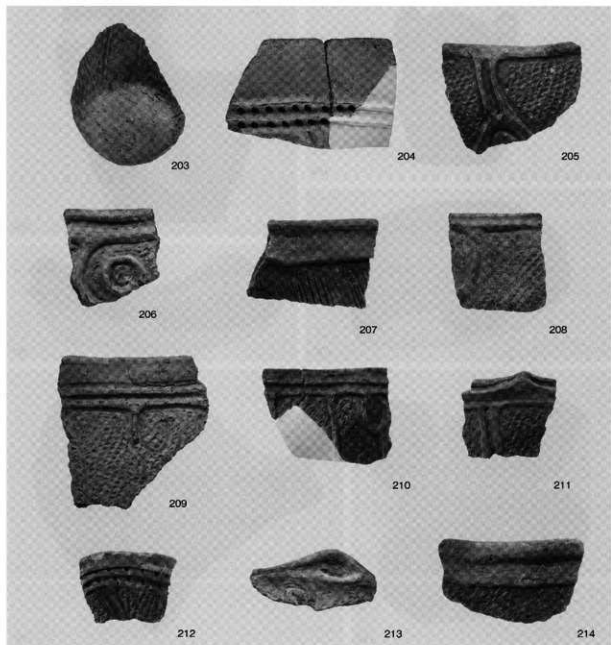
200



201



202



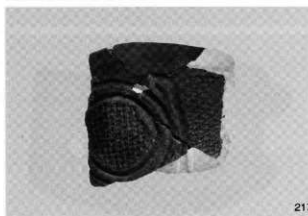
写真図版76 縄文土器 (S | 25-2)



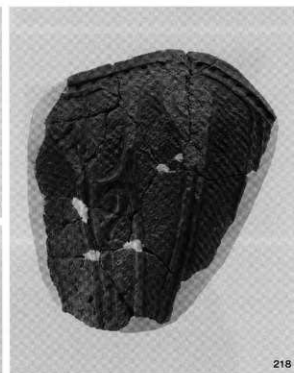
215



216



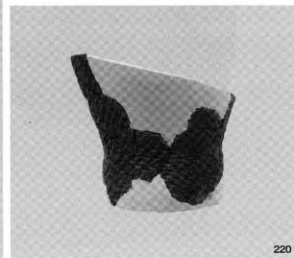
217



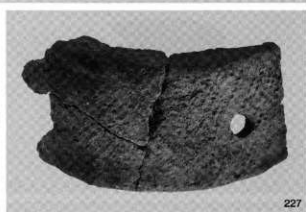
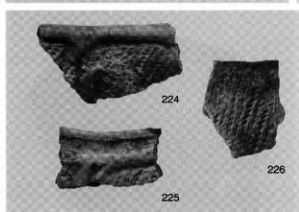
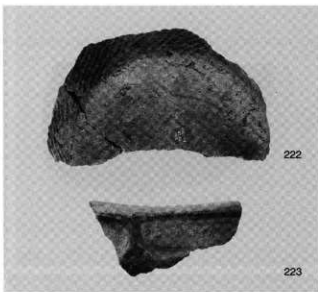
218



219



220



写真図版78 縄文土器 (S | 28)



229



231



230



232



233



234



235



236



237



238

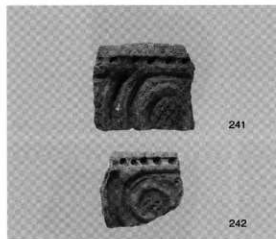
写真図版79 縄文土器 (SF01、SK10・14・25・遺構外-1)



239

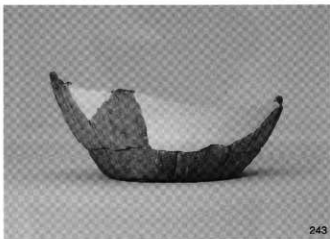


240



241

242



243



244



245

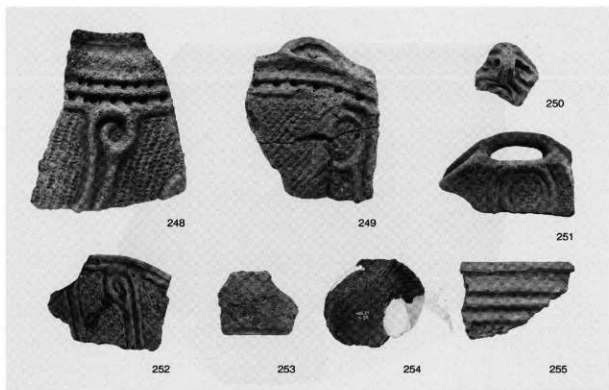


246



247

写真図版80 縄文土器（遺構外-2）



写真図版81 縄文土器（遺構外-3）

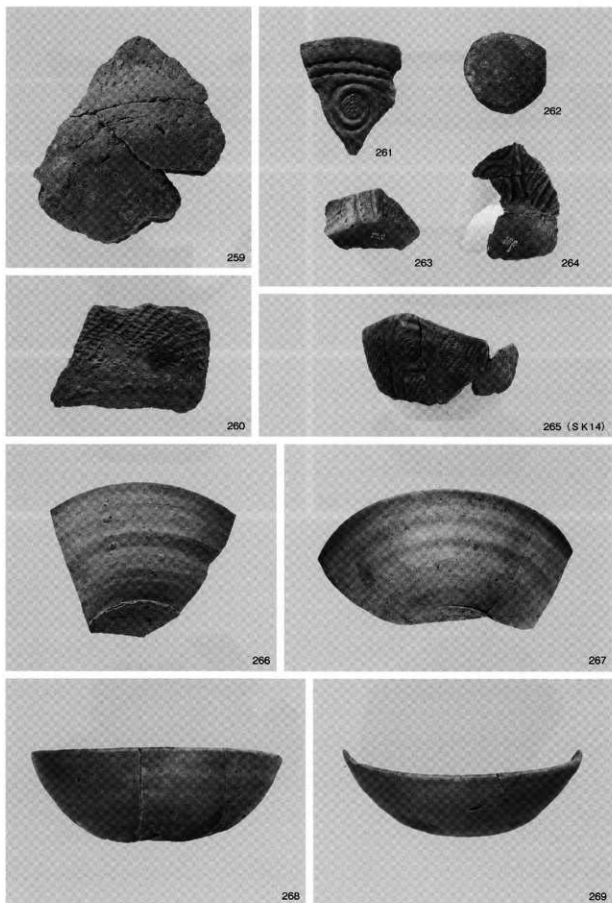


257

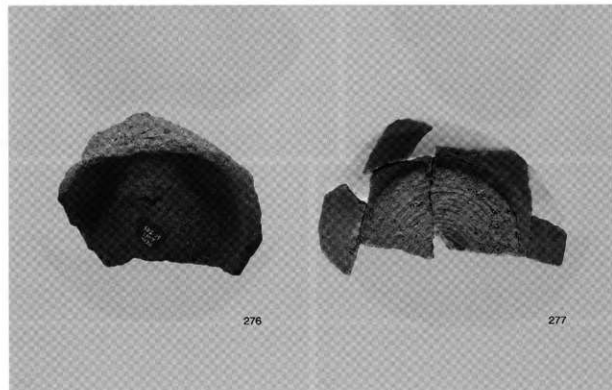


258

写真図版82 縄文土器（遺構外-4）



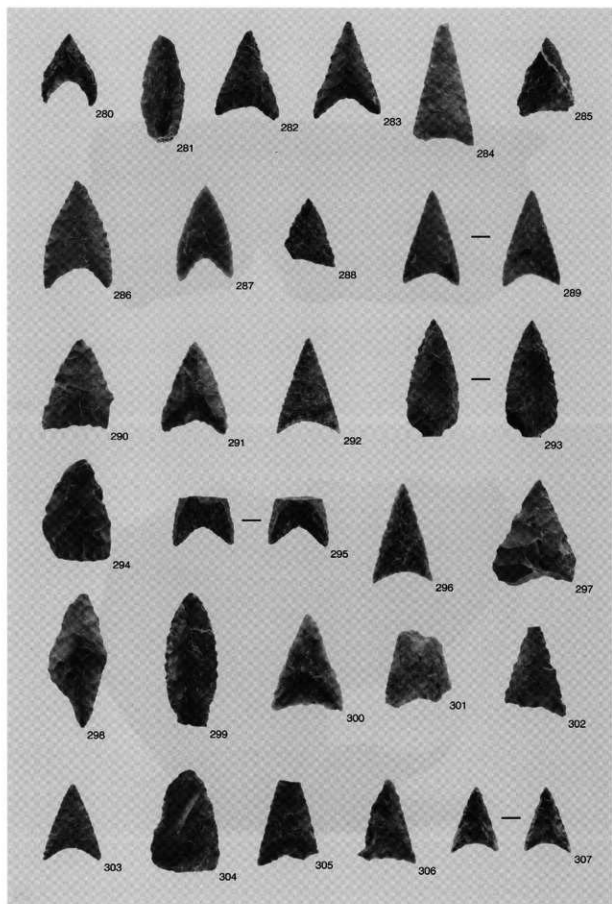
写真図版83 縄文土器（遺構外-5）、古代の土器（SK12-1・14）



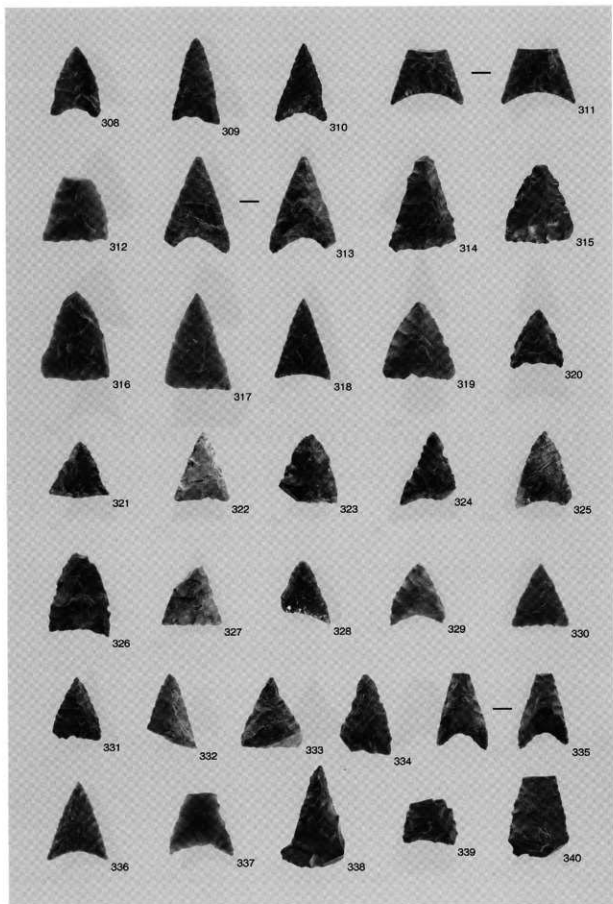
写真図版84 古代の土器 (SK12-2・17-1・18、遺構外)



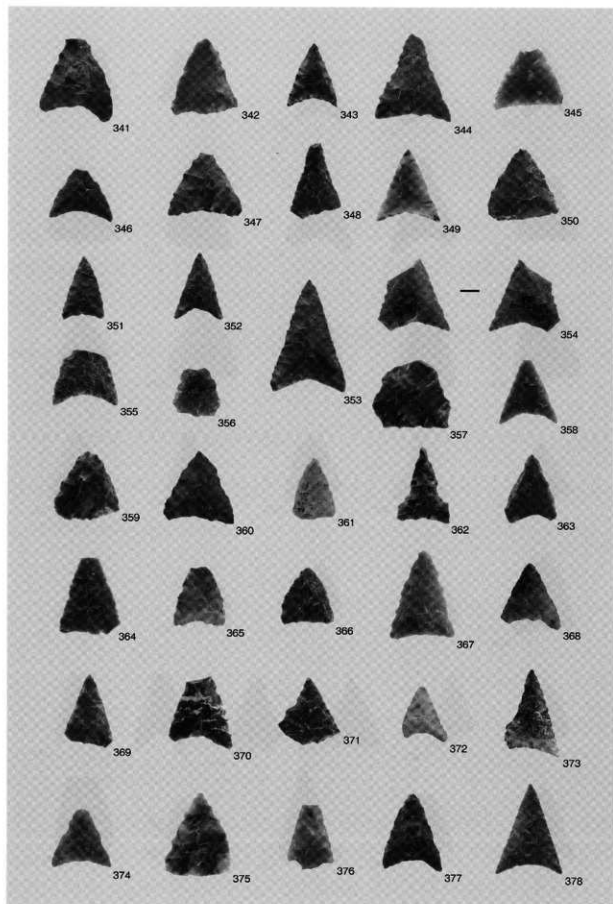
写真図版85 古代の土器 (SK17-2、SP202)



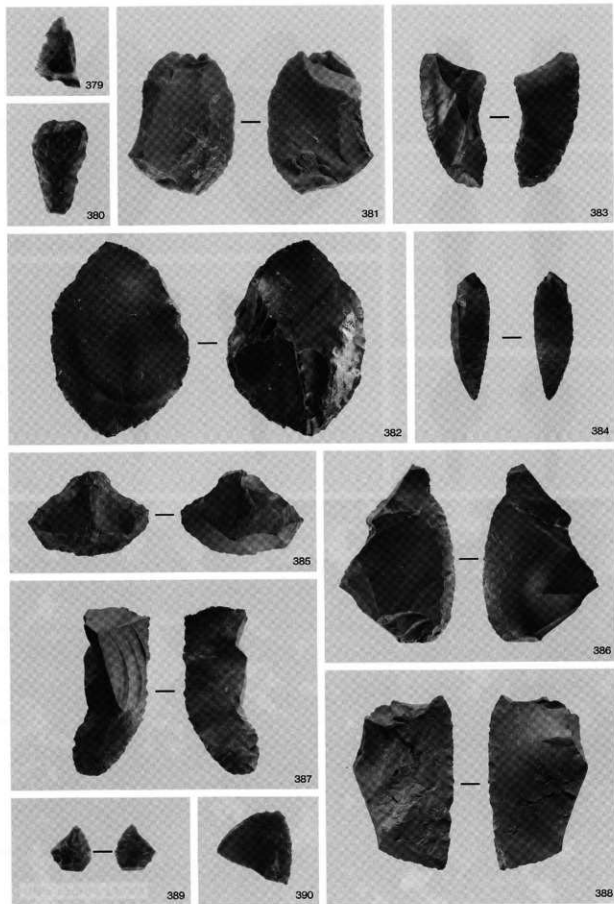
写真図版86 剥片石器 (S I 01・02・04・05~07・16・17・25-1)



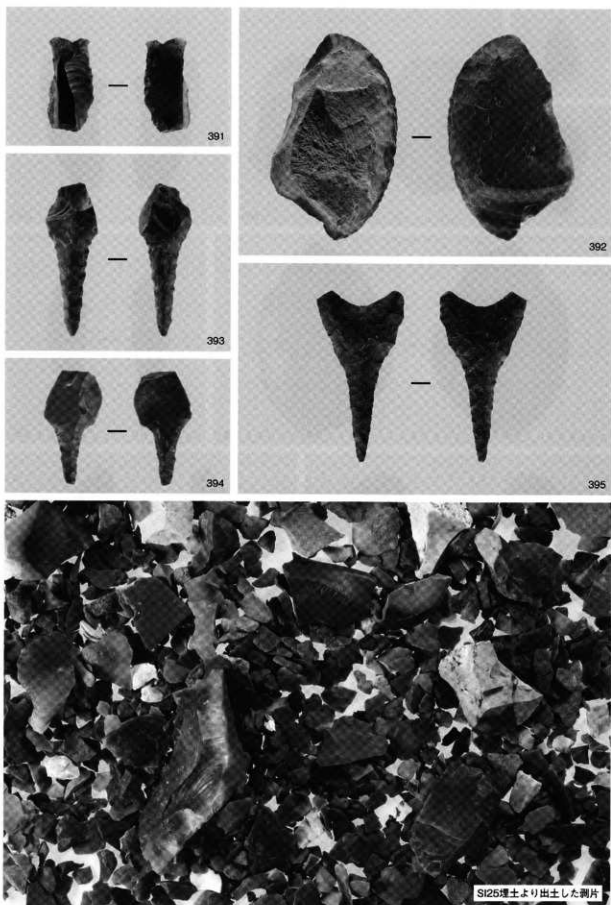
写真図版87 剥片石器 (S I 25-2)



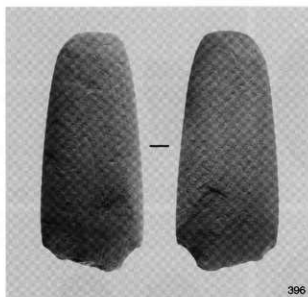
写真図版88 剥片石器 (S I 25-3・SK06・SP52・遺構外)



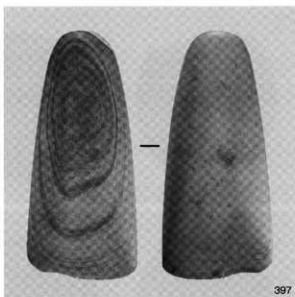
写真图版89 剥片石器 (S 101·02·04·07·12·16·17·25)



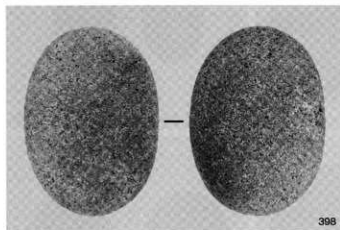
写真図版90 剥片石器 (S 107・25・28、遺構外)



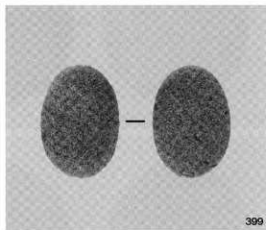
396



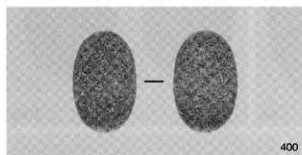
397



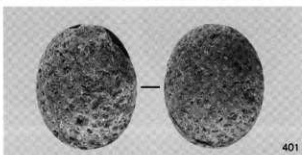
398



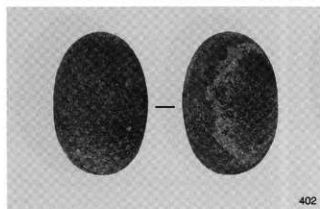
399



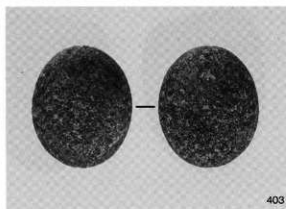
400



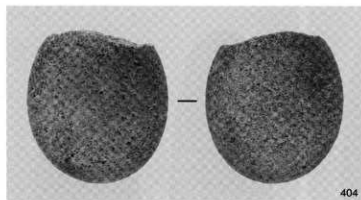
401



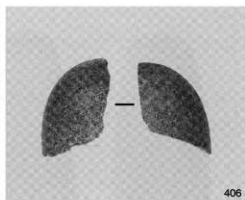
402



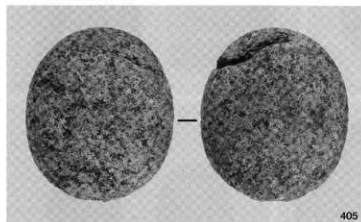
403



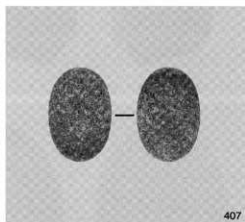
404



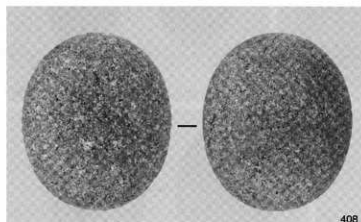
406



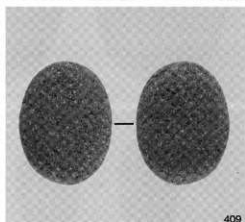
405



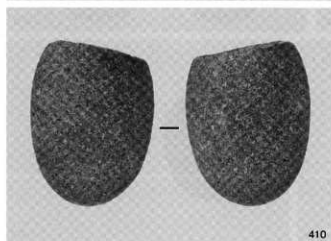
407



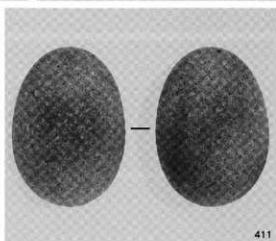
408



409

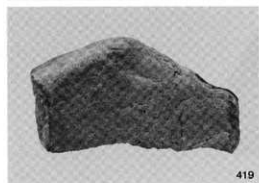
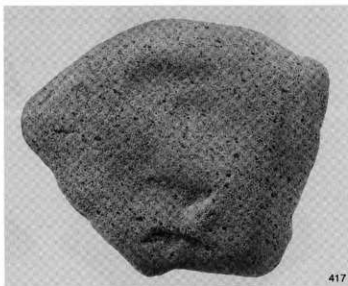
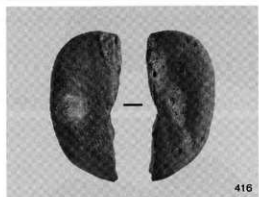
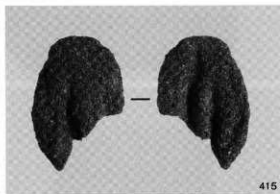
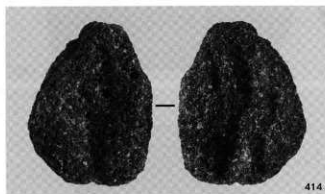
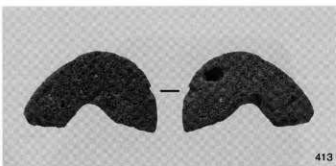
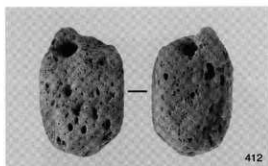


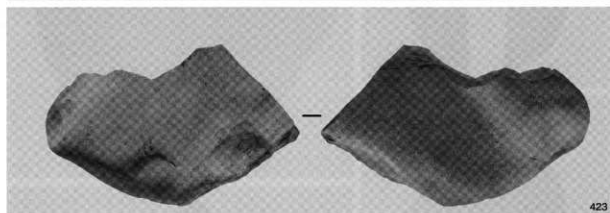
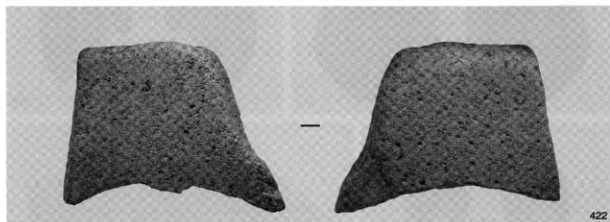
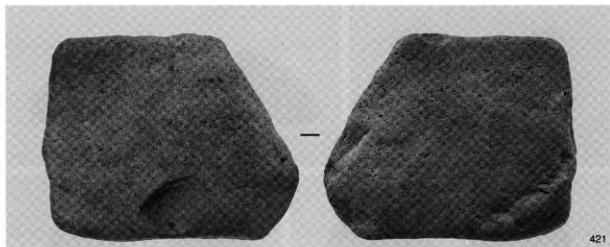
410



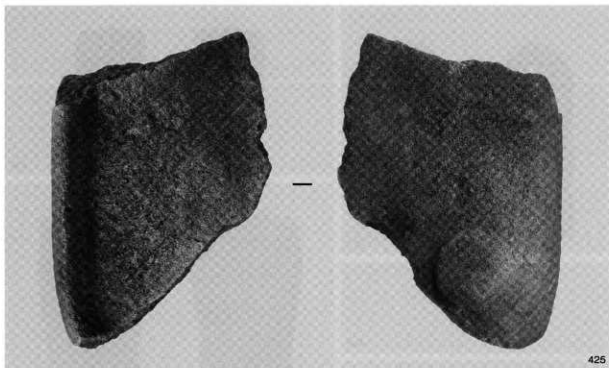
411

写真図版92 礫石器 (S I 07・15・16・23・25、遺構外)

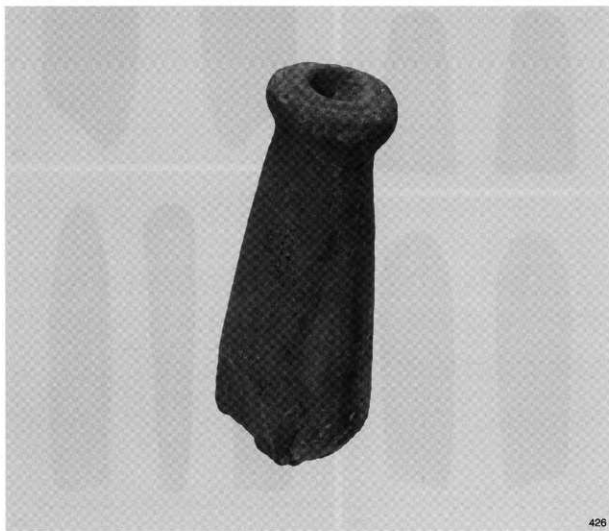




写真図版94 礫石器 (S I 04・16)

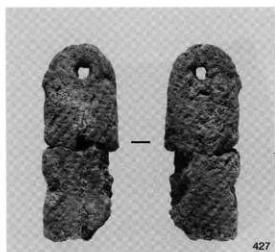


425

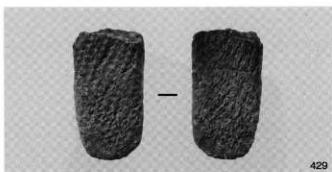


426

写真図版95 礫石器 (S 107)、石製品 (S 104)



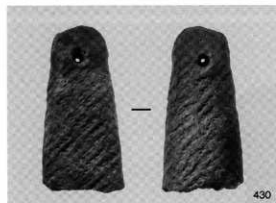
427



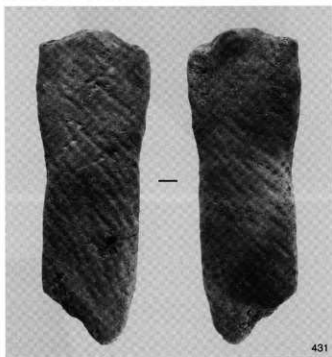
429



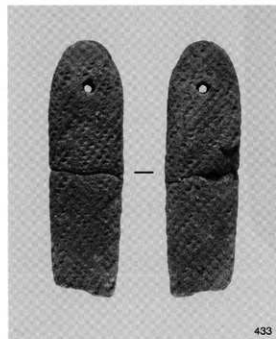
428



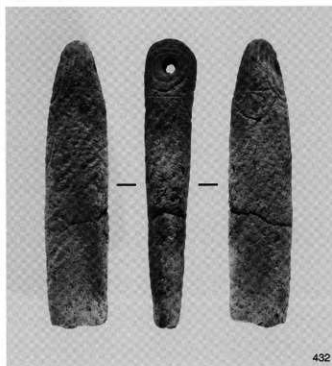
430



431

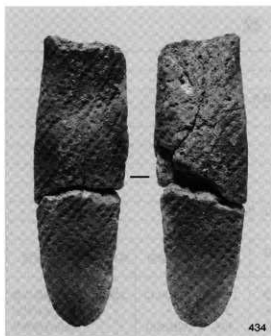


433

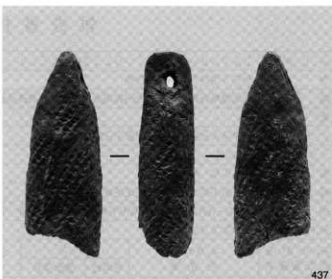


432

写真図版96 土製品 (S105・07・12・15・16)



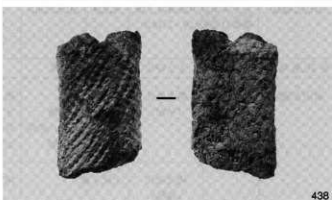
434



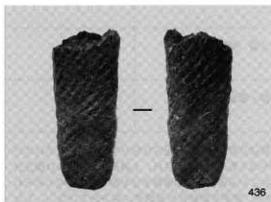
437



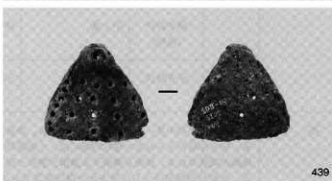
435



438



436



439



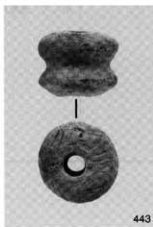
440



442



441



443

写真図版97 土製品、石製品 (S105・07・16・19・遺構外)

報告書抄録

ふりがな	しんでん2いせきはつつちょうきほうこくしょ							
書名	新田Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第572集							
編集者名	福嶋正和・晴山隆光							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2011年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 …	東経 …	調査期間	調査面積	調査原因
新田Ⅱ遺跡	岩手県遠野市飯岡町下飯岡 地割第31地割149-17ほか	03208	MF53-1305	38度 19分 12秒	141度 28分 10秒	2009.04.10 ～ 2009.08.31	2,800㎡	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
新田Ⅱ遺跡	集落遺跡	縄文時代 (中期)	竪穴住居26棟 掘立柱建物4棟 土坑(竊穴含む)40基 柱穴状土坑76個	縄文土器 (大木8b式期～大木9式期) 石器 土製品 (斧状土製品など)			縄文時代中期中葉～後葉の環状集落	
		縄文時代 (後期)	土坑1基	縄文土器 (後期)				
		縄文時代 (晩期)	竊1基	縄文土器 (晩期)				
		平安時代	土坑 焼土遺構3基	土器類・須恵器				
要約	<p>縄文時代中期中葉～後葉の集落遺跡である。集落規模は比較的大きく、竪穴住居が半環状に配置されている。竪穴住居がみられない環状内部には、土器塚群がやはり放射状に配置され、土器塚群の内側には掘立柱建物が配置される。集落を構成する遺構が整然と配されている環状集落の南側半分を調査したものとみられる。比較的短期間のうちに営まれた環状集落であるため、諸多な別時代の遺構等に乱されていない。したがって、当時の集落形態を知る上で貴重な成果である。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第572集

新田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成23年3月11日

発行 平成23年3月15日

編集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
〒020-0066 岩手県盛岡市上田四丁目2-2
電話 (019) 624-3195

(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印刷 社陵高速印刷株式会社
〒020-0811 岩手県盛岡市川目町23番2号
電話 (019) 651-2110

